

丹波市

# 高坂古墳群

国道175号竹田バイパス公共特殊改良一種事業に伴う埋蔵文化財調査報告書

2005年3月

兵庫県教育委員会

丹波市

高坂古墳群  
高坂西遺跡

2005.3

兵庫県教育委員会

## 例　　言

1. 本書は兵庫県丹波市市島町中竹田高坂（発掘調査当時氷上郡市島町中竹田高坂）に所在する、高坂古墳群および高坂西遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は国道175号竹田バイパス公共特殊改良一種事業に伴うもので、兵庫県柏原土木事務所の依頼を受けて、兵庫県教育委員会が平成10年度に本発掘調査を実施した。
3. 出土品整理は兵庫県丹波県民局長の依頼を受けて、兵庫県教育委員会が、平成14・16年度に実施した。
4. 本書に使用した方位は国土座標（第IV系）の座標北を示す。また、標高値は東京湾平均海面（T.P.）を基準とした。
5. 出土品の分析は、鹿児島国際大学の三辻利一氏に須恵器の胎土分析を、独立行政法人奈良文化財研究所の降幡順子氏に耳環の表面調査の分析を、パリノ・サーヴェイに土器の胎土分析を依頼した。
6. 執筆は、第6章第1節：西口和彦、第2節：三辻利一氏、第3節：パリノ・サーヴェイ、第4節：降幡順子氏が行い、それ以外は篠宮正が行った。
7. 編集は篠宮が行った。
8. 調査の一部はすでに『平成10年度年報』などで一部を公表している。しかし、その後の検討の結果、異なる記載があるが、本書の方が正しく、これによって訂正したと了解されたい。
9. 本書にかかる写真・図面などの記録や遺物などは、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所に保管している。
10. 発掘調査および報告書作成にあたり、  
丹波市教育委員会・旧氷上郡教育委員会・旧市島町役場・旧市島町公民館の各機関および  
青木和博・東昭吾・泉拓良・荻野正太郎・崎山正人・下山文隆・徳原多喜雄・富山直人・  
西山茂己・菱田哲郎・深澤芳樹・降幡順子・三辻利一・三好博喜・山田義三の各氏に、  
ご援助とご指導・ご教示頂いた。記して深く感謝の意を表する。

# 高坂古墳群

## 国道175号竹田バイパス道路改良事業 に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

例　　言

## 目　　次

第1章 遺跡の環境 .....	1
第1節 地理的環境 .....	1
第2節 歴史的環境 .....	2
第2章 調査の契機と経過 .....	6
第1節 調査の契機 .....	6
第2節 調査の経過 .....	8
第3章 調査の概要 .....	10
第1節 調査方法と基本層序 .....	10
第2節 調査の概要 .....	10
第4章 高坂古墳群の調査 .....	13
第1節 概要 .....	13
第2節 1号墳 .....	14
第3節 2号墳 .....	38
第4節 3号墳・6号墳 .....	47
第5節 4号墳 .....	52
第6節 5号墳 .....	56
第7節 7号墳 .....	59
第8節 木棺墓 .....	63
第9節 石棺墓 .....	66
第5章 高坂西遺跡の調査 .....	69
第1節 概要 .....	69
第2節 縄文時代 .....	70
第3節 弥生時代 .....	79
第4節 古墳時代 .....	80
第5節 古代・中世 .....	82
第6章 自然科学的調査 .....	83
第1節 高坂古墳群の電気探査 .....	83
第2節 高坂古墳群出土須恵器の蛍光X線分析 .....	85
第3節 高坂西遺跡出土縄文土器の胎土分析 .....	89
第4節 高坂1号墳出土耳環の表面調査 .....	97
第5節 小結 .....	99
第7章 まとめ .....	100
第1節 総括 .....	100
第2節 高坂西遺跡・高坂古墳群の変遷 .....	100
第3節 高坂古墳群の検討 .....	102
第4節 高坂西遺跡の検討 .....	105
報告書抄録 .....	111
図　　版	

## 挿 図 目 次

第1図	丹波市と高坂古墳群の位置	1
第2図	高坂古墳群の地形と主要遺跡(国土地理院1:25,000「黒井・市島・福知山西部・福知山東部」)	5
第3図	国道175号竹田バイパスと遺跡(国土地理院1:50,000「福知山」)	6
第4図	国道175号竹田バイパス開通後の高坂古墳群	7
第5図	高坂古墳群と周辺の地形	11
第6図	高坂古墳群の調査前の地形	12
第7図	高坂古墳群	13
第8図	高坂1号墳 墳丘 調査前	14
第9図	高坂1号墳 墳丘 調査後	15
第10図	高坂1号墳 墳丘断面	16
第11図	高坂1号墳 石室 検出	17
第12図	高坂1号墳 石室 立面	18
第13図	高坂1号墳 石室 掘形	19
第14図	高坂1号墳 石室内遺物出土状況	20
第15図	高坂1号墳 出土土器1 (1~39)	21
第16図	高坂1号墳 出土土器2 (40~56)	23
第17図	高坂1号墳 出土土器3 (57~64)	24
第18図	高坂1号墳 出土土器4 (65~69)	25
第19図	高坂1号墳 出土土器5 (70・71)	26
第20図	高坂1号墳 出土土器6 (72~74)	27
第21図	高坂1号墳 出土土器7 (75)	28
第22図	高坂1号墳 出土土器 拓影1	29
第23図	高坂1号墳 出土土器 拓影2	30
第24図	高坂1号墳 出土土器 拓影3	31
第25図	高坂1号墳 出土土器 拓影4	32
第26図	高坂1号墳 出土土器 (丹波市市島町民俗資料館保管分)	33
第27図	高坂1号墳 出土土器写真 (丹波市市島町民俗資料館保管分)	33
第28図	高坂1号墳 出土金属器1	34
第29図	高坂1号墳 出土金属器2	35
第30図	高坂1号墳 出土玉	36
第31図	高坂2号墳 墳丘 調査前	38
第32図	高坂2号墳 墳丘 調査後	39
第33図	高坂2号墳 下層 調査後	40
第34図	高坂2号墳 墳丘断面	41
第35図	高坂2号墳 埋葬施設	42
第36図	高坂2号墳 南埋葬施設	43
第37図	高坂2号墳 北埋葬施設	44
第38図	高坂2号墳 出土遺物	46
第39図	高坂3号墳 墳丘 調査前	47
第40図	高坂3号墳・6号墳 墳丘 調査後	48
第41図	高坂3号墳 墳丘断面	49
第42図	高坂3号墳 埋葬施設	50
第43図	高坂3号墳・6号墳 出土土器	51
第44図	高坂4号墳 墳丘 調査前 調査後	53
第45図	高坂4号墳 墳丘断面	54
第46図	高坂4号墳 埋葬施設と出土土器	55
第47図	高坂5号墳 墳丘 調査前 調査後	57
第48図	高坂5号墳 墳丘断面	58
第49図	高坂5号墳 埋葬施設	59

第50図	高坂5号墳 出土土器	59
第51図	高坂7号墳 墳丘 調査前 調査後	60
第52図	高坂7号墳 墳丘断面	61
第53図	高坂7号墳 埋葬施設	62
第54図	高坂7号墳 出土遺物	62
第55図	8号埋葬施設	63
第56図	9号埋葬施設	64
第57図	9号埋葬施設 出土遺物	65
第58図	10号・11号埋葬施設	66
第59図	12号石棺	67
第60図	13号石棺	68
第61図	縄文・弥生時代遺構配置	69
第62図	風倒木	70
第63図	風倒木の方位と規模	71
第64図	風倒木SZ06	72
第65図	陥穴	73
第66図	土坑	74
第67図	土坑SK01 出土土器	75
第68図	土坑SK01 出土土器 拓影	76
第69図	縄文土器	77
第70図	竪穴建物SH02	78
第71図	弥生土器	79
第72図	石器	80
第73図	SX01遺構・遺物	81
第74図	古代・中世の遺物	82
第75図	電気探査の状況	84
第76図	高坂古墳群出土須恵器の両分布図	87
第77図	南1号窯跡(丹波市市島町)出土須恵器の両分布図	87
第78図	金ヶ崎窯跡(明石市)出土須恵器の両分布図	87
第79図	陶邑群と金ヶ崎群の相互識別(K、Ca、Rb、Sr)	88
第80図	高坂古墳群(丹波市市島町)出土須恵器の産地推定(K、Ca、Rb、Sr)	88
第81図	各粒度階における鉱物・岩石出現頻度	92
第82図	胎土中の砂の粒径組成	93
第83図	孔隙・砂粒・基質の割合	94
第84図	耳環全体写真(数字は主な測定箇所)	97
第85図	耳環サビ部分拡大	97
第86図	透過X線画像	97
第87図	蛍光X線分析結果	98
第88図	高坂西遺跡・高坂古墳群の変遷	101
第89図	高坂2号墳埋葬施設と類似遺構	103
第90図	高坂古墳群の表示	105

## 表 目 次

第1表	高坂古墳群周辺の主要遺跡	4
第2表	風倒木一覧	71
第3表	高坂古墳群出土須恵器の分析データー	85
第4表	薄片観察結果(1)(2)	90・91
第5表	遺物一覧(1)(2)(3)	107~109

## 図版目次

- 図版1 遺跡 1 高坂古墳群 遠景（東から）  
2 高坂古墳群 遠景（北東から）
- 図版2 遺構 3 高坂1号墳 全景（南東から）  
4 高坂2号墳 埋葬施設全景（北から）
- 図版3 遺物 高坂1号墳 出土土器
- 図版4 遺物 高坂1号墳 出土子持器台
- 図版5 遺物 高坂1号墳 出土玉
- 図版6 分析 土器胎土薄片(1)
- 図版7 分析 土器胎土薄片(2)
- 図版8 探査・分析
- 図版9 遺跡 5 高坂古墳群 遠景（南から）  
6 高坂古墳群 遠景（東から）
- 図版10 遺構 7 高坂古墳群 全景（上が北東）  
8 高坂古墳群 全景（北東から）  
9 高坂古墳群 全景（南西から）
- 図版12 遺構 10 高坂1号墳 調査前（南西から）  
11 高坂1号墳 全景（南西から）
- 図版13 遺構 12 高坂1号墳 全景（南東から）  
13 高坂1号墳 石室（南から）  
14 高坂1号墳 石室（東から）
- 図版14 遺構 15 高坂1号墳 石室奥壁（南東から）  
16 高坂1号墳 石室右側壁（北東から）  
17 高坂1号墳 石室左側壁（南西から）
- 図版15 遺構 18 高坂1号墳 墳丘盛土断面（南東から）  
19 高坂1号墳 南西側墳丘盛土断面（南東から）  
20 高坂1号墳 北東側墳丘盛土断面（南東から）
- 図版16 遺構 21 高坂1号墳 石室掘形（南東から）  
22 高坂1号墳 石室掘形（北東から）  
23 高坂1号墳 石室掘形完掘（北東から）
- 図版17 遺構 24 高坂1号墳 遺物出土状況（南東から）  
25 高坂1号墳 羨道（南東から）
- 図版18 遺構 26 高坂2号墳 調査前全景（北西から）  
27 高坂2号墳 東埋葬施設墓標（北から）  
28 高坂2号墳 下層周溝（北西から）
- 図版19 遺構 29 高坂2号墳 埋葬施設（北から）  
30 高坂2号墳 埋葬施設（西から）
- 図版20 遺構 31 高坂2号墳 東埋葬施設鉄鏃出土状況（東から）  
32 高坂2号墳 東埋葬施設（南から）
- 図版21 遺構 33 高坂2号墳 西埋葬施設南半（北から）  
34 高坂2号墳 西埋葬施設南半（東から）
- 図版22 遺構 35 高坂3号墳 調査前全景（西から）  
36 高坂3号墳（北東から）
- 図版23 遺構 37 高坂3号墳・6号墳（北西から）  
38 高坂4号墳・5号墳 調査前全景（南西から）  
39 高坂4号墳 全景（北から）
- 図版24 遺構 40 高坂4号墳・5号墳 調査前全景（南西から）  
41 高坂5号墳 埋葬施設（北西から）

図版25 遺構	42 高坂7号墳 全景（北東から） 43 高坂7号墳 埋葬施設（北東から）
図版26 遺構	44 高坂7号墳 全景（南東から） 45 高坂7号墳 埋葬施設（北西から）
図版27 遺構	46 8号埋葬施設（北東から） 47 9号埋葬施設（北東から） 48 9号埋葬施設 土器出土状況（北東から）
図版28 遺構	49 12号石棺蓋（北東から） 50 12号石棺（北東から）
図版29 遺構	51 13号石棺蓋（北から） 52 13号石棺（北から）
図版30 遺構	53 風倒木群（南西から） 54 風倒木群（北東から）
図版31 遺構	55 風倒木SZ06（南東から） 56 土坑SK01（北東から）
図版32 遺構	57 土坑SK05（南西から） 58 土坑SK06（南西から）
図版33 遺構	59 陥穴SK18（東から） 60 陥穴SK30（東から）
図版34 遺構	61 竪穴建物SH02検出状況（北東から） 62 竪穴建物SH02検出状況（北東から） 63 竪穴建物SH02（北東から）
図版35 遺構	64 竪穴建物SH02（北東から） 65 竪穴建物SH02柱穴断面（北東から） 66 竪穴建物SH02柱穴1断面（北東から） 67 竪穴建物SH02柱穴2断面（北東から）
図版36 遺物	高坂1号墳 出土土器(1) 坏蓋
図版37 遺物	高坂1号墳 出土土器(2) 坏身
図版38 遺物	高坂1号墳 出土土器(3) 坏・高坏
図版39 遺物	高坂1号墳 出土土器(4) 子持器台
図版40 遺物	高坂1号墳 出土土器(5) 子持器台
図版41 遺物	高坂1号墳 出土土器(6) 子持器台細部および蓋
図版42 遺物	高坂1号墳 出土土器(7) 壺
図版43 遺物	高坂1号墳 出土土器(8) 提瓶
図版44 遺物	高坂1号墳 出土土器(9) 提瓶・甌
図版45 遺物	高坂1号墳 出土土器(10) 橫瓶・甌
図版46 遺物	高坂1号墳 出土土器(11) 甌
図版47 遺物	高坂1号墳 出土土器(12)・7号墳出土土器
図版48 遺物	高坂2号墳 出土土器
図版49 遺物	高坂3号墳・6号墳出土土器
図版50 遺物	高坂3号墳・4号墳・9号埋葬施設出土土器
図版51 遺物	高坂1号墳出土玉
図版52 遺物	高坂1号墳出土金属器
図版53 遺物	高坂1号墳・2号墳・7号墳・9号埋葬施設出土金属器
図版54 遺物	土坑SK01出土土器(1)
図版55 遺物	上 土坑SK01出土土器(2) 下 繩文土器
図版56 遺物	風倒木SZ06出土土器（上；表、下；裏）
図版57 遺物	弥生土器・石器類
図版58 遺物	古代・中世土器

# 第1章 遺跡をとりまく環境

## 第1節 地理的環境 (第1図)

高坂古墳群および高坂西遺跡は、兵庫県丹波市市島町中竹田高坂に存在する。丹波市市島町は兵庫県中東部に位置し、北は京都府福知山市・東は天田郡三和町と県府境を接している。また南には丹波市春日町、西には丹波市水上町・丹波市青垣町と接している。丹波市市島町には日本海側へ流れる由良川水系の支流で、春日町東端の三春峰付近を源流とする竹田川が福知山方面へ北流し土師川に合流する。竹田川の上流の丹波市春日町から西南方に向かう竹田川の支流である黒井川を遡ると、丹波市水上町石生に位置する瀬戸内海側へ流れる加古川水系との谷中分水界が存在しており「水分れ」と呼ばれている。この標高95.45mの日本一低い中央分水界を通じた交通路は、古くから瀬戸内海側と日本海側の南北を結ぶ重要なルートである。これが現在の国道175号を基軸としたルートである。

### 丹波市市島町周辺の山

塊は頁岩・砂岩やチャートを主とする丹波層群で形成されており、古墳の石材に利用されている。高坂古墳群が立地する高位段丘は大阪層群上部亞層群に相当する福知山累層で標高74m前後であり、竹田川の沖積面との比高差は20m程度ある。

北東側を市ノ貝川が開析し、斜面を形成している。段丘上面は段丘上という水利に不便な地形のせいか比較的平坦であるにもかかわらず、かつてはその大部分が森林・原野であった。しかし昭和30年代後半から昭和40年代にかけての農地等構造改善事業によって広大な圃場地帯となり多くの古墳や遺跡が削平されてしまったと考えられる。



第1図 丹波市と高坂古墳群の位置

## 第2節 歴史的環境（第2回）

高坂古墳群・高坂西遺跡は丹波市市島町に位置する、縄文時代・弥生時代・古墳時代・古代の遺跡であるため、丹波市市島町を中心に竹田川流域（丹波市春日町）あるいは氷上郡内も一部含めて、時代を追って概観する。

### 1. 旧石器時代

この地域最古である丹波市春日町七日市遺跡では、4.5haもの範囲にわたってAT下位層から3万年～2万5千年前の石器ブロックが多数検出されている。石材のほとんどは地元産のチャートが占めており、隱岐産黒曜石や二上山～岩屋原産サヌカイトもわずかながら認められている。狩猟のためのキャンプ地と考えられている。丹波市市島町梶原遺跡でもAT層下位で、チャートを主体とした石器集中ブロックが検出されているほか、丹波市市島町上ノ段遺跡では石器がわずかに出土している。

### 2. 縄文時代

縄文時代になっても遺跡の内容がわかるほどの遺跡はほとんど見られない。丹波市春日町国領遺跡では土器は出土していないが、草創期と考えられる有舌尖頭器・木葉形尖頭器を伴う石器ブロックが検出され、石器製作跡と考えられている。そのほか、丹波市市島町十ノ貝遺跡、丹波市市島町梶原遺跡、丹波市春日町多利遺跡などで後期の土器や石器などがわずかに見つかっている。丹波市市島町高坂西遺跡では晩期の土坑や陥穴調査している。丹波市春日町下野村遺跡では晩期の土器が出土している。

### 3. 弥生時代

弥生時代でも前期の遺跡はまだ少ない。丹波市市島町的場遺跡では落ち込みから弥生土器、突帯文系土器、結晶片岩様緑色岩製小玉などが出土地している。その他、丹波市市島町上ノ段遺跡、丹波市春日町七日市遺跡から弥生土器がわずかに出土している。

弥生時代中期になると沖積地の微高地上に大規模な集落が認められる。丹波市春日町七日市遺跡では中期から終末期にかけて継続した集落の中心部分が検出され、数十棟の竪穴住居跡と、30基前後の円形・方形周溝墓や墳丘を持たない多くの木棺墓・土器棺墓が調査されている。特に集落の盛期と見られる中期後半では居住域と墓域が明確に区別でき、規模や構造の異なる範囲に分かれており、集落内部においても様々な階層差が生じていたことが考えられる。中期後半には小規模な集落も散見され、丹波市市島町高坂西遺跡や上田遺跡では竪穴建物を調査している。丹波市市島町的場遺跡や梶原遺跡では中期後半の木棺墓や方形周溝墓を検出している。また丹波市春日町野々間遺跡では外縁付紐2式4区袈裟襷文銅鐸と扁平紐式4区袈裟襷文銅鐸が埋納された状態で発見調査されており、丹波市春日町野村遺跡では銅剣形石剣が出土している。

後期になると大規模な集落が衰退し、丹波市春日町国領遺跡、丹波市市島町的場遺跡などの微高地上に形成された小規模な集落が多く検出されている。またこの時期には丹波市春日町東山墳墓群など丘陵上に墳墓が造られるようになることが多くなってくる。丹波市市島町上ノ段遺跡はそれに統くものである。

### 4. 古墳時代

古墳時代の集落は上田遺跡で調査が行われており、庄内併行期の遺物を伴い二度の建替えの跡がある隅丸方形の竪穴建物跡一棟、溝状造構、木棺墓等が検出されている。古墳時代後期には多くの古墳群が確認されているが、集落関係の遺跡は調査されていない。

古墳時代に入ると規模の大きい古墳が築かれる。丹波市水上町親王塚古墳は直径42mの円墳で前方後円墳の可能性もあり、三角縁神獣鏡が出土している。丹波市春日町二間塚古墳が確実なものとして知られている。その後、竹田川流域では竪穴式石室より涙文鏡が出土した直径10mの円墳である丹波市市島町久良部1号墳が知られるのみである。丹波市市島町梶原古墳は竹田川を望む尾根上に立地する全長26mの前方後円墳である。

小規模な古墳については、5世紀後半～6世紀中頃までは木棺や石棺を埋葬施設とする古墳が多く見られ、丹波市市島町高坂古墳群・丹波市春日町松ノ本古墳群・丹波市春日町多利向山古墳群などが調査されている。6世紀中頃には丹波市春日町多利向山C-2号墳・丹波市春日町火山10号墳などであり、この地域に横穴式石室が導入された初現期の横穴式石室が見つかっている。

丹波市市島町内も古墳時代後期になると竹田川流域でも全域に古墳群が形成されるようになり、各地に数十からなる古墳群も確認されている。いずれも小規模な木棺直葬墳もしくは横穴式石室墳と考えられる。

高坂古墳群の北東、市ノ貝の谷から塩津峠の山裾には、中山古墳群・水上古墳群・西谷古墳群・才田古墳群・塩津西古墳群・塩津東古墳群が2基から9基の群をなしている。塩津東古墳群には1基の方墳が存在している。市ノ貝の谷から福知山市境にかけての段丘縁辺には、新道貝古墳群・水西古墳群・清瀬寺裏古墳群・貝谷古墳群・樽井西古墳群・樽井東古墳群が2基から10基の群をなしている。清瀬寺裏古墳群には1基の方墳が存在している。

高坂古墳群から南側の段丘縁辺には、安下北古墳・安下古墳・山中古墳が単独で存在している。高坂古墳群の竹田川を挟んで対岸には、石原古墳群・森古墳群・表古墳・友政古墳群が存在し、単独墳から8基の群をなしている。

前山川の南側には、矢代古墳群・北岡本古墳群が2基から5基の群をなしている。これらの竹田川の対岸には、狐塚古墳群・久良部古墳群（北支群）・久良部古墳群（中支群）・久良部古墳群（南支群）が2基から8基の群をなしている。久良部1号墳は竪穴式石室をもつ円墳で涙文鏡が出土している。三ツ塚廃寺の北側には三昧古墳群、南側には天神古墳群が2基から7基の群をなしている。

美和川北側の竹田川に面した山裾には、花塚古墳・山下寺山古墳・坂内古墳が単独で存在している。美和川南側には、長者ヶ野北古墳群・長者ヶ野南古墳群が5基と7基の群をなしている。

## 5. 古代

古代においてはこの地域は丹波国水上郡に、福知山市は天田郡に属し、高坂古墳群は水上郡のうち竹田里に属していたと考えられる。丹波市春日町山垣遺跡からは「竹田里春部若万呂」「竹田里六人部」と記された木簡が出土しており『和名類聚抄』だけではなく、考古学の面からも竹田里の存在が読みとれる。古代山陰道の丹後支道が多紀郡の長柄駅から氷上郡の星角駅の間で分岐し瓶割峠を通って、丹後国府に向かう途中、竹田里を通り、日出駅家が設置されていたが、考古学的には明らかにされていない。

寺院については、古代水上郡内で現在のところ唯一伽藍が確認されている白鳳期創建の丹波市市島町史跡三ツ塚廃寺跡がある。三ツ塚廃寺の南東方向の山裾には瓦を焼いた丹波市市島町天神窯跡がある。役所については丹波市水上町市辺遺跡や丹波市春日町七日市遺跡・山垣遺跡は出土した木簡の内容から水上郡衙とその別院の一部と考えられている。

その他、丹波市市島町梶原遺跡、丹波市市島町上ノ段遺跡、丹波市市島町十ノ貝遺跡では7世紀の堅

穴建物跡、丹波市市島町的場遺跡、丹波市市島町掘壁遺跡では掘立柱建物跡が検出されている。梶原遺跡では最古級の甕が出土している。

また、丹波市市島町鴨庄窯跡群（南窯跡群・岩戸窯跡群・上牧窯跡群・北奥窯跡群）は7～8世紀にかけて33基程度の窯跡が知られており、氷上郡の中心的な須恵器生産地と考えられる。

## 6. 中世

丹波市春日町下三井・庄境遺跡〔10世紀〕、丹波市春日町七日市遺跡〔11～12世紀〕、丹波市春日町多利・前田遺跡〔12～13世紀〕、丹波市春日町国領遺跡〔12～13世紀〕などで、いずれも井戸や屋敷墓を伴う多くの掘立柱建物が検出されている。当時の盛んな開発を示すもので、このうち下三井・庄境遺跡は淳和院領三井庄と関連するものと考えられている。

14世紀以降の集落はあまり明確ではないが丹波市市島町的場遺跡、丹波市市島町上ノ段遺跡、丹波市市島町十ノ貝遺跡などが認められる。またこの時期には丹波市市島町誉田城、丹波市市島町友政城、丹波市春日町史跡黒井城跡をはじめとする山城がつくられ、丹波市春日町朝日城跡・丹波市春日町火山城跡では調査がなされている。丹波市春日町河津館跡は堀と搔き揚げの土塁及び泥田掘によって区画された東西86m×南北75mの方形館跡が認められている。いずれも16世紀末の明智光秀の丹波攻略の前後に廃絶したと考えられる。

須恵器生産は、丹波市春日町中山窯跡や平松八幡神社窯跡群などが知られており、平松八幡神社窯跡群では11世紀の窯6基が調査されている。

## 7. 近世・近代

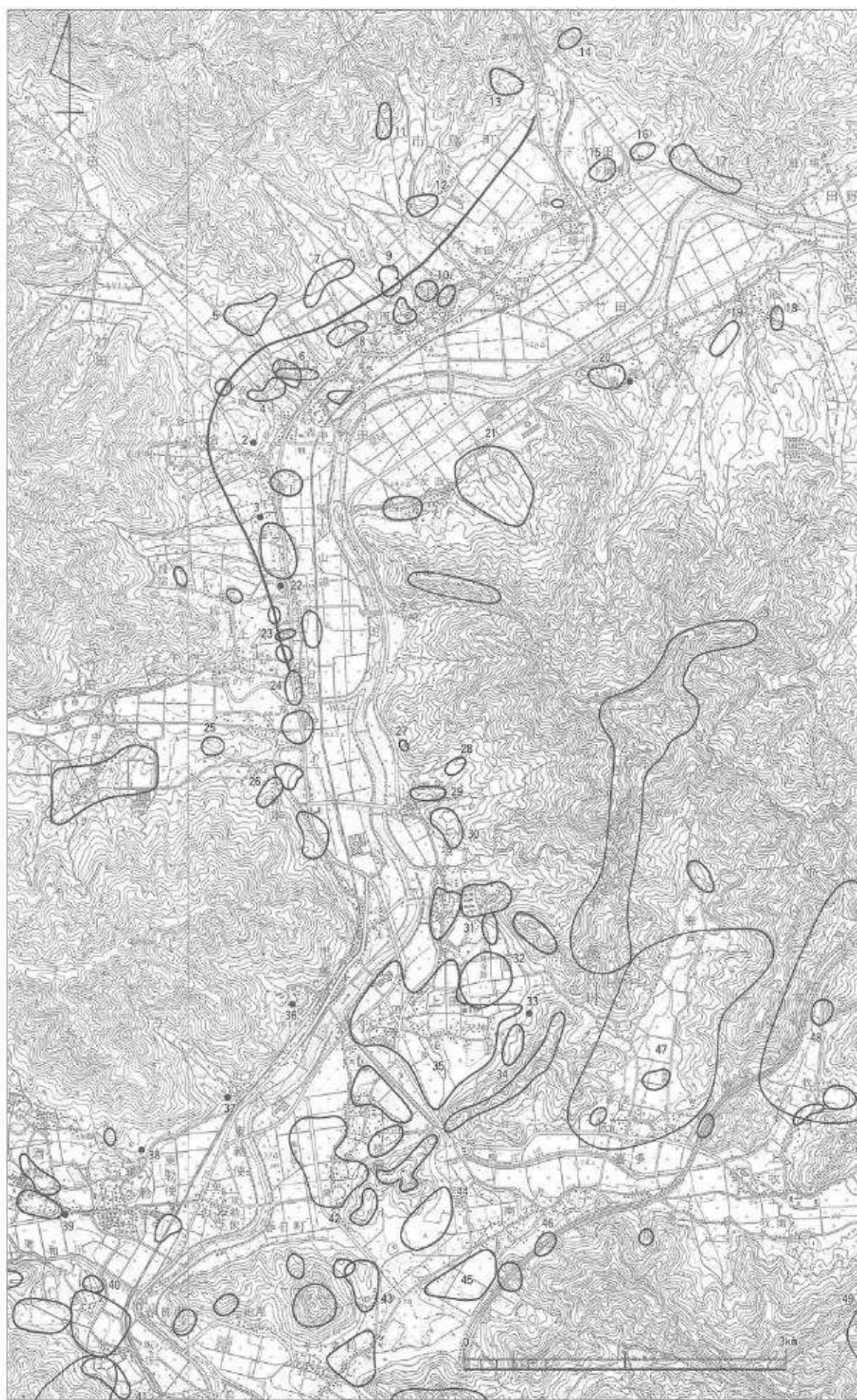
江戸時代は丹波国亀山藩領、柏原藩領、上総国鶴牧藩領、幕府領、旗本領などに分割統治されそれぞれの支配地が複雑に錯綜している。

氷上郡は、廃藩置県のあとの明治4年11月2日に豊岡県に改置統合され、明治9年8月21日に兵庫県に併合された。明治22年に町村制施行に伴い中竹田村、下竹田村と上竹田村の一部が合併し竹田村が成立した。昭和30年3月には竹田村をはじめとする5ヶ村が合併し、市島町が成立した。

平成16年11月1日に氷上郡内の市島町をはじめとする6町が合併し、丹波市が発足した。

第1表 高坂古墳群周辺の主要遺跡一覧

1	高坂古墳 高坂西遺跡	8	水呑古墳群	15	貝谷古墳群	22	山中古墳	29	久良部古墳群 (中支群)	36	花塚古墳	43	梶原古墳群
2	安下北古墳	9	十ノ貝遺跡	16	椿井西古墳群	23	上ノ段古墳	30	久良部古墳群 (南支群)	37	山下寺山古墳	44	梶原遺跡群
3	安下古墳	10	清瀬寺裏古墳群	17	椿井東古墳群	24	的場遺跡	31	三昧古墳群	38	坂内古墳	45	南窯跡群
4	高坂遺跡	11	西谷古墳群	18	石原古墳群	25	矢代古墳群	32	三ツ塚遺跡群	39	酒梨三の丸古墳	46	喜多塙墓群
5	中山古墳群	12	才田古墳群	19	森古墳群	26	北園本古墳群	33	天神瓦窯跡	40	長者ヶ野北古墳群	47	岩戸窯跡群
6	新造貝古墳群	13	塙津西古墳群	20	表古墳	27	狐塚古墳群	34	天神古墳群	41	長者ヶ野南古墳群	48	上牧窯跡群
7	氷上古墳群	14	塙津東古墳群	21	友政古墳群	28	久良部古墳群 (北支群)	35	上田遺跡	42	梶原古墳	49	北奥窯跡群



第2図 高坂古墳群の地形と主要遺跡

## 第2章 調査に至る契機と経過

### 第1節 調査の契機（第3・4図）

国道175号は、兵庫県の東播磨地域の明石と丹波地域の舞鶴を結ぶ幹線道路であり、丹波地域の生活・産業・観光など地域を支える重要な役割を果たしている。このうち、丹波市市島町上竹田から下竹田に至る4.5kmの区間は、道路の幅員が狭く線形も悪いうえ、人家が密集しているため、交通の障害になっていた。このため、兵庫県柏原土木事務所では安全で円滑な道路交通の確保を目的としてバイパス事業を計画した。

この国道175号竹田バイパスは現道の西側の段丘上を中心に計画されたため、これに伴って兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所では文化財の有無を確認するために、分布調査を実施した。平成4年度には第1期工区（丹波市市島町上竹田～中竹田間：2.8km）の分布調査（遺跡調査番号920394）を実施し、9箇所（No.1～No.9）の地点で埋蔵文化財包蔵地が存在することを確認した。平成5年度には第2期工区（丹波市市島町中竹田～下竹田間：1.8km）の分布調査（遺跡調査番号930246）を実施し、5箇所（No.10～No.14）の地点で埋蔵文化財包蔵地が存在することを確認した。



第3図 国道175号竹田バイパスと遺跡

平成7年度には、そのうち南部に位置するNo.6・No.7・No.8・No.9の4箇所の地点について確認調査（遺跡調査番号950268～950271）を行い、No.8地点とNo.9地点の2地点で遺跡が存在していることが判明した。そこで、平成8年度に的場遺跡（No.9地点）の全面調査（遺跡調査番号960086）と上ノ段遺跡（No.8地点）の全面調査（遺跡調査番号960087）を行った。

平成9年度には、北部に位置するNo.1・No.3・No.4・No.5の4箇所の地点について確認調査（遺跡調査番号970388・970410～970412）を行ったが、埋蔵文化財の存在は明らかにならなかった。

平成10年度には、第1期工区のうち調査が残っていたNo.2地点（高坂古墳群）について、古墳の存在が明らかであったため確認調査を行わず全面調査（遺跡調査番号980116）を実施した。これは平成12年度の青垣町総合運動公園完成に合わせたバイパスの供用開始が求められたからである。No.2地点（高坂西遺跡）の広がりが想定された南側は確認調査（遺跡調査番号980173・980218）を行ったが、すでに大きく削平されており、遺跡の広がりは確認できなかった。第2期工区のNo.10地点は、確認調査（遺跡調査番号980344）を行ったが、埋蔵文化財の存在は明らかにならなかった。

平成12年度には、No.11～No.14地点の確認調査（遺跡調査番号2000361）を行い、No.11地点で遺跡が存在していることが判明した。そこで、平成13年度に十ノ貝遺跡（No.11地点）の本発掘調査（遺跡調査番号2001039）を行った。さらに西側に広がる様相を示したため確認調査（遺跡調査番号2001129）を行い、遺跡の存在が判明したため、広がる部分の本発掘調査（遺跡調査番号2001208）を実施した。

なお、高坂古墳群・上ノ段遺跡・的場遺跡の調査を実施した南側の第1期工区（丹波市市島町上竹田～中竹田間：2.8km）は、平成5年度から事業着手し、平成12年7月に完成し、供用を開始した。高坂古墳群が存在していた場所には市島町により、「高坂古墳群」の表示がなされている。

十ノ貝遺跡の調査を実施した北側の第2期工区（丹波市市島町中竹田～下竹田間：1.8km）は、平成11年度から事業着手し、平成16年10月に完成し、供用を開始し事業が終了した。



第4図 国道175号竹田バイパス開通後の高坂古墳群

## 第2節 調査の経過

### 1. 全面発掘調査の経過

高坂古墳群の調査は平成10年8月19日に古墳3基、調査面積1,321m<sup>2</sup>の予定で調査を開始した。倒木除去・集積後地形を観察すると調査予定範囲外の北東側斜面に古墳らしき盛り上がりが広がること、また南西側にも平坦地が続き遺物の散布が見られる事が判明した。このため、協議を行い最終的に面積1,983m<sup>2</sup>の調査を実施し、11月25日に終了した。

残土は、道路用地の南西側延伸部は未買収であり、道路用地の両側は民地のため、北東側の斜面下に搬出した。このため古墳の調査と併行して、南西側平坦地の調査を行った。なお古墳の周辺には縄文時代の遺構が存在したため、古墳の盛り土の築造状況を調査した後、下層の遺構の調査を行った。

調査により古墳7基、木棺4基、石棺2基、縄文時代の風倒木痕跡、土坑、陥穴、弥生時代の竪穴建物、古墳時代の竪穴状の遺構を検出した。

この間、調査途中には毎日新聞社と丹波新聞社の取材を受け、新聞記事が掲載された。調査の成果については、平成10年10月30日に、地元を対象に解説会を行い、約80名の参加を得た。また11月4日には、市島町立竹田小学校の5・6年生75名に対して見学会を行った。なお、調査中も可能な限り公開し、解説を行った。

なお、市島史実会を中心に高坂1号墳の移築復原保存が計画され、市島町および市島町議会に陳情がなされたが、諸般の事情で実現には至らなかった。

なお、高坂1号墳および高坂2号墳の一部は過去に乱掘されたことが判明しており、遺物の回収はすでに氷上郡教育委員会で行っていたが、あらためて遺物の回収と乱掘時の聞き取りを調査中に行った。一部メモなどの記録が取られており、記録が信頼できる情報については、この記録を元に報告書の中で記述した。

### 2. 出土品整理の経過

出土品の整理は平成14年度から平成16年度にかけての3箇年にわたって、兵庫県丹波県民局長の依頼に基づき兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所において実施した。出土品整理作業は整理保存班（平成14年度・15年度：菱田淳子、平成16年度：村上泰樹）の進行管理のもとに篠宮が行い、金属器の保存処理については整理保存班岡本一秀の進行管理のもとに行った。

平成14年度は、土器・石器類の水洗、注記を行った後、接合・復原・実測・写真撮影などを行った。また、縄文土器および弥生土器の胎土分析をパリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。

平成15年度は、土器・石器類の写真撮影・写真整理を行うとともに、遺構図および土器・石器の実測図についてトレースを行った。

平成16年度は金属器の保存処理と実測とトレース・写真撮影・写真整理を行い、昨年度にトレースした分も合わせてレイアウトを行った。また須恵器の胎土分析は鹿児島国際大学の三辻利一氏にお願いした。耳環の材質分析は金属器担当岡本一秀を通じて独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所降幡順子氏にお願いした。これらの成果も併せて原稿執筆・編集を行い、報告書を刊行した。

### 3. 調査の担当

#### [発掘調査]

##### 高坂古墳群全面調査（調査番号980116）

企画調整担当： 柏原正民

調査担当： 西口和彦・篠宮 正・矢野治巳

調査補助員： 田中 騰・西本寿子・中尾晋也・大西智子・牛尾大祐・鈴木栄子

#### [出土品整理]

##### 平成14年度

進行管理担当： 整理保存班 菱田淳子

整理担当： 調査第2班 篠宮 正

水洗・注記： 長谷川洋子・家光和子・伊藤ミネ子・江口初美・衣笠雅美・早川亜紀子

接合・補強・復原： 吉田優子・石野照代・大仁克子・藏幾子・中田明美・西野淳子・真子ふさ恵

復原： 加藤裕美・又江立子・津田友子

土器の拓本： 杉本淳子・石野照代・中田明美・吉田優子

土器・石器の実測： 杉本淳子・小野潤子

##### 平成15年度

進行管理： 整理保存班 菱田淳子

整理担当： 調査第3班 篠宮 正

写真撮影・写真整理： 杉本淳子・小野潤子・加藤裕美・又江立子・津田友子

図面補正： 杉本淳子

土器・石器・造物の製図： 杉本淳子・藤川紀子

##### 平成16年度

進行管理： 整理保存班 村上泰樹

金属器保存： 整理保存班 関本一秀

整理担当： 調査第2班 篠宮 正

鉄器の実測・製図・写真： 高田めぐみ

金属器保存処理： 栗山美奈・大前篤子・藤井光代・三島重美・高橋朋子・那須かおり

レイアウト： 杉本淳子・高田めぐみ・藤川紀子

## 第3章 調査の概要

### 第1節 調査方法と基本層序

調査前の現況は加茂神社境内であり、本殿裏の社叢であったため、百年以上のヒノキなどの大木が樹立していた。この立木の伐採は原因者である柏原土木事務所が行った。伐採および搬出は古墳があるため、最新の注意を払って行うように申し入れていた。ところが、限られた用地幅の範囲の中に古墳が密集して存在していたことと大木の切り株を避けて何度も搬出のための重機が同じ場所を通ったことにより、一部現況の地形が改変していたことが、後の探査や調査で確認された。

発掘調査前に、低墳丘の古墳の周溝や埋葬施設を確認するために電気探査を行った。

発掘調査は、南西部分の古墳の広がっていない部分については表土および無遺物層を重機により掘削した。それ以下の包含層の掘削および遺構検出、遺構掘削は手掘りで行った。古墳部分は古墳の主軸がある程度わかる高坂1号墳については、主軸を中心に十字に畦を設定し、それ以外の古墳については、古墳の切りあい関係がつかめるような十字の畦を設定し、表土から土層を観察しながら手掘りで調査を進めていった。古墳の調査後は古墳の築造状況の調査を行い、さらに古墳築造以前の下層の調査を行った。

調査に先立ち、調査区を設定した。調査区は国土座標第V系により10m方眼で地区割りを行い、東西方向はアルファベットで西から東にA・B・C～H、南北方向は数字で北から南に1・2・3～9と表した。北西角の杭を地区の名称とした。ちなみにE4の座標値はX = -83,940.000、Y = 72,270.000である。この地区割りは測量の基準や遺物の取り上げで使用した。

遺跡の記録は写真撮影と図面で行った。写真撮影は35mmモノクロ、35mmリバーサル、35mmネガカラーを中心に撮影を行い、重要な写真は大判サイズのカメラでモノクロ、リバーサルの撮影を行った。図面は調査前の地形測量と調査後の遺構の全体図をヘリコプターによる空中写真測量で行った。このほかに個別の遺構図を作成し、必要に応じて遺物出土状況図・土層図を作成した。

調査地点の土の堆積は丘陵の斜面であるため、それほど厚くはなく、基本土層は、上から順に、第I層：表土、第II層：黒色土、第III層：黄褐色基盤層である。本来であれば第II層中で検出できるはずであるが、困難であったため第III層上面を検出面とした。

### 第2節 調査の概要（第5・6図）

今回の調査地点は、標高67.5mから75.2mの北東向き斜面と平坦面に立地している。南西側は大きく削平して柿園になっている。それ以外の南東・北西側は加茂神社境内であり、社叢になっている。

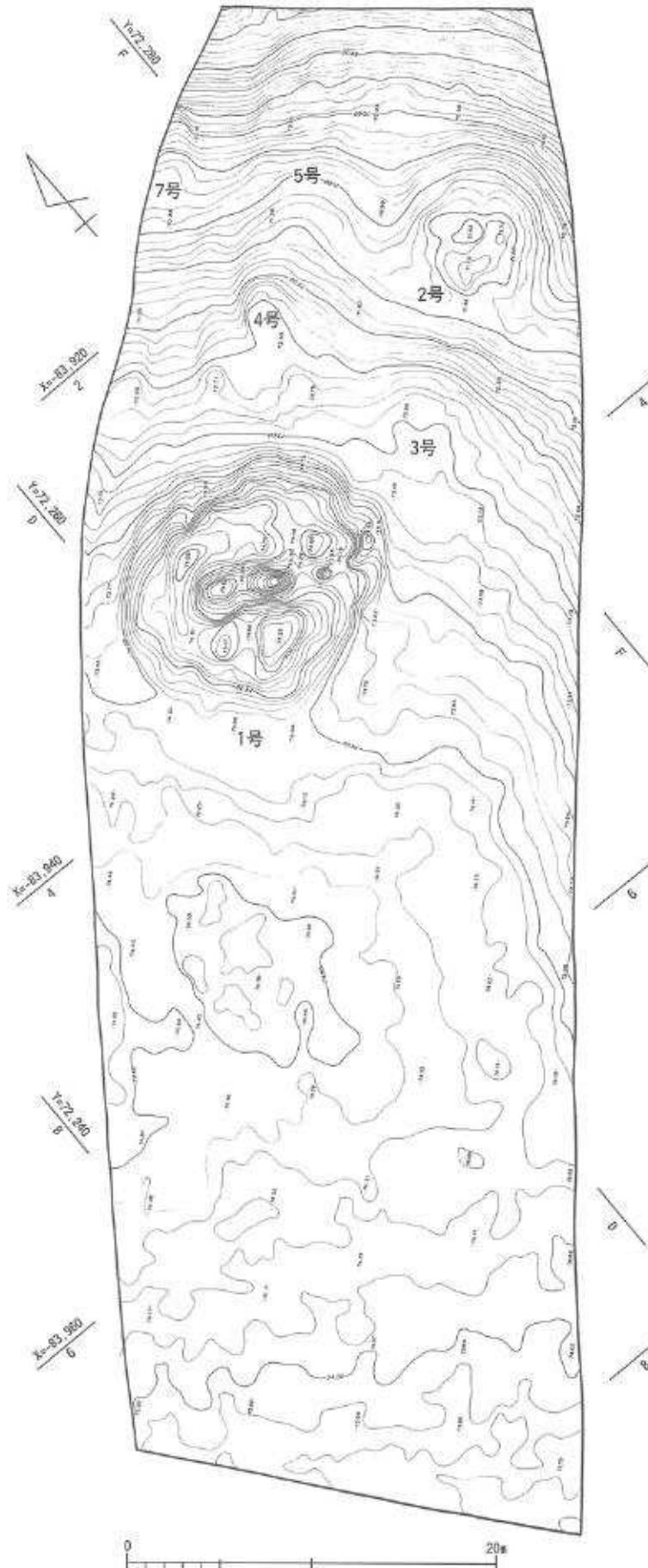
検出した遺構は古墳とそれに伴う埋葬施設など高坂古墳群と弥生時代と縄文時代の集落関係の高坂西遺跡の大きく二つに分けることができる。

高坂古墳群は横穴石室を埋葬施設とする円墳1基（高坂1号墳）、木棺を埋葬施設とする円墳6基（高坂2号墳・3号墳・4号墳・5号墳・6号墳・7号墳）、墳丘を伴わない木棺4基（8号・9号・10号・11号）、墳丘を伴わない石棺2基（12号・13号）がある。

高坂西遺跡は風倒木痕跡と縄文時代の土坑・陥穴、弥生時代の竪穴建物、古墳時代の竪穴状の遺構を検出した。風倒木痕跡は15基を確認し、縄文土器が出土したものもある。土坑は3基以上、陥穴は2基



第5図 高坂古墳群と周辺の地形



第6図 高坂古墳群の調査前の地形

確認し、いずれも底部に5個の杭痕を残している。

弥生時代の竪穴建物は高坂1号墳の下層に位置しており、埋葬施設の掘削により削平されており、2／3程度しか残存していない。

古墳時代の竪穴状の遺構は調査区北東端の斜面に位置している。古墳時代の土器が出土しているが、時期の認定は難しい。

高坂1号墳の石室内部からは中世の土器がまとめて出土しており、石室が再利用されていたことが考えられる。

出土遺物は、土器がコンテナ21箱と玉類・金属器・石器が出土した。土器は古墳時代の土器が大半であり、ほかに弥生時代・縄文時代・古代・中世の土器が出土した。玉類は1号墳から出土しており、勾玉・管玉・切子玉・丸玉などがある。金属器は1号墳・2号墳・7号墳・9号埋葬施設から出土しており、鉄鎌や刀子などがある。石器は石鎌などがある。

今回の調査地点での遺構の分布や状況から、弥生時代や縄文時代の遺跡はさらに広がる様相がうかがえた。また低墳丘の古墳も現況では確認できないが、周間に広がっている可能性は十分考えられる。

## 第4章 高坂古墳群の調査

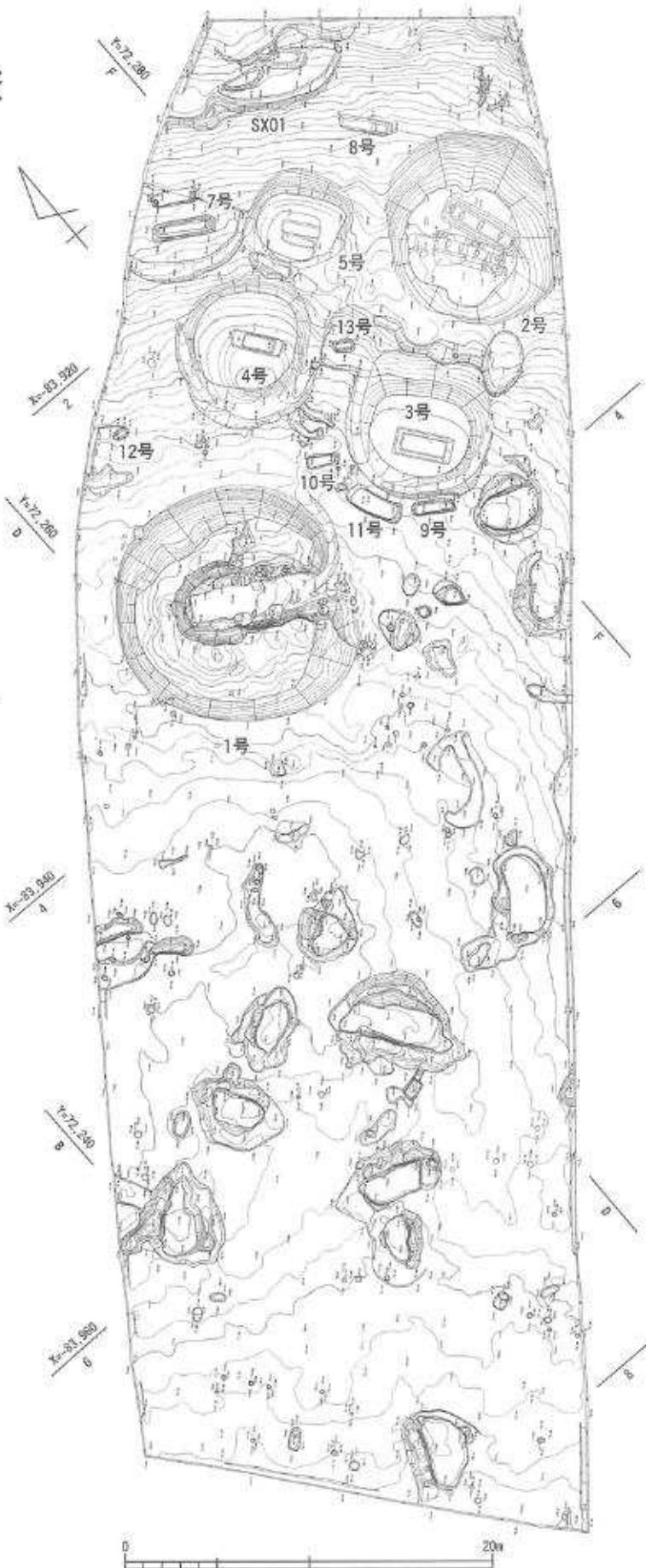
### 第1節 概要（第7図）

高坂古墳群は、竹田川の支流である市ノ貝川の右岸、段丘上および段丘傾斜地の南北方向約35m、東西方向約35mの狭い空間に分布している。

古墳群は、7基の円墳で構成されており、古墳の周囲から2基の箱式石棺と4基の木棺も検出したので、併せて調査を行った。

古墳群は、立地により大きく2群に分類できる。段丘上の平坦面に立地する1号墳と、市ノ貝の谷に面した傾斜地に立地する2号墳から7号墳である。この立地による分類は埋葬施設の違いおよび築造時期にも現れている。前者は6世紀後半に作られた横穴式石室を埋葬施設とする円墳であり、後者は5世紀後半から6世紀前半にかけての木棺を直葬する古墳とに分けられる。

古墳の調査は、基準とした十字の畦の北側を1区とし、時計回りに2区、3区、4区とした。



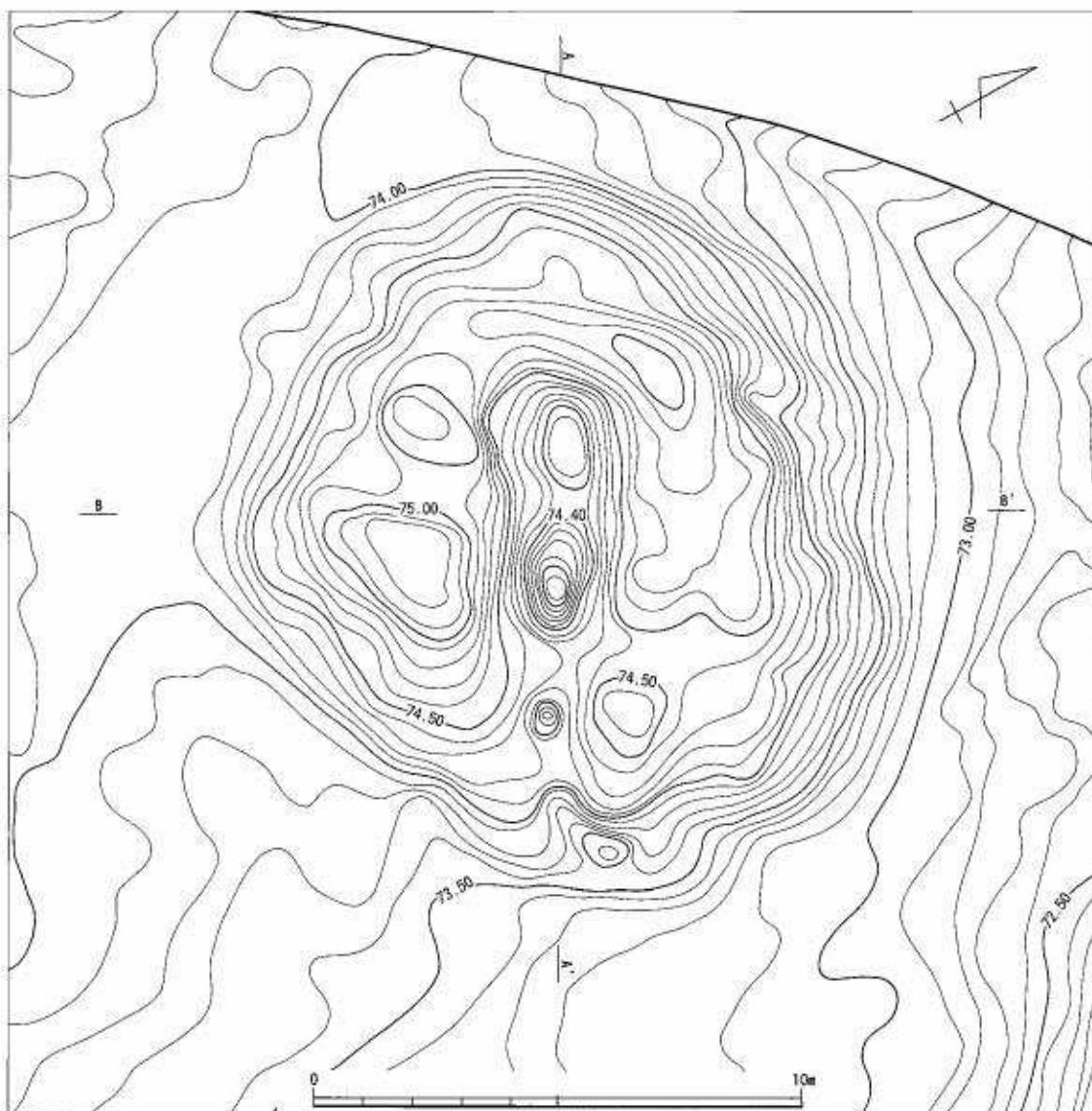
第7図 高坂古墳群

## 第2節 1号墳

高坂1号墳は調査区中央部のやや北寄りに位置しており、高坂古墳群の中でもっとも大きな墳丘をもっている。平坦面から北東に傾斜する斜面の傾斜変換点に立地する。墳丘には大木の切り株が存在していた。調査前に大きな盛り上がりと中心部分から東にかけて、大きな窪みが存在しており、石材の一部が顔のぞかせていた。このことから横穴式石室を埋葬施設とする円墳であると判断できた。

### 1. 墳丘（第8～10図）

墳丘は直径13.0mの円形で、高さは最高75.2mを測る。墳丘の中心は玄室中軸線の奥壁から玄室の3/4の位置にある。墳丘の南西側の斜面上方には幅約2.5m、深さ0.3m程度の浅い溝が巡っており、北東側の斜面下方には幅約2.0mの緩傾斜部が存在している。墳丘の構築はまず、旧表土の上面に石室掘形を掘削した黄橙色系の基盤層が盛られ、石室掘形掘削後は石室の石材の据付単位毎に行われたと考えられる。石材周辺は黄橙色系の基盤層の土と土壤化した黒色系の土を交互に積み重ね丁寧に盛っている。墳丘裾から周囲には墳丘から流失した土が厚く堆積していた。最上層は、比較的近年に石室内から掘り出されたと考えられる土が堆積しており、土器の破片や、玉類などが含まれていた。



第8図 高坂1号墳 墳丘 調査前

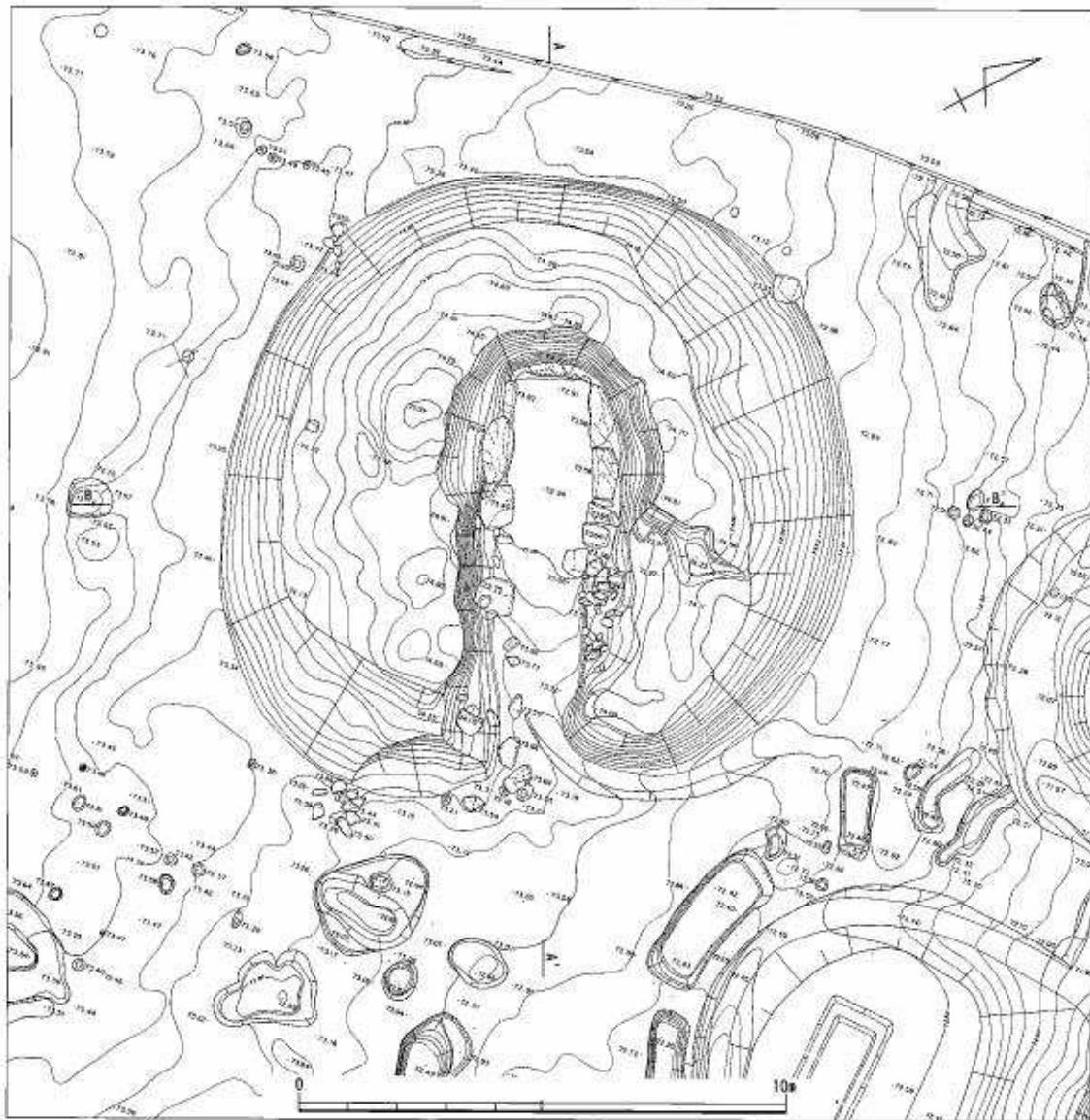
## 2. 埋葬施設（第11～13図）

埋葬施設は南東方向に開口する左片袖の横穴式石室である。主軸は北から54°西に振っている。石室上部の側壁・奥壁の一部や天井石は抜かれており石室内には、最近動かされた締まりのない土が堆積していた。

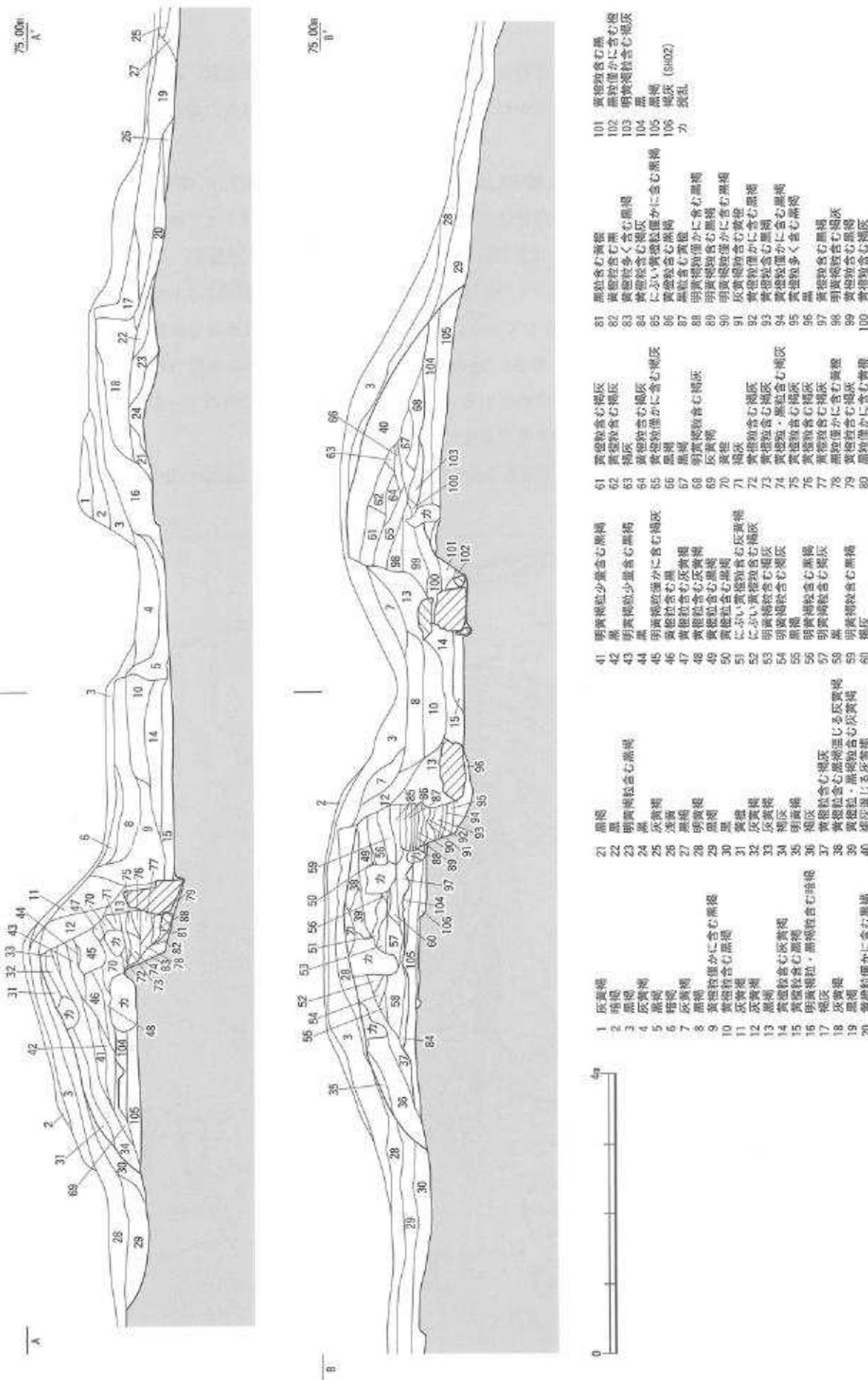
石室の構築は、上端長さ7.3m、上端幅4.5m、下端長さ6.2m、下端幅3.7m、深さ約0.4mの墓壙掘形を、玄室部分の床面は水平に、羨道部分は入り口側が浅くなるように傾斜させて掘削している。石室の全長は5m以上を測る。玄室の長さは3.5m、幅は1.75mで、平面形は長方形で、長さは幅の2倍である。袖石は左側壁から玄室幅の約1/3の0.60m突出する。玄室床面の標高は73.0mを測る。

奥壁は床面から高さ0.7mまで現存している。奥壁の石材の設置には玄室側を床面から約0.15m傾斜させて掘り、幅1.45m、高さ0.8m、厚さ0.5mの上端に頂点のある三角形の大型の石材を据え、左側壁との間の隙間に小型の石材を立てて埋めている。右側壁側も小型の石材で埋めている。奥壁石の裏側底面には小型の石材をかませたり、押さえたりしている。

玄室側壁は左側側壁が最高2段、高さ0.7mまで遺存している。基底は3石からなり、羨道側に行く



第9図 高坂1号墳 墳丘 調査後



第10図 高坂1号墳 墳丘断面

にしたがい小型化している。奥から2石目まで、奥壁の中央石とほぼ同じ高さ0.7mで揃えて構築を行っている。3石目は背が低いため、小型の石材を横方向に2石積んで高さを合わせている。右側壁は最高2段、高さ1.0mまで遺存している。基底は3石からなり、左側壁と同様に羨道側に行くにしたがい小型化している。奥から2石目まで、高さ1.0mでそろえて構築を行っている。3石目は高さ0.4mである。2段目は1石目が高さ0.85m、2石目が高さ1.0mまで積まれており、2石目の高さが1石目のほぼ倍であるため、これを基準に構築したと考えられる。

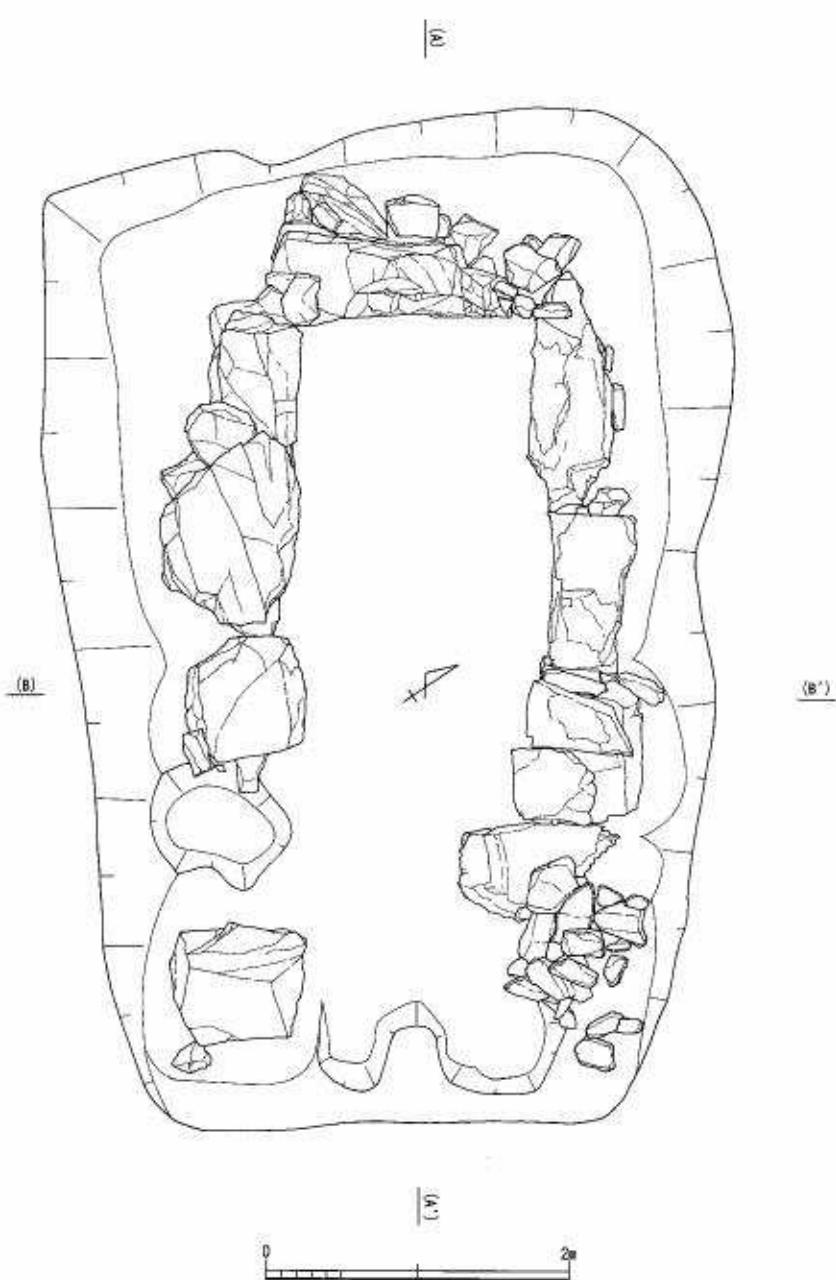
床面は乱掘により、ほとんどきれいに一度掘られていたが、ほぼ水平であり、基盤面を床面としており、敷石が敷かれていた様子はない。

羨道は左右側壁の遺存状況が悪いため不明な点が多いが、左側に袖がある左片袖式である。左側の袖石は1石で、縦に設置しており玄室の左側壁の横まで入り込んでいる。高さは右側壁の3石目の1段目とほぼ同じであ

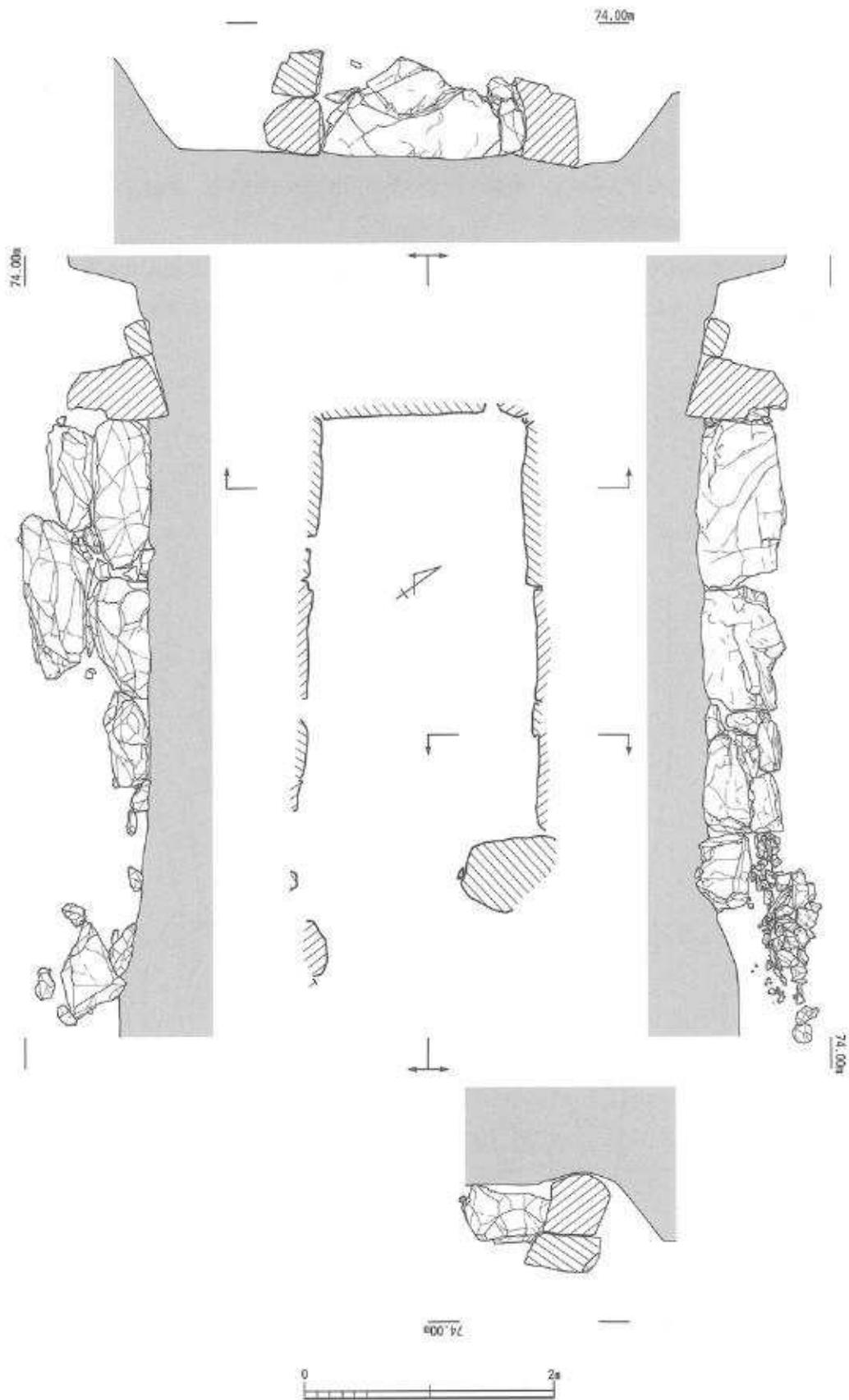
る。羨道付近も  
乱掘が行われて  
おり、当時の状  
況を保っていな  
いが、羨道の標  
高は73.25mを  
測り、玄室床面  
より0.25m高い。

閉塞施設や状  
況は後世の搅乱  
が著しく、遺存  
状況が悪いため  
詳細は明らかで  
ない。

石室の入り口  
部付近から斜面  
下方側には墳丘  
の裾に沿って、  
幅0.7m、深さ  
0.1mの素掘り  
の排水溝が掘ら  
れている。



第11図 高坂1号墳 石室 検出



第12図 高坂1号墳 石室 立面

## 3. 遺物出土状況（第14図）

遺物は石室内、前庭部、墳丘などから出土している。

石室内からは玄室と羨道部分に大きく分けられる。玄室内は奥壁左側を1区、左側羨道側を2区、右側羨道よりを1区、奥壁右側を4区とした。玄室内は奥壁部分と左側壁部分にまとまりが見られる。これは乱掘により出土したもので、乱掘時の記録から復原したものである。

玄室内奥壁部からは須恵器と鉄器が出土した。須恵器は完形であり、蓋坏と提瓶が出土しているが、提瓶は行方不明である。蓋坏は組み合わさって出土したものや重なって出土したものがある。鉄器は鉄鎌と轡があり、鉄鎌2点は蓋坏7と23のセットの下から出土した。

玄室内左壁

部は土器と鉄

器が出土した。

土器は須恵器

蓋坏と土師器

壺があり、い

ずれもほぼ完

形である。奥

壁側から須恵

器坏身、土師

器壺、須恵器

坏蓋2点が出

土した。鉄器

は須恵器坏蓋

2点が伏せた

状態で出土し、

その間から刃

部を北に向け

て、塊となっ

て出土した。

羨道部分か

らは玄室に近

い部分から玉

類が散布して

出土した。内

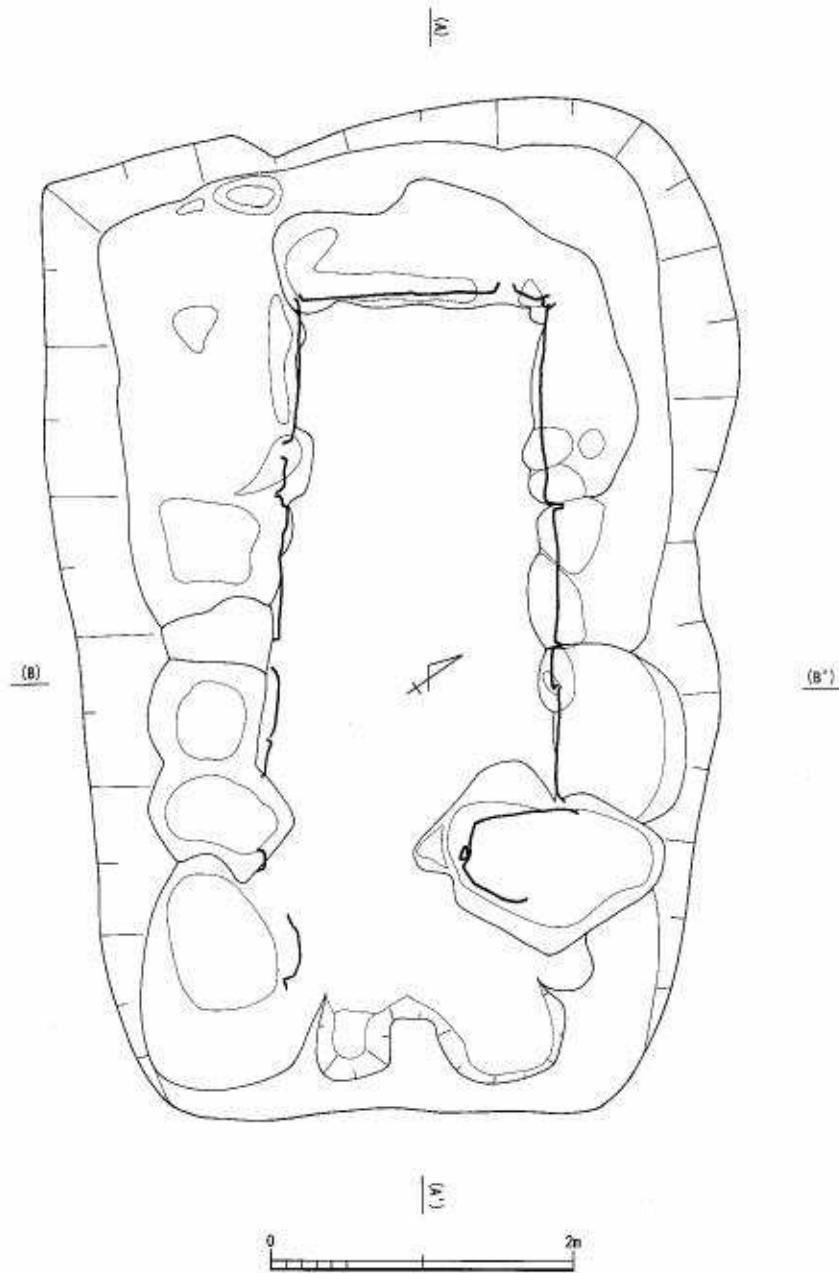
訳は水晶切子

玉2点、碧玉

管玉2点、土

玉13点である。

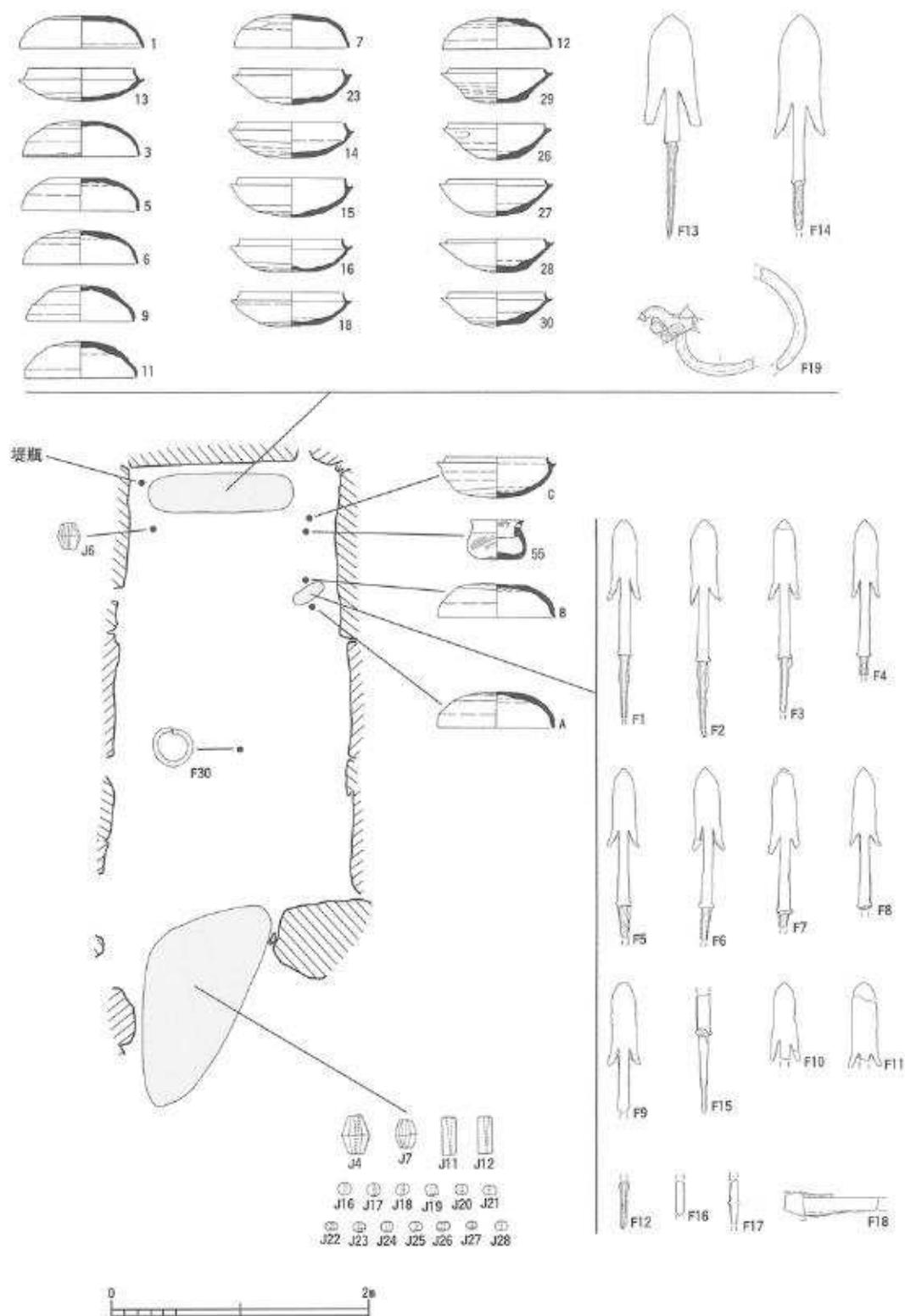
玄室中央部



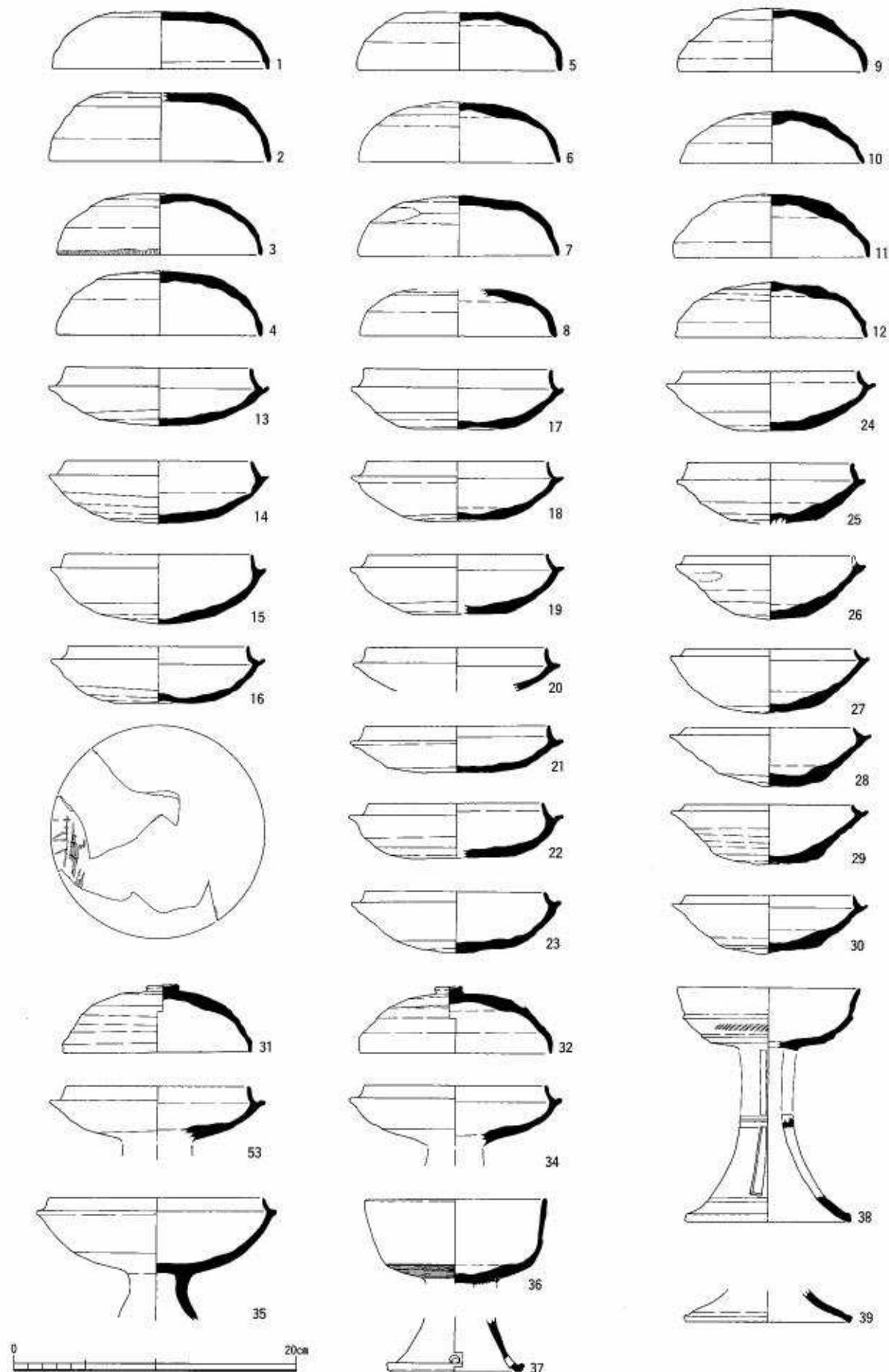
第13図 高坂1号墳 石室 掘形

から耳環、右側壁奥部から水晶切子玉が出土しているほか、須恵器や鉄器、玉類など原位置を動いた状況で出土している。

淡道から前庭部にかけては子持器台、提瓶や甕などの大型品が中心で小破片になって出土した。



第14図 高坂1号墳 石室内遺物出土状況



第15図 高坂1号墳 出土土器1 (1~39)

#### 4. 出土遺物

土器と金属器と玉類がある。土器には須恵器と土師器があり、金属器は青銅製品と鉄製品がある。

##### 土器（第15～27図）

須恵器は壺蓋、壺身、高壺蓋、有蓋高壺、無蓋高壺、短頸壺、直口壺、脚付直口壺、胞、子持器台、提瓶、横瓶、広口壺、甕などがある。

壺蓋は1～12がある。1は口径15.2cmで、口縁端部内面は内傾する段を作っている。口縁部と天井部の境界は明瞭でなく、天井部は扁平で左回転のケズリを行っている。1以外のロクロ回転は右である。2は口径15.4cm、器高4.8cmと器高が高く、口縁端部は丸く作っている。内面には当て具痕が残り、仕上げナデは行っていない。3～8は口縁部と天井部の境界は明瞭でなく、口径は14.4cm～14.0cmである。3の口縁部には板による擦痕が残っている。5の天井部には赤色顔料が付着している。7の内面には当て具痕が残り、仕上げナデを行っている。8は左回転ロクロである。9・10は口径13.2cm・13.0cmと小振りであるが、天井部は回転ケズリを行っている。内面の仕上げナデは、9は行っており、10は行っていない。11・12は口径が13.7cm前後で口径は大きいが天井部をヘラ切りしたままで回転ケズリを行っていない。内面の仕上げナデは、11は行っており、12は行っていない。

壺身は13～30がある。13は底部が扁平で左回転のケズリを行っている。13以外のロクロ回転は右である。15は立ち上がりが直立しており、口径13.2センチ、蓋に対応する径は14.6cmである。16～21は受け部から折り曲げた立ち上がりをもつ。口径13cm前後、蓋に対応する径14.6cm前後である。16の側面には記号様のヘラによる刻みがあるが詳細は不明である。22～24は内傾する立ち上がりをもち、蓋に対応する径14.4cm前後である。23は7とセットで、内面には同様の当て具痕が残り、仕上げナデを行っている。25・26は蓋に対応する径13cm前後と小さいが、底部は回転ケズリを行っている。内面の仕上げナデは行っていない。27～30は蓋に対応する径13.8cm～13.4cmで立ち上がりは内傾し低い。底部をヘラ切りしたままで回転ケズリを行っていない。内面の仕上げナデは行っていない。

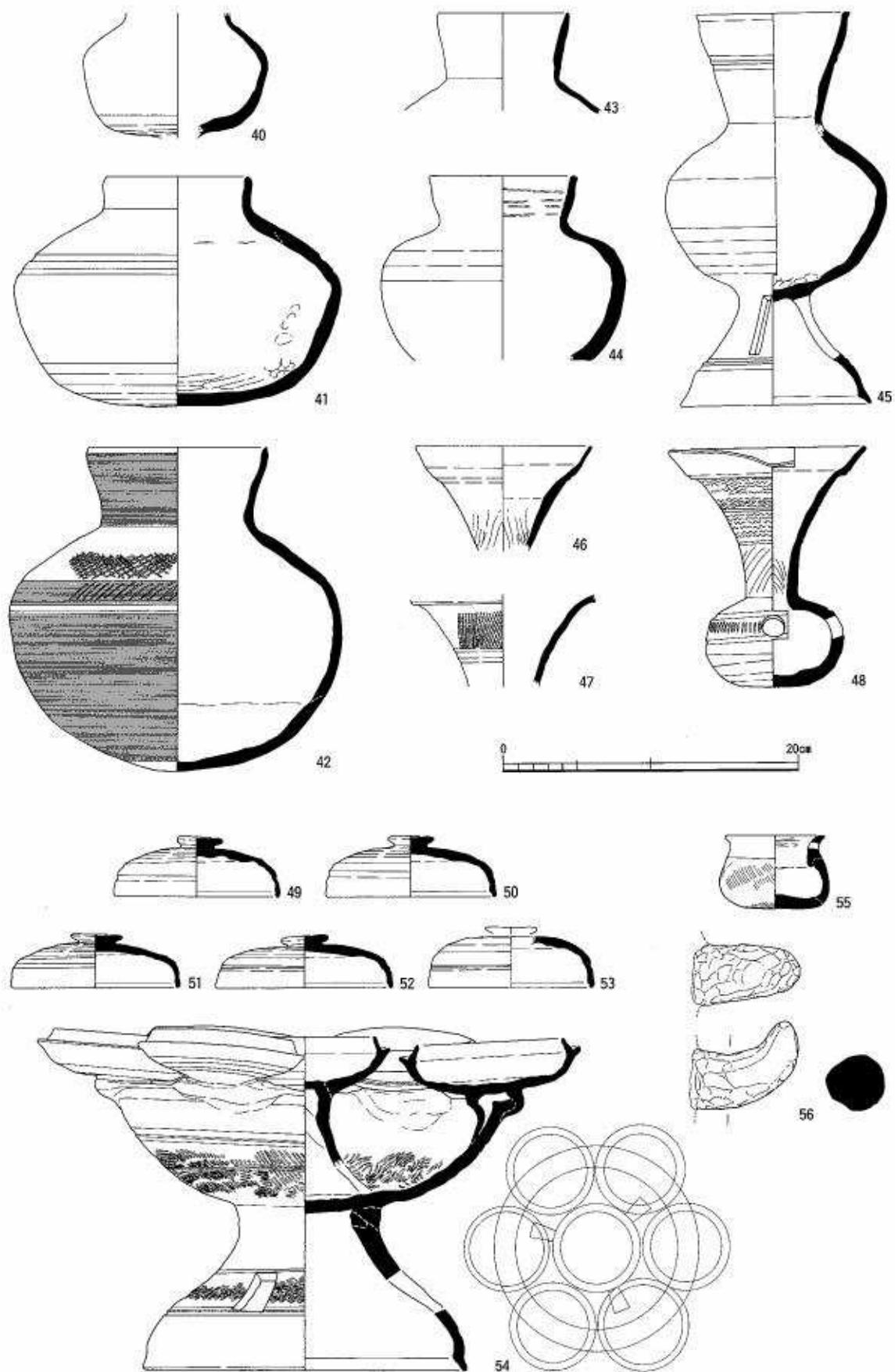
高壺蓋31・32は天井部の中心からはずれた場所に扁平な摘みを貼り付けている。32は天井部に乾燥時のひび割れがあり、このひび割れを消すようなナデの痕跡があるが、ひびは残っている。

有蓋高壺33～35は、口径12.9cm前後の33・34と口径15.1cmの35がある。無蓋高壺36は口縁が直立した深い壺部であり、脚台は接合部からはずれ欠損している。壺部底面はカキメで仕上げられている。脚台37は脚端部が僅かに拡張し、脚裾部に2個の円孔の透かしを穿っている。無蓋高壺38・39は長脚2段透かしの無蓋高壺で、38は脚上部を欠き、39は脚裾のみである。38の壺部には櫛による列点文が巡り、脚部の透かしは長方形の3方向である。

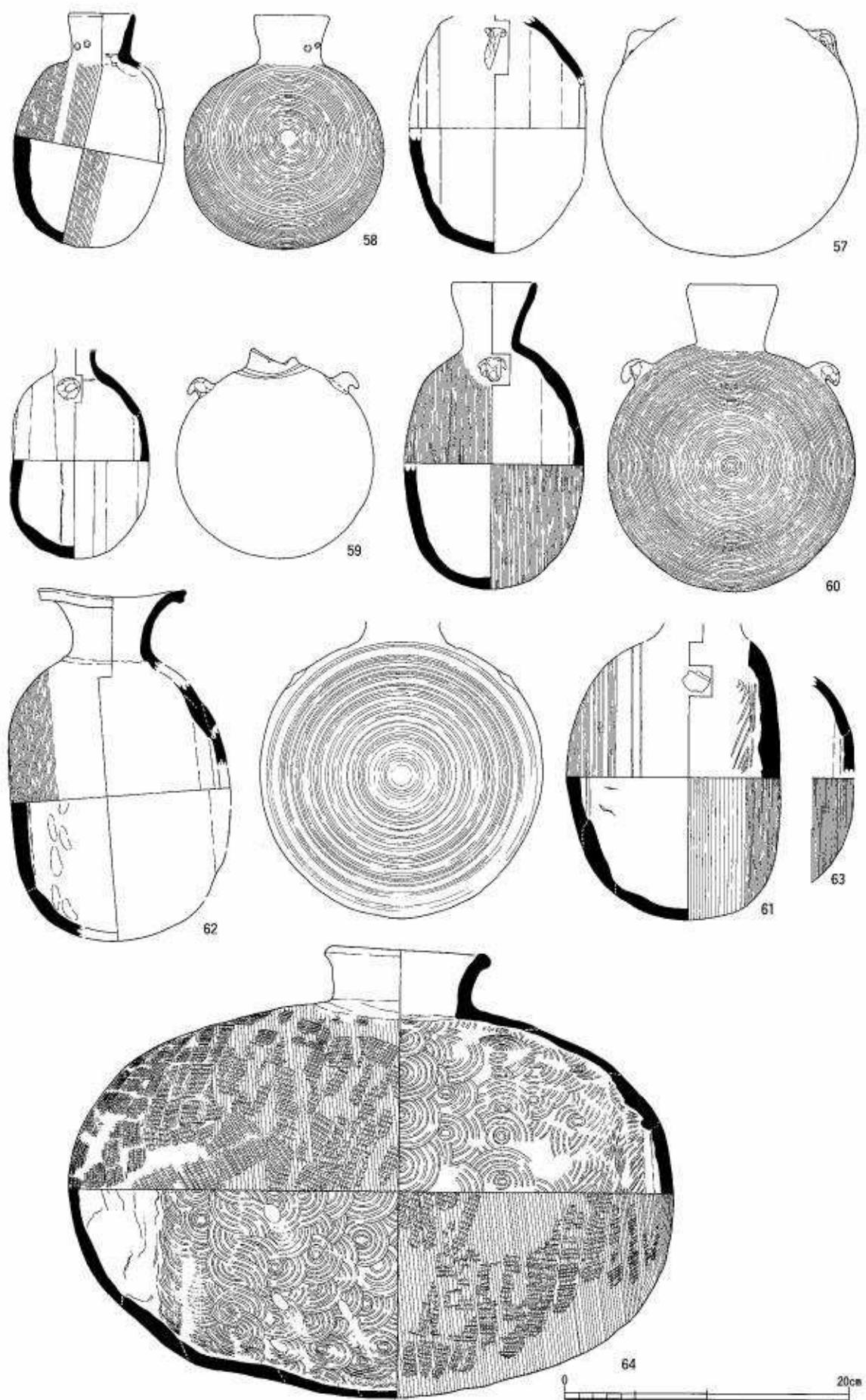
短頸壺40・41は小型の40と大型の41に分けられる。40は口縁端部を欠く。底部は丁寧な回転ケズリで仕上げている。41は肩が張った体部に短い直立した口頸部が付く。肩部には2条の凹線が巡る。

直口壺42～44は有文の42と無文の43・44とに分けられる。42は球形の体部に、やや外傾した口縁部が付く。胴部下半と口頸部はカキメを行っている。肩部に2条の沈線を巡らせ、間を斜線文で埋めている。肩部には板状工具の小口による斜格子文が施されている。43は肩の張った体部に外傾下口頸部が付く。44は球形の胴部に口頸部が付く。

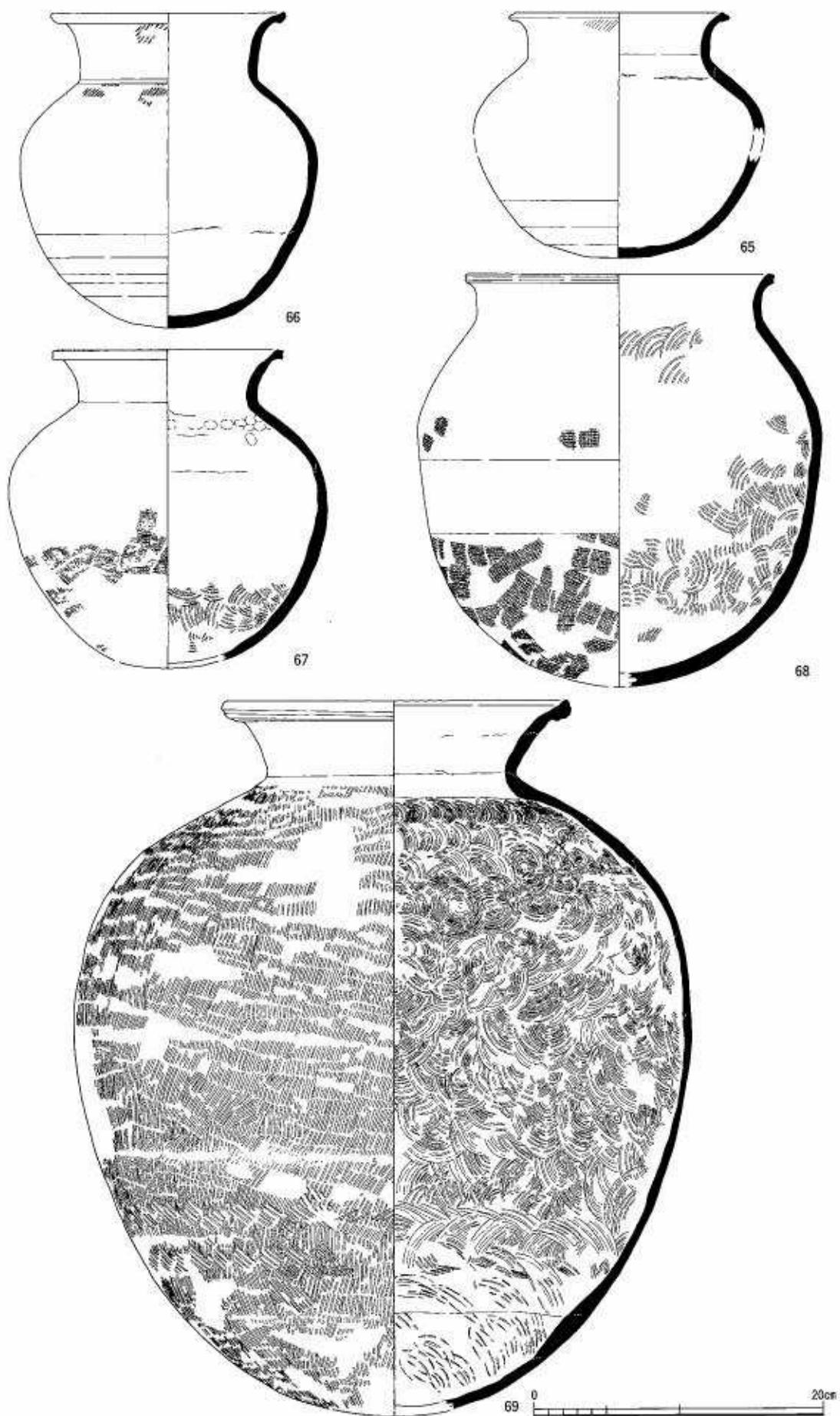
脚付直口壺45は球形の体部に外傾する口頸部が付く直口壺で、脚台が付く。頸部には2条の凹線が巡る。脚台は長方形の3方透かしを開け、脚端部は内側に段をもつ。脚台部の接合は壺内部を突き押すことにより行っている。



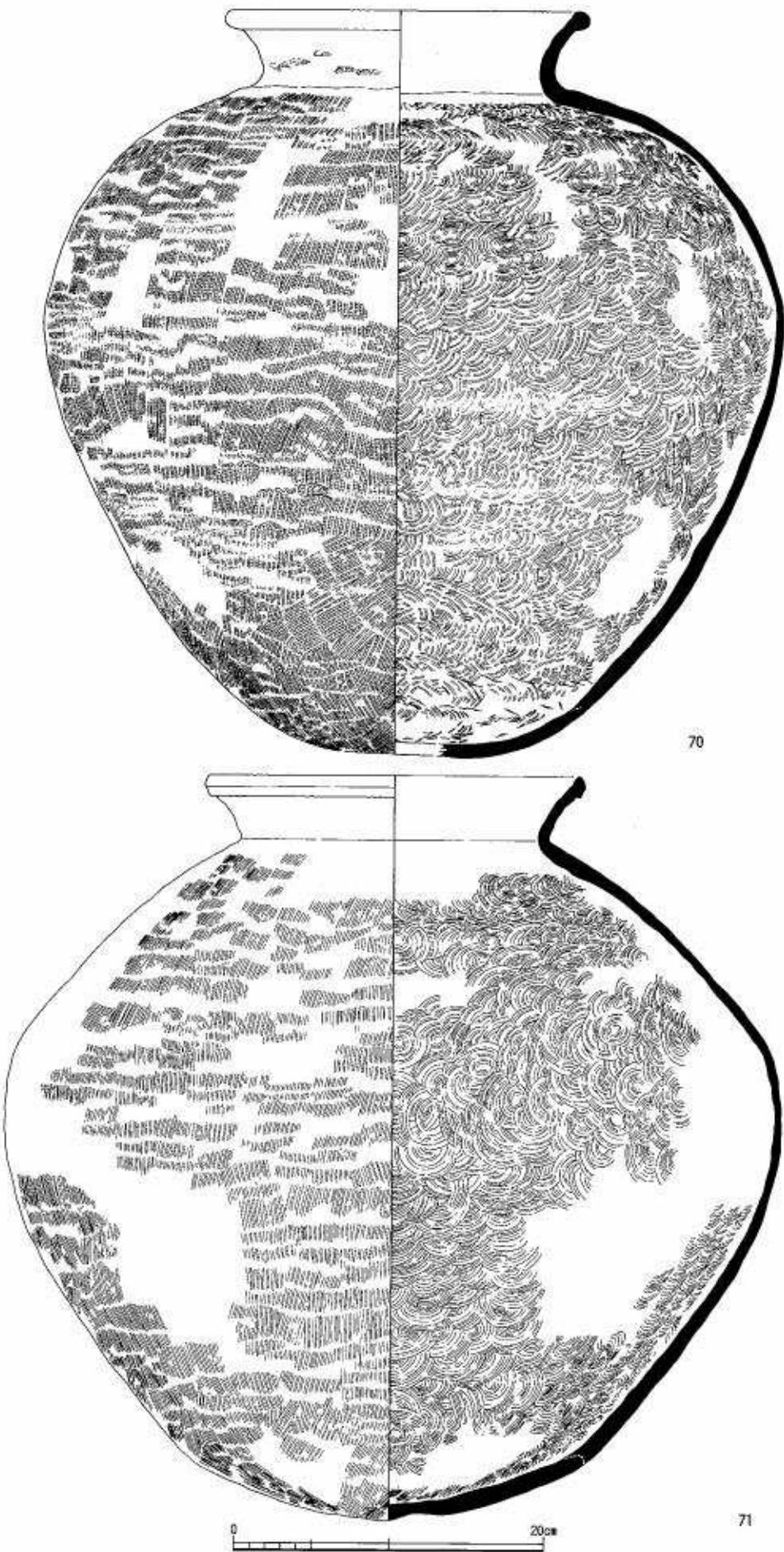
第16図 高坂1号墳 出土土器2 (40~56)



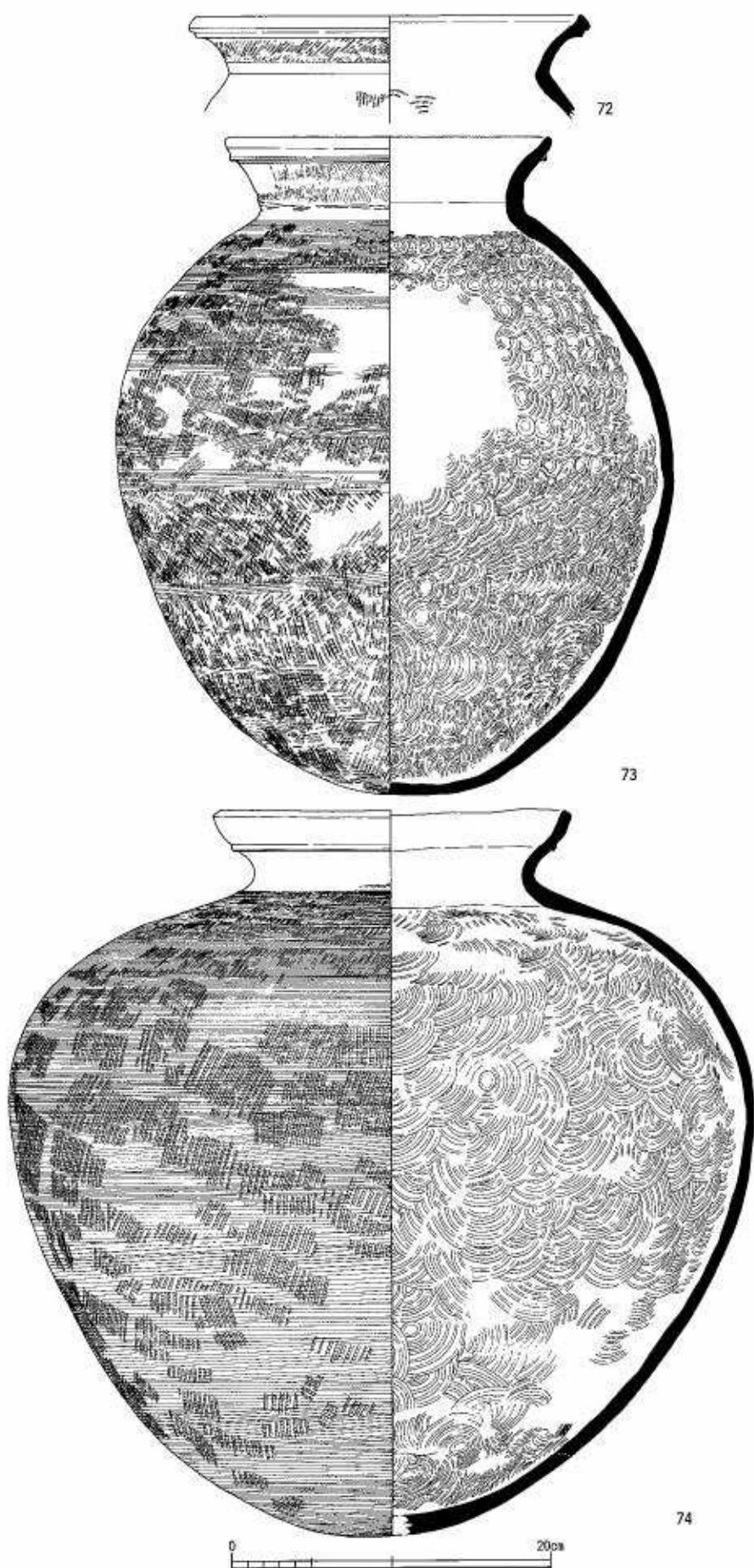
第17図 高坂1号墳 出土土器3 (57~64)



第18図 高坂1号墳 出土土器4 (65~69)

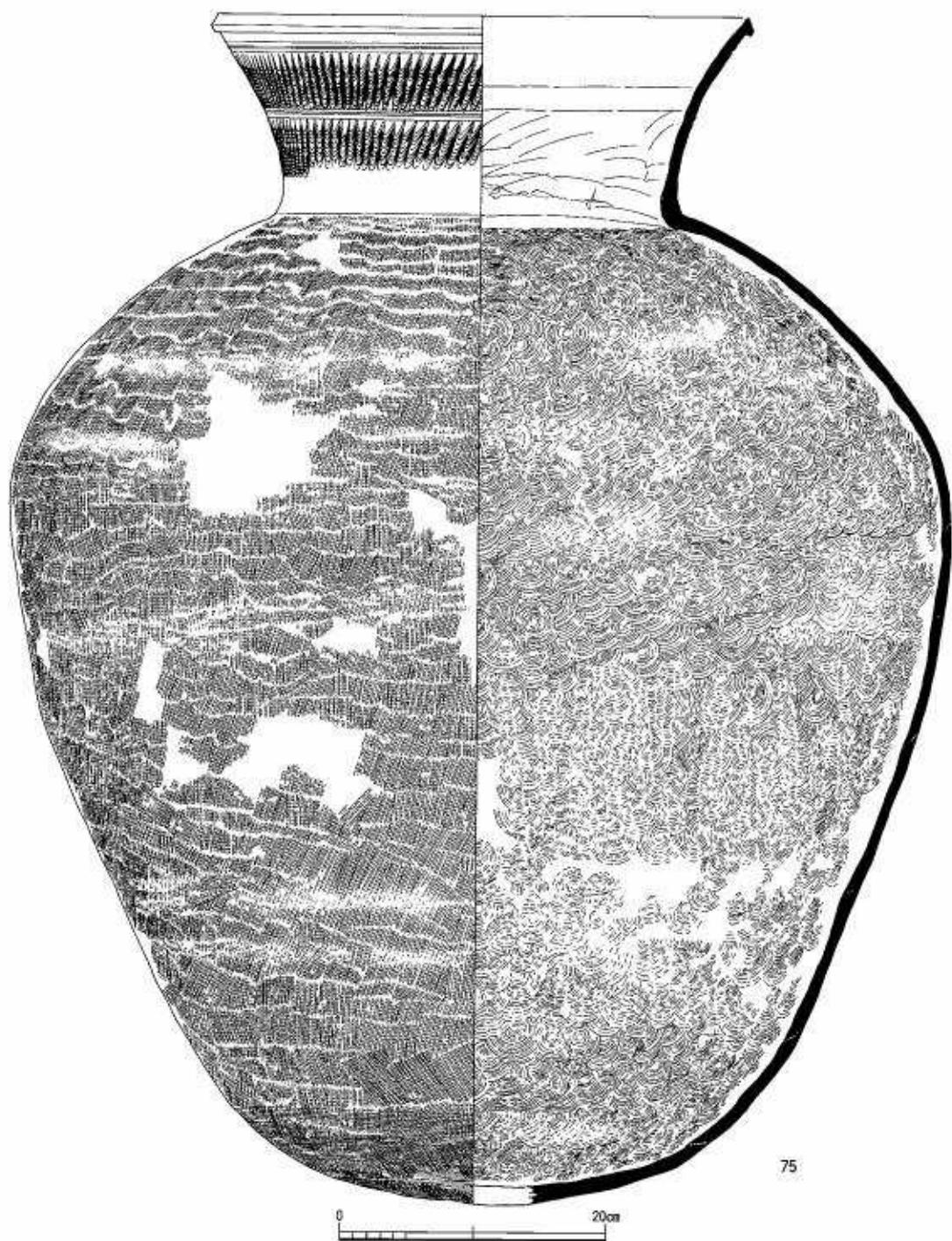


第19図 高坂1号墳 出土土器5 (70・71)



第20図 高坂1号墳 出土土器6 (72~74)

鶴46～48は頸部が無文の46と有文の47・48とに分けられる。46は頸部が大きく開き、外傾する口縁部をもつ。頸部と口縁部との境界は緩やかで明瞭ではない。頸部は絞って作っている。47は頸部中央に沈線を2条巡らし、上半部に櫛による斜線を刻んでいる。48は扁平な球形の体部に大きく広がる口頸部が付く。体部上半部には2条の沈線を巡らし、直径1.8cmの注孔を開け、そのほかは櫛による列点を刻んでいる。頸部は絞って作り、2条の沈線を巡らし、櫛による波状文を巡らしている。口縁は大きく歪んでいる。



第21図 高坂1号墳 出土土器7 (75)

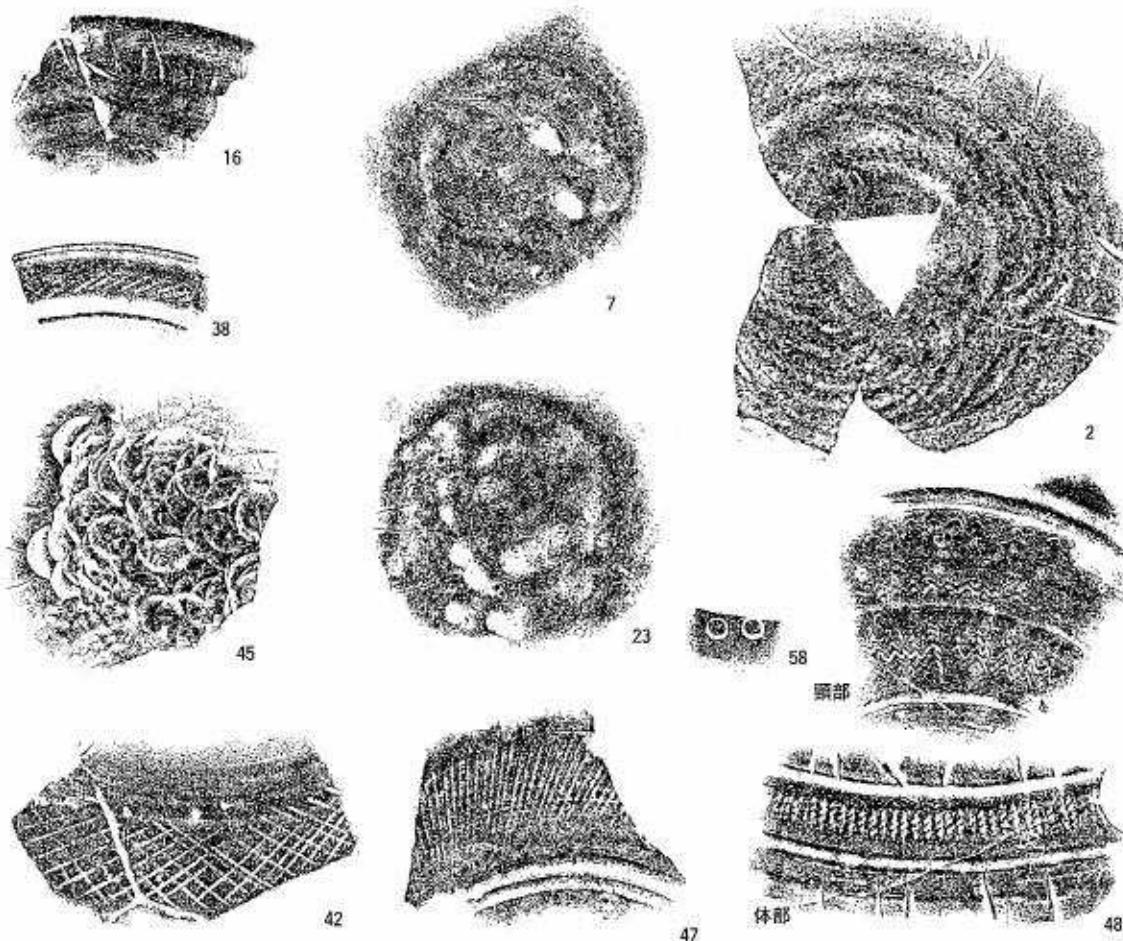
子持器台54は体高20.0cm、大きく開く直径27.4cmの鉢部をもち口縁端部は外上方に拡張している。脚部は端部が内方に屈曲しており、中央部に2本の沈線を引き獅による波状文を描き、3方向の長方形の透かしを穿っている。底径22.0cmを測る。鉢部は中央部に沈線で回線を引き、下半は平行タタキ痕跡を残し、上半はナデて仕上げている。子器はやや内側に傾けて、6箇所に壊を付ける。鉢部との接合は中空の粘土塊によって貼り付けられ、壊部の底部は鉢口縁部から浮いている。中央子器は有蓋高壊で、鉢部内面の同心円当て具の痕跡に脚が剥離した痕跡が残る。脚の下端は欠損しているが、脚径との比率から周縁子器と高さを同じに復原した。脚は絞って成形している。周縁子器・中央子器とも口径10cm前後で、口縁端部は丸く仕上げられている。蓋49～53は5個体残っており、口径10.8cm～1.8cmで子器の壊に合う。天井部には大きく扁平な摘みが付く。口縁部と天井部の境には退化した稜が付き、口縁端部内面には段が存在している。

提瓶57～63は7個体ある。直立気味の口頸部が付く58・60と外反して口縁端部に面を持つ62がある。体部は58・60～63はカキメで仕上げている。57は退化した半環状の取手がつき、59・60は鉤状の取手が付く。58の頸部下端には竹管による2個の記号を付けている。

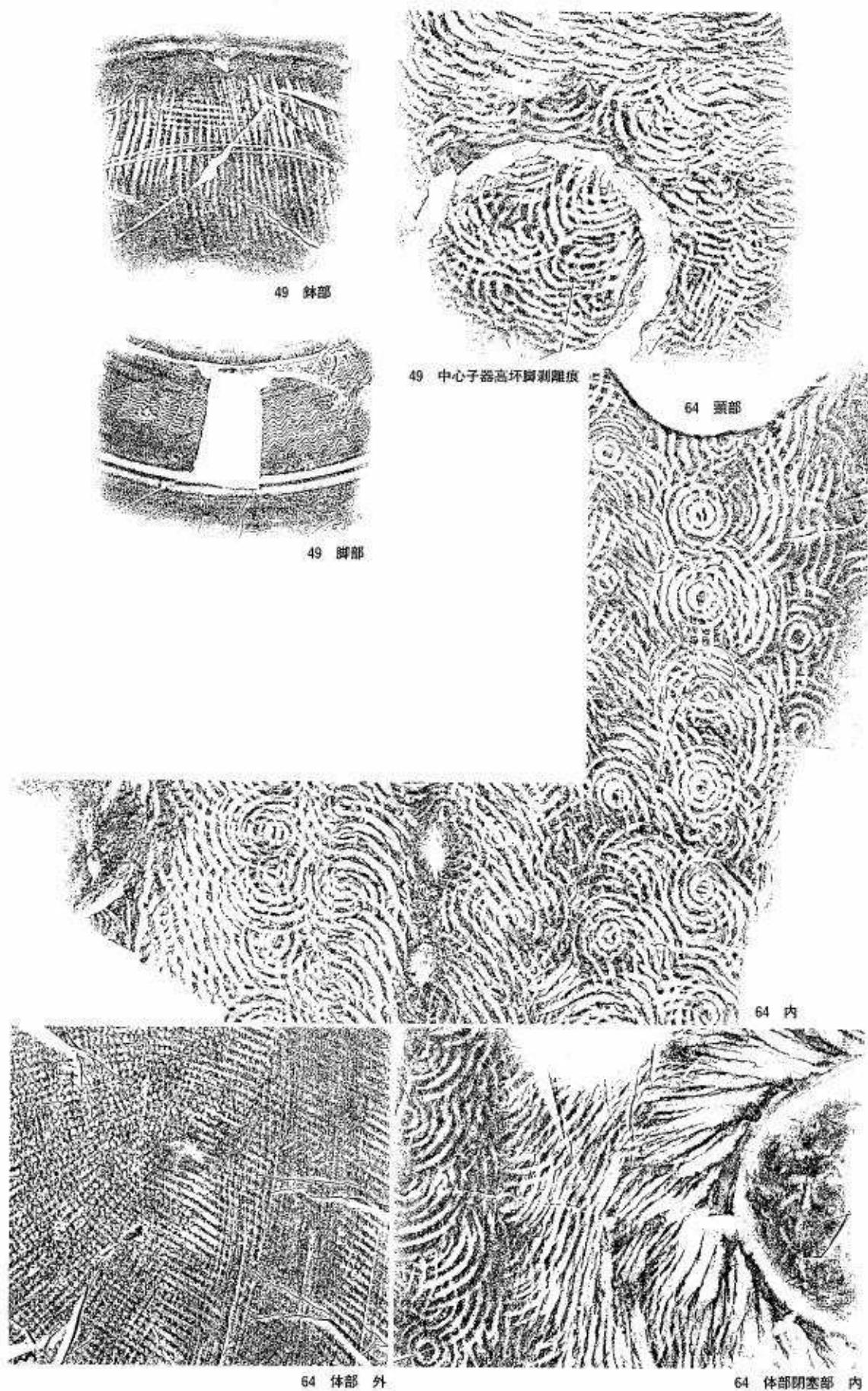
横瓶64は直立気味に外反する口頸部が付き、端部は丸く仕上げている。

広口壺65～67は中型の広口壺で、65は66・67は球形の体部に外反する口頸部が付く。口縁端部は拡張している。66の体部下半は右回転のケズリを行っている。

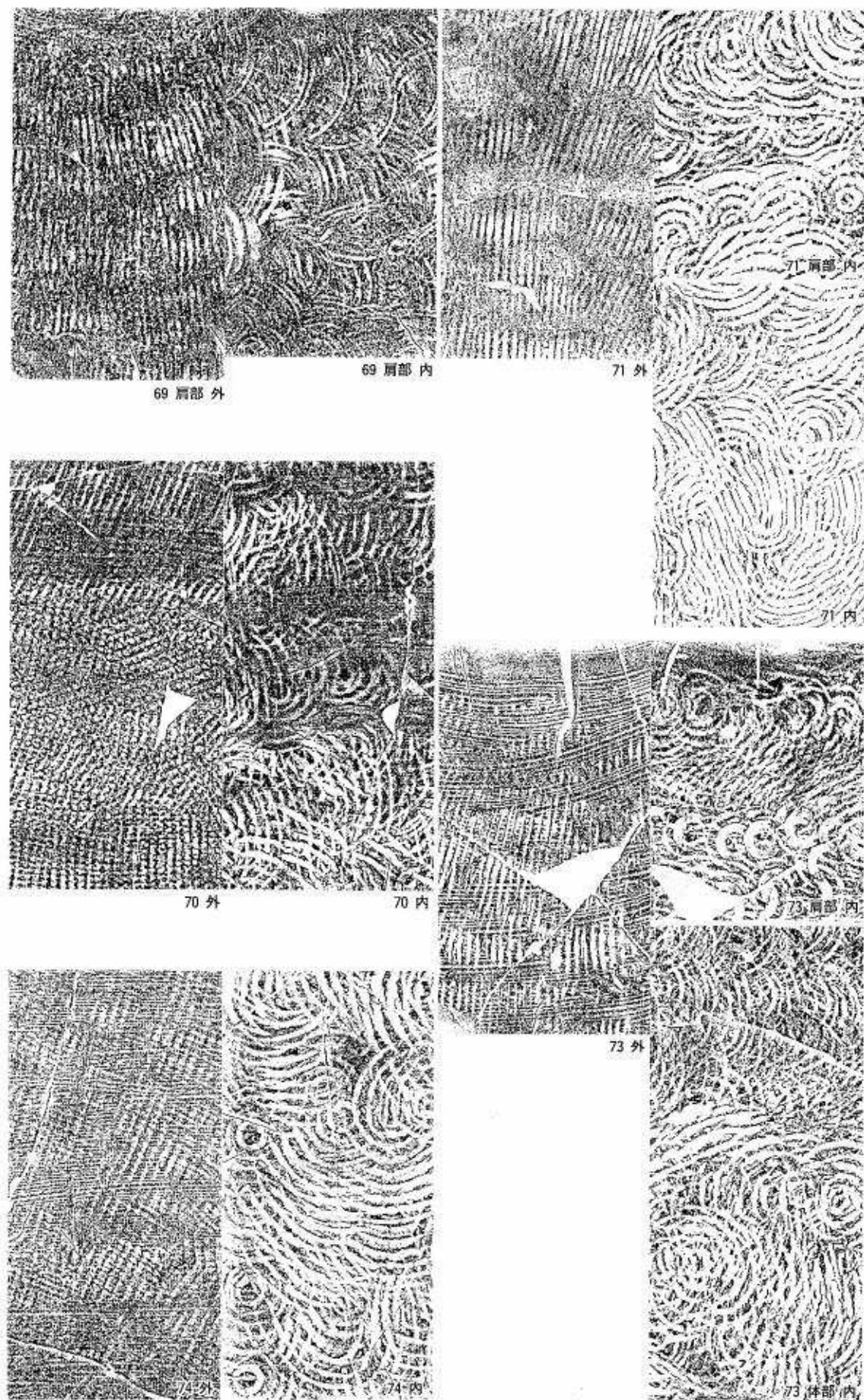
甕は68～75がある。68は小型の甕で球形の体部に大きく外反する短い口頸部が付く。69は卵形の体部



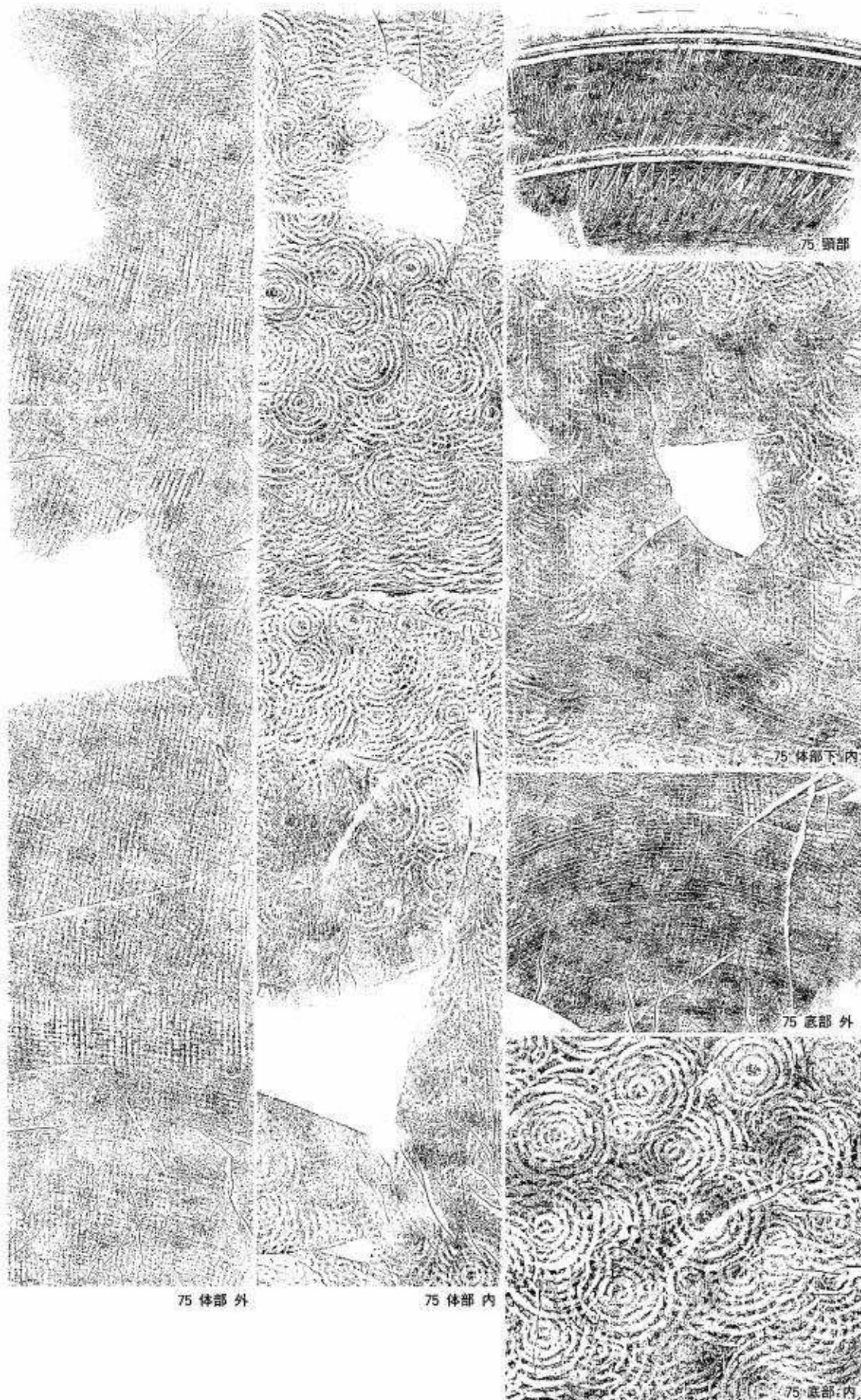
第22図 高坂1号墳 出土土器 拓影1



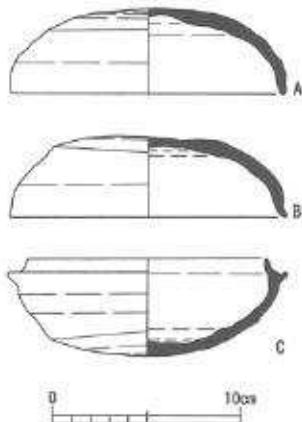
第23図 高坂1号墳 出土土器 拓影2



第24図 高坂1号墳 出土土器 拓影3



第25図 高坂1号墳 出土土器 拓影4



第26図 高坂1号墳 出土土器  
(丹波市市島町民俗資料館保管分)



第27図 高坂1号墳 出土土器写真  
(丹波市市島町民俗資料館保管分)

に外反する口頸部が付く。口縁端部は拡張している。70は肩の張った体部に外反する口頸部が付く。口縁端部は拡張して丸く作っている。71は球形の体部に外反する口頸部が付く。口縁端部は拡張して面を作っている。72は口頸部から肩部の破片である。73は卵形の体部に有段状の口縁が付く。74は肩の張った体部に有段状の短い口縁が付く。75は大型の甌で、やや肩が張った縱長の体部に外反する長めの口頸部が付く。口縁端部は下方に拡張して面を作っている。口頸部は沈線の上下に櫛描波状文を巡らしている。体部外面は擬格子叩き、内面は同心円叩き目痕が残り、下半部は縱方向にナデを行っている。

土師器壺55は扁平な体部に外反する口縁部が付く口径6.5cmの小型の壺である。口縁部には一対の小孔が穿たれている。体部はハケ調整である。土師器把手56は断面が円形で屈曲しており、手づくねで仕上げられている。

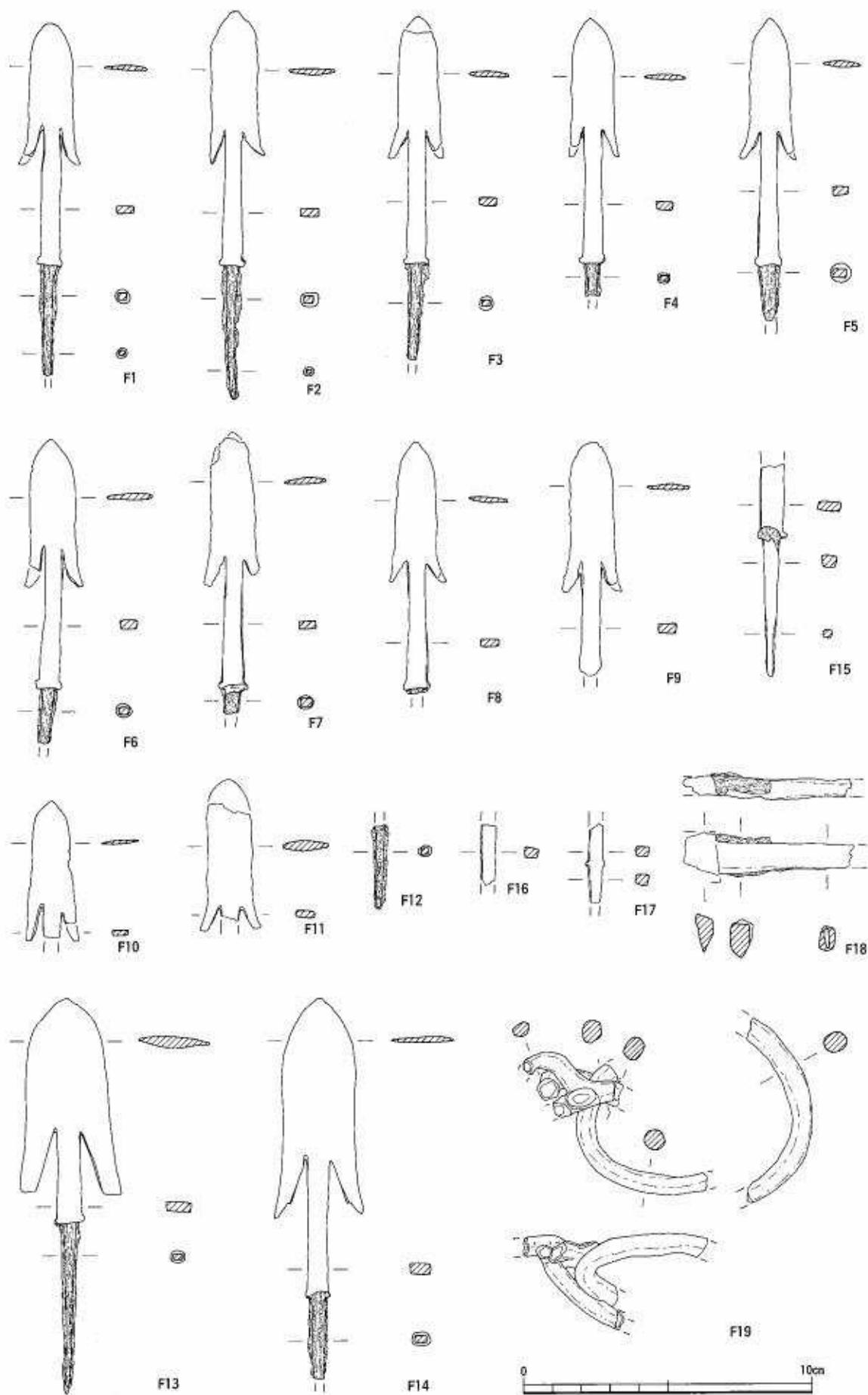
#### 金属器（第28・29図）

31点が出土しており、30点が鉄製品で、1点が青銅製品である。墳丘の裾から出土した1点（F31）を除いて、玄室の床面から出土した。種類は装身具、武器、工具、馬具などがある。

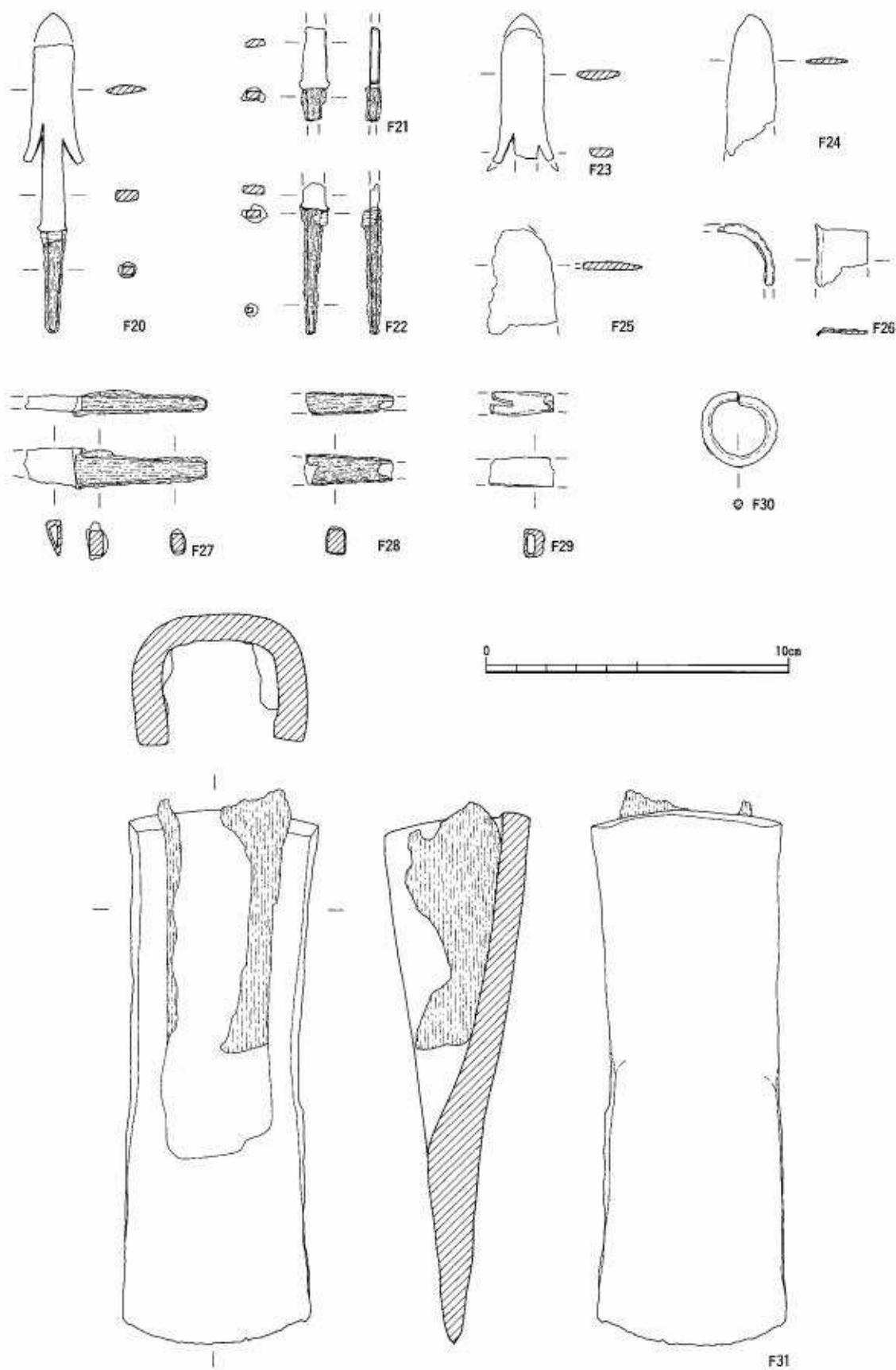
耳環F30は細身の中実の耳環で直径2.5cm、断面径0.4cmを測る。断面形は円形である。遺存状況が悪く、肉眼では表面に金あるいは銀かは確認できない。このため、本来は銅芯に金あるいは銀の箔などを貼っていたと考えられることから、分析を行ったが、金あるいは銀の元素は確認できなかった。

鉄鎌F1～F17は坏蓋Bと坏蓋Cの天井部外面の間に鎌身を北に向けて接着して塊になって出土した。F1～F11は鎌身部が腸抉柳葉式で大きさや形態はほぼ同じである。完形のF2は全長13.5cmを測る。鎌身5.3cm、頸4.7cm、茎4.7cmである。範被の間には明瞭な突出の棘をもつ。茎には木質が残存している。F1～F11の鎌身は5.0cm前後、頸は4.6cm～5.0cm、茎4.9cm前後と良くまとまっている。茎にはいずれも木質が残存している。F12は茎、F16は頸の破片である。F15・F17は頸から茎にかけての破片で、棘範被がある。

鉄鎌F13・F14は須恵器蓋坏の7と23のセットの下から出土した。大型の鎌身部が腸抉柳葉式である。F13は全長13.9cm、鎌身6.9cm、頸3.1cm、茎6.2cmである。逆刺の外反が僅かで、先端を平坦に作っている。F14は全長13.4cm以上、鎌身7.9cm、頸5.0cmである。逆刺の先端に切り込みを入れて二重にして



第28図 高坂1号墳 出土金属器1



第29図 高坂1号墳 出土金属器 2

いる。

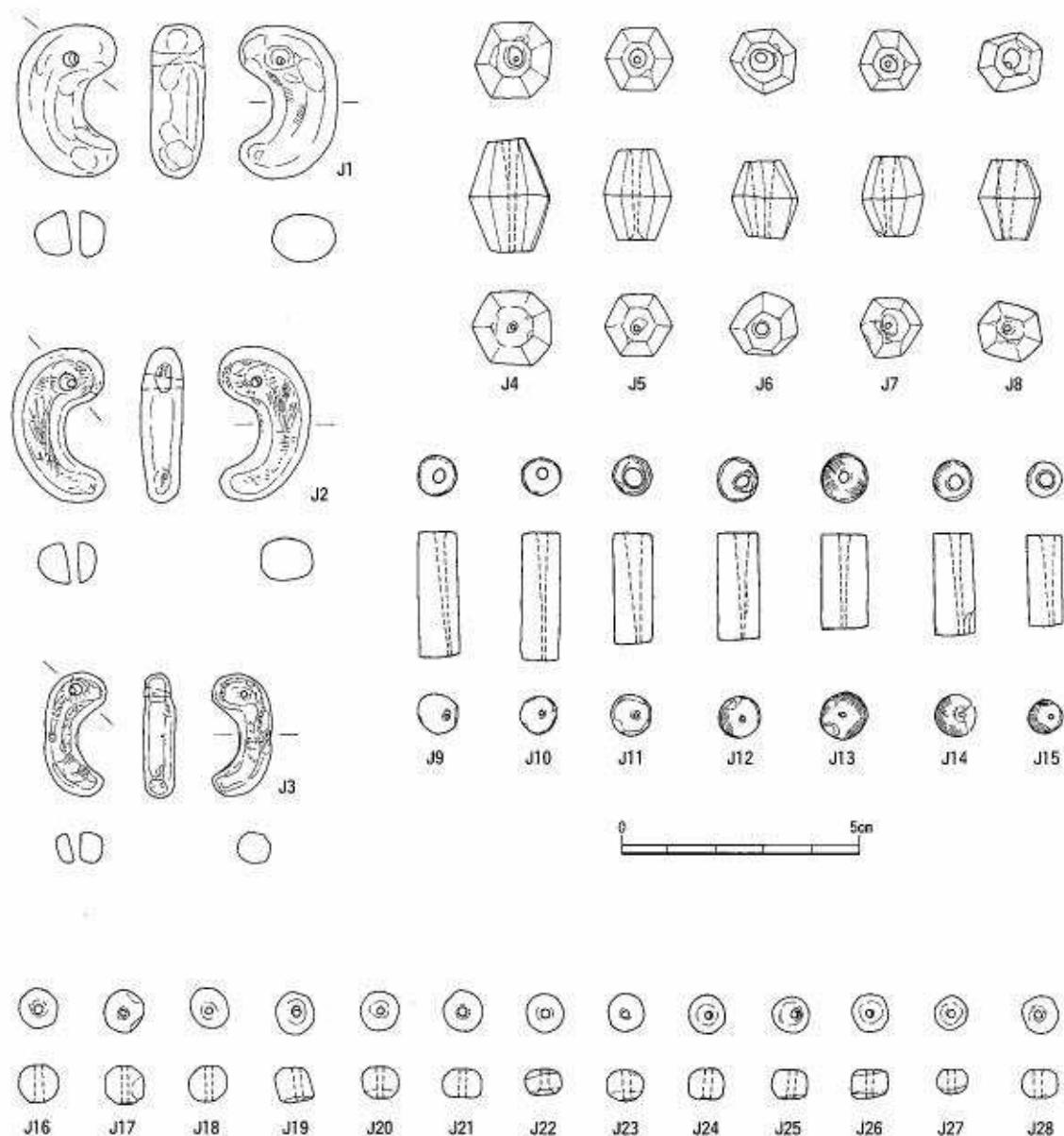
F20～F24は鉄鎌で、F20・F23・F24は鎌身部が脇挟柳葉式である。F21・F22は頸から茎にかけての破片で、棘籠被がある。

刀子F18は全長5.9cm以上、刃部長1.4cm以上、茎部長4.9cm以上を測る。刀身幅は関で1.5cm測る。上下に関をもち、茎部は木質付着している。F27は全長6.1cm以上、刃部長1.8cm以上、茎部長4.2cmを測る。刀身幅は関で1.3cm測る。上下に関をもち、茎部は木質付着している。刀子F28・F29は柄の一部である。

鋸F26は、欠損している。幅0.85cmで、縁が折り返されている。

轡F19は素環鏡板付轡である。鏡板と銜先環と引手先環が融着して破損している。鏡板は破損しているが、橢円形を呈する。引手先環は破損しているが折り曲げて環を接合している痕跡がある。

墳丘外からは鉄斧F31が出土している。全長18.5cm、重量985gを測る大型品である。袋部は厚さ約



第30図 高坂1号墳 出土玉

1cmを測り、木質が残っているが、完全に折り返されていない。古墳に伴う遺物ではなく、後世に使用されたものであろう。

#### 玉類・石製品（第30・72図）

28点の玉類と1点の石製品が出土した。玉類の種別は勾玉・切子玉・管玉・丸玉が出土している。石製品は水晶の加工品である。

J 1～J 3は勾玉である。J 1の材質は石英であり、透明感の少ない白色を呈する。J 2・J 3の材質は瑪瑙であり、淡い橙色を呈する。いずれも左側からの片側穿孔であり、J 1とJ 3は貫通部分を面取りしている。

切子玉 J 4～J 8はいずれの材質も水晶であり、J 8を除いては透明感がある。いずれも片側穿孔である。長さは16.8cm～23.1cmである。

管玉 J 9～J 15は、全体に残存状況はよく、一端を欠損するJ 14を除いて、完形の状態で出土した。J 12～J 15の小口部分には擦痕が明瞭に認められるほか、片側穿孔の貫通部分にあたる下面の孔周囲を面取りするものが多い。J 12は2度にわたって孔を穿ちなおし、孔に歪みが生じている。長さは19.2cm～26.7cm、直径は6.9cm～9.9cmである。いずれも硬質の碧玉で、深緑を呈する。

J 16～J 28は丸玉である。材質は土で黒色を呈する。直径は6.7cm～9.0cmである。

S 5は玄室内から出土した水晶の加工品である。1号墳からは古墳時代以外の遺物も出土しており、確実に1号墳に伴うか不明ではあるが、多可郡中町の東山12号墳からも出土しており、同様の性格のものであろう。重さ17.63gを測る。

#### 5. 小結

高坂1号墳は平坦面から斜面の傾斜変換点に立地している。墳丘は直径13.0mの円形で、高さは1.6mを測る。墳丘の中心は玄室中軸線の奥壁から玄室の3/4の位置にある。墳丘の斜面上方には幅約2.5m、深さ0.3m程度の浅い周溝が巡っており、斜面下方には幅約2.0mの緩傾斜部が存在している。

埋葬施設は南東方向に開口する左片袖の横穴式石室である。主軸は北から54°西に振っている。石室上部や天井石は抜かれていた。

玄室は、上端長さ7.3m、上端幅4.5m、深さ約0.4mの墓壙掘形に、長さ3.5m、幅1.75mを測る長方形で、袖石は左側壁0.60m突出する。つまり玄室の長さは幅の2倍で、玄門幅は玄室幅の約2/3である。

羨道は遺存状況が悪いため石室および羨道の全長については不明な点が多い。羨道の床面は玄室床面より0.25m高い。

遺物は玄室奥壁部分に須恵器蓋坏や鉄鎌、馬具などがまとまって出土し、左側壁奥部分では蓋坏や鉄鎌などがまとまって出土した。羨道から玄室入り口にかけては玉類がまとまって出土し、羨道入り口部から前庭部にかけて子持器台や甕類などの大型品が破片となって出土した。

出土した須恵器の坏類の時期はTK43型式からTK217型式まで、つまり6世紀後半から7世紀前半にかけてである。床面は乱掘により良好ではなかったが、遺物から複数回の追葬があったことが考えられる。

また、石室内から瓦器碗などがまとめて出土していることから、中世に何らかの再利用をしていたものと思われる。

### 第3節 2号墳

2号墳は、調査区の北東隅に位置し、標高71.7mの北東向きの斜面に立地する。南東側の一部は調査区外である。2号墳の南西側上方に接して3号墳があり、北西側には、5号墳が接している。

調査前の墳丘は、高坂古墳群中唯一、斜面上方側に周溝が存在していることが確認できた。

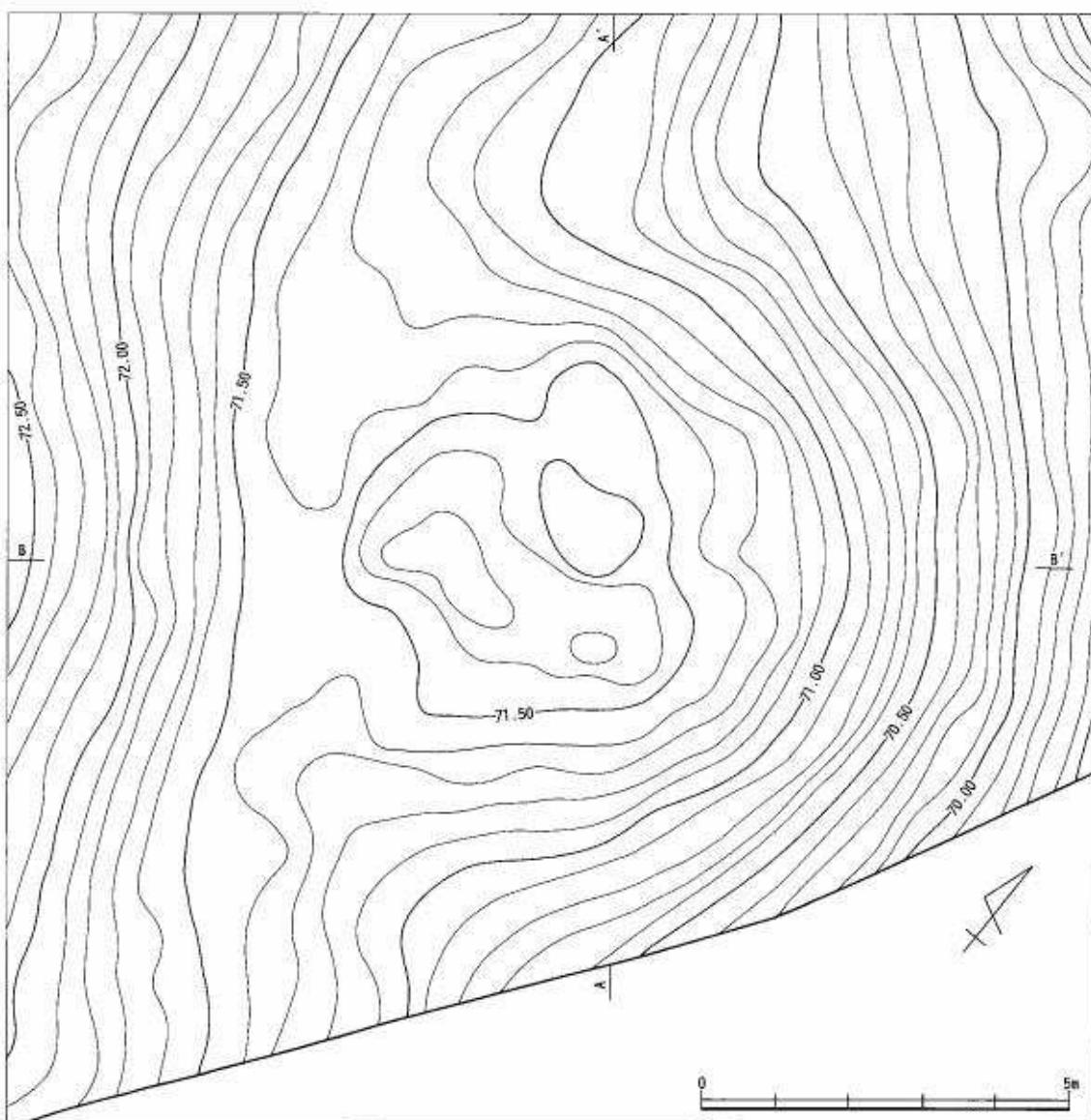
#### 1. 墳丘（第31～34図）

##### 西棺に伴う墳丘

西棺に伴う墳丘は、南西側の斜面上方を弧状の溝で画し、その掘削土等を内側に盛り上げて墳丘を構築している。墳丘は東棺の中央を中心に直径11.0mを測りほぼ円形を呈する。墳丘の高さは斜面上方側で溝底より0.8m、斜面下方側で1.8mを測る。

##### 東棺に伴う墳丘

東棺に伴う墳丘は、南西側の斜面上方を弧状の溝で画し、その掘削土等を内側に盛り上げて墳丘を形成している。墳丘は東棺の中央を中心に直径10.5mを測り円形を呈する。墳丘の高さは斜面上方側で溝底より0.9mを測る。



第31図 高坂2号墳 墳丘 調査前

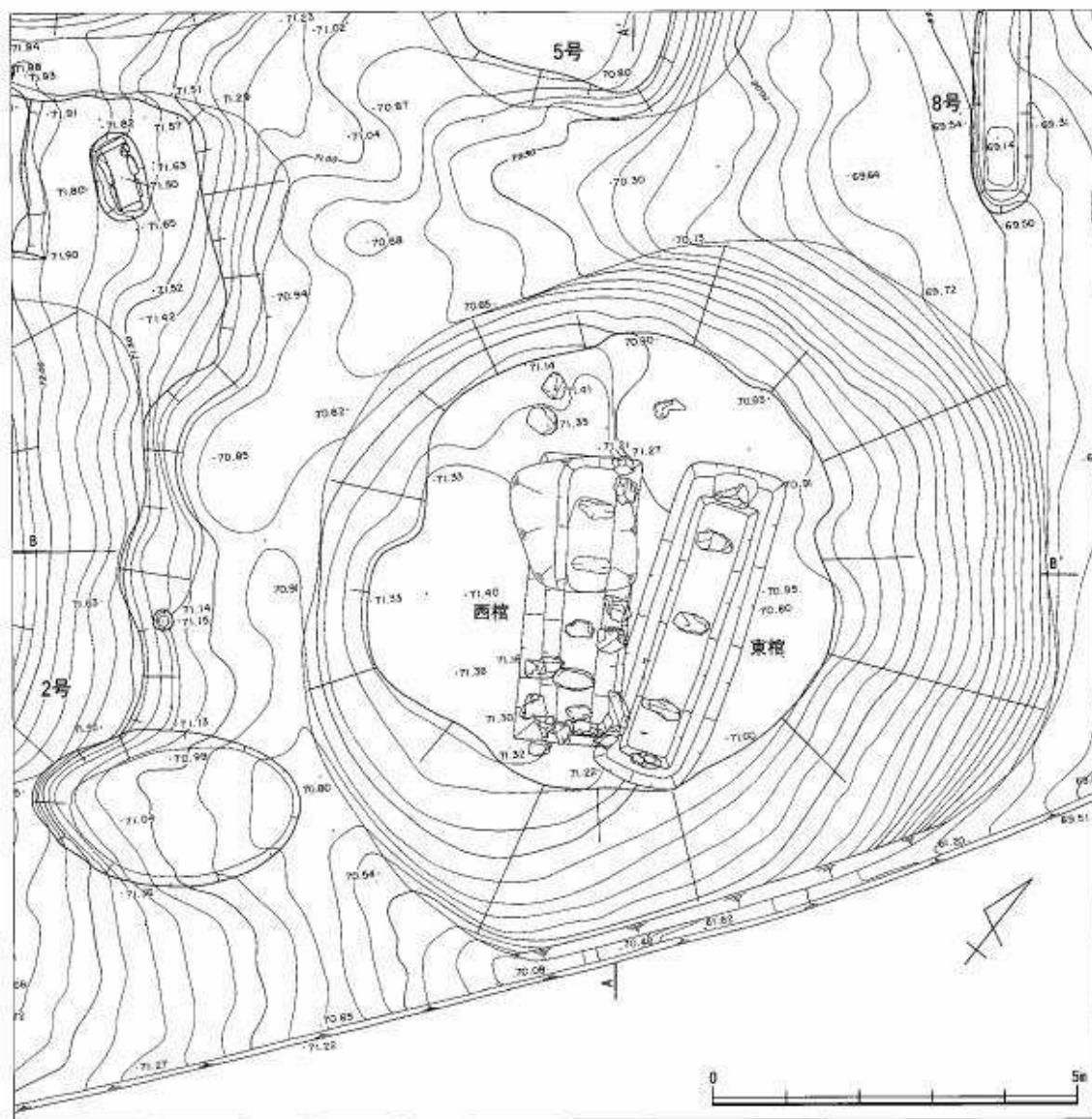
## 2. 埋葬施設（第35～37図）

本墳の埋葬施設は墳丘のほぼ中央に位置しており、斜面上方側に位置する西棺と斜面下方側に位置する東棺の2基の木棺を検出した。墓壙の切り合いにより西棺が新しく、東棺が古いことが判明した。

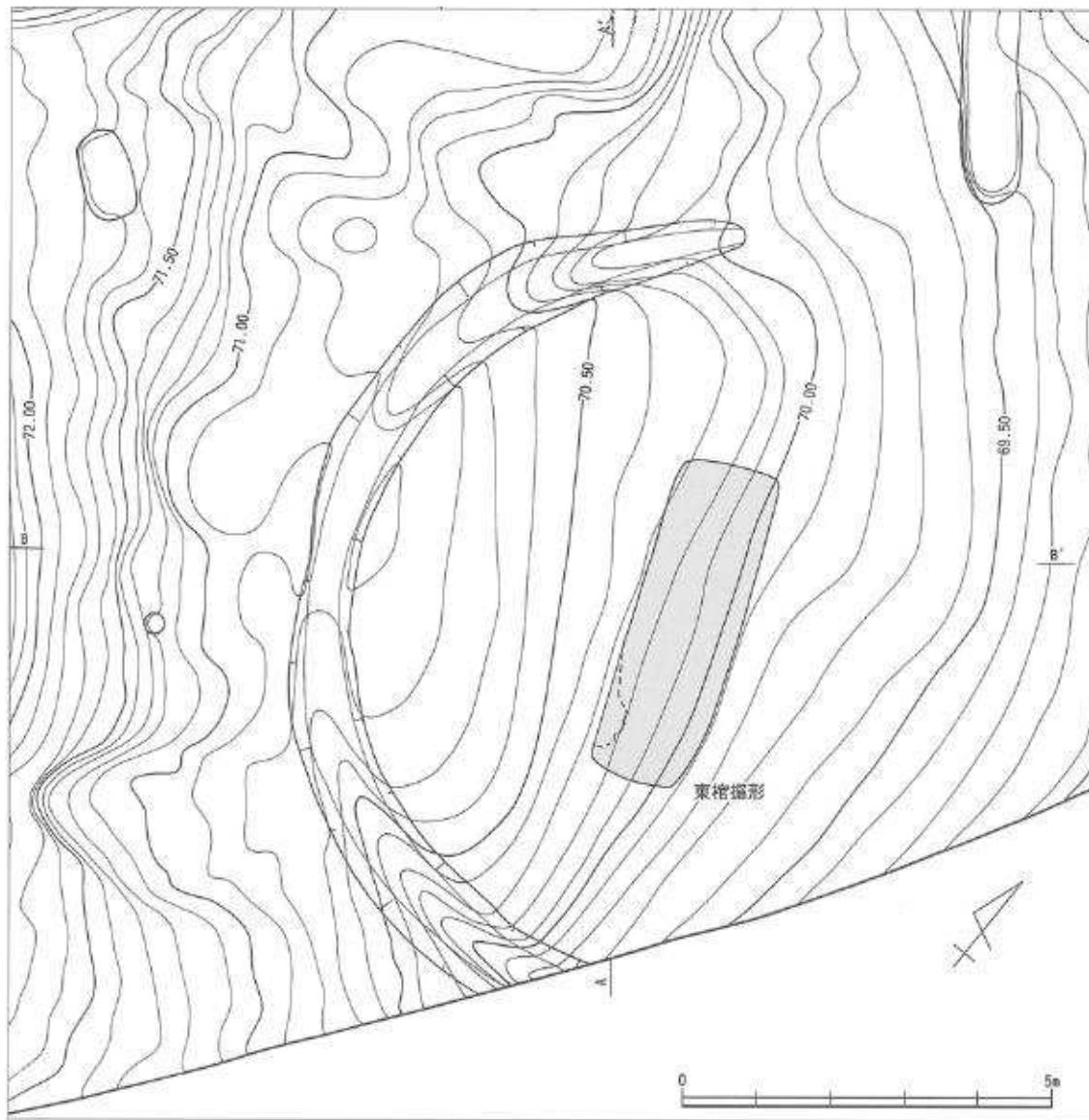
### 西棺（第36図）

西棺の北側部分は乱掘により大きく搅乱を受けていた。西棺の墓壙の規模は、南北主軸方向で長さ4.0m、中央部幅1.42m、確認面からの深さ0.57mを測る。

木棺は墓壙のほぼ中央に埋置され、主軸は北から33°西に振っている。断面の形状から割竹形木棺の可能性が考えられる。木棺の規模は、全長3.3m、棺中央部で上端幅0.8m、底幅0.5mを測る。墓壙内確認面からの深さは0.35mである。棺底には棺台と考えられる平坦な石を4個敷いている。北側の2個は搅乱により抜き取られているが、痕跡が残っており復原可能である。平坦な石は約0.8m間隔に配置し、小口側からは0.4mである。小口部分は石と粘土で、側面は部分的に石で押さえている。墓壙底の石の上面の標高は70.8mを測る。



第32図 高坂2号墳 墳丘 調査後



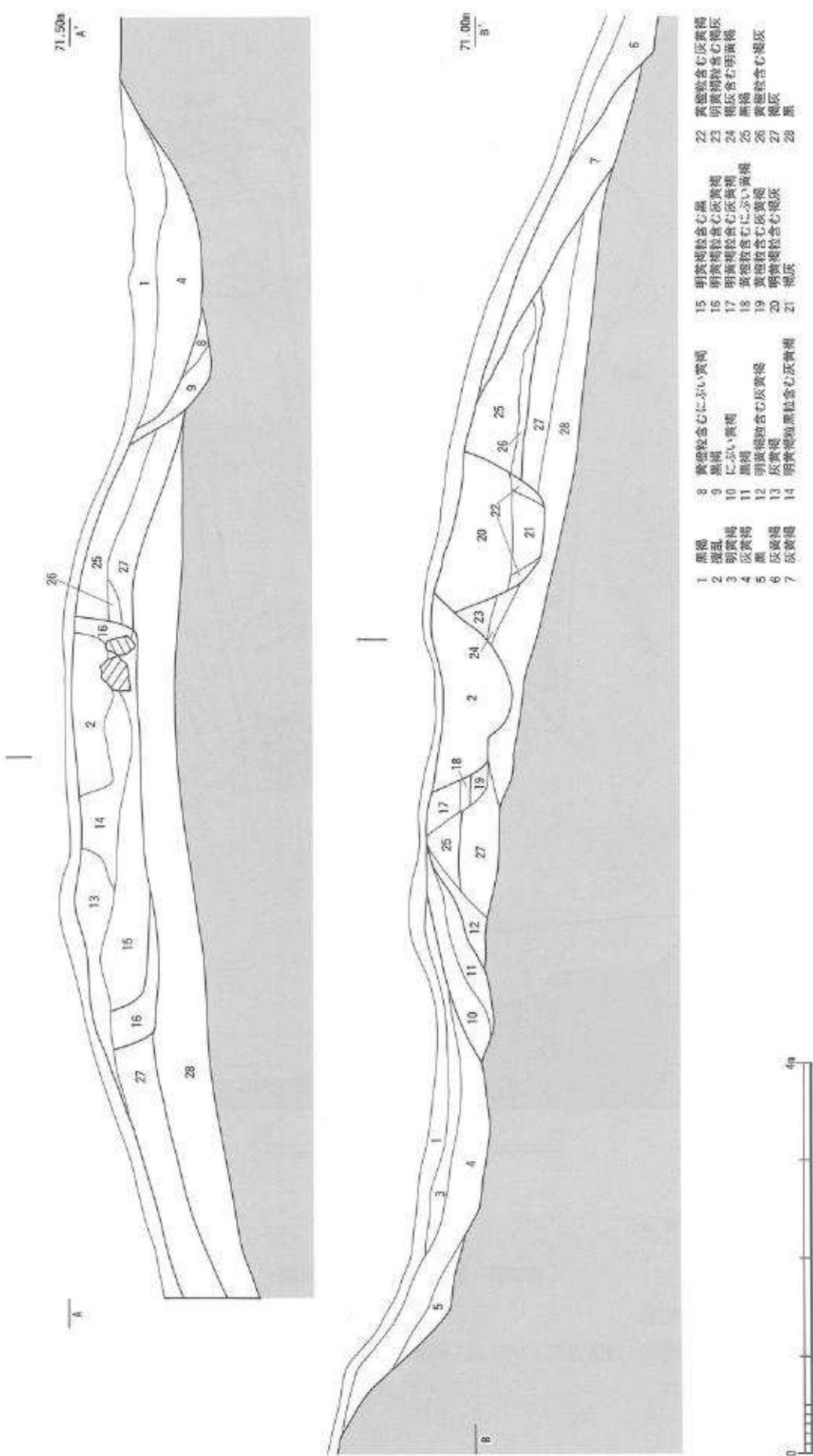
第33図 高坂 2号墳 下層 調査後

#### 東棺（第37図）

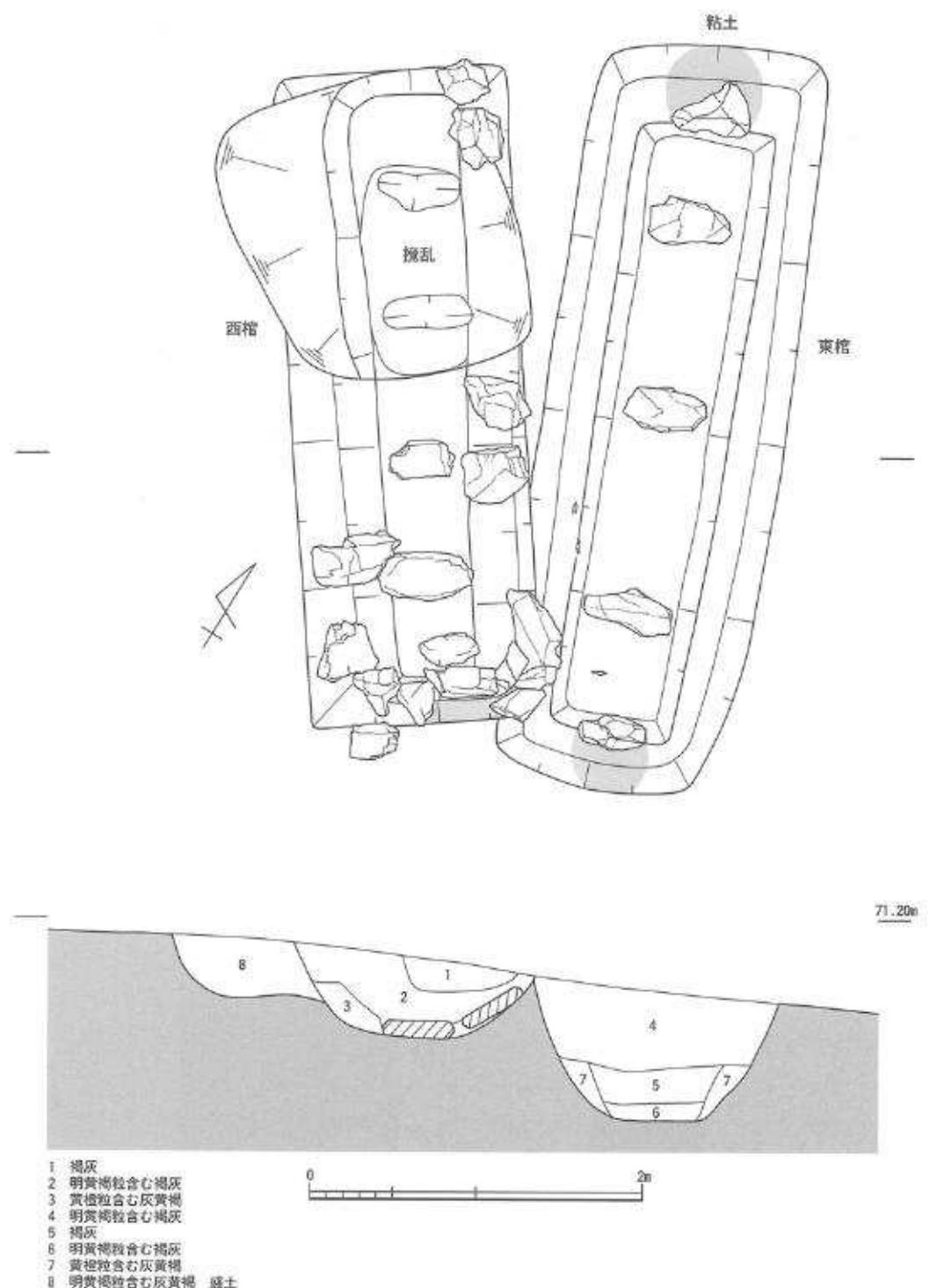
東棺の墓壙中軸線上の中央部北寄りの上部には、墓標と考えられる2個の板状の石がやや西側に傾いた状態で設置されていた。本来は、直立していたと考えられる。墓壙の規模は、南北主軸方向で長さ4.6m、中央部幅1.5m、確認面からの探さ0.73mを測る。

木棺は墓壙のほぼ中央に埋置され、主軸は北から20°西に振っている。木棺の規模は、全長3.6m、棺中央部で上端幅0.83m、底幅0.6mを測る。墓壙内確認面からの深さは0.3mである。棺底には棺台と考えられる平坦な石を3個敷いている。平坦な石は1.2m間隔に配置し、小口側からは0.6mである。小口部分は各1個の石と粘土で押さえている。墓壙底の石の上面の標高は70.4mを測る。

遺物は棺内の東小口付近から刀子と不明鉄製品が、棺外の西側から鉄鎌が2点出土した。



第34図 高坂2号墳 墓丘断面



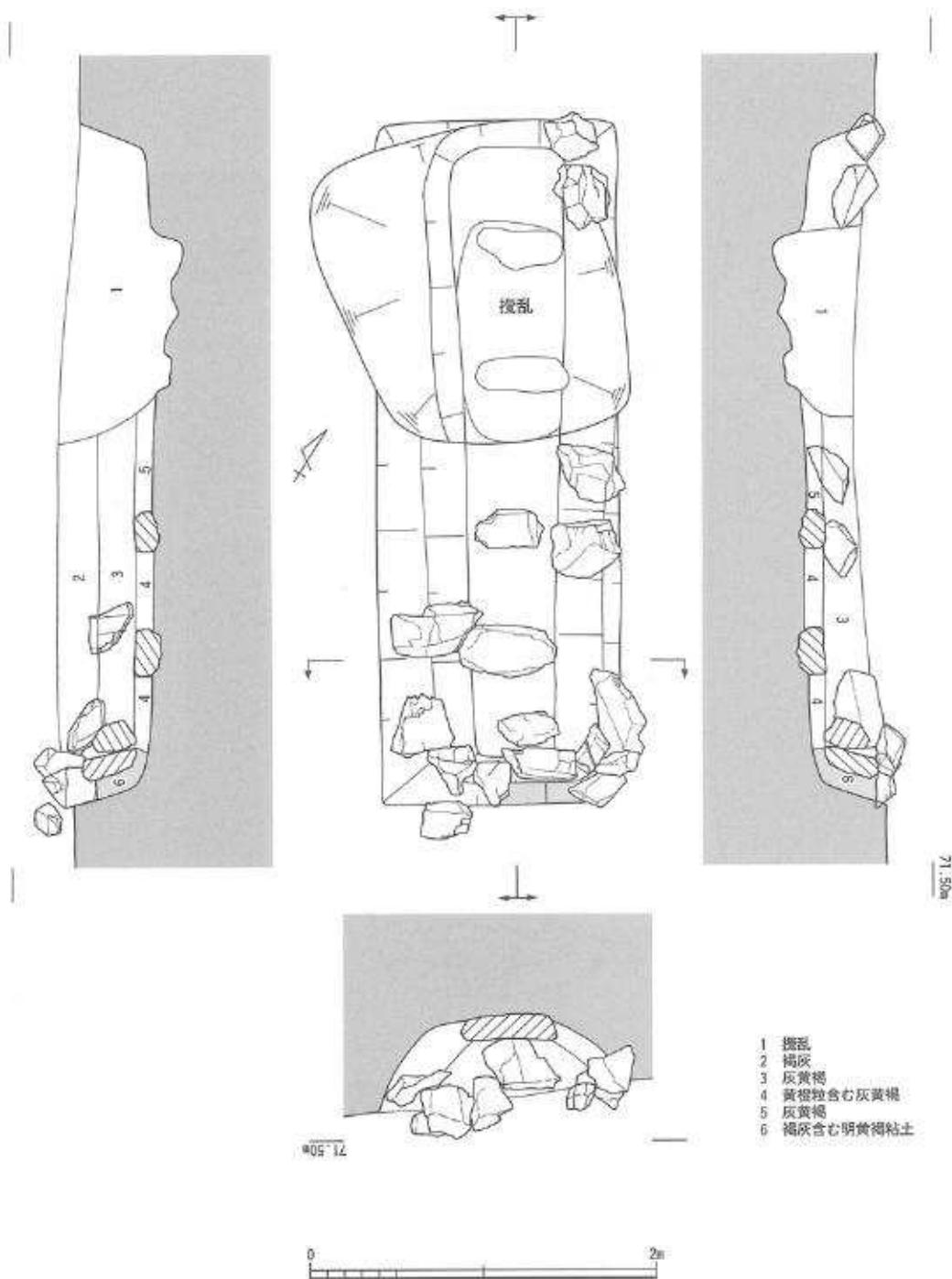
第35図 高坂2号墳 埋葬施設

## 3. 出土遺物（第38図）

遺物は、西棺内、東棺内、周溝内および墳丘、攪乱坑内より出土した。出土した土器には須恵器と土師器がある。

## 西棺

西棺からは土師器環93が出土した。土師器環93は半球形で底部は不定方向のケズリが行われ、口縁部はヨコナデを行っている。



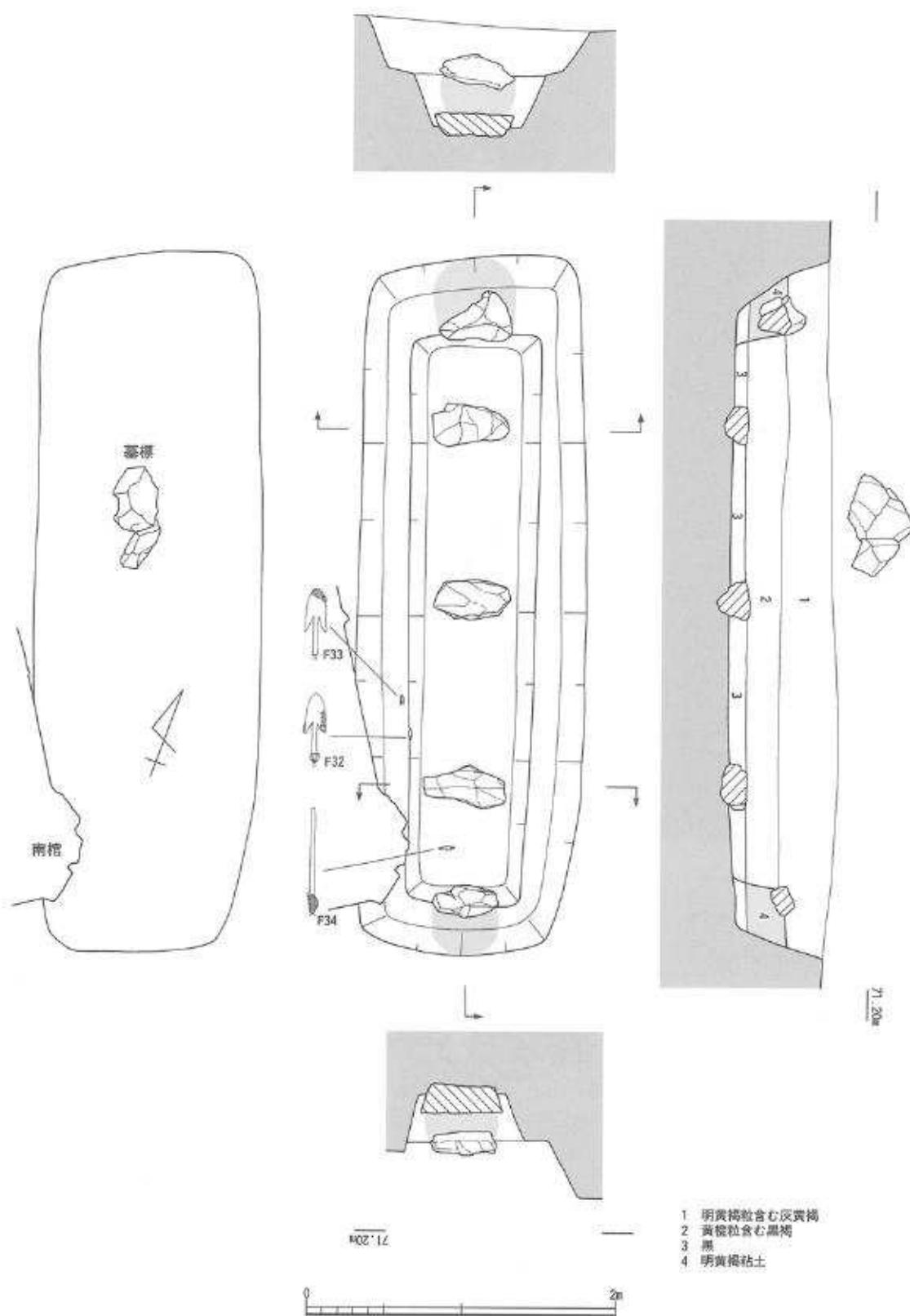
第36図 高坂2号墳 南埋葬施設

### 東棺

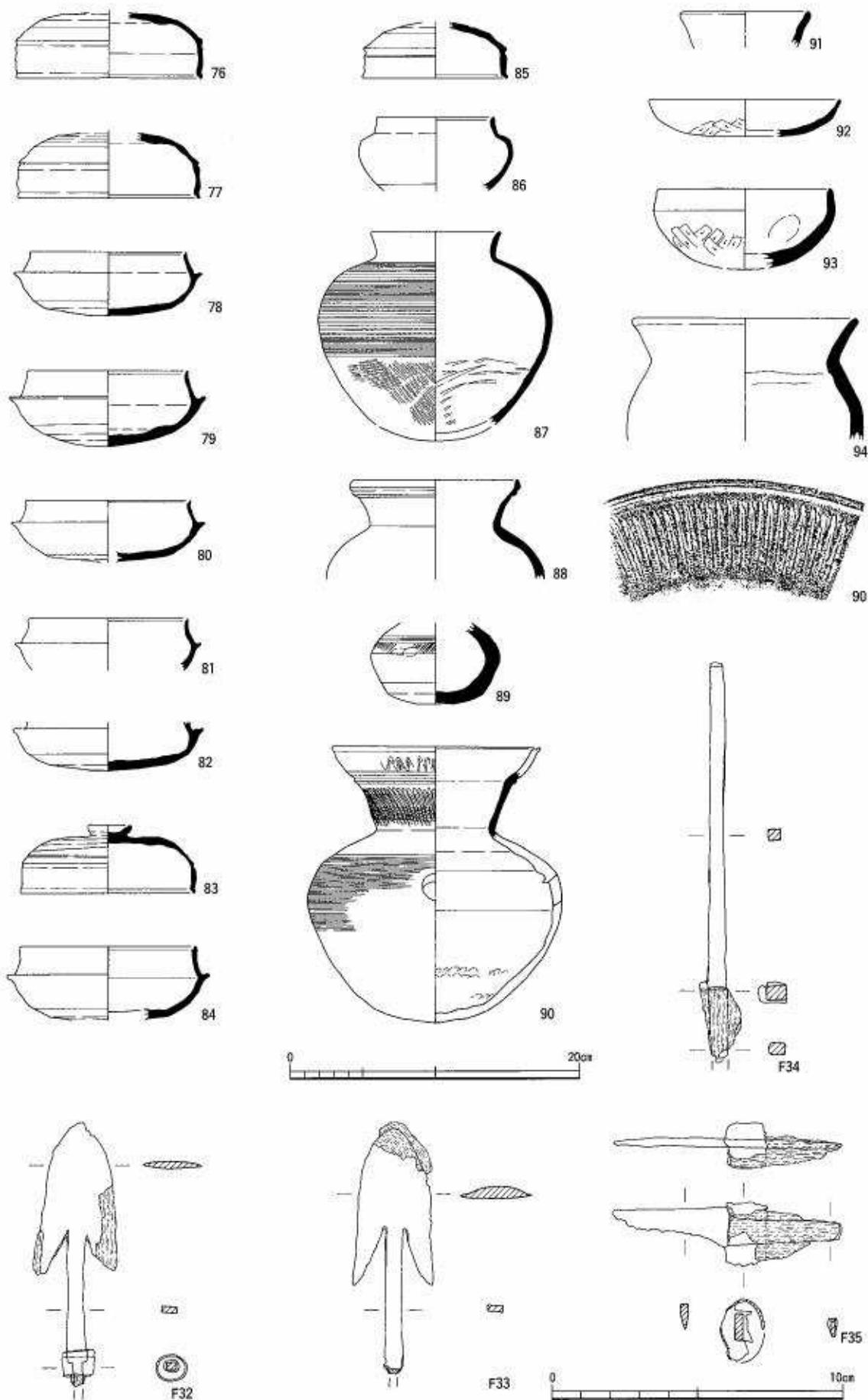
東棺からは須恵器と土師器と鉄器が出土した。

須恵器壺身81は内傾する立ち上がりをもち、口縁端部は内傾する段が付く。口径は10.9cm、蓋に対応する径は12.4cmである。土師器甕94は体部下半を欠く。口頸部はくの字に外反する。体部内面上半部には粘土紐の接合痕跡が残っている。

71-20a



第37図 高坂2号墳 北埋葬施設



第38図 高坂2号墳 出土遺物

鉄器には鉄鎌と刀子と不明品がある。

鉄鎌F32・F33は平根系鎌で、いずれも直線的な逆刺をもつ腸抉柳葉式鎌で鎌身部には木質が付着している。F32は鎌被関部が台形で、鉄錫化した結縛痕跡が認められる。いずれも茎部を欠損している。

刀子は1点出土している。刀子F35は全長7.9cm、刃部長4.0cm、茎部長3.9cmを測る。刀身幅は関で1.3cm測り、刃部は研ぎ減りしており、鋒に向かって幅を減じている。上下に関をもち、茎部は木質に覆われている。把締金具が取り付けられており、把締の断面は楕円形で、長径2.2cm、短径1.5cmを測る。

不明鉄器34は全長13.9cmを測る。断面は正方形で、柄と考えられる場所は断面長方形で、木質が着く。

#### 墳丘および周溝その他

墳丘からは須恵器83・88、土師器92が出土している。須恵器高坏蓋83は天井部と口縁部の境に稜が存在し、口縁内面には内傾する段が存在する。口径11.9cm、左回転ロクロで成形し、天井部は回転ケズリを行っている。須恵器壺88は体部下半を欠くが、大きく外傾する口径部に拡張する口縁部が付く。土師器坏92は浅い皿状をなし、底部は不定方向のケズリを行っている。

北東墳裾から出土した須恵器坏身79は、口縁端部に内傾する段が付く。左回転ロクロで成形し、内面は仕上げナデを行っていない。口径は10.9cm、蓋に対応する径は13.0cmである。土師器壺91は外傾する口縁部の破片である。

周溝からは須恵器82・85・87・89が出土している。須恵器坏身82は立ち上がりを欠く。左回転ロクロで成形し、内面は仕上げナデを行っていない。蓋に対応する径は12.4cmである。須恵器短頸壺蓋85は口径が9.9cmであることから坏蓋ではなく壺蓋であると判断した。口縁端部には内傾する段をもち、天井部との境には明瞭な稜を作る。短頸壺87は、体部は肩が張った球形で、下半はタタキ成形で作られており、上半はカキメで仕上げている。壺89は体部のみで口頭部を欠き、注孔部も無い。

東棺と墳丘から出土した須恵器坏身78は口縁端部に内傾する段が付く。底部は左回転のケズリが施されており、内面は仕上げナデを行っていない。口径は10.6cm、蓋に対応する径は12.4cmである。

東棺と周溝から出土した須恵器坏蓋76は天井部と口縁部の境に稜が存在し、口縁内面には内傾する段が存在する。口径12.7cm、左回転ロクロで成形し、内面は仕上げナデを行っていない。

東棺と周溝と墳丘から出土した須恵器坏蓋77は天井部と口縁部の境に稜が存在し、口縁内面には内傾する段が存在する。口径12.4cm、左回転ロクロで成形し、内面は仕上げナデを行っていない。

西棺と墳丘から出土した須恵器坏身80は、口縁端部に内傾する段が付く。左回転ロクロで成形し、内面は仕上げナデを行っていない。口径は11.3cm、蓋に対応する径は12.9cmである。

#### 5. 小結

2号墳の墳丘は斜面上方を弧状の溝で画し、初期の東棺に伴う墳丘は東棺を中心に10.5m、西棺に伴う墳丘は、東棺を中心に直径11.0mを測る円墳である。墳丘の高さは1.8mを測る。

埋葬施設は2基あり、いずれも棺底に棺台石を並べた木棺であり、小口は粘土と石で押さえている。初期の東棺の上には墓標石が据えられていた。

遺物は西棺南小口から刀子と不明鉄製品が、掘形から鉄鎌が出土している。棺内や墳丘、周溝からは須恵器が出土している。出土した須恵器の坏類の時期はTK23型式であり、5世紀後半に位置づけられる。

## 第4節 3号墳・6号墳

3号墳は、高坂1号墳の北東に位置し、北東向きの斜面に立地する。3号墳の北東側下方に接して2号墳が存在している。なお下層には重複して6号墳が存在している。中心が大きくずれており、6号墳の周溝に重複して3号墳の埋葬施設が存在しているため、別の古墳と認識した。

調査前の観察では、3号墳の墳丘は、標高73.1m~72.9mにかけて等高線が斜面の下方に向かって舌状に張り出していることが確認できたが、斜面上方側などには周溝の存在は確認できなかった。

上記のとおり、この古墳は2基の墳丘が重複している。現状の墳丘を3号墳、その下部から検出した墳丘を6号墳と呼称する。

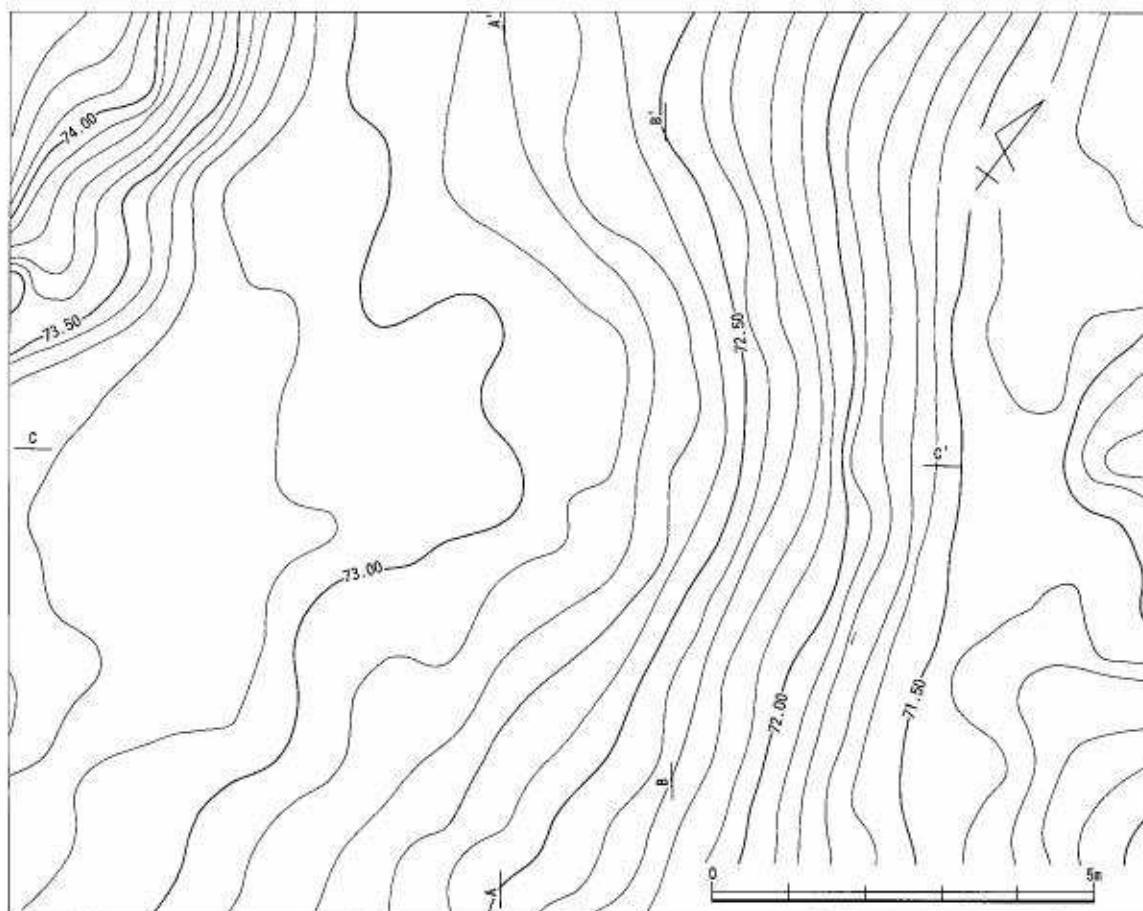
### 1. 3号墳墳丘（第39~41図）

上層の3号墳は、斜面上方側に周溝を掘り込み、その掘削土等を内側に盛り上げて墳丘を構築している。墳丘は木棺の斜面下方側を中心に直径7.0mを測り、ほぼ円形を呈する。周溝は斜面上方側で幅1m~1.5m、深さ0.2m~0.5mであり、ほぼ2/3存在する。

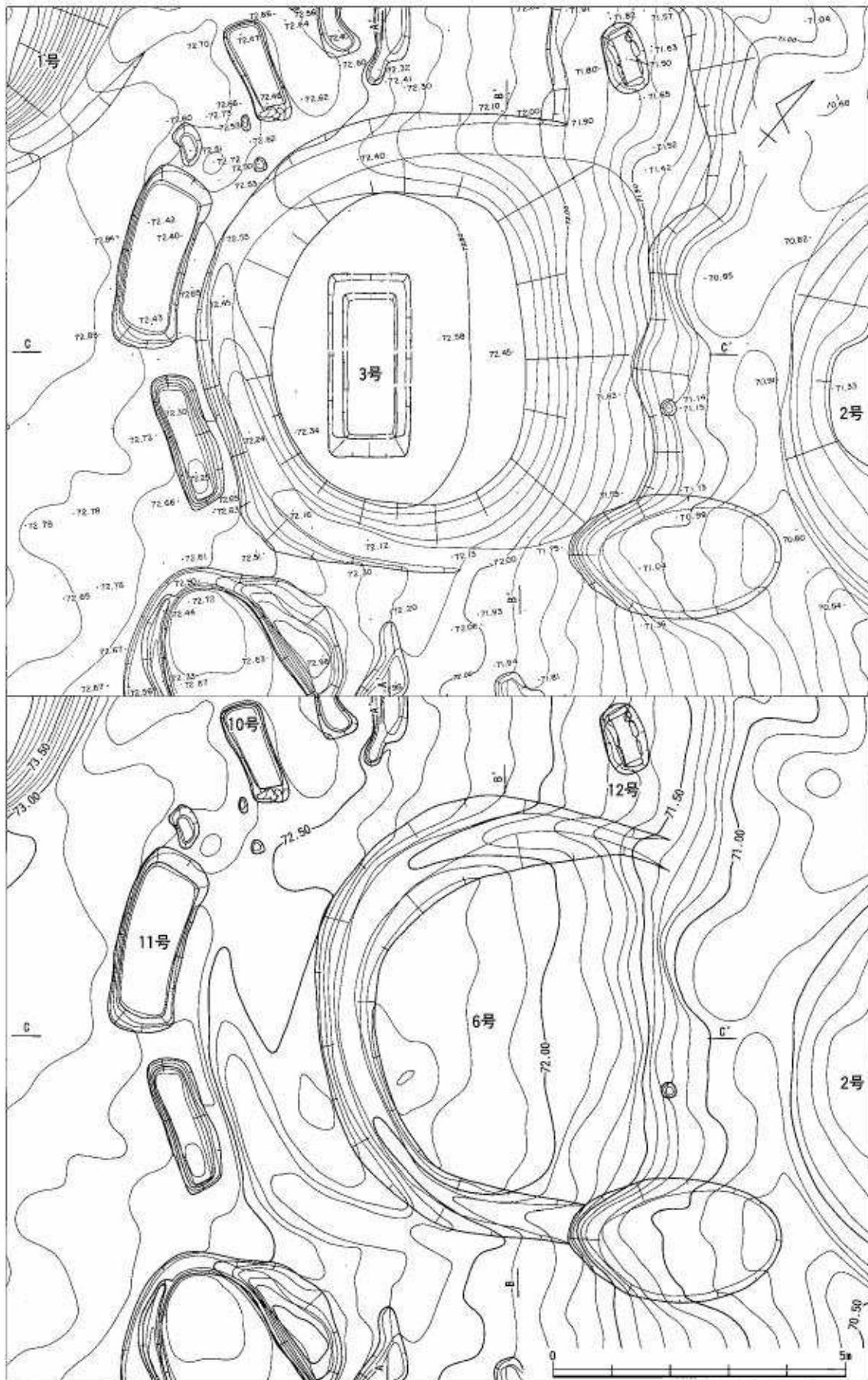
### 2. 3号墳埋葬施設（第42図）

3号墳の埋葬施設は1基の木棺直葬墓を検出した。木棺は痕跡から箱型木棺と考えられる。木棺の一部は6号墳の周溝に重複して切っている。木棺は墳丘中心より南西側の斜面上方にずれて位置している。

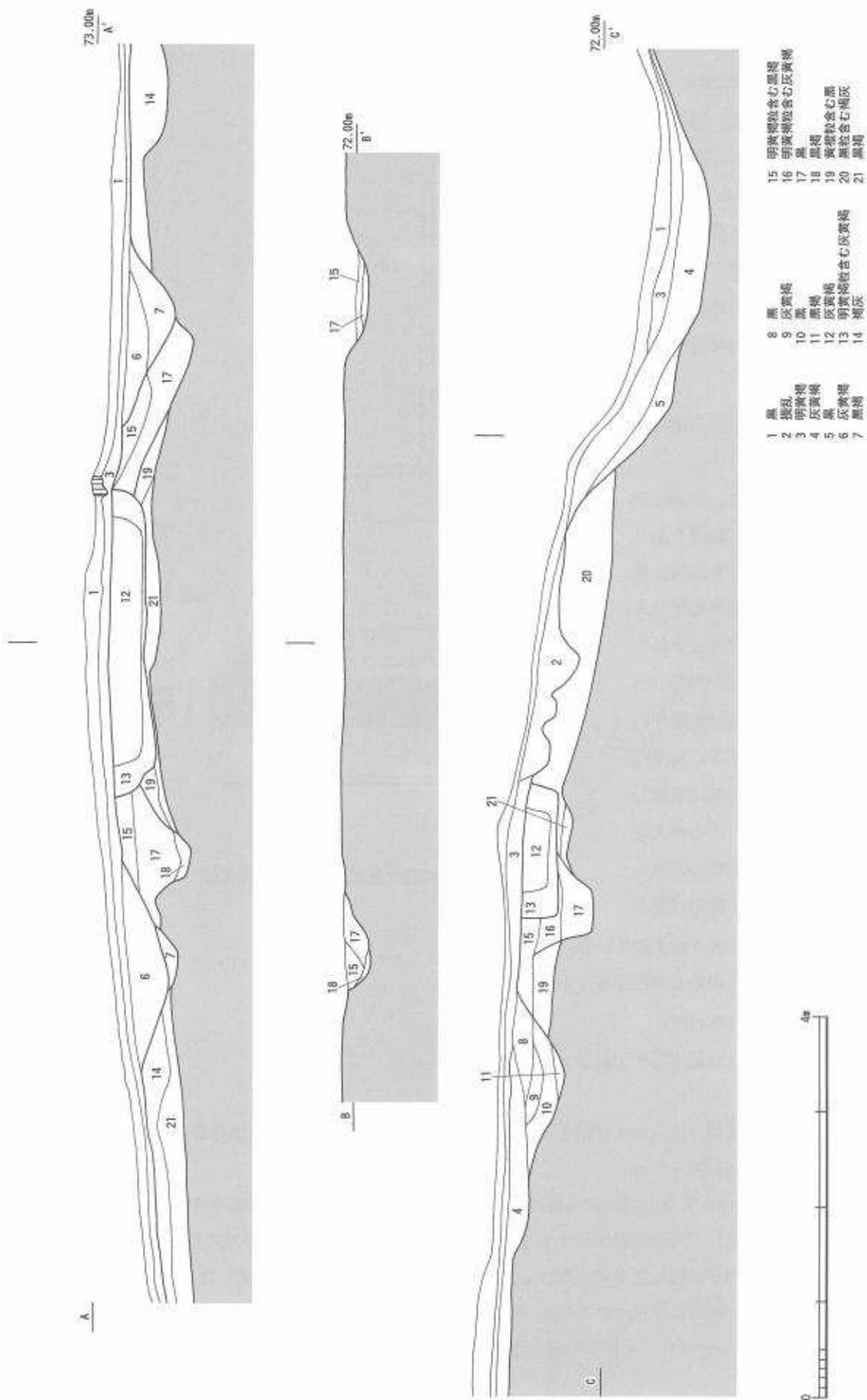
墓壇の規模は、長さ3.2m、中央部幅1.4m、確認面からの探さ0.36mを測る。平面形は長方形を呈しており、底面は平坦である。



第39図 高坂3号墳 墳丘 調査前



第40図 高坂3号墳・6号墳 墳丘 調査後



第41図 高坂3号墳 墳丘断面

木棺は墓壙のほぼ中央に埋置され、南北方向に主軸をもち、北から $37^{\circ}$ 西に振っている。木棺の規模は、全長2.5m、棺中央部幅0.9cmを測る。墓壙内確認面からの深さは0.26mで、木棺底面中央部の標高は72.6mを測る。

遺物は埋葬施設の箱内および棺上から須恵器壺蓋が出土した。

### 3. 6号墳 墳丘（第40・41図）

下層の6号墳は、旧表土上から斜面上方側に周溝を掘り込み、その堆土等を内側に盛り上げて墳丘を構築している。墳丘の直径は、6.7mである。周溝は斜面上方側で幅1.0m～1.5m、深さ0.4mを測り、ほぼ2／3存在する。周溝の一部は3号墳の木棺に重複して切られており、中心が大きくなっているため別の古墳と認識した。墳丘の中心は北東方向の2号墳側に約2mずれている。

埋葬施設は擾乱のため検出できなかった。

### 4. 出土遺物（第43図）

出土した遺物には須恵器と土師器がある。

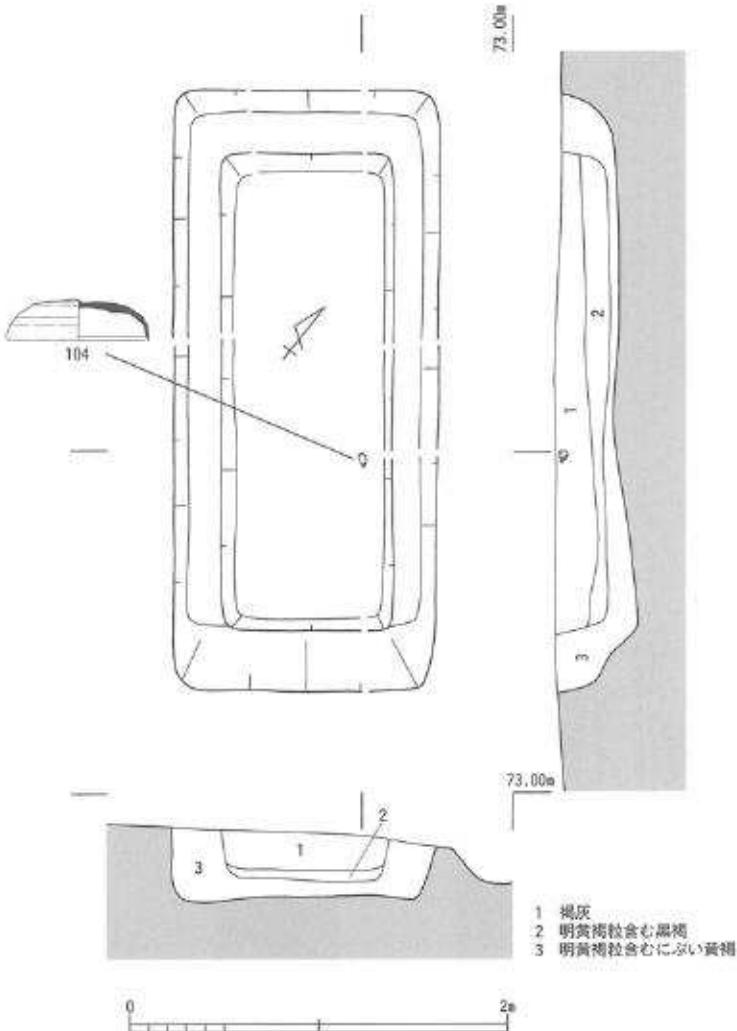
#### 3号墳

3号墳の埋葬施設の箱内および棺上からは須恵器壺蓋104が、墳丘からは須恵器壺102が、周溝からは須恵器短頸壺蓋99が出土した。

須恵器壺蓋104は天井部と口縁部の境に稜が存在せず、口縁内面には段が存在する。口径14.7cm、右回転クロロで成形し、内面は仕上げナデを行っている。須恵器壺102は3号墳の盛土の際に本来6号墳に伴っていたものが移動したと考えられる。細かく割れており、図上で復原した。内面は無文当具の痕跡が残っており、外面は平行タタキの後、カキメが行われている。須恵器短頸壺蓋99は後で述べる様に短頸壺100とセットであり、本来6号墳に伴うものと考えられる。

#### 6号墳

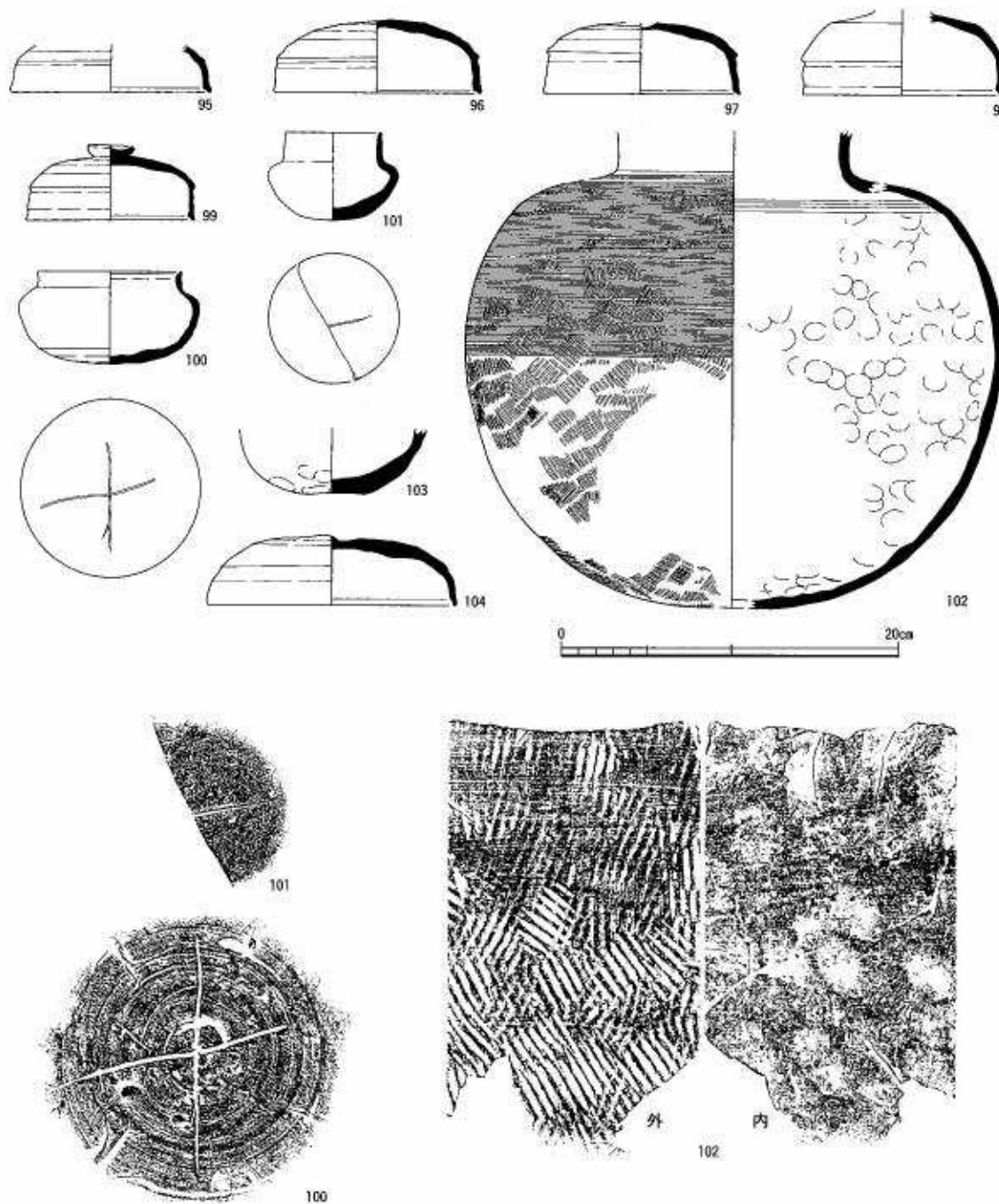
6号墳の周溝からは、須恵器壺蓋95・96、高壺蓋97・98、短頸壺100・101、土師器壺103が出土した。



第42図 高坂3号墳 埋葬施設

須恵器壺蓋95・96は天井部と口縁部の境に稜が存在し、口縁内面には内傾する段が存在する。96は口径12.3cm、左回転クロロで成形し、天井部は回転ケズリを行い、内面は仕上げナデを行っていない。高壺蓋97・98はいずれも摘み部分を欠くが存在した痕跡を残す。天井部と口縁部の境に稜が存在し、口縁内面には内傾する段が存在する。口径は97・98ともに11.7cmを測り、左回転クロロで成形している。

短頸壺100は肩部に短頸壺蓋99の口縁端部融着した痕跡が残り、セットである。扁平の体部に直立し



第43図 高坂3号墳・6号墳 出土土器

た短い口縁が付く。口縁端部には内傾する段が付く。短頸壺101は口径6.9cmの直立した口頸部に小型の丸底の体部が付く。底部はケズリを行った後、ナデている。約半分残存する底部には「-」のヘラ記号が存在するが、欠損しているため、100と同様に「×」の可能性がある。土師器壺103は丸底の壺の底部である。

## 5. 小結

3号墳と6号墳は中心が約2mずれて重複している。いずれも斜面上方側に周溝を掘っており円墳である。上層の3号墳は、墳丘は木棺の斜面下方側を中心に直径7.0mを測り、下層の6号墳は、直径は6.7mである。6号墳の周溝の一部は3号墳の木棺に重複している。

6号墳の埋葬施設は検出できなかった。3号墳の埋葬施設は箱形の木棺である。

遺物は3号の棺上から須恵器坏蓋が出土しており、3号墳の周溝と6号墳の周溝から須恵器蓋坏や壺などが出土している。須恵器壺の底部には「×」のヘラ記号が存在している。

3号墳の時期は須恵器坏蓋からMT85型式であり、6世紀後半に位置づけられる。

6号墳の時期は須恵器坏類などからTK23型式からTK47型式であり、5世紀後半に位置づけられ、3号墳とは1世紀程度時期が離れる。このことから3号墳は先に造られていた6号墳に一部重複する形で約1世紀後に造られた別古墳である。

## 第5節 4号墳

4号墳は、標高72.5mの北東向きの斜面に立地する。南側には1号墳と3号墳が存在している。北東側の斜面の下には5号墳と7号墳が接して存在している。南東側には周溝を挟んで12号石棺が存在する。

### 1. 墳丘（第44・45図）

4号墳の墳丘は、調査開始時点において、斜面の下方に向かって舌状の張り出しが確認できたが、斜面上方側などには周溝の存在は確認できなかった。

調査後の墳丘は、南西側の斜面上方を弧状の溝で画し、その掘削土等を内側に盛り上げて墳丘を形成している。周溝は、幅1m～2m、深さ0.4m前後を測る。墳丘は埋葬施設を中心に直径6.8mを測り、円形を呈する。墳丘の高さは斜面上方側で溝底より0.45m、斜面下方側で1.4mを測る。

### 2. 埋葬施設（第46図）

4号墳の埋葬施設は墳丘のほぼ中央部やや南東よりに位置しており、1基の木棺直葬墓を検出した。木棺は痕跡から箱形木棺と考えられる。

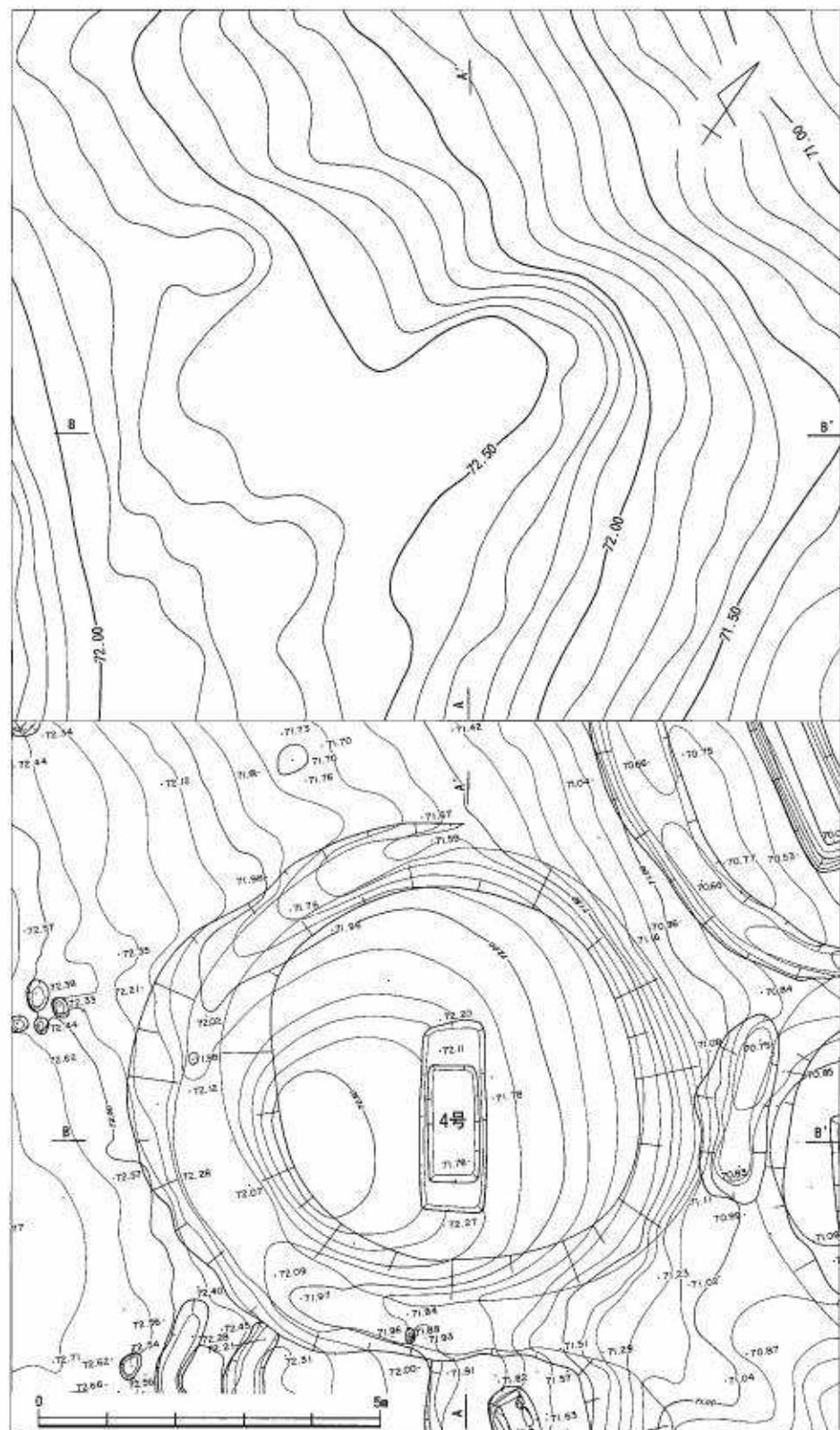
墓壙の規模は、南北主軸方向で長さ2.9m、中央部幅1.0m、確認面からの探さ0.28mを測る。墓壙底の標高は北小口で72.0m、南小口で72.05mを測る。

木棺は墓壙のほぼ中央に埋置され、主軸は北から38°西に振っている。木棺の規模は、全長1.75m、棺中央部幅0.8mを測る。墓壙内確認面からの深さは0.2mを測る。

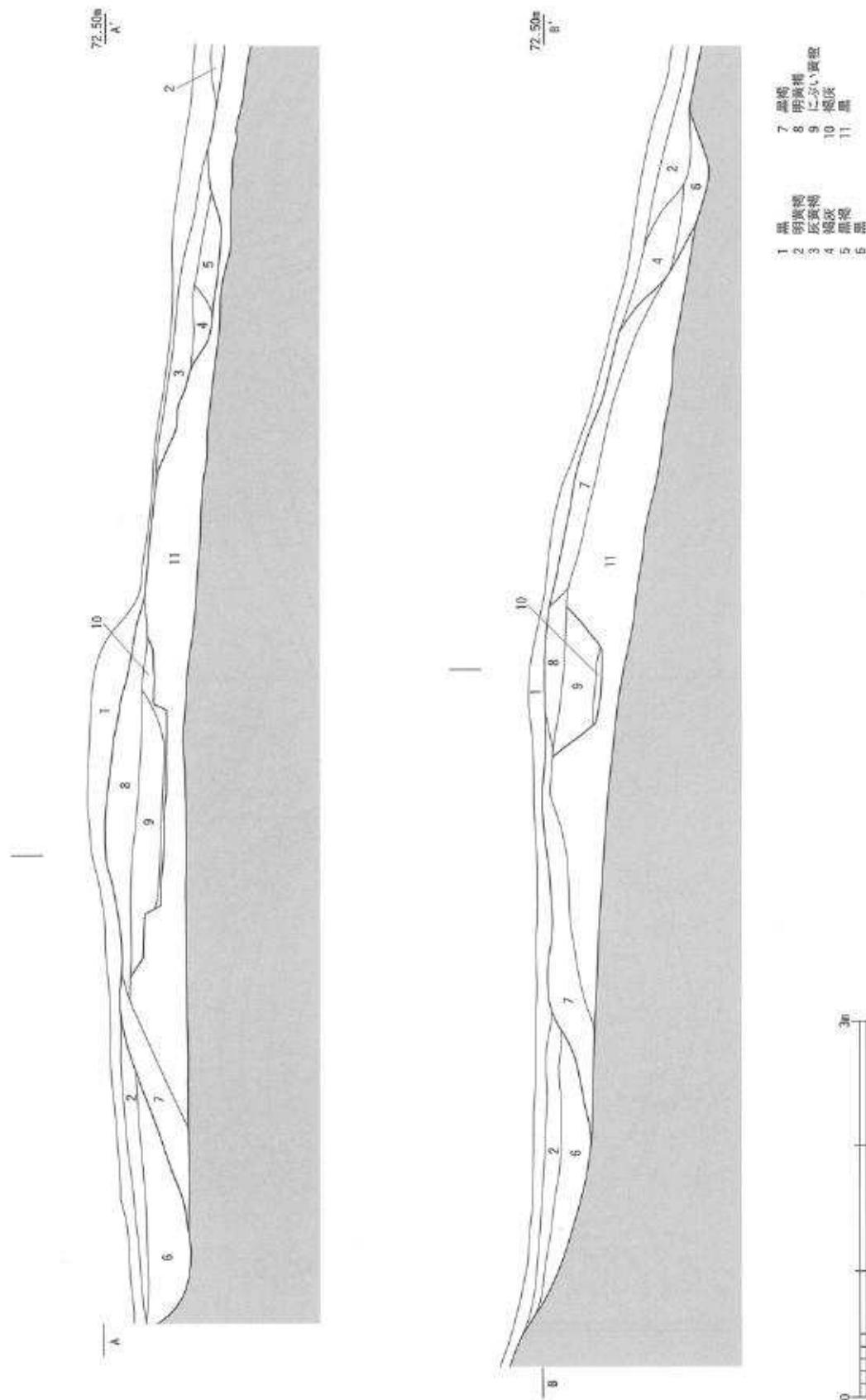
遺物は出土しなかった。

### 3. 出土遺物（第46図）

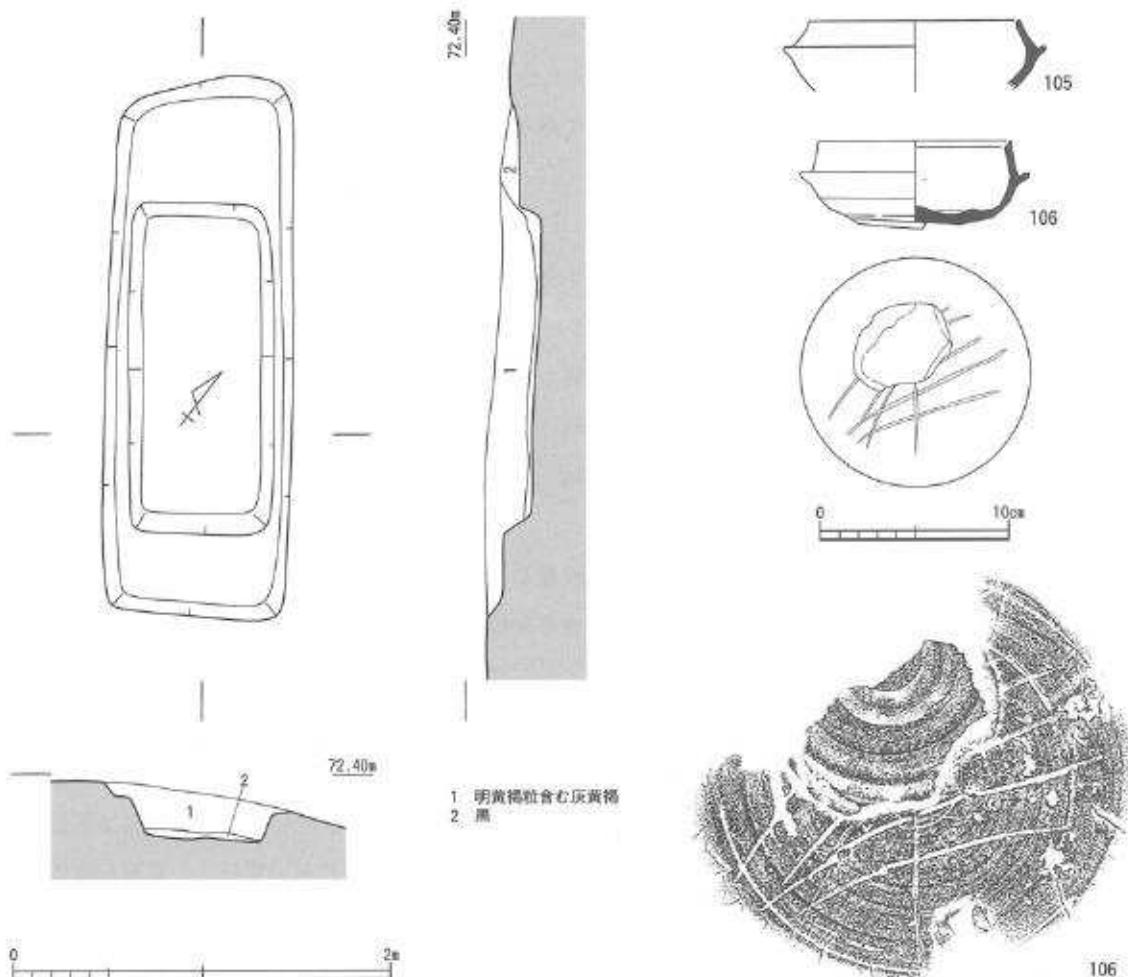
4号墳からは須恵器が2点出土した。1号墳に近い墳丘から須恵器坏身105と南東側の周溝から須恵器坏身106が出土した。



第44図 高坂4号墳 墓丘 調査前（上） 調査後（下）



第45図 高坂4号墳 墓丘断面



第46図 高坂4号墳 埋葬施設と出土土器

須恵器坏身105は小破片であり、口縁から体部の一部にかけて残っている。内傾する比較的長い立ち上がりをもち、口縁端部は丸く作っている。底部は左回転のケズリが施されている。須恵器坏身106は完形で底部には別個体の須恵器坏の破片が融着している。わずかに内傾する比較的長い立ち上がりをもち、口縁端部は内傾する段を作っている。底部は丁寧な左回転のケズリが施されている。ヘラ記号が描かれているが、融着した別個体で一部覆われているため、詳細は不明である。内面は仕上げナデが行われている。

#### 4. 小結

4号墳の墳丘は斜面上方を弧状の溝で画し、埋葬施設を中心に直径6.8mを測る円墳である。墳丘の高さは1.4mを測る。

埋葬施設は1基あり、箱形の木棺が考えられる。

遺物は墳丘および周溝から須恵器の坏身が出土した。4号墳の時期は須恵器坏がTK47型式からMT15型式であり、6世紀前半に位置づけられる。

## 第6節 5号墳

5号墳は、標高70.0m～71.1mの北東向きの斜面に立地する。5号墳の南西側の斜面上方に接して4号墳があり、北西側には7号墳の周溝が一部重複して接しており7号墳の周溝を切っている。南東側には2号墳が接している。

### 1. 墳丘（第47・48図）

5号墳の墳丘は、調査開始時点において、斜面の下方に向かって舌状の張り出しが確認できたが、斜面上方側などには周溝の存在は確認できなかった。

調査後の墳丘は、南西側の斜面上方を弧状の溝で画し、その掘削土等を内側に盛り上げて墳丘を形成している。周溝は、幅1m～2m、深さ0.2m～0.4mを測る。墳丘は東棺を中心に直径6.4mを測り円形を呈する。墳丘の高さは、斜面上方側で溝底より0.5m、斜面下方側で1.4mを測る。

### 2. 埋葬施設（第49図）

5号墳の埋葬施設は墳丘の中央より斜面上方側に位置しており、2基の木棺直葬墓を検出した。斜面上方に存在するものを西棺、斜面下方に存在するものを東棺と呼称した。切り合い関係が認められ、西棺の北東部が東棺の北西部を切っており、西棺が新しく、東棺が古い。

#### 東棺

東棺は墳丘のほぼ中央部に位置しており、北西部の一部を西棺に切られている。墓壙の規模は、長さ2.1m、中央部幅0.7m、確認面からの探さ0.16mを測る。平面形は長方形を呈しており、底面は平坦である。南北方向に主軸をもち、北から39°西に振っている。埋土は上層がにぶい黄橙土、下層が黄橙粒を含む灰黄褐色土である。木棺底面中央部の標高は70.9mを測り、西棺よりわずかに高い。

遺物は出土しなかった。

#### 西棺

西棺は東棺の斜面上方の南西側に位置しており、北東部の一部が東棺を切っている。墓壙の規模は、長さ1.8m、中央部幅0.6m、確認面からの探さ0.22mを測る。南側が細い隅丸長方形で、断面形はU字形である。南北方向に主軸をもち、北から31°西に振っている。埋土は明黄褐色粒を含む灰黄褐色土である。北小口に近い頭部と想定できる場所から直径15cmの範囲で赤色顔料の痕跡が認められた。木棺底面中央部の標高は70.85mを測り、東棺よりわずかに低い。

遺物は出土しなかった。

### 3. 出土遺物（第50図）

5号墳からは須恵器坏蓋が墳丘上から1点出土している。

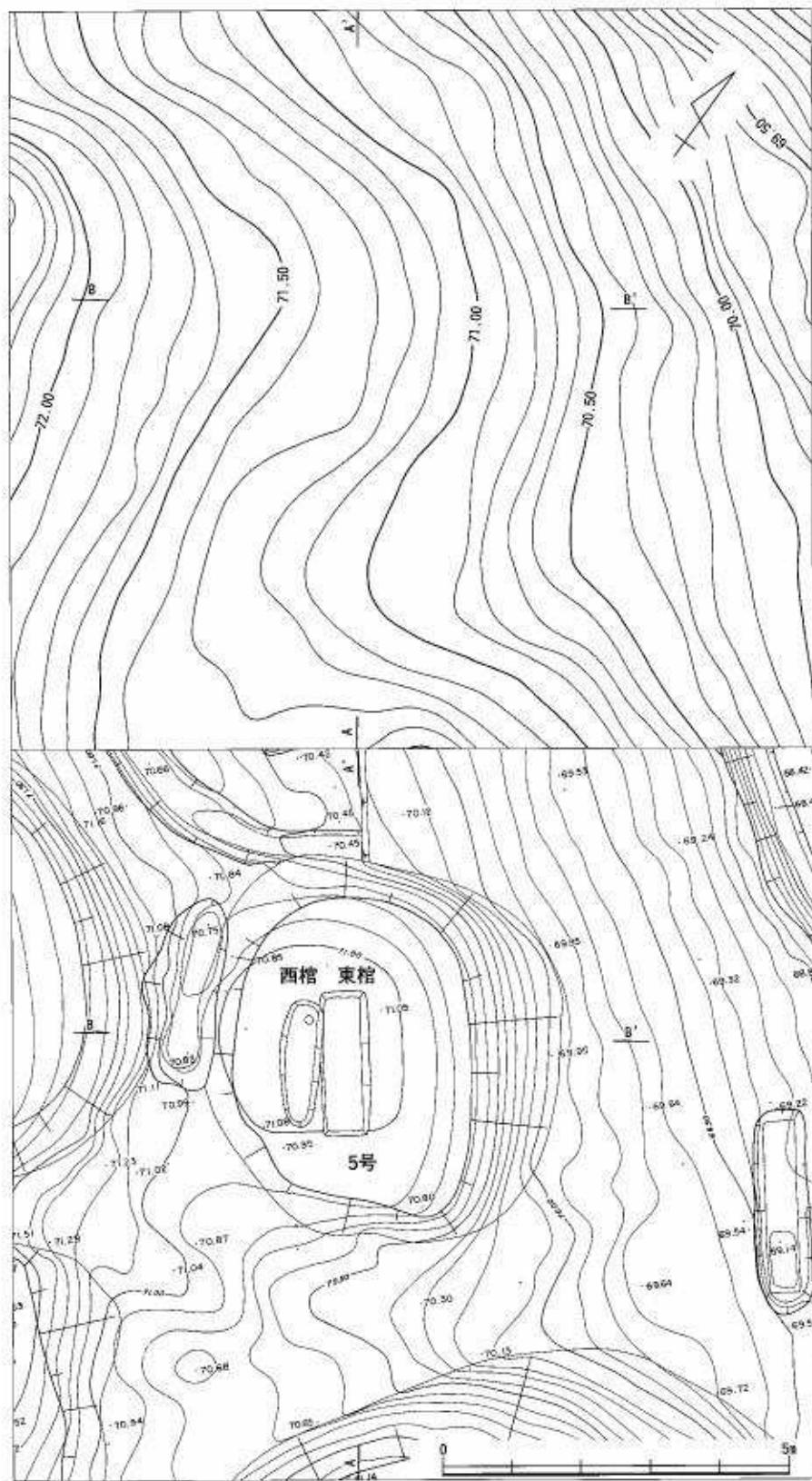
須恵器坏蓋107は天井部と口縁部の境に鋭い稜が存在しており、口縁端部内面には内傾する段が存在する。口径11.0cm、左回転クロロで成形している。

### 4. 小結

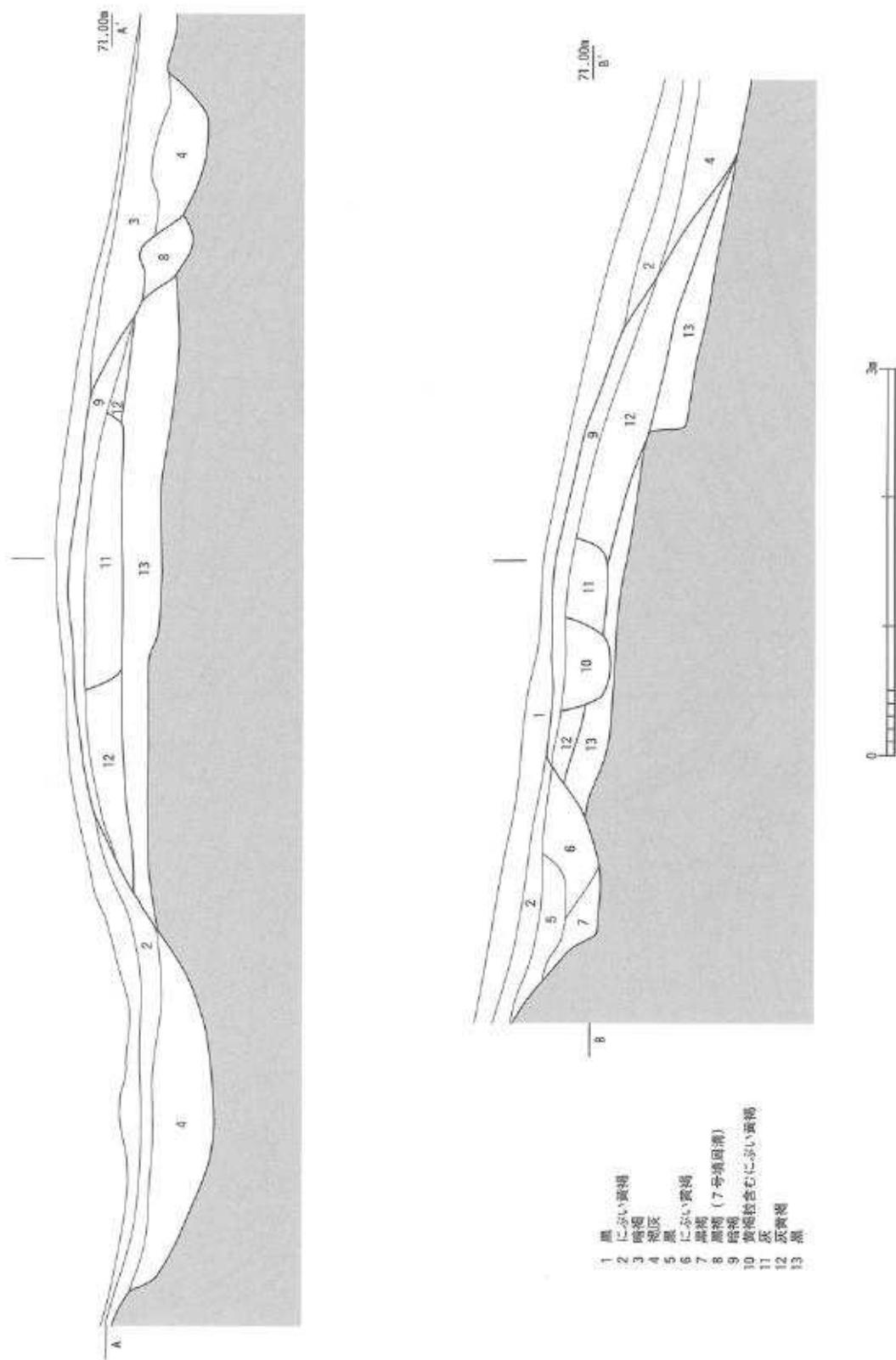
5号墳の墳丘は、斜面上方に周溝をもち、東棺の中央を中心の直径6.4mの円墳で、墳丘の高さは1.4mを測る。7号墳が接しており、周溝を切っている。2基の木棺を埋葬施設とする。中央の東棺が古く、西棺が新しい。東棺は箱形木棺であり、西棺の頭部には赤色顔料の痕跡が残る。

遺物は墳丘から須恵器の坏身が出土しており、TK47型式であり、5世紀後半に位置づけられる。

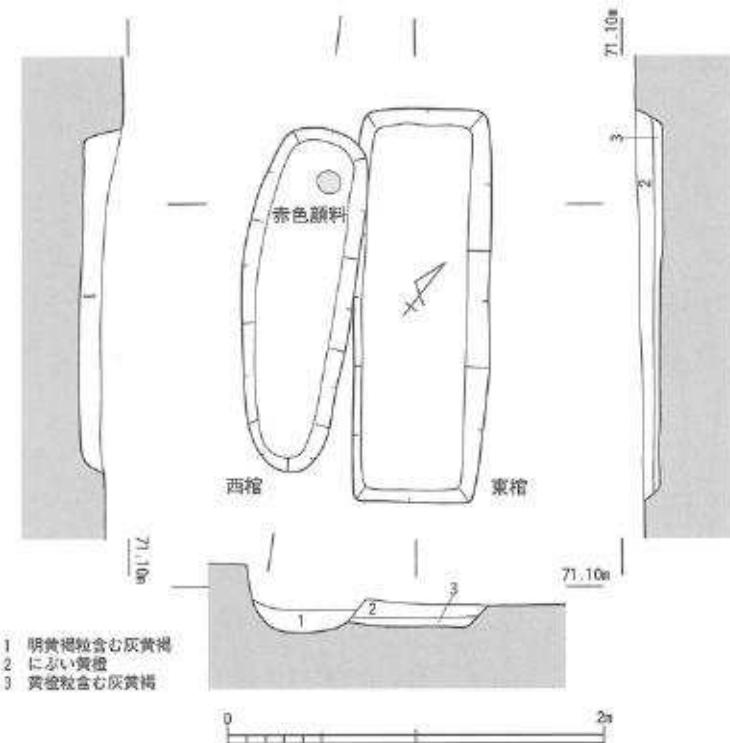
5号墳の時期は古墳の周溝の切り合いから7号墳より新しい。



第47図 高坂5号墳 墓丘 調査前（上） 調査後（下）



第48図 高坂5号墳 墳丘断面



第49図 高坂5号墳 埋葬施設

第50図 高坂5号墳 出土土器



## 第7節 7号墳

7号墳は、調査区の北西隅に位置し、標高70m～71mの北東向きの斜面に立地する。北西側の一部は調査区外である。7号墳は2号墳と並んで古墳群の中では標高のもっとも低い場所に位置している。7号墳の南側の斜面上方に接して4号墳があり、南東側には5号墳の周溝が一部重複しており、周溝を切られている。

### 1. 墳丘（第51・52図）

7号墳の墳丘は、調査開始時点においては、重機の踏みつけにより明瞭な墳丘は観察できなかつたが、調査区の境界部分に2m程度の平坦化した部分が認められるため、重機の踏みつけがなければわずかな高まりが確認できたかもしれない。

調査後の墳丘は、南西側の斜面上方に1／2を弧状の溝で画し、その掘削土等を内側に盛り上げて墳丘を形成している。周溝は、幅0.5m～1.1m、深さ0.3mを測る。墳丘は東棺の中央を中心に直径8.0mを測り、形を呈する。墳丘の高さは、検出時に削平しており不明である。

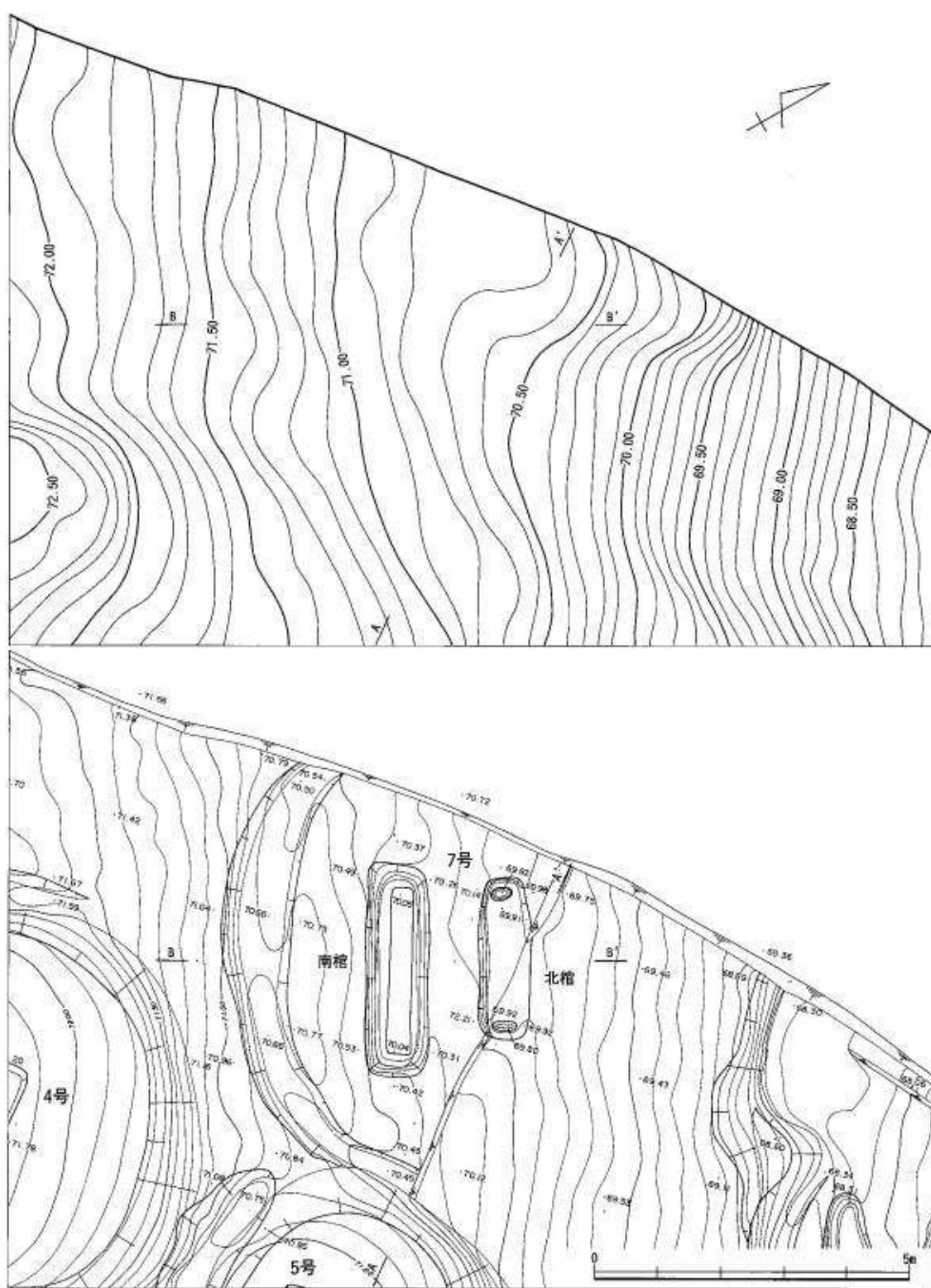
### 2. 埋葬施設（第53図）

7号墳の埋葬施設は墳丘のほぼ中央に位置しており、2基の異なる構造の木棺直葬墓を検出した。斜面上方に存在するものを南棺、斜面下方に存在するものを北棺と呼称した。ほぼ並行しており重複関係は認められず、新旧関係は明らかでない。

#### 南棺

南棺は古墳の中心より斜面上方に寄っている。墓壙の規模は、長さ3.45m、中央部幅1.1m、確認面からの探さ0.52mを測る。断面形態はU字形であり、木棺は割竹形木棺が考えられる。東西方向に主軸

をもち、北から $60^{\circ}$  西に振っている。木棺底面中央部の標高は69.5mを測り、北棺より0.1m高い。  
遺物は、北西部で鉄製の刀子が出土した。



第51図 高坂7号墳 墳丘 調査前 調査後

### 北棺

北棺は古墳の中心に位置している。小口板を深く埋め込む組み合わせ式の木棺である。墓壙の規模は、長さ2.9m、中央部幅0.8m、確認面からの探さ0.26mを測る。東西方向に主軸をもち、北から60°西に振っている。小口部分には幅0.4m、厚さ0.2m程度、深さは西側で0.35m、東側で0.25mを測る小口穴が存在する。棺の内法は、長さ2.0m、幅0.6mを測る。底面は平らであり、木棺底面中央部の標高は69.4mを測る。

### 3. 出土遺物（第54図）

遺物は、墳丘より須恵器坏身が出土した。南棺の北西部で鉄製の刀子が出土した。

須恵器坏H身（108・109）は、底部は丸味をもち、108が端部を鋭く取めており、109が内傾する段をもつ。底部外面は、丁寧な回転ヘラ削り調整が施されている。

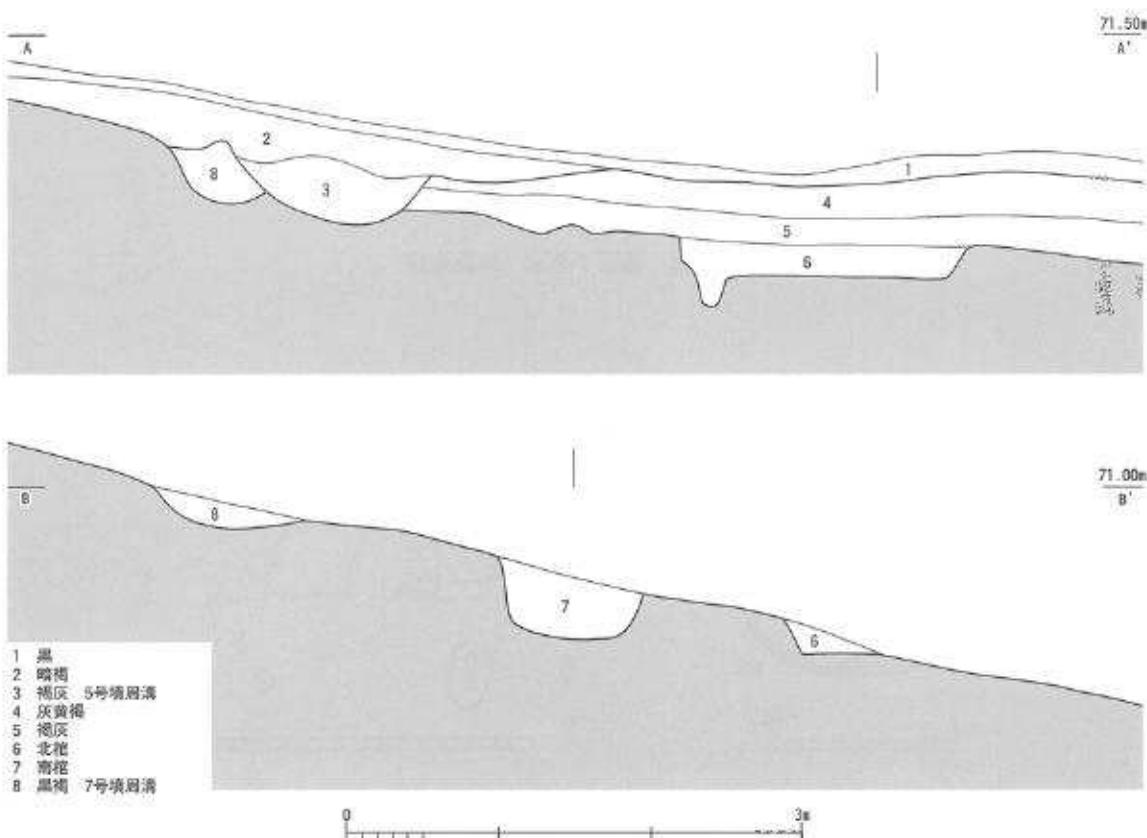
鉄器は刀子が1点出土している。刀子F36は全長9.8cm程度、刃部長4.0cm、茎部長2.3cmを測る。刀身幅は関で1.2cm測り、鋒に向かって幅を減じている。茎部は木質が鎧化して空洞になっている。把縁金具が取り付けられており、把縁の断面は楕円形で、長径1.8cm、短径1.2cmを測る。

### 5. 小結

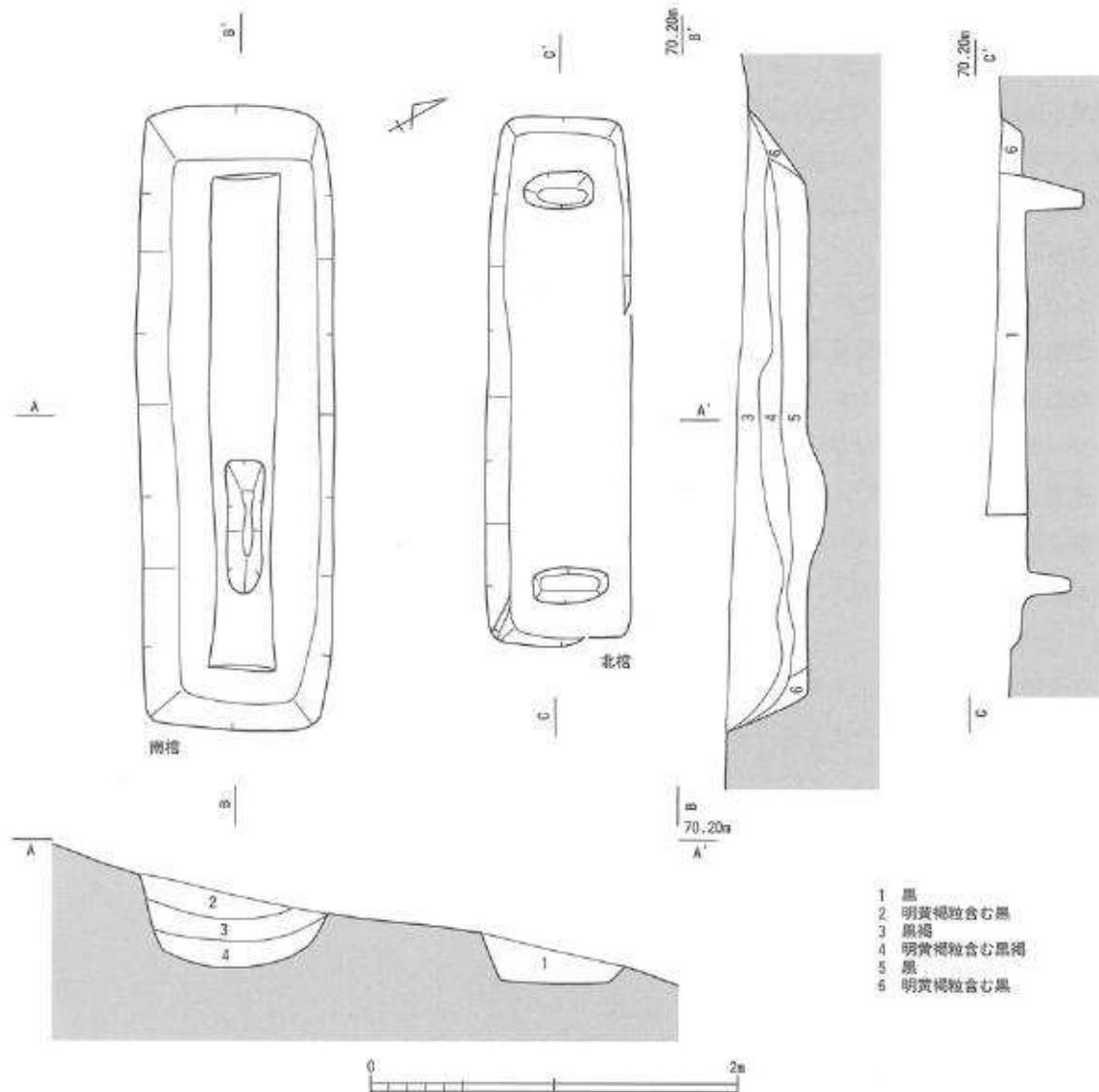
7号墳の墳丘は斜面上方を弧状の溝で画し、北棺を中心に直径8.0mを測る円墳である。

埋葬施設は形式が異なる2基の木棺が存在し、南棺は割竹形木棺、北棺は小口穴を深く埋め込む組み合わせ式の木棺である。

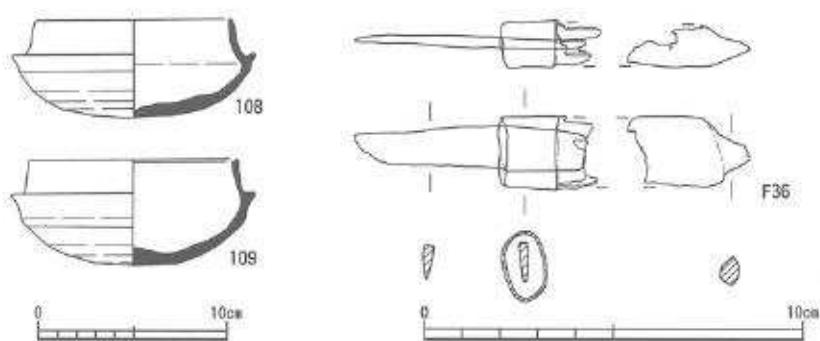
遺物は南棺内より刀子が出土し、墳丘から須恵器坏が出土した。須恵器の時期はTK23型式であり5世紀後半に位置づけられる。



第52図 高坂7号墳 墳丘断面



第53図 高坂7号墳 埋葬施設



第54図 高坂7号墳 出土遺物

## 第8節 木棺墓

墳丘を伴わない、木棺墓は4基検出した。

### 1. 8号棺（第55図）

8号棺は、標高69.5m付近の2号墳の北側の斜面に位置している。当初から墳丘は確認できず、調査後にも墳丘を画する溝が検出できなかつたことから、無墳丘の可能性が高い。

墓壙は、長さ2.9m、幅0.85m、確認面から深さ0.4mの規模をもち、底面は平らである。墓壙底の標高は69.2mを測る。南北方向に主軸をもち、北から37°西に振っている。

墓壙から遺物は出土しなかつた。

### 2. 9号棺（第56図・57図）

#### 遺構

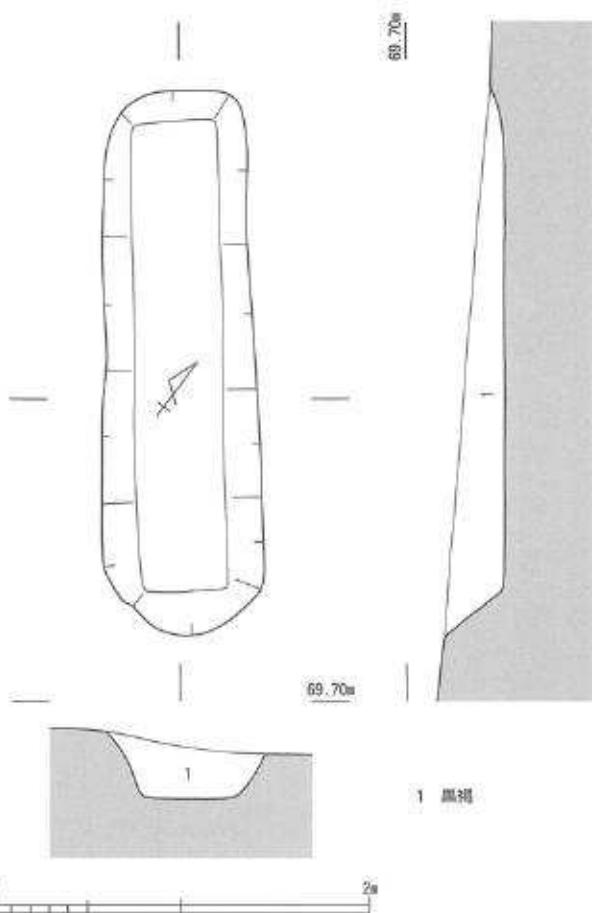
9号棺は、標高72.7m付近の3号墳と6号墳の南西側に接して位置している。当初から墳丘は確認できず、調査後にも墳丘を画する溝が検出できなかつたことから、無墳丘の可能性が高い。

墓壙は、長さ2.35m、幅0.85m、確認面からの最大深さ0.5mの規模をもち、底面は平坦である。墓壙底の標高は72.25mを測る。東西方向に主軸をもち、主軸は北から57°西に振っている。頭位は、棺の構造と遺物の出土状況から西と考えられる。

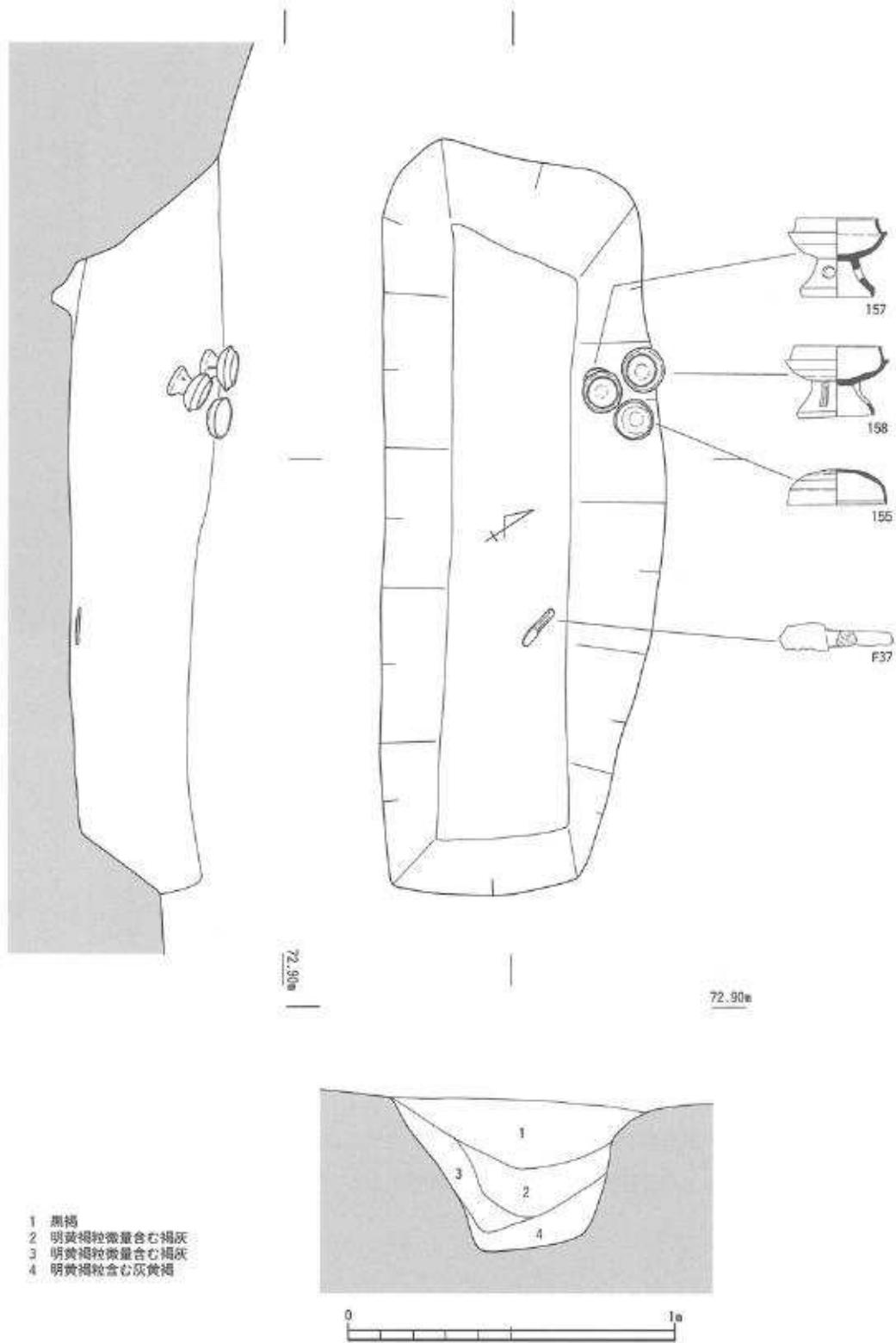
遺物は墓壙検出面で、須恵器の高環2点と坏蓋2点が出土したことから、棺上に須恵器を供えていたと考えられる。このうち1点は確実な出土位置が記録できなかつた。また、墓壙底面の中央東よりから、鉄製刀子が出土した。

#### 遺物

須恵器坏蓋（110・111）と須恵器高环（112・113）がある。須恵器坏蓋110は背が高く天井部は丸味をもち、天井部と口縁部の境界は、突出して鈍い稜を作る。口縁部は直立しており、端部は内傾し凹線状の段をもつ。天井部外面は、丁寧な回転ケズリが施され、ヘラ記号が存在する。111は天井部と口縁部の境界は、突出して鈍い稜を作る。口縁端部は内傾し凹線状の内傾する段をもつ。天井部外面は、丁寧な回転ケズリが施されている。



第55図 8号埋葬施設



第56図 9号埋葬施設

須恵器高坏112・113はともに有蓋高坏で、口縁端部は内傾し段をもつ。112の脚部には3方向の長方形透かしがあり、113の脚部には3方向の円形透かしがある。

鉄器は刀子が1点出土している。刀子F37は刃部が大きく欠損しており、全長7.0cm以上、刃部長3.0cm以上、茎部長4.0cmを測る。刀身幅は関で1.8cmを測り、鋒に向かって幅を減じている。茎部にはわずかに木質が付着している。

### 3. 10号棺（第58図）

10号木棺は、標高72.7m付近の3号墳と6号墳の西側に接して位置している。11号棺の北側にある。当初から墳丘は確認できず、調査後にも墳丘を画する溝が検出できなかったことから、無墳丘の可能性が高い。

墓壙は、長さ1.85m、幅0.65m、確認面から深さ0.13mの規模をもち、底面は平らである。東西方向に主軸をもち、北から55° 西に振っている。東側小口には2個の石が存在した。頭位は、棺の構造から東と考えられる。

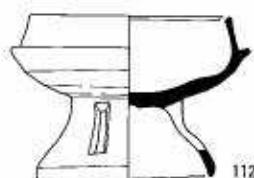
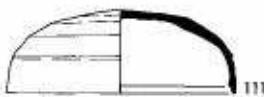
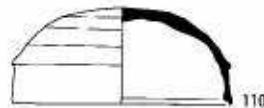
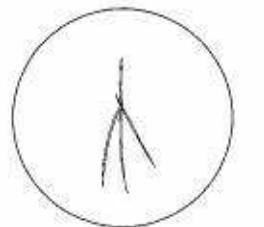
墓壙から遺物は出土しなかった。

### 4. 11号棺（第58図）

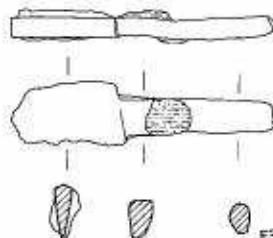
11号棺は、標高72.8m付近の3号墳と6号墳の西側に接して位置している。9号棺と10号棺の間にある。当初から墳丘は確認できず、調査後にも墳丘を画する溝が検出できなかったことから、無墳丘の可能性が高い。

墓壙は、長さ3.1m、幅1.05m、確認面から深さ0.35mの規模をもち、底面は平らである。南北方向に主軸をもち、北から20° 西に振っている。

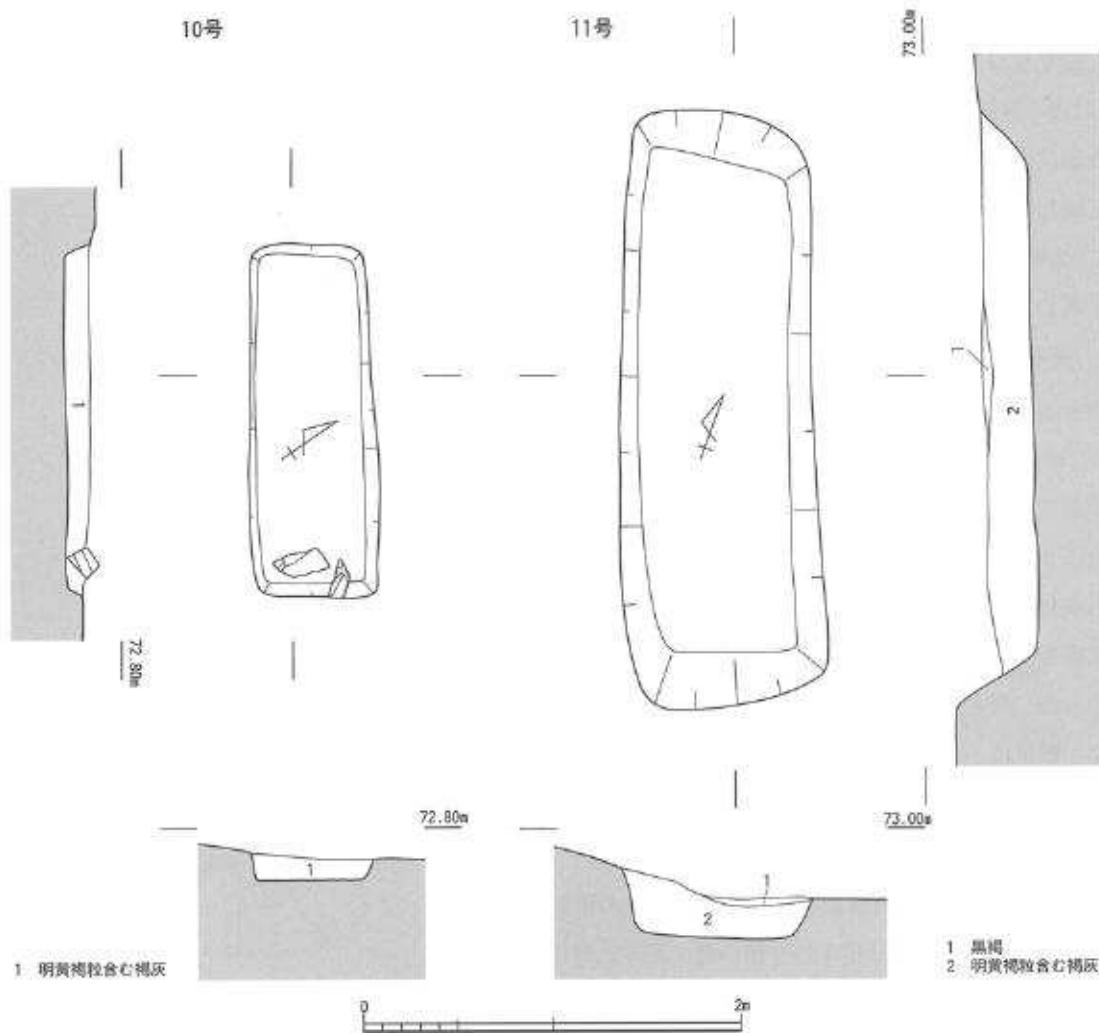
墓壙から遺物は出土しなかった。



110外



第57図 9号埋葬施設 出土遺物



第58図 10号・11号埋葬施設

## 第9節 石棺墓

墳丘を伴わない石棺墓は2基検出した。

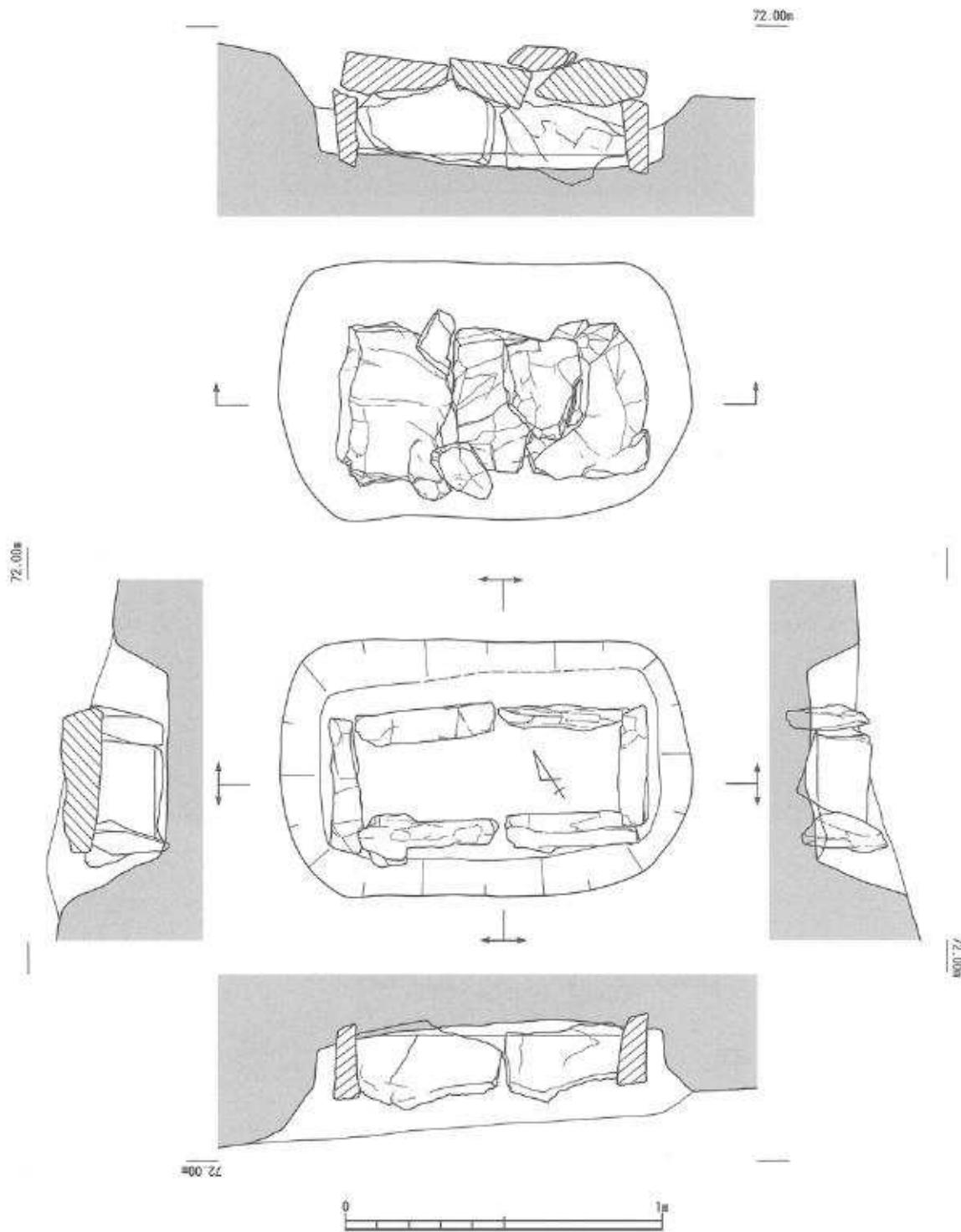
### 1. 12号石棺（第59図）

12号石棺は、標高72m付近の3号墳と4号墳の周溝の間に位置している。当初から墳丘は確認できず、調査後にも墳丘を画する溝が検出できなかったことから、無墳丘の可能性が高い。

埋葬施設は、小規模な箱式石棺である。墓壙は、長さ1.3m、幅0.8m、確認面から深さ0.3~0.2mの規模を持つ。壙底においては、変形の棺材を据え置くため、石の形に合わせた掘り込みを行っている。石棺は、東西方向に主軸をもち、北から58°西に振っている。棺材は、チャートで、加工痕はみられない。蓋石は、3枚の板石を配している。東側の隙間に比較的大きな石を1個、西側の隙間に小さな石2個で目地を塞いでいるが、粘土による目貼りはみられない。棺の側壁をなす側石・小口石は、前者は2枚ずつであるが、後者は1枚ずつ使用し、側石を小口石が挟み込んでいる。

棺の規模は、内法で長さ0.84m、東小口幅0.28m、西小口幅0.25m、また上端からの深さ0.2mを測る。頭位は、棺の構造から西と考えられる。

棺内・墓壙から遺物は出土しなかった。

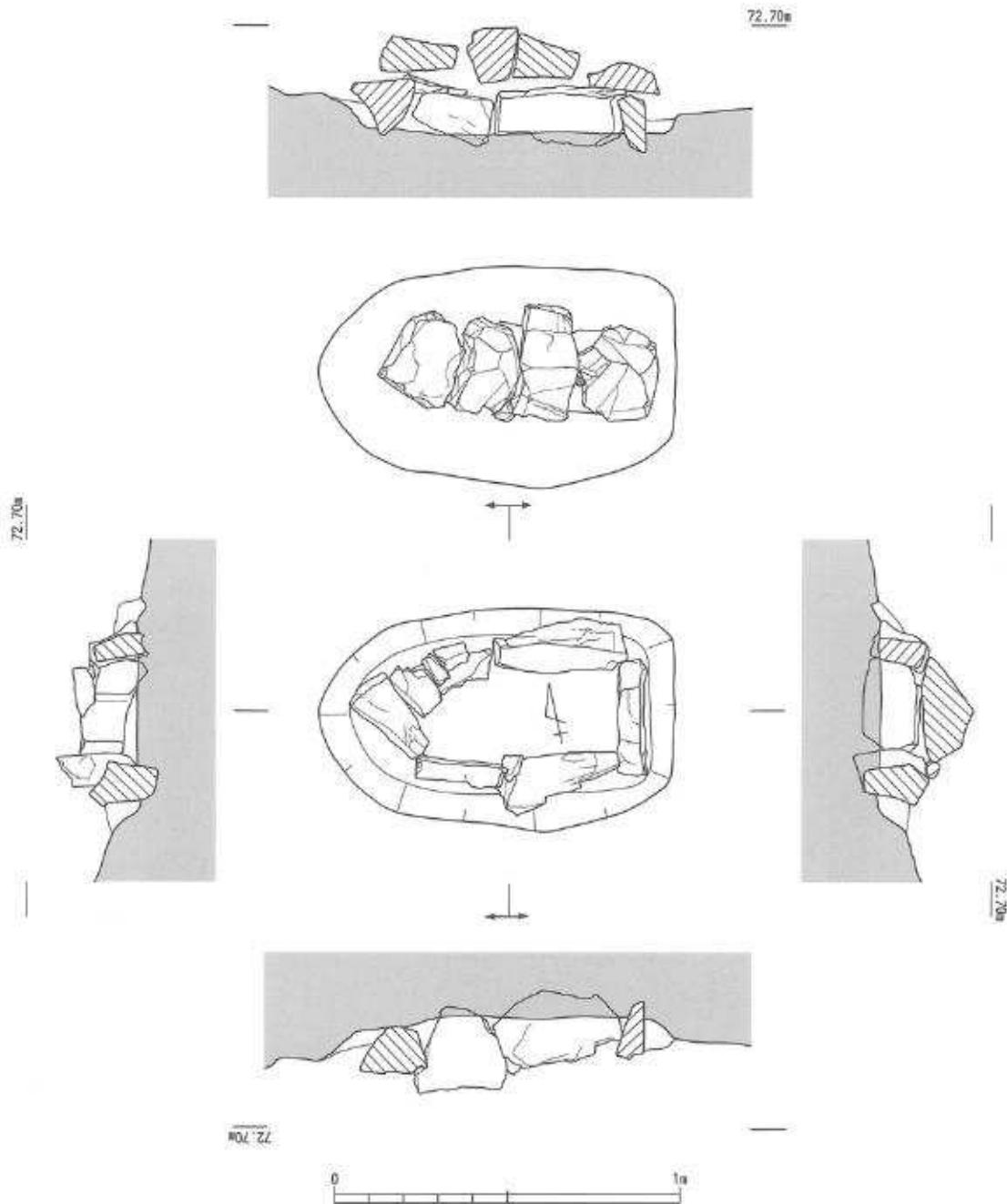


第59図 12号石棺

## 2. 13号石棺 (第60図)

13号石棺は、標高72.5m付近の1号墳の北側で4号墳の西側に位置している。当初から墳丘は確認できず、調査後にも墳丘を画する溝が検出できなかったことから、無墳丘の可能性が高い。

埋葬施設は、小規模な箱式石棺である。墓壙は、長さ1.03m、幅0.65mの西が尖った平面形で、確認面から深さ0.15~0.05mの規模を持つ。壙底においては、変形の棺材を据え置くため、石の形に合せた掘り込みを行っている。



第60図 13号石棺

石棺は、東西方向に主軸をもち、北から $79^{\circ}$ 西に振っている。棺材は、チャートで、加工痕はみられない。蓋石は、4枚の石を配しており、中央の2枚は厚みがある。蓋石の隙間には目地を塞ぐ石や、粘土による目貼りはみられない。棺の側壁をなす側石・小口石は、前者は2枚ずつであるが、後者は1枚ずつ使用している。西側小口は変形した厚みのある石を使っている。北西の側石の上には2個の小石を置いて隙間を埋めている。

棺の規模は、内法で長さ0.6m、東小口幅0.22m、西小口幅0.18m、また上端からの深さ0.16mを測る。頭位は、棺の構造から西と考えられる。

棺内・墓壙から遺物は出土しなかった。

## 第5章 高坂西遺跡 の調査

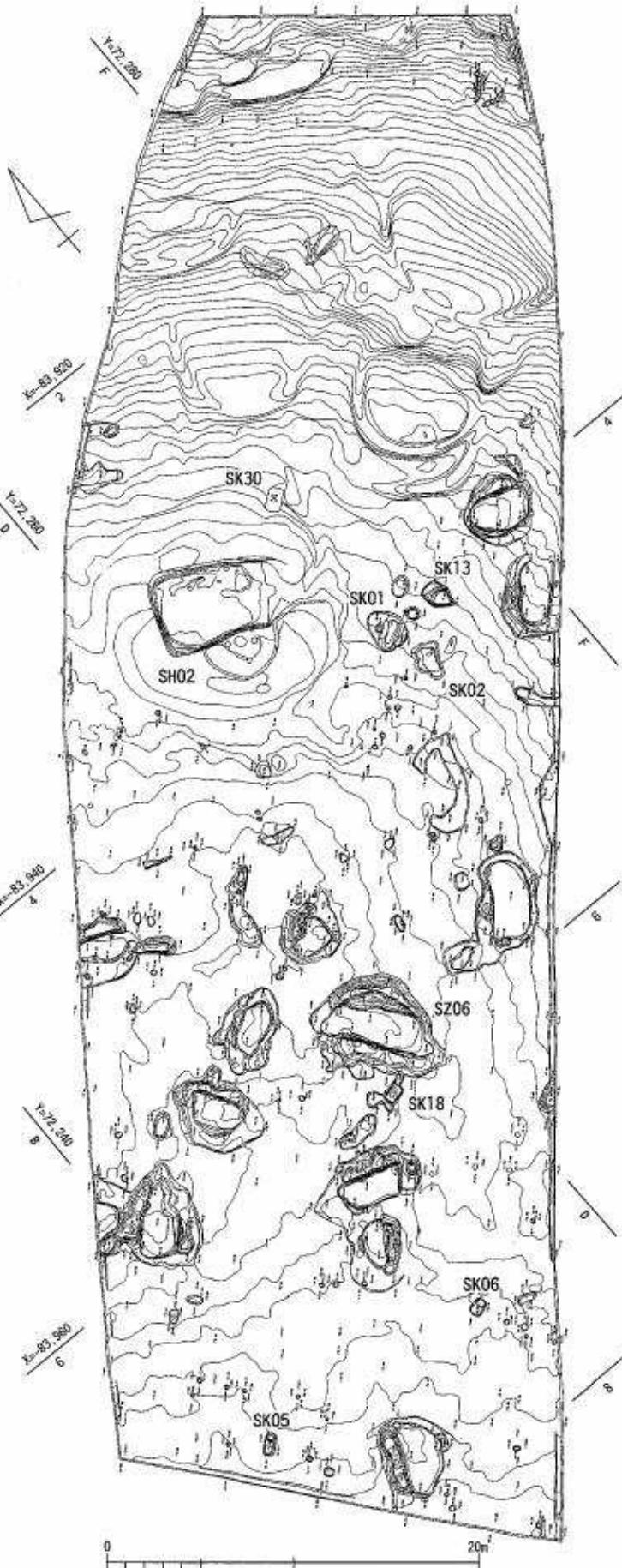
### 第1節 概要 (第61図)

高坂西遺跡は風倒木の痕跡と縄文時代の土坑・陥穴、弥生時代の竪穴建物、古墳時代の竪穴状の遺構を検出した。風倒木痕跡は15基を確認し、縄文土器が出土したものもある。陥穴は2基確認し、いずれも底部に5個の杭痕を残している。土坑は3基以上確認した。弥生時代の竪穴建物は高坂1号墳の下層に位置しており、埋葬施設の掘削により削平されており、2／3程度しか残存していない。

古墳時代の竪穴状の遺構は調査区北東端の斜面に位置しており、古墳時代の土器が出土しているが、時期の認定は難しい。

高坂1号墳の石室内部からは中世の土器がまとまって出土しており、石室が再利用されていたことが考えられる。

これらの、縄文・弥生時代における遺構配置図に見られる地形は古墳築造前の地形の様相を表しており、興味深い。



第61図 縄文・弥生時代遺構配置

## 第2節 繩文時代

縄文時代の遺構は遺跡の南西側を中心に、陥穴、土坑などの遺構と風倒木の痕跡を検出した。

### 1. 風倒木（第62図）

風倒木の痕跡は平坦面を中心には15基検出した。調査区の境界部分には風倒木と考えられる落ち込みや調査区内でも彌状の溝も存在することから、さらに増えると考えられる。

個別の遺構の詳細図は遺物が出土しているSZ06を代表して提示し、ほかの風倒木については全体図と一覧を掲げ、概略を述べる。風倒木からは縄文土器が出土しているものがあるが、厳密に言うと縄文時代以降である。

### 風倒木群（第63図・第2表）

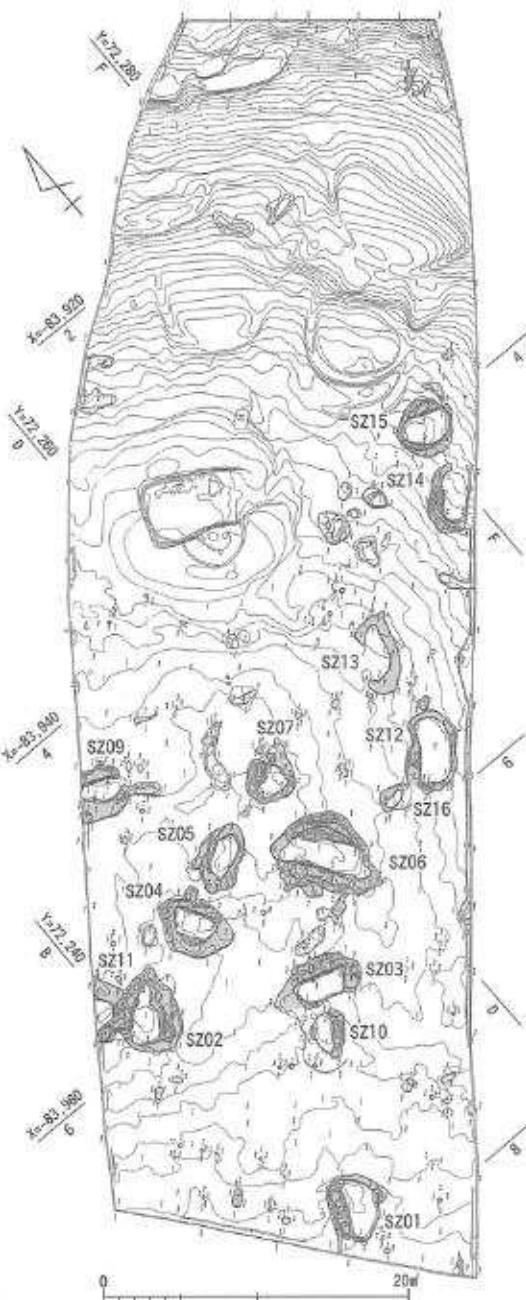
高坂西で検出した風倒木群は15基ある。この15基を遺構の規模や溝の深さ、方位などから木が倒れた方向を考えてみる。

風倒木の痕跡は中央部に高まりが存在し、周囲に梢円形をした溝が巡っている。この溝は木が倒れたときに木の根が持ち上がるなどして隙間ができ、この隙間に土が流入した痕跡が溝となっている。溝は長軸方向側が深く、短軸方向側が浅いものが一般的である。長軸方向の比較的深い溝も深さに差があり、一般的に風上側が深く、倒れた側は浅くなる。高坂西遺跡の風倒木はSZ10とSZ11とSZ12の3基を除いて、北を中心とする北西から北東の強い風によって、南を中心に南東から南西に向かって倒れていることがわかる。

風倒木の痕跡の規模は生えていた木の太さや根の張り具合に規定されると考えられる。長軸方向に長いものはSZ06の7.7mであり、短軸方向もSZ06の6.0mである。

溝の深さはSZ02の0.97mが一番深く、次いでSZ06の0.92mが深い。

以上のように、高坂西遺跡の風倒木の痕跡は北を中心とする強い風で大木が倒れた痕跡であると推定できる。



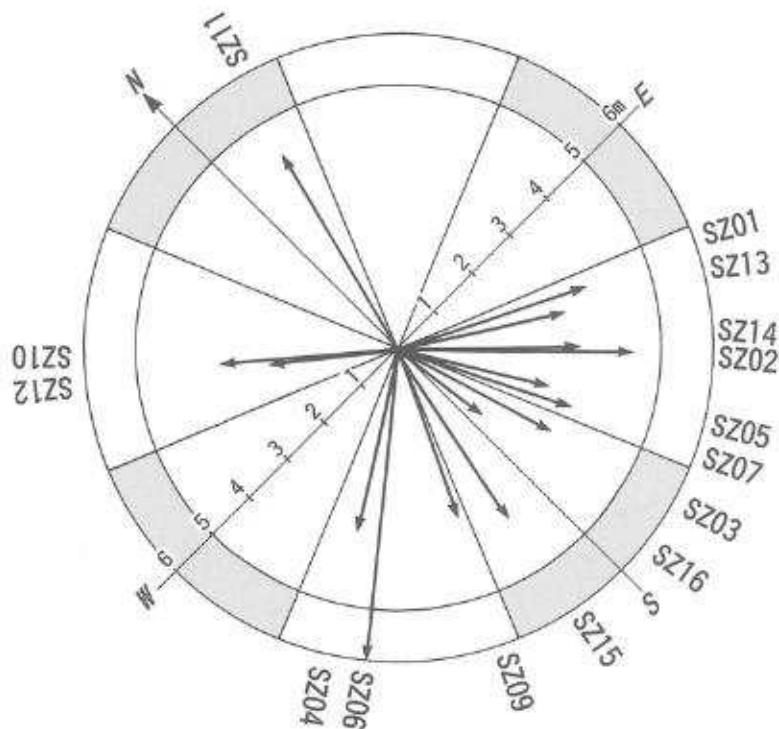
第62図 風倒木

## SZ06（第64図）

SZ06は高坂1号墳の南約25mの平坦面に存在する。短軸方向は長軸7.7m、短軸6.0mを測り、北東部がやや尖った楕円形を呈する。中央部は基盤層が盛り上がっており、周囲に落ち込みが巡っている。長辺側の側面に深い落ち込みが存在し、南西側で深さ0.89m、北東側で深さ0.92mを測る。北東側が深く、黒色土層は奥深くまで入り込んでいる。短辺側は浅く0.2m程度である。周囲の落ち込みの埋土は基盤層の明黄褐色土と黒色土層などが混在する様相が読み取れる。

平面形態・落ち込みの深さや断面形状などから考え、長辺の深い溝の存在する北東側からの風により、南西に倒れた風倒木の痕跡であると考えられる。

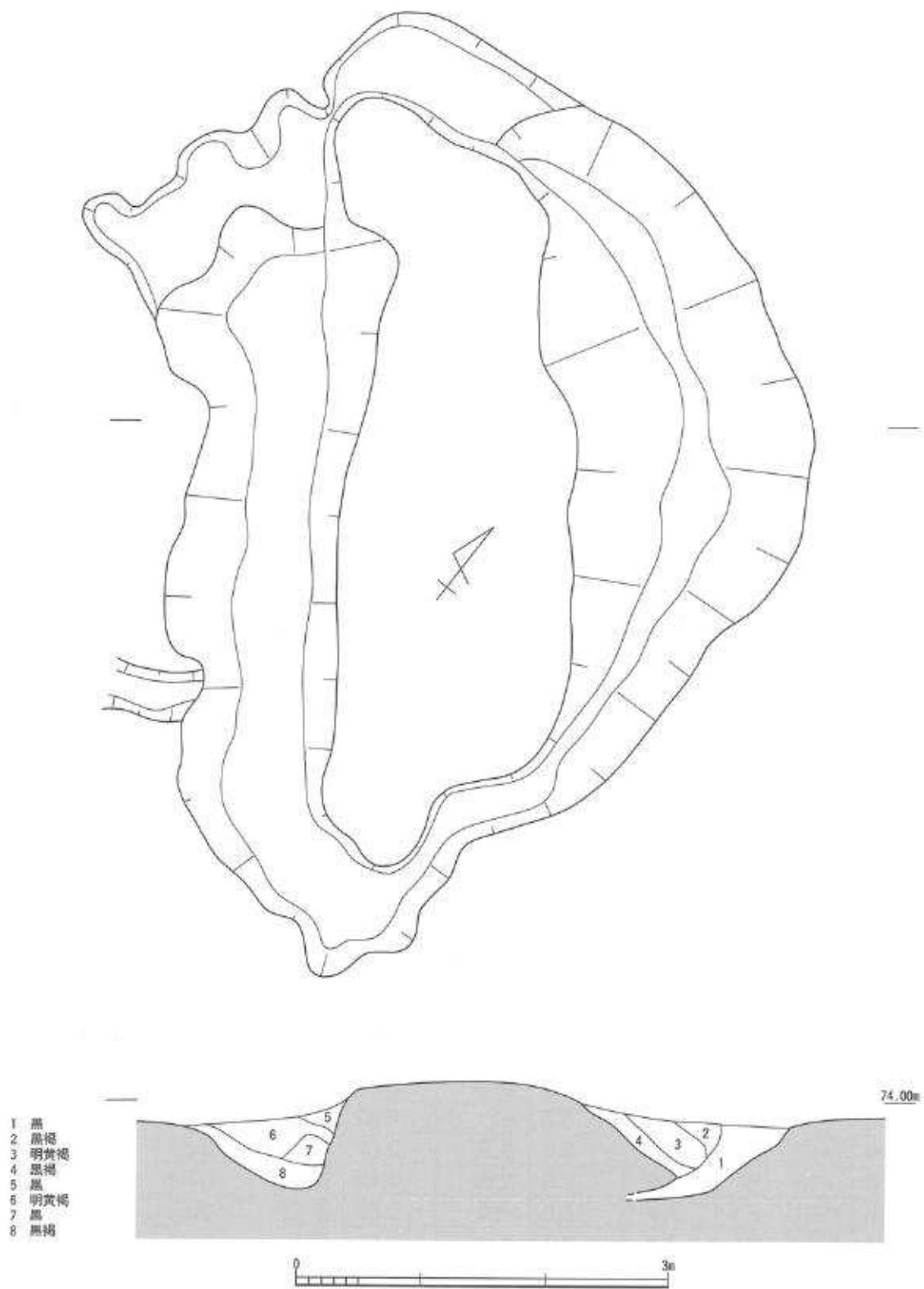
遺物は北東の落ち込みで多数の縄文土器の破片が出土地した。この遺物は木が倒れた時期を示すものではなく、この土器の時期前後以降に木は倒れたと考えられる。



第63図 風倒木の方位と規模

第2表 風倒木一覧

名称	短軸方向	長辺(m)	短辺(m)	深い側	深さ(m)	深い側	深さ(m)	倒れた方向
SZ01	N-63° -W	4.7	3.7	北西	0.88	南東	0.47	北西→南東
SZ02	N-46° -W	5.7	4.4	北西	0.97	南東	0.78	北西→南東
SZ03	N-16° -E	6.5	3.3	北	0.87	南	0.46	北→南
SZ04	N-58° -E	5.4	3.6	北東	0.61	南西	0.53	北東→南西
SZ05	N-31° -W	4.8	2.9	北西	0.49	南東	0.32	北西→南東
SZ06	N-51° -E	7.7	6.0	北東	0.92	南西	0.89	北東→南西
SZ07	N-26° -W	4.1	3.4	北西	0.82	南東	0.42	北西→南東
SZ09	N-26° -E	3.2+	3.4	北東	0.62	南西	0.25	北東→南西
SZ10	N-51° -W	3.4	2.5	南東	0.73	北西	0.31	南東→北西
SZ11	N-14° -E	2.8+	4.3	南	0.68	北	0.22	南→北
SZ12	N-50° -W	5.6	3.4	南東	0.47	北西	0.33	南東→北西
SZ13	N-57° -W	5.4	3.2	北西	0.09	南東	0.00	北西→南東
SZ14	N-45° -W	4.7	3.4	北西	0.59	南東	0.44	北西→南東
SZ15	N-12° -E	4.2	3.8	北	0.76	南	0.16	北→南
SZ16	N-7° -W	2.5	2.0	北	0.15	南	0.10	北→南



第64図 凤倒木SZ06

## 2. 陥穴 (第65図)

陥穴は2基検出した。

S K18

鳳倒木SZ06の南東側に接して位置し、標高は173.4mである。周囲には鳳倒木や浅い土坑が存在して

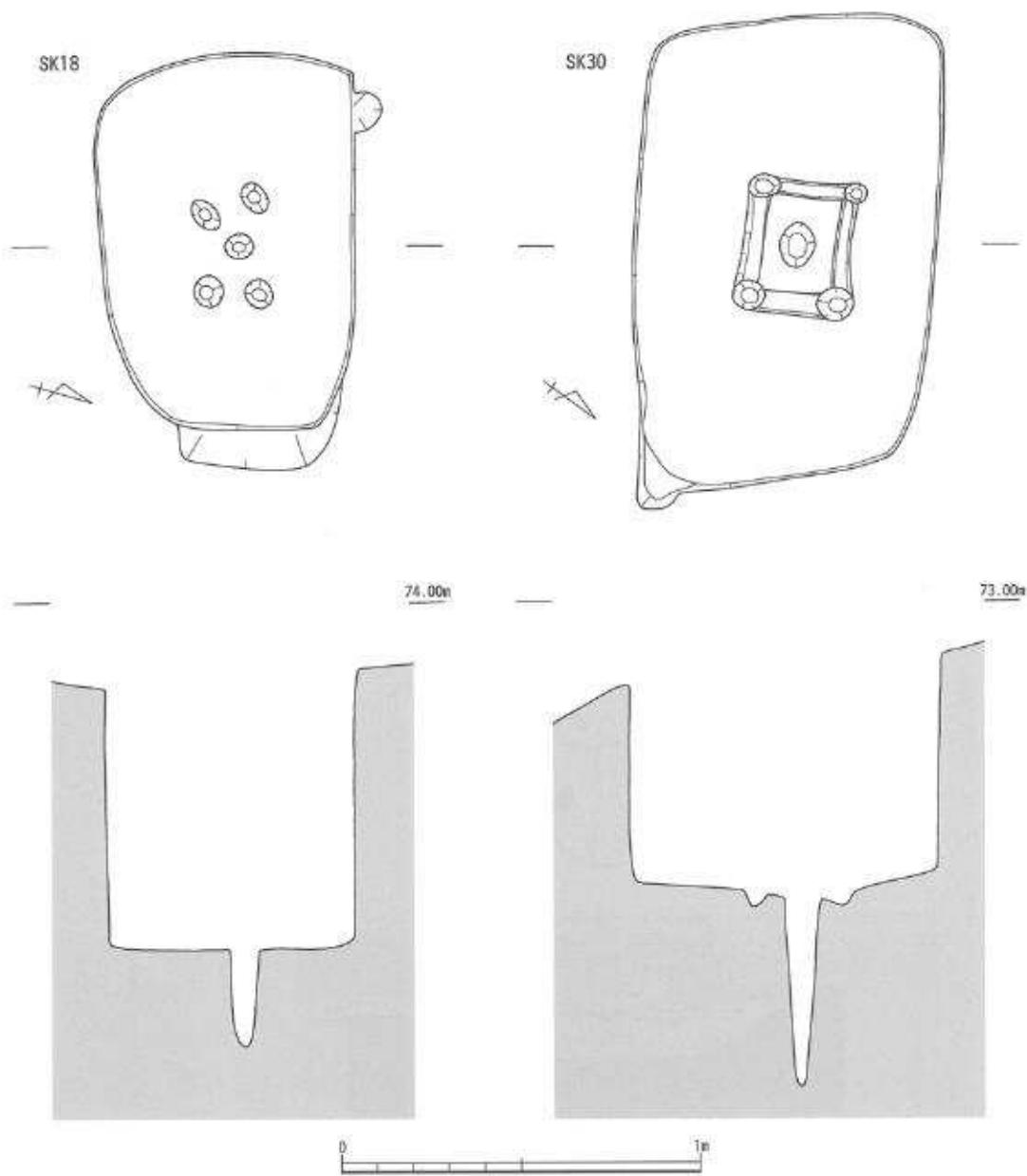
いるが同様な土坑は存在していない。

平面形は隅丸長方形で底面は平坦である。規模は長軸1.06m、短軸0.74mを測る。検出面からの深さは0.84mで、土坑の壁の法はほぼ垂直である。埋土はクロボクで自然に埋まった状況を示している。底面には径10cm弱の杭穴が5個あり、いずれも深さ30cm前後である。土坑内からは遺物は全く出土していない。土坑の形状、深さなどから、陥穴と思われる。

#### S K30

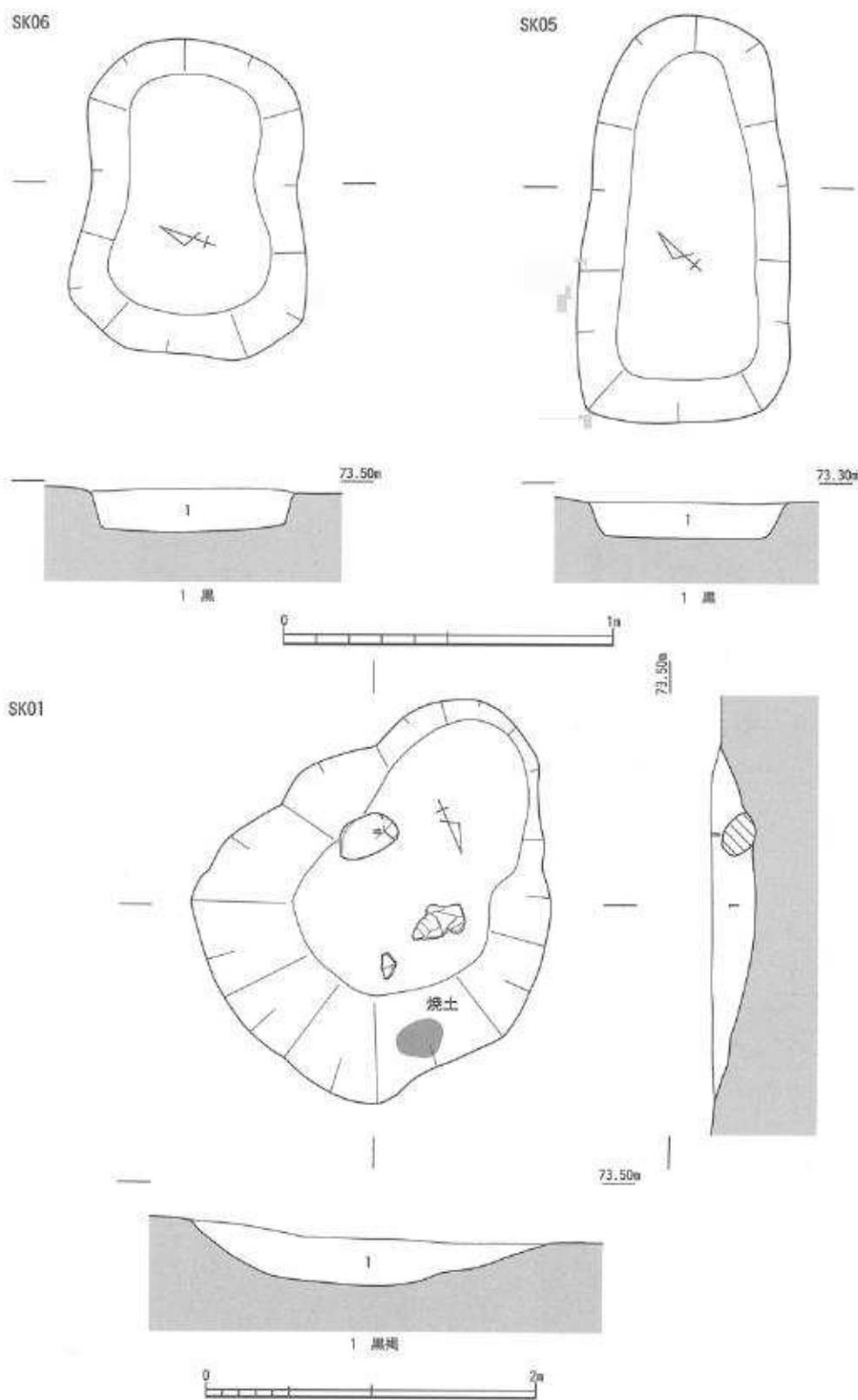
高坂1号墳の盛土を除去した後、検出した。石室の北側に位置している。標高は173.4mである。

平面形は隅丸長方形で底面は平坦である。規模は長軸1.3m、短軸0.84mを測る。検出面からの深さは0.68mで、土坑の壁の法はほぼ垂直である。埋土はクロボクで自然に埋まった状況を示している。底



第65図 陥穴

面には径10cm前後の杭穴が5個あり、周囲の4個を結ぶ浅い溝が掘られている。溝は幅5cm前後、深さ5cm前後である。杭穴はいずれも深さ50cm前後である。土坑内からは遺物は全く出土していない。土坑の形状、深さなどから、陥穴と思われる。



第66図 土坑

## 3. 土坑（第66図）

## SK01

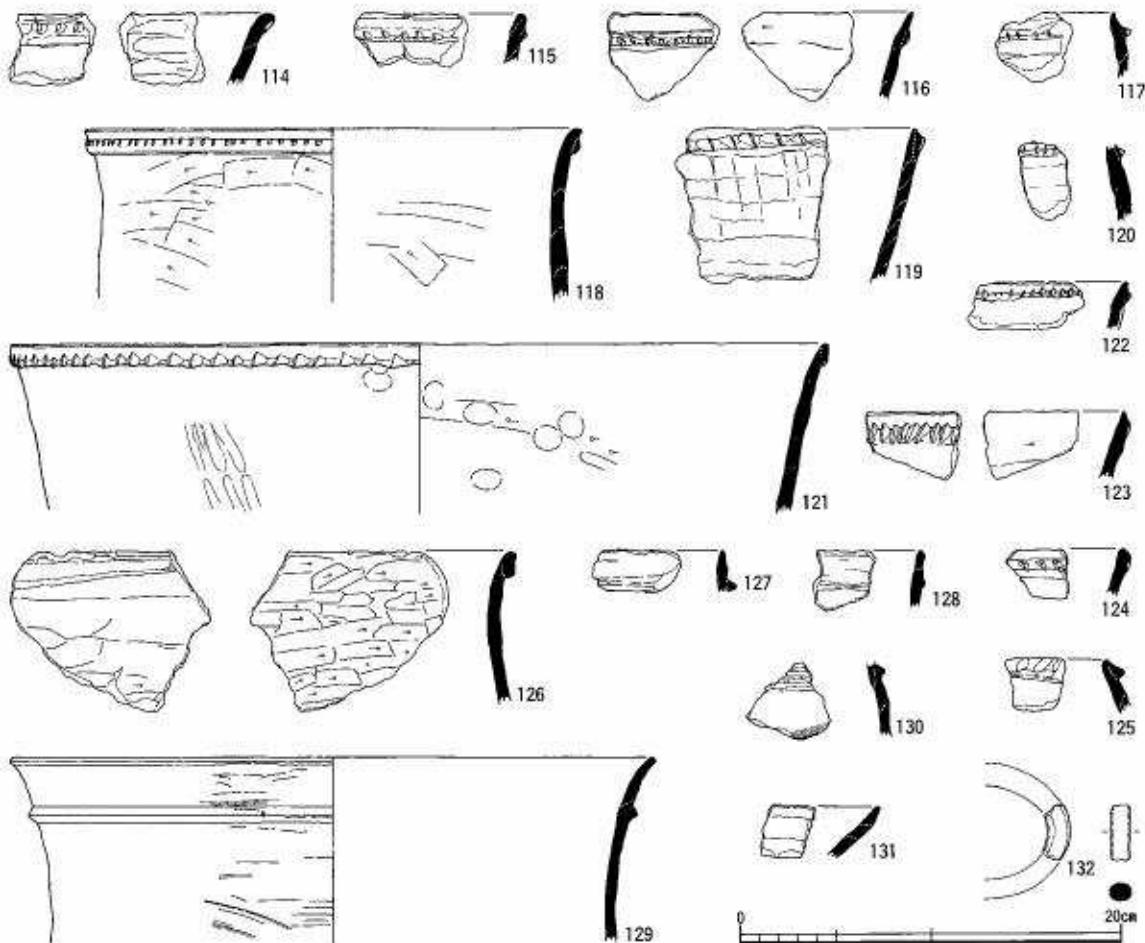
高坂1号墳の南東に位置しており、高坂1号墳の周溝掘削により上部が削平されていると考えられる。平面形は東西にやや長い不整な円形を呈している。検出面における規模は、東西2.5m、南北2.0m、深さ0.3mを測る。底は浅くくぼんでおり、人頭大の礫が出土した。北側の側面には火を受けて赤変している部分が存在する。底面には大型の土器片が貼り付いており、ほかに縄文晩期の土器片がまとまって出土した。

## SK05

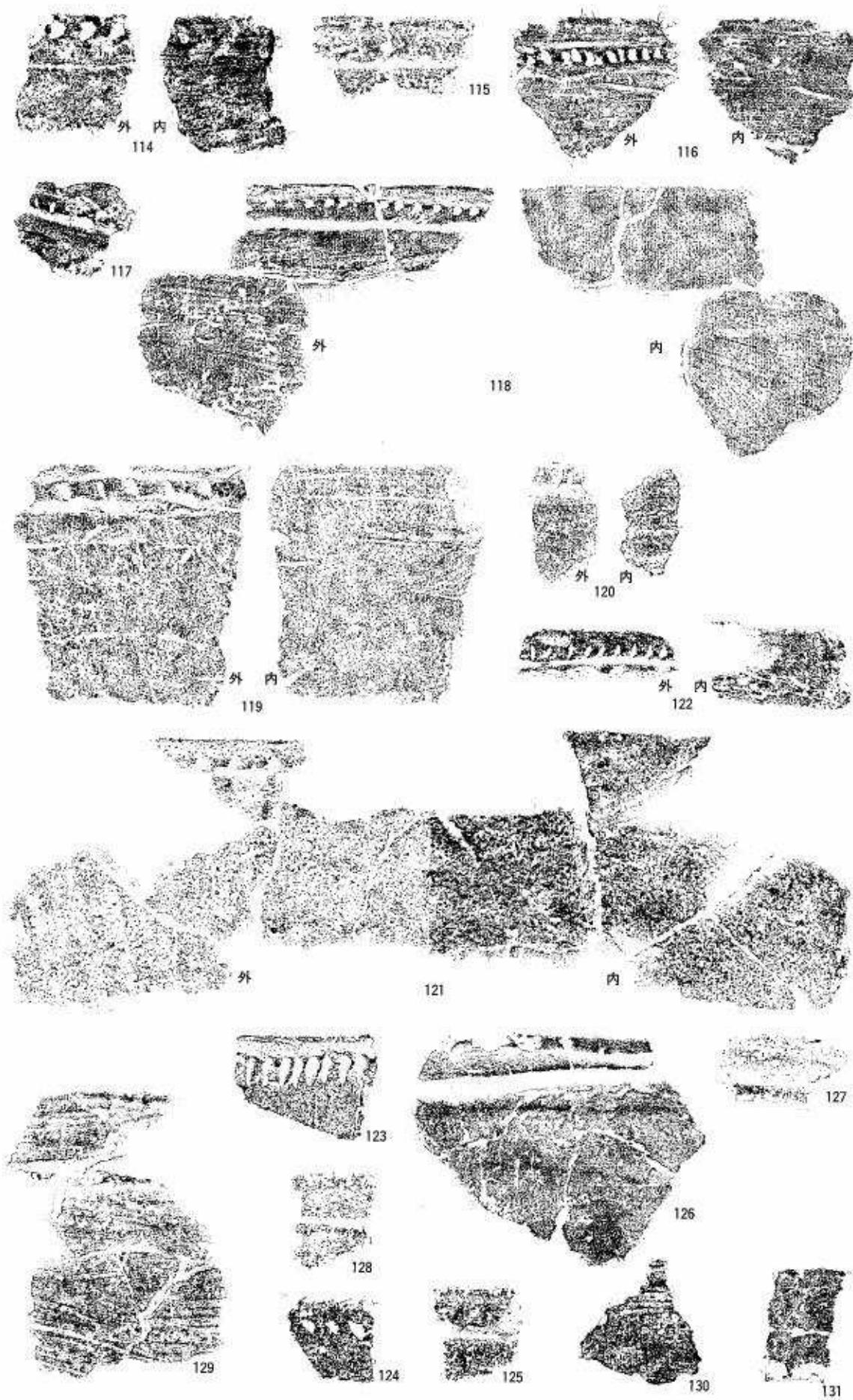
調査区の南西端、風倒木SZ01の北西に位置している。平面形は南北に長い、隅丸長方形を呈している。検出面における規模は、長さ1.25m、幅0.65m、深さ0.1mを測る。底は平坦である。埋土は黒色土で、遺物は出土していない。

## SK06

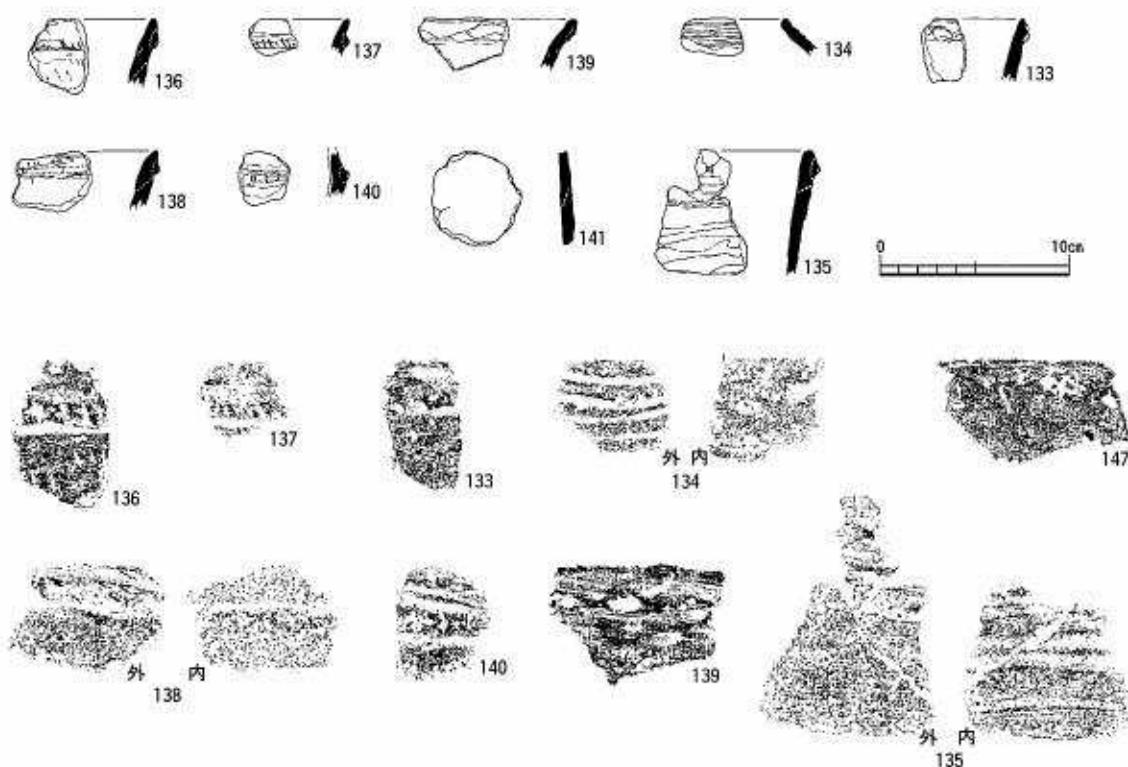
調査区の南端、風倒木SZ10の南に位置している。平面形は中央部がくびれた東西に長い、隅丸長方形を呈している。検出面における規模は、長さ0.88m、幅0.65m、深さ0.13mを測る。底は平坦である。埋土は黒色土で、遺物は出土していない。



第67図 土坑SK01 出土土器



第68図 土坑SK01 出土土器 拓影



第69図 繩文土器

## 4. 遺物（第67～69・72図）

SK01

繩文土器深鉢（114～130）、浅鉢（131）、土製品（132）がある。

繩文土器深鉢114は丸みをもつ口縁部をわずかに膨らませ、逆C形の刺突を加える。115・116・122は口縁直下の突帯に、D型の刻みを加えている。117は内傾する口縁部直下に突帯を貼り付け、刻みを加えている。118は直立気味に外反する口縁部直下に断面三角形の貼り付け突帯上に半裁竹管による逆C形の刺突を加える。外面は横方向のケズリが顕著である。119は直線的に開く口縁端部を突出させ、板状工具により刻みを加えている。外面は粘土紐接合痕が明瞭に残り、煤が付着している。120は端部が存在しないが、突帯上に刻みを加えている。121は大型の深鉢で外方に直線的に開く口縁端部直下に下膨れの断面三角形の突帯を貼り付け、D型の刻みを加えている。123は直線的に開く口縁端部をわずかに突出させ、D型の刻みを加えている。124は丸みをもつ口縁部をわずかに膨らませ、刻みを加えている。125は内傾する口縁端部外面に突帯を貼り付け、弱い刻みを加えている。126は口縁部直下に刻みのない断面三角形の突帯をもつ。内面は横方向のケズリが顕著である。127・128は口縁部下位に刻みのない断面三角形の突帯をもつ。129は口径が大きく、口縁部下位に刻みのない断面三角形の突帯をもつ。130は小片のため突帯の刻みの有無は不明である。

浅鉢131は大きく外傾する体部に直立気味の口縁端部が付く。外面は粘土紐積み上げ痕跡が残る。

土製品132は直径1cm前後の扁円形の断面をもつ橢円環状の土製品である。復原できる大きさから腕輪などが考えられる。

SK02

繩文土器深鉢133は外傾する口縁端部の直下に下側が膨らむ断面三角形の突帯を貼り付けている。

## その他

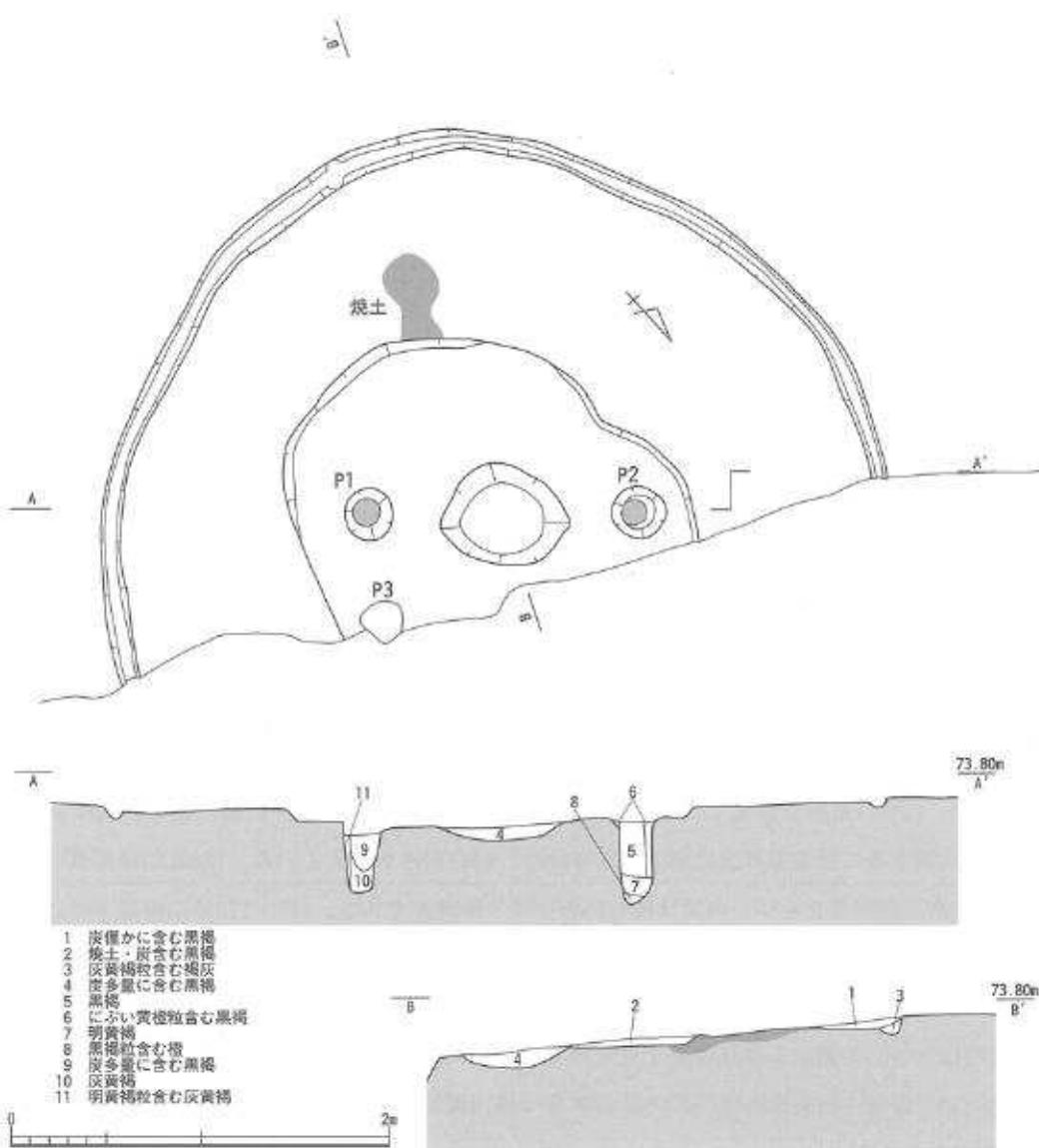
縄文土器深鉢（136～140）、土製品（141）、磨石（S 4）を図化し掲載した。

136・138は高坂2号墳から出土した。137・140・S4は高坂1号墳から出土した。139と土製品141は採集によるものである。しかし、いずれも縄文時代の遺構に伴うものではないが、縄文の遺物が比較的多く出土したSK01に比較的近い場所から出土している。

縄文土器深鉢136・137は口縁端部直下に下膨れの断面三角形の突帯を貼り付け、斜方向の刻みを加えている。138は口縁端部直下の断面三角形突帯上の刻みは小片のため不明である。139は口縁端部直下に突帯を貼り付け、横長の押圧を加えている。

土製品141は深鉢の一部を円形に打ち欠いて加工した土製円盤である。直径4.9cmを測る。

S4は砂岩製の磨石である。先端が尖った長い形状をしており、一部欠損している。断面は梢円形で、一面を磨っている。



第70図 積穴建物SH02

### 第3節 弥生時代

#### 1. SH02

##### 遺構（第70図）

SH02は高坂1号墳の盛土を除去した後、検出した竪穴建物である。北東側約1／3は高坂1号墳の石室掘形で削平されているが、平面形はほぼ円形で、規模は直径4.2mである。床面積は推定復原13.8m<sup>2</sup>である。

床面は二段になっており、中央部が一段低くなっている。外側の高床部の床面は検出面から0.05m前後深くなっている、中央部はさらに0.05m下がっている。中央部の床面の標高は73.55mである。外側の高床部の床面の一部で被熱赤色面を検出した。

屋内施設は周壁溝、柱穴、中央土坑を検出した。周壁溝は削平部分については不明であるが、全周している。幅は0.12m前後で、床面からの探さは0.05m前後を測る。柱穴は、P1とP2の2穴が主柱穴であり、柱穴間の距離は1.45mである。P3は動物による新しい掘削による穴であり、柱穴ではない。P1は掘形の直径0.27m、柱痕の直径0.14m、床面からの探さは0.38mである。P2は掘形の直径0.30m、柱痕の直径0.14m、床面からの探さは0.47mである。P2は一度、掘った掘形を埋め、深さ0.31mに調整している。

中央土坑はほぼ中央部に位置する。平面形は不整円形で、長軸方向0.75m、短軸方向0.55mで、探さは0.10mを測る。下層には炭化物が多く混じっている。

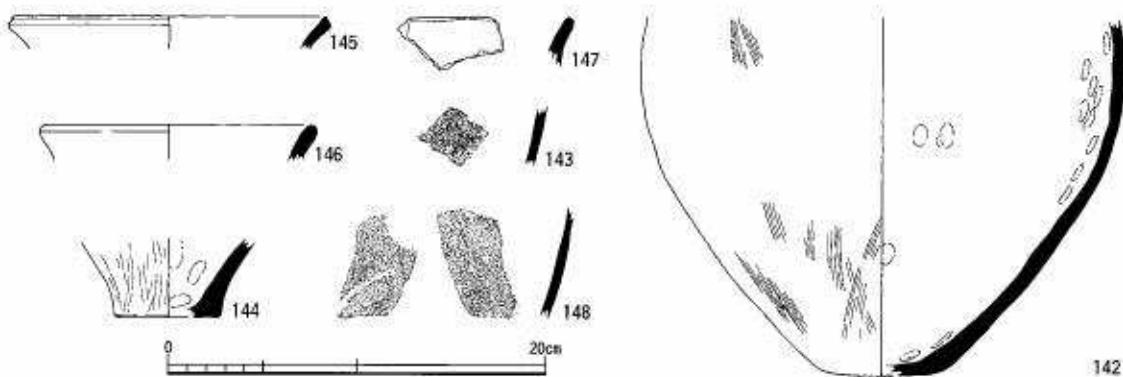
遺物は、床面で弥生土器の壺底部、甕胴部破片と石鎌が出土した。焼土の塊（169～171）も出土した。

##### 遺物（第69・70図）

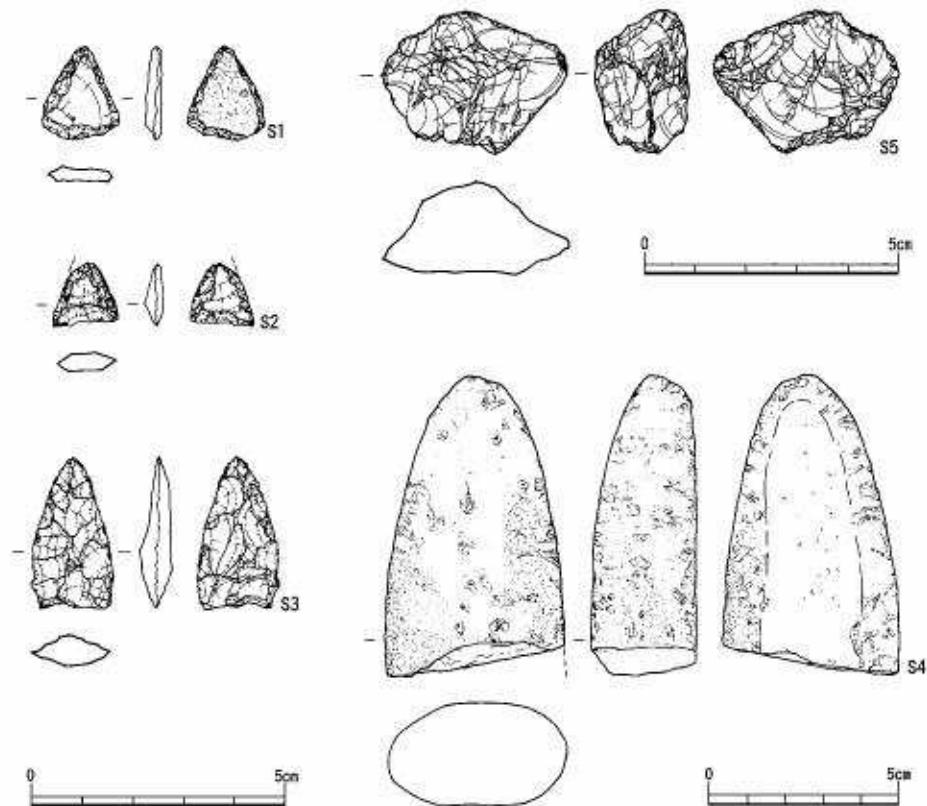
弥生土器（142・143）と石器（S2）がある。

弥生土器142は壺の胴部下半で、底部は丸底気味の平底である。表面の残りはあまり良くないが、外側は縦方向のハケ調整を行っている。弥生土器143は甕の胴部破片である。ハケによる調整を行っている。

石鎌S2はサヌカイト製の平基式の小型打製石鎌で、先端を欠いている。重さは0.54gである。



第71図 弥生土器



第72図 石器

## 2. その他

弥生土器（144～147）は144が2号墳、145～147が1号墳から出土した。しかし、いずれも弥生時代の遺構に伴うものではないが、弥生時代の遺構が存在するSH02に比較的近い場所から出土している。

弥生土器144は弥生土器甕の底部で、遺存状況はよくないが、外面は縦方向のミガキ調整を行っている。弥生土器145は甕の口縁部破片で、外反し、口縁端部に面を作っている。弥生土器146は壺の口縁部破片で、口縁端部を丸く仕上げている。

石鎌S1は1号墳の墳丘から出土した。サヌカイト製の平基式の打製石鎌で、片面に原面をもち、薄く作っている。縁辺の2次加工は最小限で、重さは0.93gである。石鎌S3は古墳時代の9号木棺から出土した。サヌカイト製の凹基式の大型打製石鎌で、重さは2.25gである。

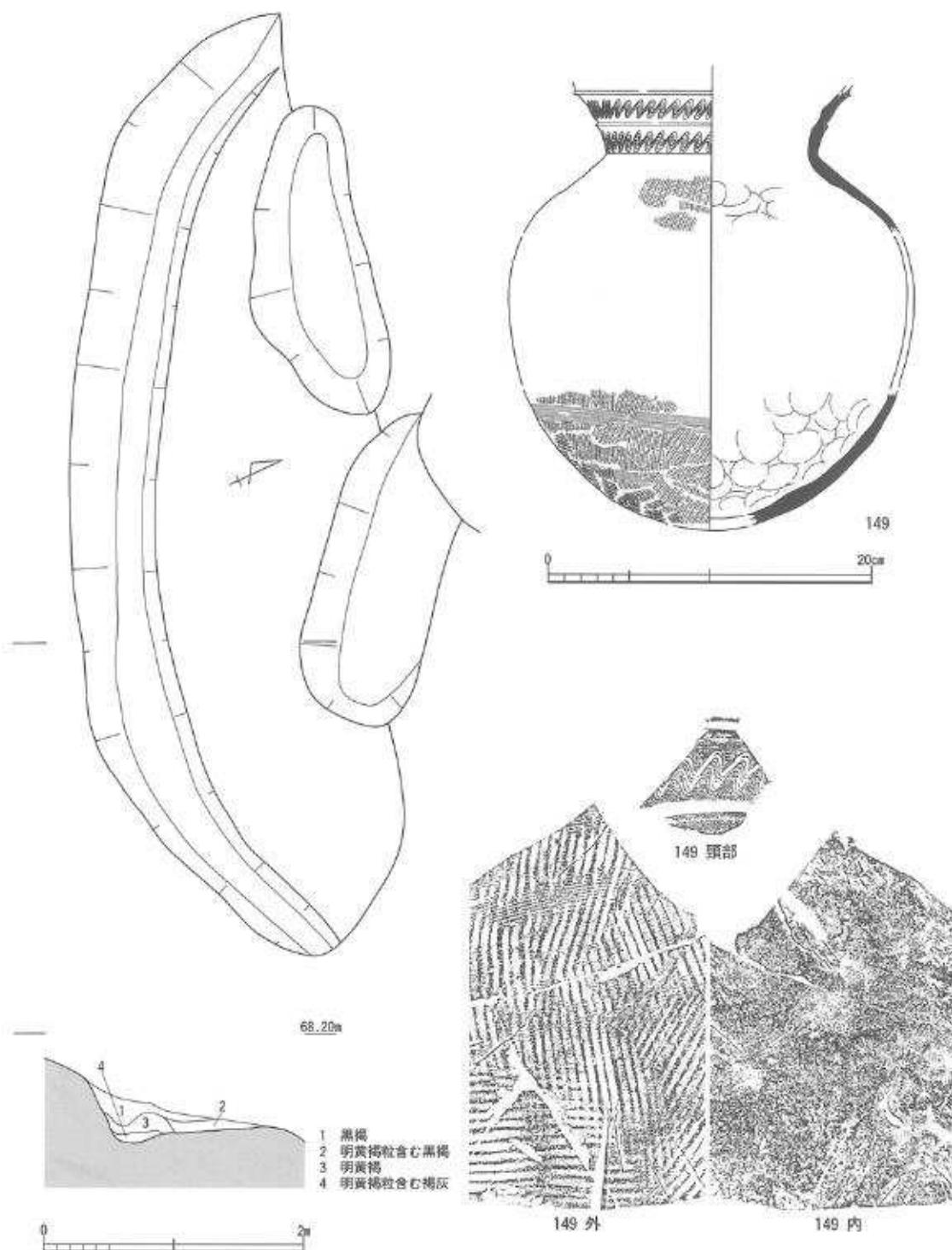
## 第4節 古墳時代

SX01（第73図）

### 遺構

8号埋葬施設の北側の斜面下に位置している。斜面のため北東側下部は削平されており、本来の形状は明らかではない。斜面を掘削して平坦面を築いている。斜面上方側に最大高さ0.4mの壁面をもち、壁際に幅約0.4m、深さ0.1m前後の溝が巡る。2箇所の楕円形の土坑あるいは搅乱が存在している。

住居跡の可能性が高いが、不明である。付近から須恵器壺が出土したが、この遺構に確実に伴うかどうかは不明である。



第73図 SX01遺構・遺物

## 遺物

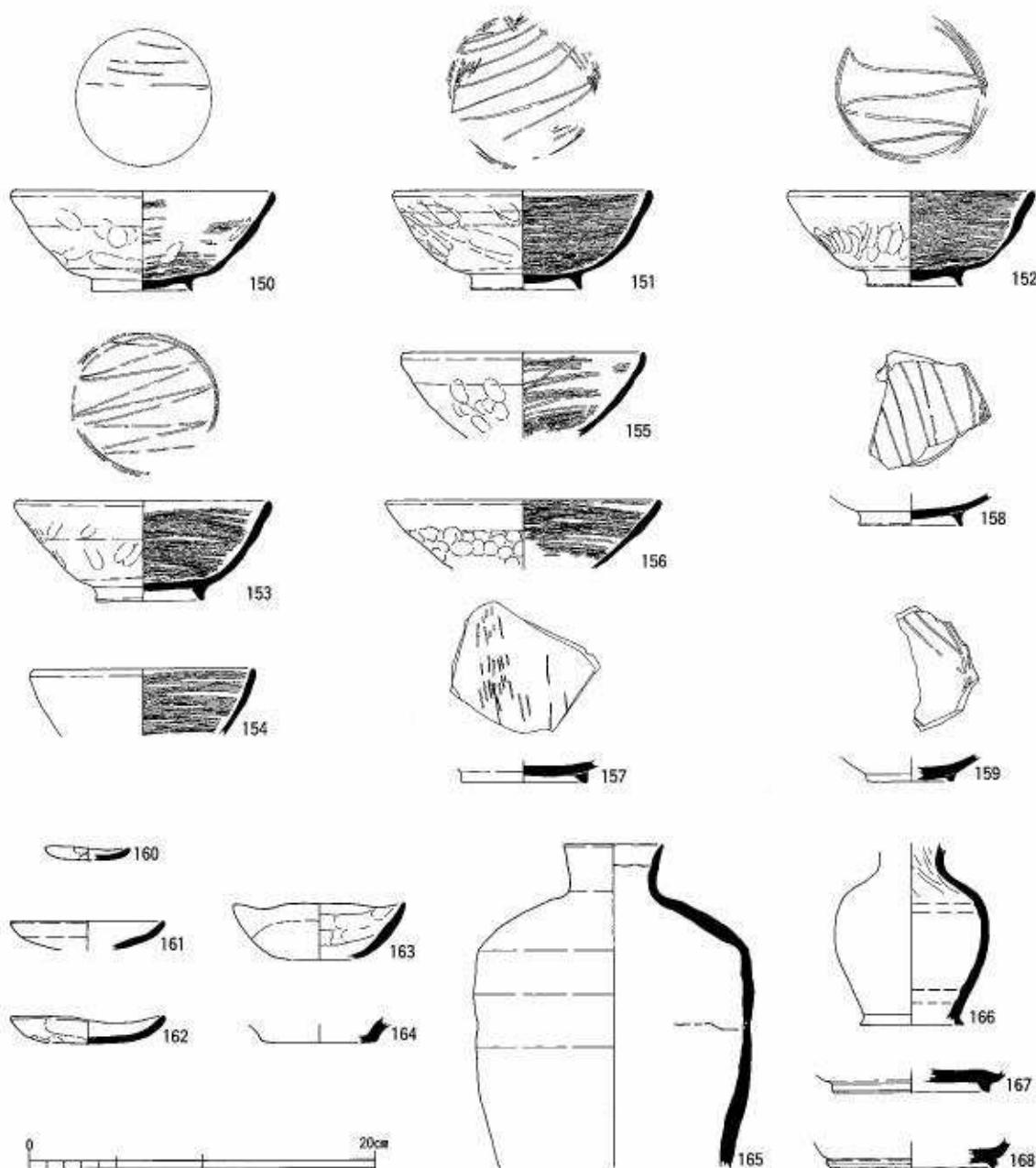
須恵器壺149は球形の体部に外反する頸部が付くが、口縁部を欠いている。体部外面は平行タタキで成形し、一部カキメ調整を行っている。内面は無文の当具の痕跡を残している。頸部は二段にわたって波状文を施している。

## 第5節 古代・中世 (第74図)

瓦器(150~159)は椀のみ出土している。口縁部は肥厚しており、腰部は極端に薄い。底部は、断面三角形の高台を貼り付けている。口径は13cm~15cm、器高は5.8cm前後を測る。底部径は5.4cm~7.4cm前後を測る。体部内面は細かい平行ミガキを施しており、底部内面にはジグザグのミガキを施している。口縁部外面はヨコナデ調整、外面にはミガキはなく、指押さえ調整を施している。

土師器皿160~163は、口径4.7cmの160と口径8.8cmの161・162と深めの163がある。いずれも強いナデによって仕上げられている。土師器壊164は底部の一部であるが、輶轆により成形している。

須恵器壺165・166は短い口頸部をもち肩が張った165と頸部を絞って成形している166がある。須恵器壊167・168底部のみで高台が貼り付けられている。



第74図 古代・中世の遺物

## 第6章 自然科学的調査

### 第1節 高坂古墳群の電気探査

#### 1. はじめに

樹木の伐採を終えた調査現場は、横穴式石室を埋葬施設とする1号墳のみが認められた。1号墳は段丘上の平坦地に位置し、段丘は1号墳の東側墳裾から徐々に北東方向に下がっている。1号墳の約15m東の斜面に小さい高まりが認められ別の古墳の存在が推測された。しかし、目視では斜面上には他に古墳と見られる高まりは認められなかった。よって、物理探査により新たな古墳や埋葬施設が推測出来ないかとの考えで、電気探査を実施することになった。

#### 2. 探査の方法と測定範囲

電気探査で地中に石室などの構造物があればそこは周囲の土壌よりも電気抵抗値は高いであろうし、墓壙などの穴があれば水分を含みやすく抵抗値は低いと考えたのである。

測定にはイギリスGeoscan Research社製のRM15電気抵抗測定器(Resistance Meter)を使用し測定法には4本の電極棒を等間隔に配置するウェンナー法を採用した。測定範囲は発掘調査区の南隅を起点とし1号墳の墳裾を一部含め調査区の横断方向に18.5m、北東斜面方向に18m（巻き尺を地形の傾斜に合わせたので斜距離となった。地形図と成果図とでは距離表示に違いが生じている）を測定した。対象探査深度は1mとし移動電極の測定間隔は横方向が0.5m、縦方向は1mとしている（測定順の関係で横方向は起点から負の距離となっている）。

成果図（図版8）は、測定数値（見かけ比抵抗）の高数値から低数値を暖色から寒色に色分けし、測定区内の相対的な見かけ比抵抗値を平面的に表現している。さらに等比抵抗線を加えている。

#### 3. 探査成果と解析

成果図（図版8）では注意を引く箇所にアルファベットを付けている。次に、発掘調査により判明した遺構（古墳）に当たる箇所は、古墳番号数値と墳丘を白の波線で囲み表している。

Aは測定区の西側辺に沿って直線状に延びている。これは伐採された樹木を調査区外に搬出するため斜面を登ったパワーショベルの片方のキャタピラーの痕である。地表面を踏み固めた結果であろう。

Aを除いて抵抗の高い所や低い箇所あるいは等比抵抗線が密になっている箇所を探すとB・CとDが挙げられる。Bは中央のやや東側に抵抗の高い箇所が広がり、周りをそれよりやや抵抗値の低い数値が囲っている。CはBほどではないが、やや抵抗の高い一つの纏りとして捉えることが出来る。反対にDは抵抗の低い箇所と捉えられる。

Bは調査前から古墳と推定した箇所であり、その墳丘であろう。比抵抗の高い部分は電気抵抗の高い物質、例えば石などを用いた埋葬施設と推測される。墳丘と推測した中のEに比抵抗の低い箇所がある。土坑が存在する可能性がある。

CもBほど明確ではないが同じような比抵抗値を持つ土壤の固まりとすると古墳々丘と推測される。中央部にやや抵抗の高い箇所があり、埋葬施設を表しているかもしれない。

Dは測定区内で一番電気抵抗の低い箇所である。一般的には大きな窪みと推測されるが、BもしくはCの周溝によるものであろうか。

#### 4. おわりに

以上が発掘調査前に探査成果から推測した地中の状況である。調査後、各古墳の位置を探査成果図に加えたのが白色波線である。探査での推測と発掘結果とがほぼ合ったものは、2号墳のみである。

2号墳の埋葬施設は2基の木棺であった。棺台として石が使用されているので、中央部に電気抵抗の高い反応が表れたと考えられる。しかし、個々の木棺の掘形を判別することは出来なかった。墳丘内に盗掘坑があり探査でEとした箇所がそれに当たるのである。

探査でCとした箇所を古墳とその埋葬施設と推定したが、詳細に地形図でその位置を検討すると、近くに5号墳が存在するがやや西にずれている。調査担当者と検討した結果、Aと同様にパワーショベルが走行した痕ではないかとの結論になった。

探査では判読出来なかった古墳に3・4・5号墳がある。3号墳の位置を注意して成果図で見るとやはり抵抗の高い縦状の箇所である。さらに周囲を抵抗の低い箇所が巡っていることも解る。4号墳や5号墳はDと判読した箇所に近い。大きな窪み又は周溝と考えたが、全く異なった結果となった。

探査区内には他に3号墳の周囲に木棺墓や5号墳の北に7号墳などが調査によって検出されている。今回の探査では全くそれらを判読することが出来なかった。当初の探査目的を達することが出来なかつた。その原因として以下のことが考えられる。

- ①遺跡の覆土が薄く遺構は浅かったのに探査対象深度を1mとした。
- ②移動電極間隔が縦方向に1mとした。
- ①については、必要以上に深い箇所を探ってしまった可能性がある。0.5mや0.75mなどと深い深度からの複数の探査深度設定が必要であった。②は木棺墓とか石棺墓など幅の狭い遺構に対して測定間隔が広かつた。より詳細にデータを得るには移動電極間隔を対象とする遺構幅よりもさらに短く、細かくする必要があった。

高坂古墳群の探査結果を踏まえ、今後の探査作業の反省としたい。



第75図 電気探査の状況

## 第2節 高坂古墳群出土須恵器の蛍光X線分析

鹿児島国際大学

三辻利一

## 1. はじめに

6世紀代に入ると、須恵器生産は地方にも広がり、少数ではあるが須恵器窯跡が各地で発見されている。しかし、これまでの分析データによると、地方の古墳からは地元産の須恵器は検出されるが、同時に、当時の最大の須恵器生産地であった和泉陶邑産の須恵器も検出される場合も多い。今回は丹波市市島町にある高坂古墳群から出土した須恵器の蛍光X線分析のデータと同じ旧氷上郡内の須恵器窯である南1号窯跡から出土した須恵器の分析データと比較した結果について報告する。

## 2. 試料処理法と分析法

須恵器片試料は表面を手動式研磨機で研磨して付着物を除去したのち、タンクステンカーバイド製乳鉢の中で100メッシュ以下に粉砕した。粉末試料は塩化ビニル製リングを枠にして、10トンの圧力をかけてプレスし、内径20mm、厚さ5mmの錠剤試料を作成し、蛍光X線分析用試料とした。

使用した蛍光X線分析装置は理学電機製RIX2100（波長分散型）で完全自動式の装置である。使用したX線管球はRh管球（3.0kW）である。使用した電圧、電流は50kV、50mAであった。測定元素はNa、K、Ca、Fe、Rb、Srの6元素である。

定量分析のための標準試料は岩石標準試料、JG-1である。分析値はJG-1の対応する元素の蛍光X線強度を使って標準化した値で表示した。

表3 高坂古墳群出土須恵器の分析データ

資料No.	報告No.	出土遺構	種別	器種	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na	D <sup>2</sup> (褐色)	D <sup>2</sup> (金ヶ崎)	产地推定
T-01	3	1号墳	須恵器	环蓋	0.373	0.111	2.29	0.540	0.230	0.062	4.7	27.0	陶邑
T-02	4	1号墳	須恵器	环蓋	0.343	0.044	2.62	0.488	0.246	0.139	5.5	25.6	陶邑
T-03	8	1号墳	須恵器	环蓋	0.427	0.077	1.89	0.637	0.253	0.073	1.8	1.9	不定
T-04	17	1号墳	須恵器	环身	0.239	0.090	1.62	0.477	0.253	0.073	18.2	6.4	金ヶ崎
T-05	21	1号墳	須恵器	环身	0.352	0.050	2.45	0.503	0.266	0.119	5.6	31.5	陶邑
T-06	20	1号墳	須恵器	环身	0.338	0.061	2.44	0.422	0.197	0.026	3.9	4.5	不定
T-07	25	1号墳	須恵器	环身	0.304	0.059	2.20	0.363	0.219	0.089	7.5	16.0	陶邑
T-08	28	1号墳	須恵器	环身	0.578	0.031	2.37	0.733	0.161	0.118	20.7	25.7	不明
T-09	26	1号墳	須恵器	环身	0.438	0.022	3.16	0.496	0.119	0.041	7.8	15.3	陶邑
T-10	35	1号墳	須恵器	有蓋高环	0.225	0.265	4.24	0.217	0.343	0.160	58.0	433	不明
T-11	37	1号墳	須恵器	高环湖	0.243	0.093	2.25	0.348	0.203	0.050	14.9	22.1	不明
T-12	41	1号墳	須恵器	短頸壺	0.223	0.128	2.02	0.277	0.383	0.140	35.2	133	不明
T-13	44	1号墳	須恵器	壺	0.198	0.049	2.13	0.291	0.093	0.013	18.4	27.8	不明
T-14	43	1号墳	須恵器	直口壺	0.252	0.055	3.04	0.311	0.139	0.043	12.0	13.8	不明
T-15	42	1号墳	須恵器	壺	0.250	0.125	2.22	0.373	0.333	0.121	21.6	57.9	不明
T-16	54	1号墳	須恵器	子持器合	0.351	0.115	2.28	0.529	0.238	0.062	5.9	28.0	陶邑
T-17	62	1号墳	須恵器	提瓶	0.294	0.342	2.50	0.516	0.565	0.143	62.0	511	不明
T-18	61	1号墳	須恵器	提瓶	0.354	0.077	2.29	0.466	0.292	0.247	5.0	30.2	陶邑
T-19	59	1号墳	須恵器	提瓶	0.510	0.106	1.95	0.692	0.312	0.172	2.1	9.6	不定
T-20	60	1号墳	須恵器	提瓶	0.292	0.116	2.42	0.469	0.254	0.083	10.8	24.5	不明
T-21	63	1号墳	須恵器	提瓶	0.327	0.068	2.10	0.510	0.342	0.154	14.8	80.5	不明
T-22	64	1号墳	須恵器	横瓶	0.423	0.097	1.75	0.650	0.276	0.121	2.2	5.2	不定
T-23	66	1号墳	須恵器	壺	0.249	0.056	1.99	0.373	0.218	0.035	13.3	11.8	不明
T-24	67	1号墳	須恵器	短頸壺	0.505	0.063	1.66	0.794	0.260	0.095	8.0	16.2	陶邑
T-25	68	1号墳	土師器	短頸壺	0.353	0.030	1.85	0.463	0.198	0.059	3.7	16.3	
T-26	69	1号墳	須恵器	甕	0.172	0.044	2.12	0.409	0.172	0.061	24.6	2.1	金ヶ崎
T-27	73	1号墳	須恵器	甕	0.305	0.072	2.06	0.493	0.228	0.083	7.0	1.3	不定
T-28	74	1号墳	須恵器	甕	0.188	0.103	2.55	0.376	0.302	0.085	32.0	35.0	不明
T-29	70	1号墳	須恵器	甕	0.412	0.098	1.58	0.662	0.286	0.120	3.2	6.2	不定
T-30	71	1号墳	須恵器	甕	0.234	0.060	2.27	0.431	0.211	0.081	15.4	2.3	金ヶ崎
T-31	80	2号墳	須恵器	环身	0.591	0.113	1.86	0.859	0.317	0.271	12.3	16.8	不明
T-32	85	2号墳	須恵器	短頸壺蓋	0.367	0.024	1.52	0.628	0.176	0.058	5.6	19.7	陶邑
T-33	86	2号墳	須恵器	短頸壺	0.313	0.015	1.54	0.572	0.150	0.039	7.6	21.1	陶邑
T-34	87	2号墳	須恵器	短頸壺	0.332	0.070	2.23	0.522	0.345	0.149	14.4	78.5	不明
T-35	102	6号墳	須恵器	甕	0.325	0.105	2.24	0.559	0.283	0.151	8.3	9.8	不定
T-36	108	7号墳	須恵器	环身	0.393	0.101	2.49	0.535	0.311	0.269	2.0	20.6	陶邑
T-37	149	SH01	須恵器	甕	0.224	0.088	2.38	0.326	0.314	0.120	26.5	66.7	不明
T-38	166	1号墳	須恵器	甕	0.491	0.079	1.95	0.719	0.361	0.188	5.6	54.5	陶邑
T-39	150	1号墳	瓦器	椀	0.336	0.056	4.26	0.452	0.130	0.022	6.0	19.0	

### 3. 分析結果

分析値は第3表にまとめてある。このデータに基づいて作成したK-Ca、Rb-Srの両分布図を第76図に示す。多くの試料はまとまって集団を形成しており、同じところで製作された須恵器であることを示唆している。しかし、この中でNo.10、12、17の3点の試料はCa、Sr量が多く、集団からはずれて分布しており、別産地の須恵器である。また、土師器と瓦器が1点ずつ含まれているが、これらも多くの須恵器と類似した胎土をもつことがわかる。

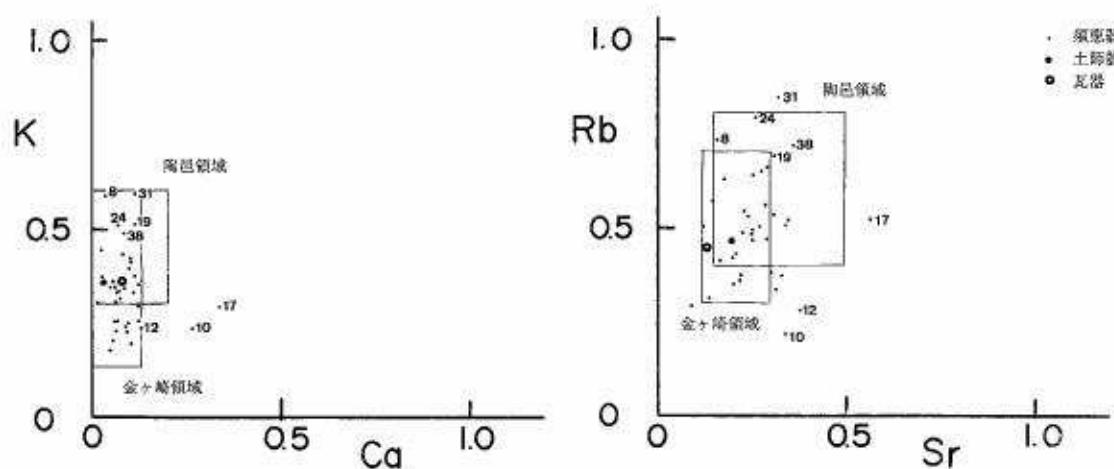
さて、問題は両分布図で集団をなして分布した試料が地元、氷上郡内の窯跡出土須恵器の胎土と同じであるかどうかである。同じであれば地元産の須恵器であると判断される。そのために、氷上郡島町にある南1号窯跡から出土した須恵器の両分布図を第77図に示す。試料は窯跡出土の須恵器としてよくまとまって分布することがわかる。殆どの試料を包含するようにして、南領域を描いてみた。この領域は今回分析した高坂古墳群の殆どの須恵器試料の分布位置からはずれることは第76・77図を比較すればよくわかる。同様に、同じ鴨庄窯跡群の須恵器窯である上牧7、8号窯跡出土須恵器の分布位置からもずれた。上牧7、8号窯の須恵器は南領域の少し右側にずれて分布し、高坂古墳群の須恵器の分布位置とはさらに遠くずれることになる。したがって、高坂古墳群の須恵器は地元、鴨庄窯群の製品ではないと判断された。外部地域からの搬入品である。外部地域での产地探しが始まった。

まず、兵庫県内の6世紀代の窯跡出土須恵器と比較してみた。揖保郡御津町の碇岩朝地窯、さらに、龍野市中井鴨池窯の須恵器が比較されたが、Rb-Sr分布図では大きくずれて分布し、これらの窯の須恵器には全く対応しないことがわかった。これらの窯も高坂古墳群の須恵器の产地候補からはずされることになった。

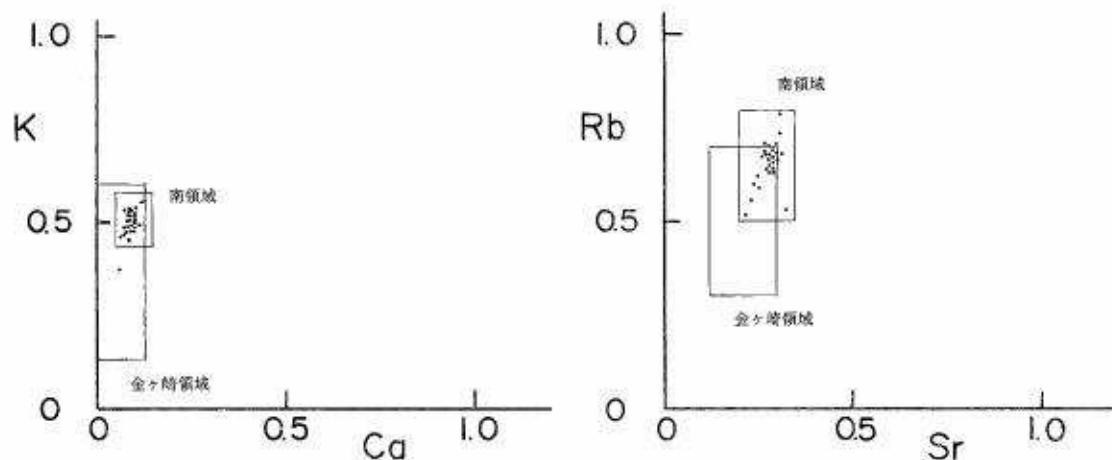
第78図には、もう一つの产地候補である加古川下流域にある金ヶ崎窯跡出土須恵器の両分布図を示す。この窯の製品の特徴はCa、Sr量が少ないという点にある。ずっと遅れて操業に入る魚住窯跡群の須恵器も同じ化学的特徴をもつ。ただ、金ヶ崎窯の試料の分布をみると、KとRbはかなり広い範囲にわたって分布するという特徴をもつ点が魚住窯群の製品とは異なる。さらに、もう一つの特徴はNa量が少ないことである。

第78図で金ヶ崎窯の試料をほとんど包含するようにして、比較対照のための金ヶ崎領域を描いた。この領域を第76図にもいれてみた。第76図をみると、高坂古墳群の殆どの試料は金ヶ崎領域に含まれることがわかった。また、高坂古墳群の須恵器はNa量が少ないという点でも、金ヶ崎窯の須恵器と共に通の特徴をもつ。これらのこと考慮に入れると、金ヶ崎窯が有力な产地候補となる。

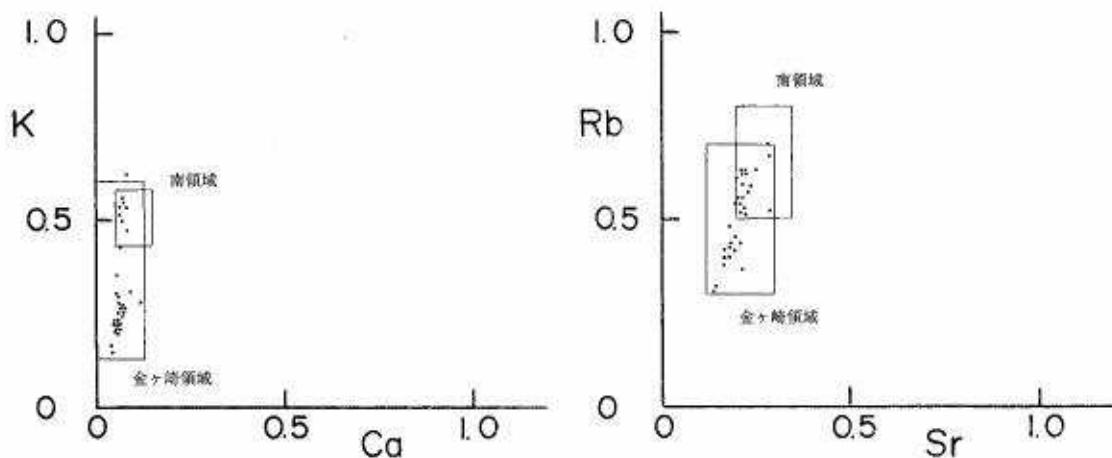
ここで、念のため、判別分析にかけることにした。古墳時代の須恵器の产地推定では地元窯と陶邑窯群間の2群間判別分析が適用できる場合が多い。そこで、金ヶ崎窯を地元の产地の有力候補とし、金ヶ崎群と陶邑群間の2群間判別分析を行った。その結果が第79図に示されている。重複領域があるものの、両者の相互識別は十分可能であることを示している。この判別図上に高坂古墳群の須恵器をプロットしたのが第80図である。もし、高坂古墳群の須恵器が地元、金ヶ崎窯の製品と陶邑からの搬入品からなるとすれば、判別図では両領域に分かれて試料は分布するはずである。ところが、第80図をみると、高坂古墳群の須恵器は金ヶ崎領域に分布する試料もあれば、陶邑領域に分布する試料もあり、さらに、不明領域に分布する試料の数も予想以上に多く、3領域に分かれて分布している。これは異常な分布である。第76図の高坂古墳群の須恵器の分布から1ヶ所での製品と推察したことからみると、この判別図での分布の仕方は受け入れが難く、異常であるとしか言いようがない。このような場合には判別分析の結果もそのまま受け入れることは出来ない。一応、 $D^2$ (金ヶ崎)、 $D^2$ (陶邑)の計算値も第3表に入れておいた。



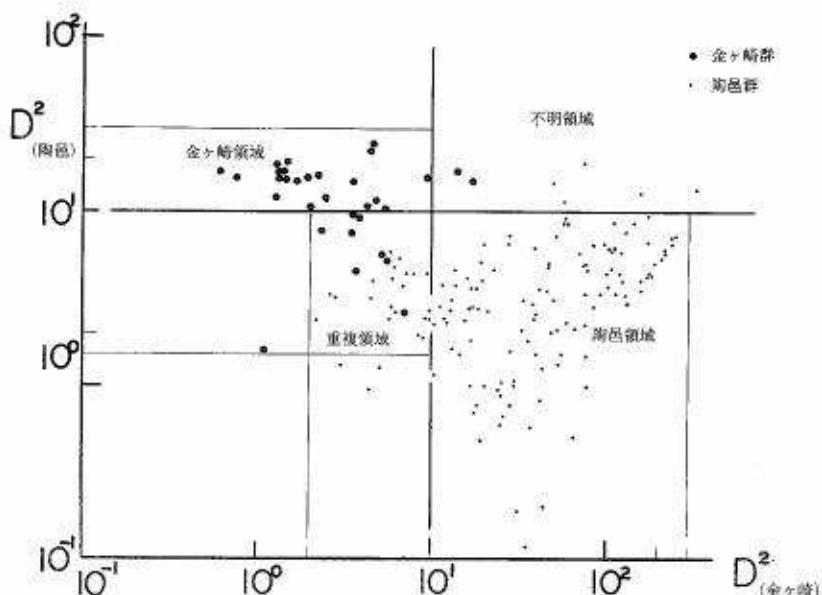
第76図 高坂古墳群出土須恵器の両分布図



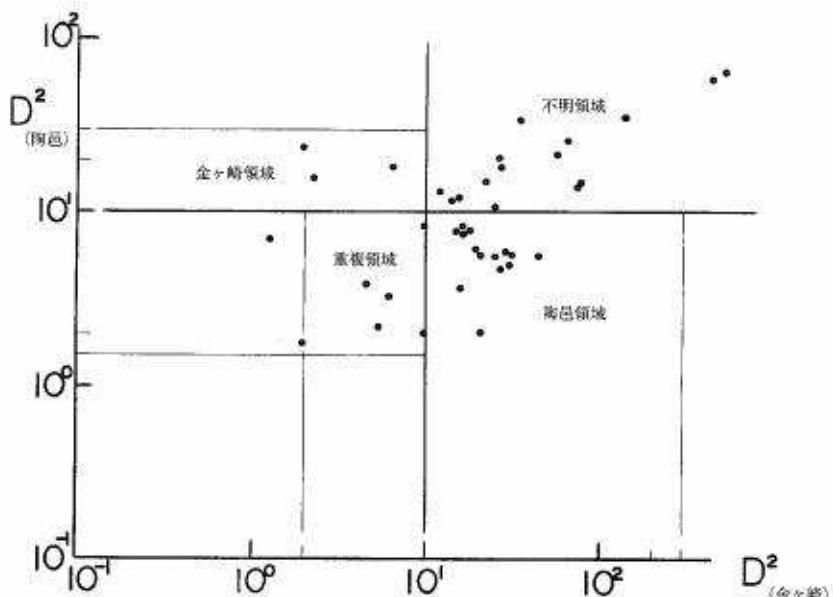
第77図 南1号窯跡（丹波市市島町）出土須恵器の両分布図



第78図 金ヶ崎窯跡（明石市）出土須恵器の両分布図



第79図 陶邑群と金ヶ崎群の相互識別 (K、Ca、Rb、Sr)



第80図 高坂古墳群（丹波市市島町）出土須恵器の産地推定 (K、Ca、Rb、Sr)

高坂古墳群の須恵器の考古学的な観察では金ヶ崎窯の製品にも、陶邑産の須恵器にも類似しないという。

自然科学の方法でも、考古学的な観察でも産地が絞りきれなかった訳である。そうすると、無理のない判断として、未発掘の窯を想定するしかない。しかも、金ヶ崎窯の須恵器の化学的特徴との類似性から、地元、加古川下流域にある未発見の窯と推定せざるを得ない。

もう一つ考えられることは、最近、大阪市北部の吹田窯跡群が5～7世紀にかけて、100基以上の窯を擁したという報告である。この時期にこれほど多くの窯跡をもつ窯群は陶邑以外にはない。しかも、陶邑産の須恵器と吹田産の須恵器の胎土の化学的特徴は類似しており、分析データでは誤判断される場合が多い。今後、吹田窯群の製品との対比も必要となるであろう。なお、土師器、瓦器については生産地である窯跡が残っていないので、産地を推定することはできない。胎土が陶邑産須恵器と類似するというに止める。

### 第3節 高坂西遺跡出土縄文土器の胎土分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

矢作健二・石岡智武

#### はじめに

兵庫県丹波市市島町に所在する高坂西遺跡、高坂古墳群は、兵庫県北部福知山盆地付近を流れる竹田川支流の市ノ貝川の南西に広がる段丘上に位置している。これまでの発掘調査により、6世紀後半の古墳、5世紀末の古墳や木棺、石棺などが確認され、高坂西遺跡では弥生時代の竪穴住居跡や縄文時代の土坑、陥穴などが検出されている。これらのうち、縄文時代の遺構からは、土器や石器などの遺物も出土しているが、中でも1号墳の東に位置する土坑SK01からは縄文時代晩期とされる土器が多量に出土した。一方、竪穴住居跡SH02からも土器が出土しているが、これは文様が不明であり、器形から弥生土器の可能性もあるとされている。

本報告では、これらの土器の材質すなわち胎土の特徴を明らかにし、1つの土坑内出土の土器の間で胎土の違いがあるかないか、また竪穴住居跡出土土器と土坑出土土器との間での違いの有無を検討する。さらに、高坂西遺跡に近い下竹田の竹田川河原より採取した砂についても分析を行い、これらの検討結果から、本遺跡における縄文土器の製作に関わる資料を作成するものである。

#### 1. 試料

試料は、高坂古墳群1号墳の東で検出された土坑SK01より出土した縄文晩期とされる土器片7点と1号墳下層から検出された竪穴住居跡SH02より出土した土器片の合計8点である。さらに、ここでは、参考試料として、高坂古墳群から東へ約2.5km離れた下竹田の竹田川右岸の河原より採取した砂1点も分析する。砂の採取地は、市ノ貝川と竹田川の合流点よりやや下流になる。

なお、前述のように竪穴住居跡から出土した土器は、その外見的な特徴から弥生土器である可能性も考えられている。試料には、それぞれ報告番号が付けられており、SK01出土試料は118、114、116、126、123、119、121、竪穴住居跡出土試料は142である。

#### 2. 分析方法

胎土分析には、現在様々な分析方法が用いられているが、大きく分けて鉱物組成や岩片組成を求める方法と化学組成を求める方法がある。前者は粉碎による重鉱物分析や薄片作製などが主に用いられており、後者では蛍光X線分析が最もよく用いられている方法である。縄文土器や弥生土器のように比較的粗粒の砂粒を含む土器胎土の分析では、前者の方法の方が、胎土の特徴が捉えやすいこと、地質との関連性を考えやすくなるなどの利点がある。さらに前者の方法の中でも薄片観察は、胎土中における砂粒の量はもちろんのこと、その粒径組成や砂を構成する鉱物および岩石片の種類なども捉えることが可能であり、得られる情報が多い。

この情報をより客観的な方法で表現したものとして、松田ほか（1999）の方法がある。これは、胎土中の砂粒について、中粒シルトから細礫までを対象とし、各粒度階ごとに砂粒を構成する鉱物片および岩石片の種類構成を調べたものである。この方法では、胎土中における砂の含量や粒径組成により、土器の製作技法の違いを見出すことができるため、同一の地質分布範囲内にある近接した遺跡間での土器製作事情の解析も可能である。今回の分析で対象とする縄文土器や弥生土器も、同一の地質分布範囲内で作られた可能性もあるため、単に岩片や鉱物片の種類のみを捉えただけでは、試料間の胎土の区別ができないことが予想される。このことを考慮し、本分析では松田ほか（1999）の方法を用いる。以下に試料の処理過程を述べる。

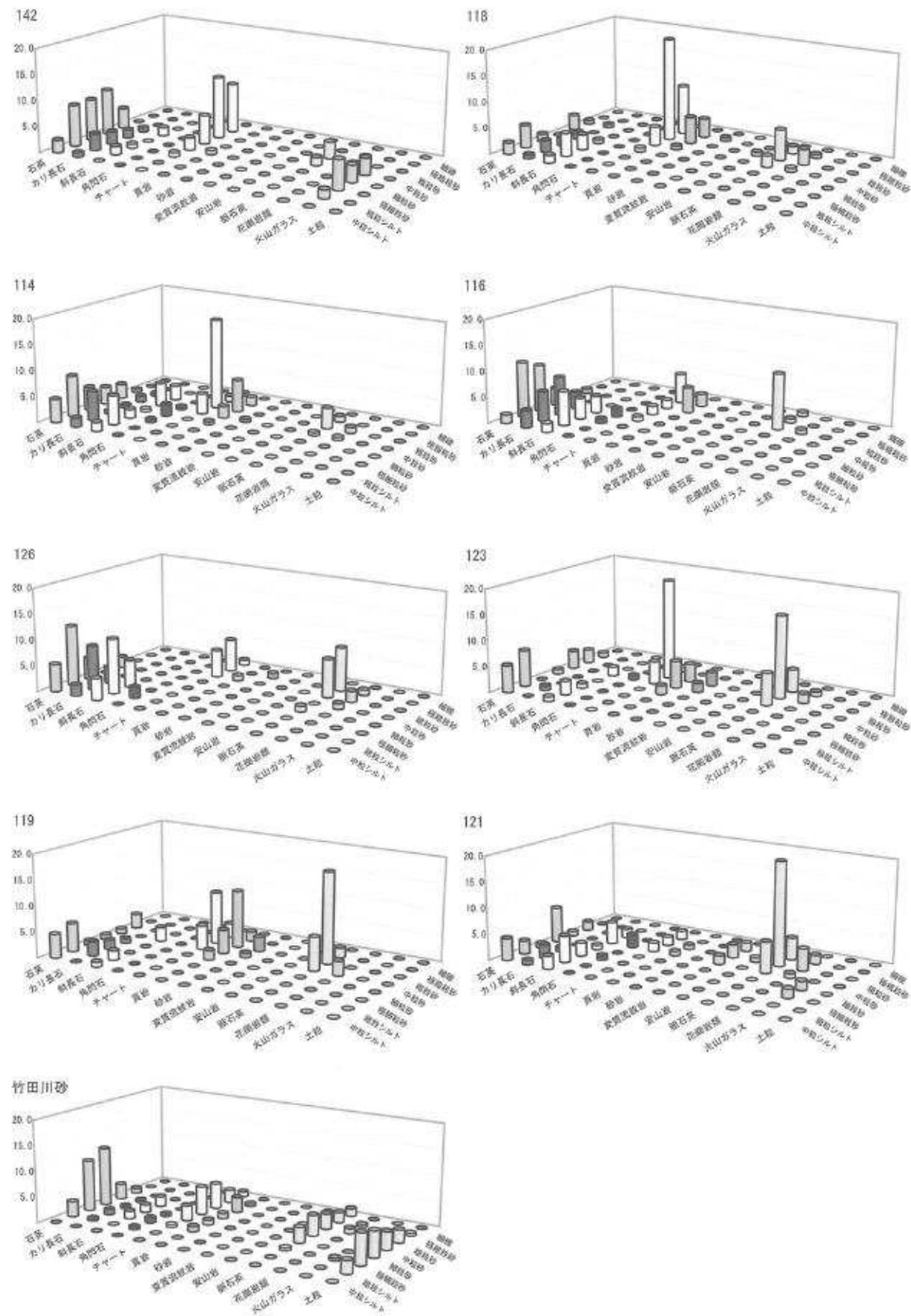
薄片は、試料の一部をダイアモンドカッターで切断、砂試料については樹脂で固化した後に切断し、正確に0.03mmの厚さに研磨して作製した。薄片は偏光顕微鏡による岩石学的な手法を用いて観察し、胎土中に含まれる砂粒を構成する鉱物片および岩石片の種類構成を明らかにした。砂粒の計数は、メカニカルステージを用いて0.5mm間隔で移動させ、細礫～中粒シルトまでの粒子をポイント法によりブレラート全面で計数した。また、同時に孔隙と基質のポイントも計数した。ただし、砂試料については、200粒を計測した。これらの結果から、各粒度階における鉱物・岩石別出現頻度、孔隙・砂粒・基質の割合、砂粒の粒径組成を求めた。

第4表 薄片観察結果(1)

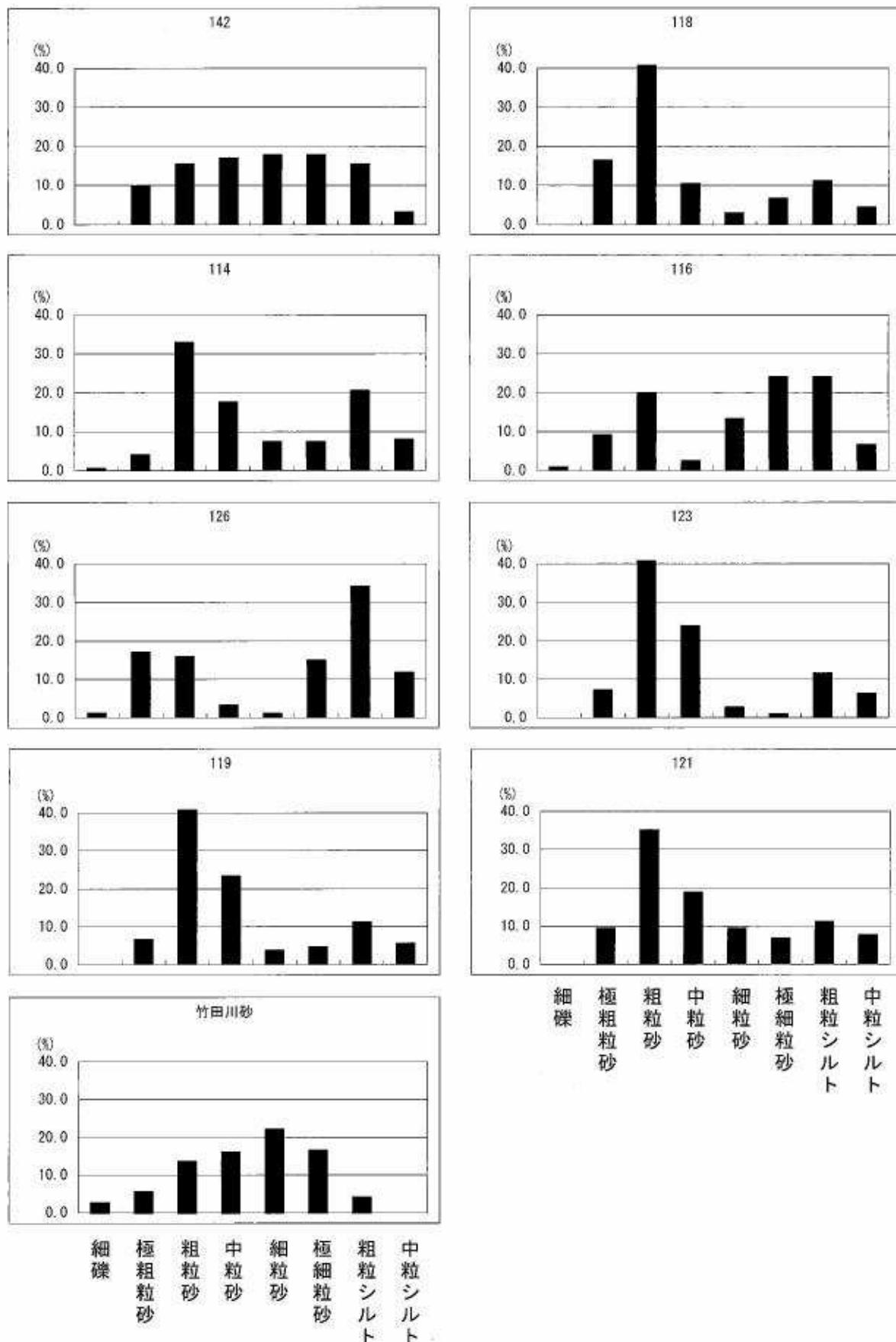
試料番号	砂粒区分	砂粒の種類構成													合計	
		鉱物片							岩石片							
		石英	カリ長石	斜長石	角閃石	黒雲母	綠康石	不透明鉱物	チャート	頁岩	砂岩	変質流紋岩	安山岩	黒石英	花崗岩類	火山ガラス
142	砂	細礫														0
		極粗粒砂							12							12
		粗粒砂							15				4			19
		中粒砂	5	1	2				7				2	4		21
		細粒砂	11	2				1	3	1				4		22
		極細粒砂	10	3	1				1					7		22
		粗粒シルト	10	4	2				1					2	5	19
		中粒シルト	3	1												4
	基質															396
		孔隙														24
118	砂	細礫														0
		極粗粒砂							13	5	1			2	1	22
		粗粒砂	1	1					43	7			1	8	4	65
		中粒砂	4						5	1			3	1		14
		細粒砂	2	1					1							4
		極細粒砂	2	2	4			1								9
		粗粒シルト	6	3	6											15
		中粒シルト	3	1	2											6
	基質															596
		孔隙														34
114	砂	細礫							1							1
		極粗粒砂							2	3				2		7
		粗粒砂	1	1	5				31	11			7	2		58
		中粒砂	5	2	8	1		1	7	4	1		1	1		31
		細粒砂	6	1	1	4				1						13
		極細粒砂	8	1	3	1										13
		粗粒シルト	14	10	10				2						3	36
		中粒シルト	8	3	3											14
	基質															495
		孔隙														24
116	砂	細礫											1			1
		極粗粒砂							7	3			1			11
		粗粒砂	1				1		2	6			13	1		24
		中粒砂	1						2							3
		細粒砂	4	4	4	2		1	1							16
		極細粒砂	11	9	5	1	2	1								29
		粗粒シルト	13	7	8		1									29
		中粒シルト	2	4	2											8
	基質															373
		孔隙														30

第4表 薄片観察結果(2)

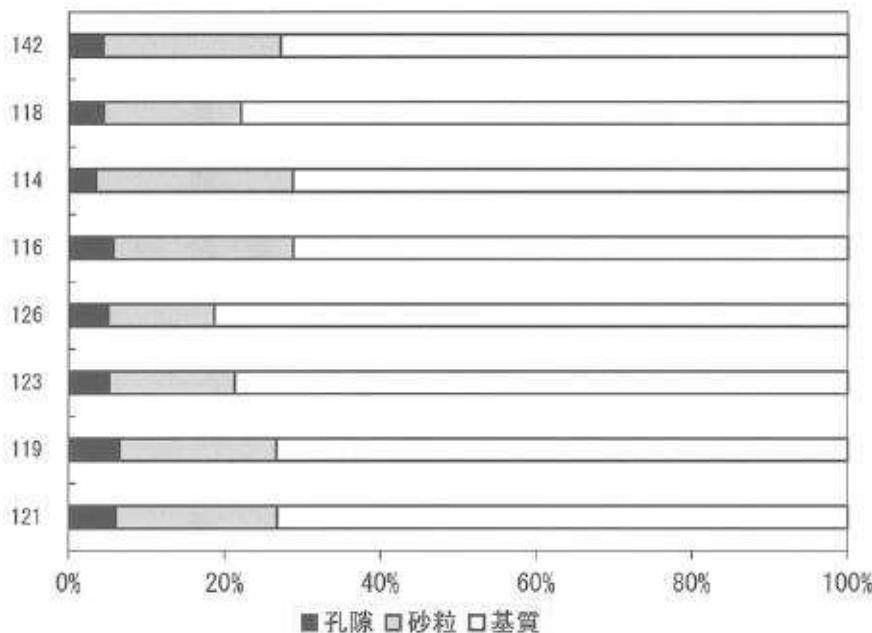
試料番号	砂粒区分	砂粒の種類構成													合計		
		鉱物片							岩石片								
		石英	カリ長石	斜長石	角閃石	黒雲母	緑簾石	不透明鉱物	チャート	頁岩	砂岩	変質流紋岩	安山岩	脈石英	花崗岩類	火山ガラス	
126	砂	細礫							1								1
		極粗粒砂							6		1			8	1		16
		粗粒砂							5	1				7	2		15
		中粒砂	2												1		3
		細粒砂												1			1
		極細粒砂	4	3	5			2									14
		粗粒シルト	11	8	10	2		1							1		32
		中粒シルト	5	2	4												11
	基質																562
		孔隙															35
123	砂	細礫															0
		極粗粒砂	1						1					5	1		8
		粗粒砂	3				1			22	4	3		18	2		53
		中粒砂	4		2	1			5	6	2			7			27
		細粒砂	1							2							3
		極細粒砂			1												1
		粗粒シルト	8	1	3			1							1		13
		中粒シルト	6		1												7
	基質																553
		孔隙															37
119	砂	細礫															0
		極粗粒砂							3	2				2			7
		粗粒砂	3						11	12	3			19			48
		中粒砂	1		3				5	5	1			7	3		25
		細粒砂	1	1						2							4
		極細粒砂	1	2				2									5
		粗粒シルト	6	3	2			1							1		12
		中粒シルト	5		1												6
	基質																393
		孔隙															35
121	砂	細礫															0
		極粗粒砂							2			2		5	2		11
		粗粒砂	2		2				2	1		3	1	25	5		41
		中粒砂	1		5	3			2	1		2		7	1		22
		細粒砂	8		1										2		11
		極細粒砂	1	1	3	1									2		8
		粗粒シルト	3	3	6			1							2		13
		中粒シルト	5	1	3												9
	基質																413
		孔隙															34
竹田用砂	砂	細礫							2					3			5
		極粗粒砂							5	1				4	1		12
		粗粒砂	2						10	6				6	2	1	32
		中粒砂	6	1	4				11	2				8		7	39
		細粒砂	23	1	3	1		1	6	2				6		10	54
		極細粒砂	20	2	3	2		1	1	2				1		12	45
		粗粒シルト	6	1		1									5		13
		中粒シルト															0
	基質																-
		孔隙															-



第81図 各粒度階における鉱物・岩石出現頻度



第82図 胎土中の砂の粒径組成



第83図 孔隙・砂粒・基質の割合

### 3. 結果

分析結果を第4表に示す。この結果から、各粒度階における鉱物・岩石別出現頻度を棒グラフにして第81図に示し、砂粒の粒径組成を第82図、孔隙・砂粒・基質の割合を第83図に示す。以下に各試料の胎土の特徴を述べる。

#### 1) 142 (堅穴住居跡SH02出土)

砂全体の粒径組成は、粗粒シルトから粗粒砂までほぼ同程度の割合を示し、非常に不淘汰な様相を呈する。ただし、粗粒砂～細粒砂の主体は石英の鉱物片であり、中粒砂以上の砂はチャートの岩石片が主体である。また、極細粒砂～中粒砂で火山ガラスがやや多いことも特徴となる。他に碎屑物としては、少量のカリ長石と斜長石の鉱物片および少量の脈石英片と微量の頁岩などが認められる。なお、脈石英は、同試料中に含まれるチャートの岩石片中に比較的多くの石英脈が認められることから、チャートの岩石片に由来する可能性がある。

#### 2) 118, 114 (SK01出土)

砂全体の粒径組成は、粗粒砂に明瞭なモードが認められるが、粗粒シルトでも第2のピークが認められるいびつな双峰形を示す。粗粒砂を構成している碎屑物は主にチャートの岩石片であり、これに少量の頁岩や脈石英、微量の花崗岩などの岩石片も伴う。一方、粗粒シルトを構成している碎屑物は、石英、カリ長石、斜長石の鉱物片である。

#### 3) 116, 126 (SK01出土)

砂全体の粒径組成は、極粗粒砂～粗粒砂と極細粒砂～粗粒シルトの2箇所にピークの認められる双峰形を示す。細粒側のピークの方がやや高い。粗粒側の碎屑物の主体は、互いに同量程度のチャートおよび脈石英であり、少量の頁岩と花崗岩を伴っている。細粒側の碎屑物の主体は、石英、カリ長石、斜長石の鉱物片であり、微量の角閃石も認められる。

#### 4) 123 (SK01出土)

砂全体の粒径組成は、118, 114とは同様に粗粒砂に明瞭なピークがあり、粗粒シルトに第二のピー

クのあるいびつな双峰形を示す。各粒径における碎屑物の種類構成も118、114とはほぼ同様であるが、粗粒砂のピークにおいてその主体がチャートのみではなく、脈石英も同程度の割合を示す点で、118、114と異なる。

#### 5) 119 (SK01出土)

砂全体の粒径組成は上述の118、114および123と同様である。ただし、粗粒砂を構成する碎屑物が、脈石英が最も多く、これに次いで互いにはほぼ同量程度のチャートと頁岩となっている点で、118、114、123とは異なる。

#### 6) 121 (SK01出土)

砂全体の粒径組成は、上述の118、114、123、119の4点と同様である。ただし、粗粒砂を構成する碎屑物の主体が脈石英であり、チャートや頁岩は少量である。さらに、少量の変質流紋岩と花崗岩および微量の安山岩も認められた。極細粒砂～細粒砂には少量の火山ガラスも含まれる。

#### 7) 竹田川砂（下竹田採取）

粒径組成は、細粒砂をピークとし、それより粗粒側にやや裾の長い単独峰形を示す。ただし、薄片中で土粒として計数した粒子は、おそらく細粒シルトや粘土分の塊と考えられるから、実際の堆積物としての粒径組成は、ここで示したものとは異なるであろう。細粒砂径および極細粒砂径の石英の鉱物片の量比が突出していることは、上記いずれの土器試料とも異なる特徴であるが、出現する種類構成は、121以外の7点の土器試料とはほぼ同様であり、鉱物片では石英以外に、カリ長石、斜長石、角閃石などを伴い、岩石片ではチャート、頁岩および脈石英が比較的多く、微量の花崗岩類も伴われる。

### 4. 考察

前項の結果記載において8点の土器試料を6項目に分けて述べた。これは、今回の土器試料8点には6種類の胎土を確認することができたことを意味する。ただし、その6種類が、互いに等距離に異なるわけではなく、関係が近いと考えられるものと明らかに異なる製作事情があると考えられるものとが存在する。

まず、砂全体の粒径組成において、142と他の7試料とで、大きく分けることができる。142以外の7試料は、粗粒砂と粗粒シルトの2つのピークがあることで共通する。この砂の粒径組成の違いは、土器製作技術の違いを示している可能性があり、142の土器の作り方と他の7試料との間には、大きな断絶がある可能性がある。前述のように、142のみ住居跡の出土であり、かつ外見からも他の縄文晩期の土器とは異なり、弥生土器の可能性もあるという発掘調査所見がある。今回認められた、他の縄文土器の胎土との明瞭な差は、この所見を支持していると考えてよい。

一方、142の砂を構成している碎屑物の種類は、鉱物片および岩石片とともに、他の6試料（後述するように121は除く）と大きく変わることはない。これは、142も他の6試料も、同じ地質学的背景を有する地域内の粘土や砂を土器の材料としていることを示唆する。ここで言う同じ地質学的背景を有する地域とは、竹田川流域および土師川流域程度の広がりを指す。この地域の地質については、栗本・牧本（1990）に詳しい。両河川の流域に広がる山地は、近畿地方北部を占める丹波高地の西方延長に相当するが、この山地を構成している地質は、丹波帯と呼ばれる中生代ジュラ紀の堆積岩からなる地層である。堆積岩は、主に頁岩、砂岩、チャートから構成される。したがって、142および他の6試料は、竹田川流域ないし土師川流域の地質を反映していると見ることができる。さらに、今回参考試料として分析した竹田川砂の鉱物片および岩石片の種類構成は、142および他の6試料とはほぼ同様であることが確かめられた。したがって、これら7点の試料は、竹田川および土師川流域内で製作された可能性が高い。なお、142では、火山ガラスが比較的多く含まれるが、これは、河川沿いに形成された段丘堆積物中に狹

在するテフラ層に由来すると考えられる。

次に、118、114、116、126、123、119の6点の中では、118、114と123、119は、同じ地域内で同じ技術により作られた土器である可能性が高い。前2者と後2者の違いは、粗粒砂におけるチャート岩石片と脈石英の量比の違いであったが、前述のように脈石英もチャートに由来するものであり、両者とも粒径が同じであれば、硬さや色などはほとんど同様であり、土器の製作において区別する必要のないものである。したがって、粗粒砂におけるチャートと脈石英の量比は、おそらく人為の関与しない違いであると考えられる。

これに対して、116、126と他の4点との違いは、粒径組成における違いであるから、同じ地域内で作られた土器の中にも製作技術に若干の違いがあったことを示唆している可能性がある。

さらに121については、粒径組成が、142を除く他の6点、特に118、114、123、119の4点とほぼ同様であることは、これら4点との製作技術の共通性を示唆する。しかし、121で無視できないのは、中粒砂以上の粗粒碎屑物である変質流紋岩および安山岩の存在である。竹田川流域および土師川流域とともにこれらの岩石の分布は認められておらず、実際に竹田川砂試料にもこれらの岩石片を認めることができなかった。これらのことから、121は、これら河川の流域で作られたものではない可能性がある。上述の栗本・牧本（1990）により周辺で流紋岩の分布をみると、竹田川流域とは山一つ隔てた加古川流域に、中生代白亜紀の有馬層群と呼ばれる流紋岩および流紋岩質凝灰岩、安山岩および安山岩質凝灰岩からなる地質の分布が認められる。現時点では、121の製作地を加古川流域に限定することはできないが、製作地の可能性の高い地域としてあげることができる。ここで、粒径組成では、118など4点と同様であったことから、加古川流域と竹田川流域との間に土器製作技術が共有されていた可能性もある。

なお、今回の分析では、8点の土器胎土における砂粒の粒径組成と竹田川砂のそれとは明瞭に異なることもわかった。これは、縄文土器においても弥生土器においても、土器胎土中の砂は、人為が加えられたものであることを示しており、粒径組成は製作技術の違いを反映しているとする上述の考え方を支持しているといえる。

以上、今回の8点の土器胎土からみた関係をまとめると以下のようになる。

- 1) 竪穴住居跡SH02から出土した142は、他の縄文土器と同じ竹田川～土師川流域内で作られたが、その技法には他の縄文土器との間に大きな隔たりがある。
- 2) SK01から出土した土器7点のうち、118、114、123、119の4点は、竹田川～土師川流域内で同じ製作技術のもとに作られた。
- 3) SK01から出土した土器のうち、116と126は、上記4点と同じ地域内で作られたものであるが、その製作技術は若干異なっている。
- 4) SK01から出土した土器のうち、121は、製作技術は上記118、114、123、119と同様であるが、その製作地は、加古川流域であった可能性がある。

今後、福知山盆地周辺の各地において、今回と同様の方法による土器胎土事例を蓄積することができれば、土器の製作地や製作技術に係わる資料の作成が可能になると考えられる。

#### 引用文献

- 栗本史雄・牧本 博（1990）福知山地域の地質、地域地質研究報告（5万分の1図幅）、97p., 地質調査所。  
松田順一郎・三輪若葉・別所秀高（1999）瓜生堂遺跡より出土した弥生時代中期の土器薄片の観察－岩石学的・堆積学的による－、日本文化財科学会第16回大会研究発表要旨集、p.120-121.

## 第4節 高坂1号墳出土耳環の表面調査

独立行政法人文化財研究所 奈良文化財研究所

降幡順子

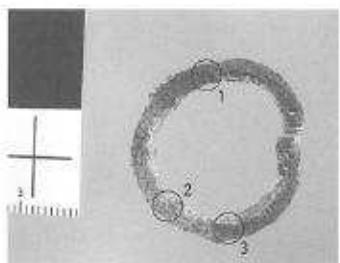
兵庫県丹波市高坂1号墳出土の耳環表面において、箔が残存しているかどうかを蛍光X線分析と実体顕微鏡による表面観察によって調査した(図版8)。

耳環は、銅芯に金属を張っていた可能性がある。そのためまず顕微鏡により表面状態の観察をおこなった。形状は長径が約2.6cm、短径が約2.4cmの偏円形であり、厚さはサビの状態に依存するが約3.6mmである。表面は、暗紫色を呈している薄い層が観察され、その下には細かい貝殻状の赤色を呈するサビ層が観察できる。これらは亜酸化銅( $Cu_2O$ )であると考えられる。また濃紫色層の上には、薄緑色のサビに覆われている所も観察された。赤色サビ層の下には、暗紫色層が広く露出した状態になっている。耳環開口部は淡緑色のサビに覆われており詳細な観察ができなかった。表面観察からは、金箔などの残存は確認できなかったため、表面緑色サビ層と、広く露出している暗紫色部分について蛍光X線分析をおこない、その差異を比較検討した。

広く露出している暗紫色部分(第84図に示す1)と淡緑色部分(第84図に示す2)をそれぞれ蛍光X線にて分析した結果(第87図)、1ではほぼ銅のみが検出された。2では、銅に加えて若干の鉛、砒素、銀が検出された。他の場所についても数箇所の分析をおこなったが、金は検出されなかった。したがって、金箔が残存している可能性は低いといえる。2で若干検出した鉛、砒素、銀などは、埋蔵中に耳環の芯部分より溶出した成分と考えることができる。また銀下地、銀箔の可能性は否定できないが、銅の不純物としても銀は含まれるため確実とはいえない。表面に観察された暗紫色部分(第84図に示す3)では2と同様な結果を得た。

また、X線透過撮影をおこない(第86図)、表面緑色サビ層の下の様子を観察したが、密度に大きな差異は観察されなかった。

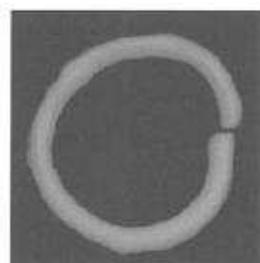
これらの非破壊調査の結果から、この耳環に金箔が残存している可能性は低いものと推測される。



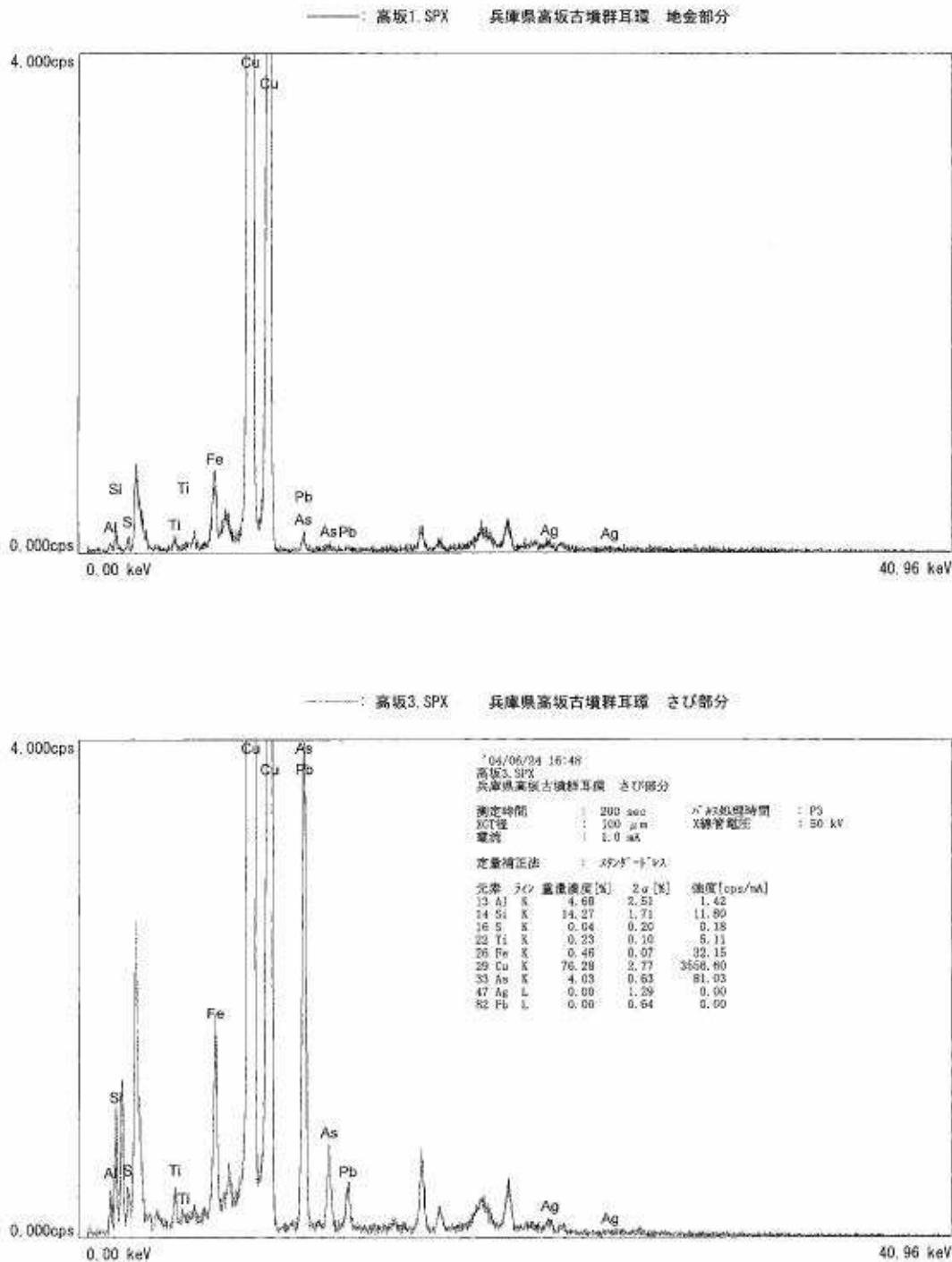
第84図 耳環全体写真  
(数字は主な測定箇所)



第85図 耳環サビ部分拡大



第86図 透過X線画像  
(X線透過撮影) 富士フィルム製μFX・100にて撮影し、条件は電圧70kV、電流75μA、照射時間75秒である。



第87図 蛍光X線分析結果 (上) 測定箇所1 (下) 測定箇所2・3

分析条件：(蛍光X線分析) HORIBA製X線分析顕微鏡XGT-2000Wにて測定をおこない、条件は管電圧50kV、電流1.0mA、測定時間200秒、XGT径100μm、パルス処理時間P3

## 第5節 小結

高坂古墳群および高坂西遺跡の調査は、発掘調査前に古墳群の電気探査を行い、調査後に遺物の分析を行った。遺物は須恵器の生産地推定、縄文土器の製作地推定、耳環の表面調査の3件を行った。

### 電気探査

発掘当初の自然科学的な調査は電気探査を行った。測定法は4本の電極棒を等間隔に配置するウェンナー法で行い、測定範囲は発掘調査区の南隅を起点とし1号墳の墳裾を一部含めた北東斜面について実施した。成果図の抵抗の高い処や低い箇所あるいは等比抵抗線が密になっている箇所を遺構の痕跡と想定したが、結果的には判読できなかった遺構も多く存在した。これには重機が走行した影響もあるが、探査対象深度の設定や移動電極間隔の設定など今後改良すべき点が考えられた。

### 須恵器の生産地推定

高坂古墳群は7基の古墳と木棺墓や石棺墓の調査を行った。調査において多くの須恵器が出土し、時期決定を行った。しかし同一の時期であっても製作方法や焼成が異なるものが存在した。そこで三辻利一氏に蛍光X線分析法による生産地の推定を依頼した。

市島町には7世紀から始まる須恵器の生産地である鴨庄窯跡群が存在しており、近辺に未だ発見されていない6世紀以前の窯跡の存在を想定して、須恵器の胎土分析を行った。しかし鴨庄古窯跡群（南1号窯跡）の領域とはずれており、金ヶ崎窯跡と陶邑窯跡群と不明領域のものが存在した。不明領域に分布する試料の数も予想以上に多く存在し、未発見・未分析の窯跡の存在が想定できる。陶邑産と推定された資料の中には製作技法（須恵器坏内面の静止ナデ）から陶邑窯では行われていないものがあり、陶邑窯の中にこのような資料が存在しているのか、それとも陶邑窯と同じ分析データをもつ他の産地で坏内面の静止ナデを行う窯が存在するかのどちらかであろう。

今後、同じ流域の福知山市や綾部市の窯跡の分析データやナデを行っている吹田窯跡群の分析データとの比較検討を行う必要がある。いずれにしても、藤原学氏が指摘するように考古学的な検証が必要である。

### 縄文土器製作地推定

高坂西遺跡からは縄文晩期の突帯文土器が多く出土した。形態や突帯の作り方など、多様性が認められた。そこで、製作地の違いによるものではないかと考え、薄片を作製し、鉱物組成や粒径組成の違いなどにより製作地を推定するため、パリノ・サーヴェイに分析を依頼した。

調査の結果、縄文晩期の突帯文土器は鉱物組成により高坂西遺跡周辺で作られたと推定されるものと加古川流域と推定されるものが存在した。分析点数が少なかったため、産地と属性の違いの検討はできなかつたが、今後の検討課題としたい。同様に分析した弥生中期土器との違いも粒径組成の違いにより判別できた。

### 耳環の表面調査

高坂1号墳出土の耳環は遺存状況が悪く表面に箔が残存しているかどうかを目的として、降幡順子氏に依頼した。調査は蛍光X線分析と実体顕微鏡による表面観察による非破壊調査で実施した。表面観察では、金箔などの残存は確認できなかったため、表面緑色サビ層と広く露出している暗紫色部分について蛍光X線分析を行ったが、この耳環に金箔が残存している可能性は低いものと推測された。

## 第7章 まとめ

### 第1節 総括

高坂古墳群および高坂西遺跡は、兵庫県丹波市市島町中竹田高坂の加茂神社の裏に位置する。遺跡は竹田川支流の市ノ貝川の右岸の高位段丘上および段丘傾斜地に立地している。標高は74m前後を測り、沖積面との比高差は20m程度ある。

高坂古墳群は南北方向約35m、東西方向約35mの狭い空間に分布している。古墳群は、7基の円墳で構成されており、古墳の周囲から2基の箱式石棺と4基の木棺を検出した。周囲には、同様の地形が続いているが、踏査の結果、古墳の存在は確認できていない。ただし、発掘調査において、低墳丘の古墳や墳丘が明らかでなかった木棺墓や石棺墓が存在することから、周囲に広がる可能性がある。

古墳群は、立地により大きく2群に分類できる。段丘上の平坦面に立地する1号墳と、市ノ貝の谷に面した傾斜地に立地する2号墳から7号墳である。この立地による分類は埋葬施設の違いおよび築造時期の違いにも現れている。前者は6世紀後半に作られた横穴式石室を埋葬施設とする円墳であり、後者は5世紀後半から6世紀前半にかけての木棺を直葬する古墳である。

高坂西遺跡は風倒木の痕跡と縄文時代の土坑・陷穴、弥生時代の竪穴建物、古墳時代の竪穴状の遺構を検出した。周囲には、同様の地形が続いており、遺跡の範囲は広がる可能性が高い。

風倒木痕跡は15基を確認し、縄文土器が出土したものもある。陷穴は2基確認し、いずれも底部に5個の杭痕を残している。土坑は3基以上確認した。SK01からは縄文時代晚期の突帯文土器がまとまって出土した。

弥生時代の竪穴建物は高坂1号墳の墳丘盛土の下に位置しており、埋葬施設の掘削により削平されており、2／3程度しか残存していない。

古墳時代の竪穴状の遺構は調査区北東端の斜面に位置しており、古墳時代の土器が出土しているが、時期の認定および性格は難しい。高坂1号墳の石室内部からは中世の土器がまとまって出土しており、石室が再利用されていたことを示す資料である。

### 第2節 高坂西遺跡・高坂古墳群の変遷（第88図）

高坂西遺跡および高坂古墳群の変遷を遺構の継続性を重視して、大きくⅠ期からⅤ期に分けた。密度の濃いⅢ期はさらに3小期に分け、Ⅳ期は2小期に分けた。

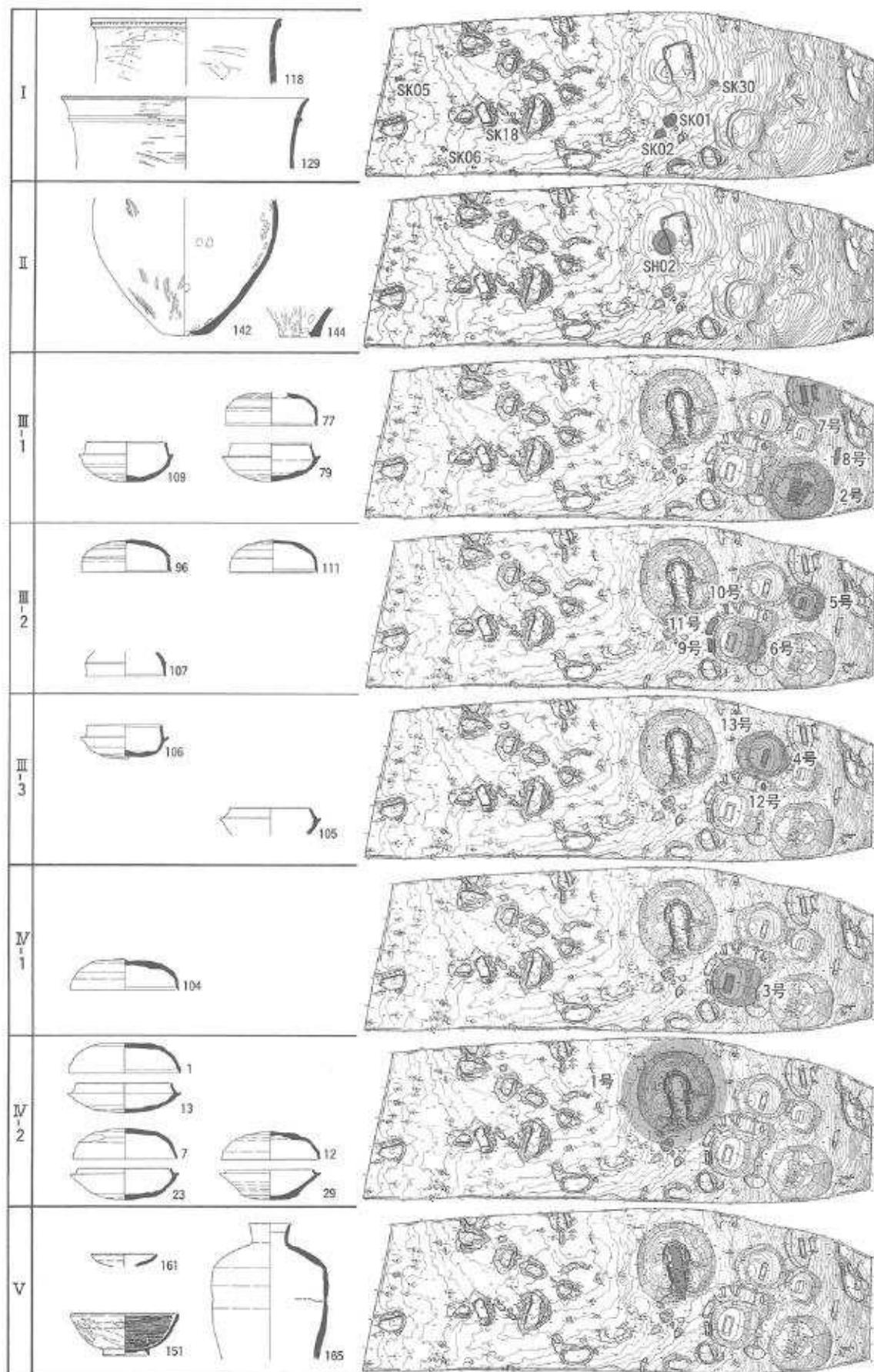
#### 1. 第Ⅰ期

第Ⅰ期は高坂西遺跡に人間の生活の痕跡が残る最初である。縄文時代に位置づけられ、土坑・陷穴・風倒木の痕跡が存在する。土坑SK01・SK02からは縄文時代晚期の突帯文土器が出土している。陷穴は2基存在しているが遺物は出土しておらず、厳密な時期決定はできない。

風倒木の痕跡は平坦面を中心に15基検出した。調査区の境界部分には風倒木と考えられる落ち込みや調査区内でも弧状の溝も存在することから、さらに増えると考えられる。風倒木からは縄文土器が出土しているものがあるが、厳密に言うと縄文時代以降である。

#### 2. 第Ⅱ期

第Ⅱ期は弥生時代に位置づけられる。竪穴建物1棟が存在する。床面からの遺物は少ないが、弥生時代中期後半に位置づけられる。遺跡全体の遺物量も少なく、集落規模や存続時期は短いと考えられる。



第88図 高坂西遺跡・高坂古墳群の変遷

### 3. 第Ⅲ期

第Ⅲ期は古墳時代の6世紀後半から7世紀初頭にかけて位置づけられる。第Ⅱ期からは数十年の断絶が存在する。第Ⅲ-1期から第Ⅲ-3期の三つの小期に分けた。

#### 第Ⅲ-1期

第Ⅲ-1期は高坂古墳群の造墓開始時期である。7号墳と2号墳の円墳がこの時期に該当し、陶邑編年のTK23型式に並行する。斜面下方に築造され、第Ⅲ期の中では規模が大きい。埋葬施設は7号墳が小口を深く埋め込む組み合わせ式の木棺と割竹形木棺、2号墳は棺台が伴う木棺で、高坂古墳群の中では古い様式を残していたり個性のある埋葬施設である。なお、8号棺も立地などから、この時期に位置づけられる。

#### 第Ⅲ-2期

第Ⅲ-2期は6号墳と5号墳の円墳と9号棺がこの時期に該当し、陶邑編年のTK47型式前後に並行する。第Ⅲ-1期の斜面上方に接して古墳を築造している。墳丘の規模はやや小さくなっている。埋葬施設の形式は、箱形の木棺に変わっている。遺物は出土していないが、10号・11号もこの時期の可能性が高い。

#### 第Ⅲ-3期

第Ⅲ-3期は4号墳の円墳がこの時期に該当し、陶邑編年のMT15型式前後に並行する。第Ⅲ-2期の斜面上方に接して古墳を築造している。12号石棺・13号石棺も遺物は出土していないが、この時期の可能性が高い。

### 4. 第Ⅳ期

第Ⅳ期は古墳時代の6世紀後半から7世紀初頭にかけて位置づけられる。第Ⅲ-3期からは数十年の断絶を経て造墓が再開されている。

#### 第Ⅳ-1期

第Ⅳ-1期は3号墳の円墳がこの時期に該当し、陶邑編年のMT85型式前後に並行する。3号墳は6号墳に重複するように築造されており、第Ⅲ期からの時間経過を物語るものであろう。埋葬施設の形式は、木棺直葬であり、この時期までである。

#### 第Ⅳ-2期

第Ⅳ-2期は円墳である1号墳が築造されてから追葬が終わるまでの時期で、6世紀後半から7世紀前半にかけてである。陶邑編年のTK43・TK209・TK217型式前後に並行する。

1号墳は段丘平坦面に立地しており、横穴式石室を埋葬施設としており、大きく変化している。多くの古墳群がこの時期から7世紀の中頃にかけて古墳群を築き続けているが、高坂古墳群は高坂1号墳のみで築造を終えている。墓域が移動したのか、途絶えたのかの理由は不明である。周辺の古墳の動向や集落の調査により、今後明らかになるであろう。

### 5. 第Ⅴ期

第Ⅴ期は古代から中世に位置づけられ、古墳の追葬終了後、高坂1号墳の石室を何らかのかたちで再利用したことが考えられるが、乱掘のため詳細は不明である。

## 第3節 高坂古墳群の検討

### 1. 高坂1号墳

#### 古墳の石室

高坂1号墳の石室は乱掘されているため不明な点も多いが、埋葬施設は南東方向に開口する左片袖の

横穴式石室である。玄室床面は羨道部分より0.25m低い。このように羨道より玄室が一段下がる構造の古墳に火山10号墳がある。火山10号墳は古墳群を形成し始めた契機となる古墳で、時期は須恵器からMT85型式に位置づけられている。火山10号墳は高坂1号墳よりやや先行する。火山10号墳の次に続く火山7号墳は玄室と羨道が同一面に存在する通常の石室に変化している。

竹田川流域で最初に横穴式石室が採用されている多利向山C-2号墳は玄室の平面形が正方形で、時期はMT15型式に位置づけられている。これに続く、火山10号墳や高坂1号墳は横穴式石室採用第二段階の地域的特徴のある石室の一形態であると考えられる。

#### 須恵器

高坂1号墳の時期を須恵器蓋坏から考えてみる。形態や法量、技法などから大きく4類に分類でき、時間的経過を示している。1類は左回転轆轤で成形され、蓋の口縁端部内面に段をもつ口径が15.2cmの蓋1と身13である。2類～4類は右回転轆轤で成形され、蓋の口縁端部内面の段が省略されている。2類は口径が14.4cm前後の蓋2～8・A・Bと身14～24・Cである。3類は口径が13.1cm前後の蓋9・10と身25・26である。4類は蓋天井部および身底部のヘラ削りが省略されており、口径が13.7cm前後の蓋11・12と身27～30である。1類は焼成が良く、2類～4類は焼成が良くないものが多い。

子持器台の蓋は口縁端部内面に段をもち、天井部との境に稜が残っており、焼成も良好で古い様相を残しており、蓋坏の1類に伴うと考えられる。したがって、子持器台は古墳築造の初期の段階に供献されたものと考えられる。

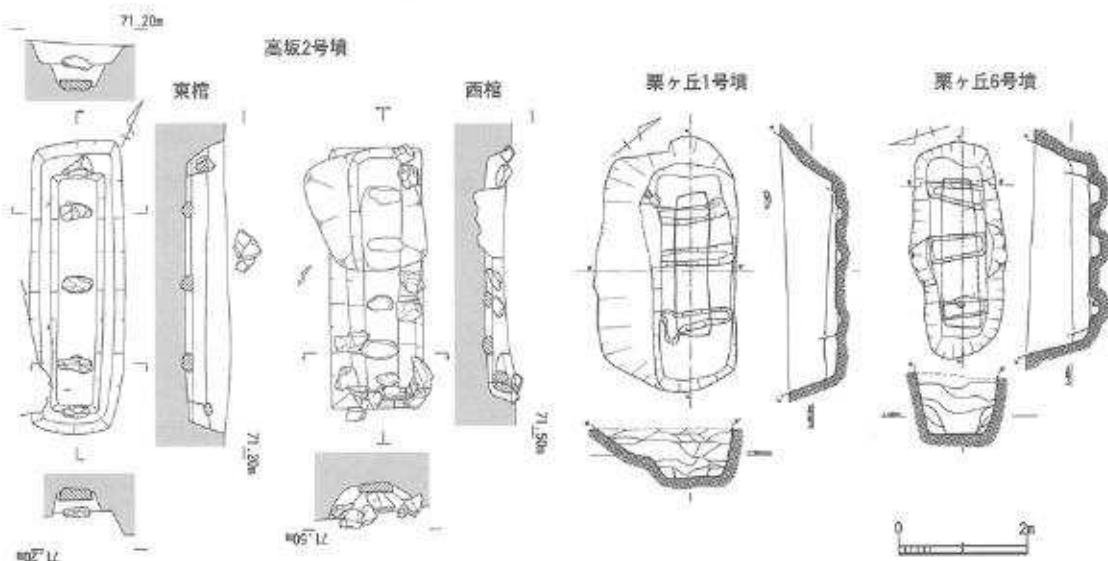
#### 古墳の時期

古墳の時期は石室および須恵器で検討したとおり、6世紀後半（TK43型式）に築造され7世紀前半、まで何回かの追葬が行われたものと考えられる。

### 2. 高坂2号墳

#### 墓壙の構造（第89図）

高坂2号墳の2基の埋葬施設は棺の底に棺台を設置している特殊な構造である。小口部分を粘土や石で押さえる構造の類例は多いが、棺台を設置している例は見当たらない。あえて同様に遺構を探すと、綾部市栗ヶ丘1号墳と6号墳に求められる。時期は6世紀中葉以降と考えられており、やや新しい。何



第89図 高坂2号墳埋葬施設と類似遺構

れも木棺直葬墳の古墳であり、石は設置されていないが、1号墳と6号墳ともに埋葬施設底部に3箇所の溝状の穴が存在している。一見して小口穴にも見えるが、3箇所であり、浅いことから小口穴とは構造が異なっている。棺痕跡の小口部分からほぼ等間隔である点は、高坂2号墳と同じ様相である。栗ヶ丘古墳群のものは、この穴に木などを棺台として設置したものが、木棺とともに腐朽したと考えられ、高坂2号墳の系譜を引くものであると考えられる。今後、類例を探した上でさらに検討したい。

### 3. 墳丘の中心と棺埋葬の原理

高坂古墳群の第Ⅲ期に位置づけられる5基（2号墳・4号墳・5号墳・6号墳・7号墳）の古墳のうち、2号墳・5号墳・7号墳の3基は1墳丘2基の埋葬施設が存在している。1墳丘2基の埋葬施設が存在する古墳の墳丘の中心は、斜面下方側の埋葬施設の中央に位置する。1墳丘1基の埋葬施設の古墳である4号墳の墳丘の中心も埋葬施設の中央に位置する。埋葬施設に重複関係が認められる2号墳と5号墳はともに、墳丘の中心に存在する斜面下方の埋葬施設が斜面上方の埋葬施設に切られており、墳丘の中心に存在する埋葬施設が古いことがわかる。したがって切り合い関係のない7号墳も墳丘の中心に存在する斜面下方の埋葬施設である北棺が古いことが推測できる。

2号墳は2棺目の埋葬にあたっては、斜面上方に並行して埋置し、墳丘の中心は変えずに直径を0.5m大きくして周溝を掘り直している。

つまり、古墳の墳丘は埋葬施設を中心に設定し、古墳の築造を行っていることがわかる。また、2棺目は斜面上方に並行して埋置することが原則である。

埋葬頭位は5号墳の西棺が頭部の赤色顔料から北方向であることが判るほかは明確ではない。北方向ではあるが厳密には北ではなく、ほかの埋葬施設を見ても地形の傾斜に沿って棺の設置を行っている。また遺体の頭位は市ノ貝谷の谷奥側に設置し埋葬しているものと考えられる。

そして、第2節の高坂古墳群の変遷で見たように斜面の下方から斜面の上方に向かって継続して築かれている。古墳の規模も大きいものから小さいものへ、埋葬施設も個性のあるものから箱形の木棺へと変化している。

以上のように、高坂古墳群は付近に同様の地形が存在するにもかかわらず、近接して築造されていることが特徴である。

### 4. 高坂古墳群の母集落

高坂古墳群は5世紀後半から6世紀前半にかけてと6世紀後半から7世紀初頭にかけての古墳群である。この古墳群の母体となった集落はどこに存在するのであろうか。今までにこの付近において、同時期の集落の調査は行われていない。また分布調査において、丹波市市島町北部の古墳時代の遺物が採集されている遺跡は下竹田樽井遺跡、十ノ貝遺跡と上竹田金吹遺跡、的場遺跡でのみである。これに比べて多くの古墳群が分布しており、そのほとんどは後期の古墳群であると考えられ、古墳群の数と集落の数は比例しない。

このように、集落の調査が行われていない現状から推測の域を出ないが、谷ごとなど一定間隔の集落の墓域として古墳群が形成されていた可能性が高い。したがって、高坂古墳群の東側に位置する丹波市市島町中竹田に所在する高坂遺跡が候補に上げられるであろう。分布調査では奈良時代から近世の遺物が採集されているのみであるが、現在の集落が形成されているところまで範囲を広げれば、古墳時代の集落が存在する可能性は高いであろう。

## 第4節 高坂西遺跡の検討

### 1. 縄文時代

#### 風倒木

風倒木は15基検出している。詳細は事実報告の第5章第2節で検討したとおり、SZ10とSZ11とSZ12の3基を除く12基は北を中心とする北西から北東の強い風によって、南を中心に南東から南西に向かって倒れた木の痕跡であることがわかる。風倒木痕からは縄文土器が出土しているものがあるが、厳密に言うと縄文時代以降である。

#### 縄文土器

SK01からは突帯文土器がまとまって出土している。小破片のため、全容が判明するものはないが、突帯の存在している破片は大方、口縁部の破片であることから、1条突帯の深鉢のみで2条突帯のものは存在していないと考えて良さそうである。また口縁部をわずかに膨らませただけのものもある。突帯の付く位置は口縁直下のものとやや下がった位置のものとがある。突帯はD型の刻みのものが多いが、刻みの無いものや、半裁竹管による逆C形の刺突によるものがある。

以上のような突帯の様相などから、突帯文土器の中でも新しく位置づけられ、本来ならば弥生土器が伴ってもいい時期である。同じ丹波市市島町的場遺跡でも突帯文土器の1条突帯の深鉢が出土しており、流路内ではあるが弥生時代前期の土器が伴っている。

このような2条突帯を伴わない1条突帯の突帯文土器深鉢は日本海側に分布しており、2条突帯の突帯文土器深鉢が多く出土する瀬戸内海側とは大きく様相が異なっている。

突帯文土器の胎土は分析により、鉱物組成から高坂西遺跡周辺で作られたと推定されるものと、加古川流域と推定されるものが存在した。また、SH02から出土した弥生中期土器とは明らかに粒径組成が異なっており、突帯文土器の粒径組成の特徴が提示できた。



第90図 高坂古墳群の表示

## 本書全体の参考文献

- 『角川日本地名大辞典 28 兵庫県』 角川書店1988
- 兵庫県教育委員会『松ノ本古墳群』 1985年
- 兵庫県埋蔵文化財調査事務所『多利向山古墳群』 兵庫県教育委員会 1986年
- 兵庫県教育委員会『河津館跡』 1987年
- 兵庫県教育委員会『多利遺跡群発掘調査報告書』 1987年
- 兵庫県教育委員会『鴨庄塚跡群(1)』 1988年
- 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所『山垣遺跡』 兵庫県教育委員会 1990年
- 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所『七日市遺跡(Ⅰ) 第1分冊』 兵庫県教育委員会 1990年
- 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所『七日市遺跡(Ⅰ) 第2分冊』 兵庫県教育委員会 1990年
- 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所『七日市遺跡(Ⅰ) 第3分冊』 兵庫県教育委員会 1990年
- 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所『七日市遺跡(Ⅱ)』 兵庫県教育委員会 1990年
- 兵庫県埋蔵文化財調査事務所『鴨庄塚跡群(2)』 兵庫県教育委員会 1991年
- 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所『国領遺跡発掘調査報告書』 兵庫県教育委員会 1991年
- 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所『喜多中世墓』 兵庫県教育委員会 1992年
- 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所『国領遺跡(Ⅱ)』 兵庫県教育委員会 1993年
- 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所『国領遺跡(Ⅲ)』 兵庫県教育委員会 1993年
- 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所『的場遺跡・上ノ段遺跡』 兵庫県教育委員会 2002年
- 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所『七日市遺跡(Ⅲ) 旧石器時代の調査』 兵庫県教育委員会 2004年
- 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所『七日市遺跡(Ⅲ) 弥生～平安時代の調査』 兵庫県教育委員会 2004年
- 氷上郡教育委員会『氷上郡埋蔵文化財分布調査報告書(1) -兵庫県氷上郡島町-』 1993年
- 氷上郡教育委員会『氷上郡埋蔵文化財分布調査報告書(2) -兵庫県氷上郡春日町-』 1995年
- 氷上郡教育委員会『三ツ塚周辺遺跡の概要』 1995年
- 氷上郡教育委員会『氷上郡埋蔵文化財調査概要報告書Ⅲ』 2000年
- 丹波三ツ塚遺跡発掘調査团『丹波三ツ塚遺跡Ⅰ』 兵庫県氷上郡島町 1973年
- 丹波三ツ塚遺跡発掘調査团『丹波三ツ塚遺跡Ⅱ』 兵庫県氷上郡島町 1975年
- 丹波三ツ塚遺跡発掘調査团『丹波三ツ塚遺跡Ⅲ』 兵庫県氷上郡島町 1981年
- 丹波三ツ塚遺跡発掘調査团『丹波三ツ塚遺跡Ⅳ』 兵庫県氷上郡島町 2000年
- 兵庫県氷上郡島町『久良部1号墳』 1987年
- 兵庫県氷上郡島町『三ツ塚庵寺跡環境整備事業報告書』 1987年
- 市島町公民館『天神塚跡環境整備事業報告書』 兵庫県氷上郡島町 2000年
- 兵庫県氷上郡春日町『野々間遺跡』 1990年
- 春日町歴史民俗資料館・兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所『七日市遺跡と氷上回廊』 2000年
- 梶原遺跡発掘調査团『梶原遺跡B地区出土の犁』 兵庫考古学研究会 1993年
- 藤原学「群集墳と群集廬」「八十塚古墳群の研究」関西大学文学部考古学研究室 2002年
- 中川涉他「火山古墳群」「平成9年度年報」兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 1998年
- 西口圭介他「十ノ貝遺跡」「平成13年度年報」兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 2002年
- 下山文隆他「応相寺・応相寺古墳群(2次)」「氷上郡埋蔵文化財調査概要報告書Ⅲ」氷上郡教育委員会 2000年
- (財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター「栗ヶ丘古墳群」「京都府遺跡調査報告書」第13冊 1989年
- 京都府立大学考古学研究室『東山古墳群Ⅱ』 兵庫県多可郡印南町教育委員会 2001年

第5表 高坂古墳群・高坂西遺跡出土土器一覧[1]

報告No.	持団	拓影	図版	種別	形種	出土遺構	場所	口径	器高	底径	附加記	備註	重量(g)	備考
1	第15回		図版36	須恵器	环蓋	高坂1号墳	玄室内床面奥壁	15.2	4.0	—	左	236		
2			図版36・47	須恵器	环蓋	高坂1号墳	—	15.4	4.8	—	右			
3			図版36	須恵器	环蓋	高坂1号墳	玄室内床面奥壁	14.4	4.3	—	右			
4				須恵器	环蓋	高坂1号墳	2区前庭	14.4	4.6	—	右			
5			図版36	須恵器	环蓋	高坂1号墳	玄室内床面奥壁	14.3	4.1	—	右	226		
6				須恵器	环蓋	高坂1号墳	玄室内床面奥壁	14.2	4.2	—	右	258		
7		第22回	図版36・47	須恵器	环蓋	高坂1号墳	玄室内床面奥壁	14.1	4.3	—	右	255		
8				須恵器	环蓋	高坂1号墳	3区前庭	14.0	3.4	—	左			
9			図版36	須恵器	环蓋	高坂1号墳	玄室内床面奥壁	13.2	4.4	—	右	178		
10				須恵器	环蓋	高坂1号墳	2区墳頂	13.0	3.6	—	右			
11				須恵器	环蓋	高坂1号墳	玄室内床面奥壁	13.6	4.5	—	右	205		
12				須恵器	环蓋	高坂1号墳	玄室内床面奥壁	13.6	3.9	—	右			
13		図版37		須恵器	环身	高坂1号墳	玄室	13.1	4.1	丸	15.1	左	236+	
14				須恵器	环身	高坂1号墳	玄室内床面奥壁	13.3	4.5	丸	15.3	右	318	
15				須恵器	环身	高坂1号墳	玄室内床面奥壁	13.3	5.0	丸	14.6	右	238	
16		第22回	図版38	須恵器	环身	高坂1号墳	玄室内床面奥壁	12.8	4.1	丸	14.7	右		
17			図版37	須恵器	环身	高坂1号墳	2区前庭	(13.3)	4.4	丸	14.7	右		
18				須恵器	环身	高坂1号墳	玄室内床面奥壁	13.0	4.2	丸	14.7	右	245	
19				須恵器	环身	高坂1号墳	3区墳丘	12.6	4.2	丸	14.6	右		
20				須恵器	环身	高坂1号墳	玄室	(12.7)	3.1+	丸	14.4	右		
21				須恵器	环身	高坂1号墳	3区狭道	(13.0)	3.3	丸	14.8	右		
22		図版37		須恵器	环身	高坂1号墳	2区前庭	12.3	3.9	丸	14.5	右		
23		第22回	図版37・47	須恵器	环身	高坂1号墳	玄室	12.8	4.4	丸	14.4	右	260	
24			図版37	須恵器	环身	高坂1号墳	狭道	12.4	4.2	丸	14.3	右		
25				須恵器	环身	高坂1号墳	2区前庭	11.7	4.3	丸	12.8	右	176+	
26				須恵器	环身	高坂1号墳	玄室内床面奥壁	(12.0)	4.2	丸	13.2	右		
27		図版37		須恵器	环身	高坂1号墳	玄室内床面奥壁	12.1	4.6	丸	13.8	右	205	
28				須恵器	环身	高坂1号墳	玄室内床面奥壁	11.9	4.2	丸	13.6	右		
29				須恵器	环身	高坂1号墳	玄室内床面奥壁	12.1	4.3	丸	13.6	右		
30				須恵器	环身	高坂1号墳	玄室内床面奥壁	11.9	4.2	丸	13.4	右	188	
31		図版38		須恵器	高環蓋	高坂1号墳	玄室	13.2	4.8	—	右			
32				須恵器	高环蓋	高坂1号墳	玄室	13.6	4.7	—	左	240		
33				須恵器	高环	高坂1号墳	狭道	12.9	4.0+	丸	14.5	右		
34				須恵器	高环	高坂1号墳	狭道	(12.8)	4.4+	丸	14.6	右		
35				須恵器	有蓋高环	高坂1号墳	狭道	(15.1)	9.0	丸	16.5	右		
36		図版39		須恵器	高台付椎	高坂1号墳	2区前庭	12.7	5.9+	丸				
37		図版47		須恵器	高环	高坂1号墳	2区前庭	—	3.9+	9.7				
38		第22回	図版38	須恵器	無蓋高环	高坂1号墳	1区墳指	12.8	12+	11.5				
39				須恵器	高环脚	高坂1号墳	3区狭道	—	2.3+	11.7				
40	第16回		図版42	須恵器	短頸壺	高坂1号墳	2区墳丘	—	8.4+	—	左			
41				須恵器	短頸壺	高坂1号墳	3区前庭	(9.6)	16.6	丸				
42		第22回	図版47	須恵器	壺	高坂1号墳	狭道	11.7	22.0	22.8				
43				須恵器	直口壺	高坂1号墳	2区前庭	(9.7)	6.6+	丸				
44			図版42	須恵器	壺	高坂1号墳	3区狭道	9.9	12.5+	丸				
45		第22回	図版44	須恵器	横合付垂	高坂1号墳	3区墳丘	9.9	26.5	12.8	右			
46				須恵器	壺	高坂1号墳	2区墳丘・狭道	(12.0)	7.1+	丸				
47		第22回	図版47	須恵器	足	高坂1号墳	2区狭道	—	5.9+	丸				
48			図版44	須恵器	足	高坂1号墳	2区前庭	13.0	16.2	丸	右			
49		第23回	図版39・41	須恵器	子持小鉢环蓋	高坂1号墳	狭道・前庭	10.9	4.0	—	右			
50				須恵器	子持小器环蓋	高坂1号墳	狭道	11.8	3.5	—	右			
51				須恵器	子持小器环蓋	高坂1号墳	狭道・前庭	11.1	3.7	—	右			
52			図版40	須恵器	子持小器环蓋	高坂1号墳	前庭	11.3	4.1	—	右			
53			図版39・40・41	須恵器	子持台形	高坂1号墳	2区前庭	10.8	3.5+	—	右			
54			図版42	須恵器	子持台形	高坂1号墳	2区前庭	27.4	23.2	22.0				
55			図版42	土器	小壺	高坂1号墳	玄室内朱面左壁	6.5	4.8	7.3				
56				土器	鍋	高坂1号墳	4区墳丘	—	—	—				
57	第17回		図版43	須恵器	提瓶	高坂1号墳	—	—	16.7+	—				
58		第22回	図版44	須恵器	提瓶	高坂1号墳	1区墳丘	5.1	16.5	—	右			
59			図版43	須恵器	提瓶	高坂1号墳	3区前庭	—	14.7+	—	右			
60			図版44	須恵器	提瓶	高坂1号墳	3区前庭	6.1	21.4	—				
61			図版43	須恵器	提瓶	高坂1号墳	狭道	—	20.8+	—				
62				須恵器	提瓶	高坂1号墳	1区墳指	(10.1)	24.9+	—				
63				須恵器	提瓶	高坂1号墳	狭道	—	14.6+	—				
64		第23回	図版45	須恵器	横腹	高坂1号墳	2区前庭	10.3	31.2	—	左			
65	第18回			須恵器	壺	高坂1号墳	3・4区狭道	14.1	推18.0	丸	右			
66			図版42	須恵器	壺	高坂1号墳	—	(16.0)	21.8	丸	右			
67				須恵器	短颈壺	高坂1号墳	2区前庭	15.1	21.6+	丸				
68				土器	短颈壺	高坂1号墳	2区前庭	20.7	26.4	丸				
69		第24回	図版46	須恵器	壺	高坂1号墳	2区前庭	23.5	49+	丸				
70	第19回			須恵器	壺	高坂1号墳	—	22.1	47.9	丸	右			
71				須恵器	壺	高坂1号墳	2区墳指	23.7	47.8	丸				
72	第20回		第24回	図版46	須恵器	壺	高坂1号墳	2区前庭	(24.0)	6.4+	丸			
73				須恵器	壺	高坂1号墳	2区墳指	19.1	40.1	丸				
74				須恵器	壺	高坂1号墳	—	21.5	45.6	丸	右			
75	第21回	第25回	図版45・46	須恵器	壺	高坂1号墳	2区前庭	40.0	89.7	丸				
76	第38回		図版48	須恵器	环蓋	高坂2号墳	東棺・4区周溝	12.7	4.5+	—	左			
77				須恵器	环蓋	高坂2号墳	3区 墓丘上 東棺	12.4	4.45+	—	左			
78			図版48	須恵器	环身	高坂2号墳	東棺・2区周溝	(10.6)	4.4	丸	12.4	左		
79				須恵器	环身	高坂2号墳	1区周溝	10.9	5.3	丸	13.0	左	220+	
80				須恵器	环身	高坂2号墳	西棺・墳丘	(11.3)	4.3	丸	12.9	左		
81				須恵器	环身	高坂2号墳	東棺	(10.9)	3.7+	丸	12.4			
82				須恵器	环身	高坂2号墳	4区周溝	—	3.5+	丸	12.2	右		
83			図版48	須恵器	高环蓋	高坂2号墳	3区墳丘	11.9	4.7	—	左			
84				須恵器	高环	高坂2号墳	—	12.0	5.1+	欠	13.4	左		
85		図版48	須恵器	短颈壺蓋	高坂2号墳	4区周溝	(9.9)	3.8+	—	左				
86				須恵器	短颈壺	高坂2号墳	—	(8.0)	4.7+	—	右			
87				須恵器	短颈壺	高坂2号墳	3区周溝	(8.7)	13.3+	欠				
88		図版48	須恵器	壺	高坂2号墳	2区墳指	(11.3)	6.9+	欠					

第5表 高坂古墳群・高坂西遺跡出土土器一覧(2)

報告No.	地図	拓影	図版	種別	器種	出土遺構	場所	口径	器高	底径	重の口徑	重量(g)	備考
88	第38図	図版48	須恵器	罐	高坂6号墳	3区周溝		5.7+	丸	右			
89			須恵器	大型罐	高坂2号墳	3区埴縁	(14.4)	(19.1)	丸				
90			土師器	甕	高坂2号墳	1区埴縁	8.4	2.4+	欠				
91			土師器	环身	高坂2号墳	埴丘	(13.0)	2.5	丸				
92			土師器	甕	高坂2号墳	東棺	11.7	5.5	丸				
93			土師器	甕	高坂2号墳	東棺	15.0	8.3+	欠				
94			須恵器	环蓋	高坂6号墳	4区周溝	(11.8)	2.8+	一				
95			須恵器	环蓋	高坂6号墳	3区周溝	12.3	4.3	一	左			
96			須恵器	高环蓋	高坂6号墳	3区周溝	11.7	4.2	一	左			
97			須恵器	高环蓋	高坂6号墳	1区周溝	(11.7)	5+	一	左			
98	第43図	図版49	須恵器	高环蓋	高坂6号墳	東周溝	10.0	4.5	一	右			
99			須恵器	短頭壺蓋	高坂6号墳	3区周溝	8.5	5.6	丸				
100			須恵器	短頭壺	高坂6号墳	4区周溝	8.9	5.3	丸				
101			須恵器	甕	高坂3号墳	3区埴丘	—	28.5+	丸				
102			土師器	甕	高坂6号墳	東周溝	—	3.8+	丸				
103			須恵器	环蓋	高坂3号墳	棺内上	14.7	4.1	一	右			
104			須恵器	环身	高坂6号墳	4区埴丘	11.0	3.7+	欠	13.3	左		
105			須恵器	环身	高坂4号墳	周溝東	10.1	4.3	丸	11.6	左		
106			須恵器	环身	高坂5号墳	1区	11.0	3.4+	一	左			
107			須恵器	环身	高坂7号墳	埴丘	10.2	5.2	丸	12.3	左		
108	第43図	図版47	須恵器	环身	高坂7号墳	1区埴丘	11.0	5.5	丸	12.3	左	192	
109			須恵器	环身	高坂7号墳	9号棺	11.5	5.1	一		右		
110			須恵器	环身	高坂7号墳	9号棺	12.0	4.4	一		左		
111			須恵器	高环	高坂7号墳	9号棺	10.4	6.7	9.0	12.2	右		
112			須恵器	高环	高坂7号墳	9号棺	9.8	9.8	—	11.6	右		
113			須恵器	高环	高坂7号墳	9号棺	—	—	—	—	—		
114	第65図	図版50	圓文	深鉢	SK01		(44.0)	3.8+	欠				
115			圓文	深鉢	SK01		(25.2)	2.7+	欠				
116			圓文	深鉢	SK01		(29.6)	4.7+	欠				
117			圓文	深鉢	SK01		—	3.2+	欠				
118			圓文	深鉢	SK01		(25.8)	9.3+	欠				
119			圓文	深鉢	SK01		(31.0)	8.4+	欠				
120			圓文	深鉢	SK01		—	4.2+	欠				
121			圓文	深鉢	SK01		(43.8)	9+	欠				
122			圓文	深鉢	SK01		—	2.5+	欠				
123			圓文	深鉢	SK01		(30.6)	3.4+	欠				
124	第66図	図版54	圓文	深鉢	SK01		—	2.6+	欠				
125			圓文	深鉢	SK01		—	2.6+	欠				
126			圓文	深鉢	SK01		(44.8)	8.3+	欠				
127			圓文	深鉢	SK01		—	2.2+	欠				
128			圓文	深鉢	SK01		—	3.1+	欠				
129			圓文	深鉢	SK01		(33.8)	(10)	欠				
130			圓文	深鉢	SK01		(18.2)	4.0+	欠				
131			圓文	浅鉢	SK01		—	3.5+	欠				
132			圓文	深鉢	SK02		—	—	—				
133	第67図	図版55	圓文	深鉢	S206		—	3.3+	欠				
134			圓文	深鉢	S206		—	3.1+	欠				
135			圓文	深鉢	S206		—	8.5+	欠				
136			圓文	深鉢	高坂2号墳	4区埴丘	—	3.2+	欠				
137			圓文	深鉢	高坂1号墳	玄室	—	1.9+	欠				
138			圓文	深鉢	高坂2号墳	周溝	—	3.1+	欠				
139			圓文	深鉢	殊集		(23.4)	2.7+	欠				
140			圓文	深鉢	高坂1号墳		—	2.2+	欠				
141			圓文	内窓	殊集		—	—	—				
142	第69図	図版56	弥生	甕	SH02		—	19.0+	(6.4)				
143			弥生	甕	SH02		—	3.3+	欠				
144			弥生	甕	高坂2号墳		—	4.2+	5.4				
145			弥生	甕	高坂1号墳		(16.5)	1.8+	欠				
146			弥生	甕	高坂1号墳		(15.0)	1.9+	欠				
147			弥生	甕	高坂1号墳		(42.5)	3.2+	欠				
148			弥生	甕	SH02		—	6.4+	欠				
149	第71図	図版58	須恵器	甕	SX01の北		—	27.2+	丸	左			
150			月器	甕	高坂1号墳	4区埴丘	(15.1)	5.9	5.8				
151	第74図	図版57	瓦器	壺	高坂1号墳	玄室・4区埴丘	14.7	5.8	6.3				
152			瓦器	壺	高坂1号墳	玄室・4区埴丘	14.1	5.6	5.4				
153			瓦器	壺	高坂1号墳	玄室	14.6	5.9	6.1				
154			瓦器	壺	高坂1号墳	玄室	(12.8)	3.9+	—				
155			瓦器	壺	高坂1号墳	玄室	(13.9)	4.9+	—				
156			瓦器	壺	高坂1号墳	1区埴丘	(15.6)	4.0+	—				
157			瓦器	壺	高坂1号墳	3区埴丘	—	1.1+	7.4				
158			瓦器	壺	高坂1号墳	1区埴丘	—	1.9+	5.9				
159			瓦器	壺の底部	高坂1号墳	4区埴丘	—	1.5+	(5.0)				
160			土師器	甕	高坂1号墳		4.7	0.7	丸				
161	図版57	図版57	土師器	甕	高坂1号墳		8.7	1.2	丸				
162			土師器	甕	高坂1号墳	4区埴丘	8.8	1.1	丸				
163			土師器	甕	高坂1号墳	1区埴丘	(9.8)	(3.2)	丸				
164			土師器	甕	高坂1号墳		—	1.1+	(6.3)				
165			須恵器	甕	高坂1号墳	1区埴丘	5.8	18.8+	—				
166			須恵器	甕	高坂1号墳		—	9.6+	(6.0)				
167	A	第26図	須恵器	环B	高坂1号墳	4区埴丘	—	1.2+	8.9				
168			須恵器	环B	高坂5号墳	4区埴丘	—	1.5+	(9.5)				
A			須恵器	环蓋	高坂1号墳	玄室内床面左壁	14.25	3.5	—	右			
B	B	C	須恵器	环蓋	高坂1号墳	玄室内床面左壁	14.5	4.2	—	右	205+		
C			須恵器	环身	高坂1号墳	玄室内床面左壁	12.6	5.1	丸	右	217		

第6表 高坂古墳群出土金属器一覧

報告No.	挿図	図版	種別	器種	出土遺構	場所	全長(cm)	幅(cm)	厚み(cm)	重量(g)	備考
F1	第28図	図版52	鉄器	鉄鎌	高坂1号墳	玄室内床面左壁	12.3	2.0	0.5	6.3	
F2			鉄器	鉄鎌	高坂1号墳	玄室内床面左壁	13.5	1.9	0.5	6.7	
F3			鉄器	鉄鎌	高坂1号墳	玄室内床面左壁	11.5	1.9	0.5	5.7	
F4			鉄器	鉄鎌	高坂1号墳	玄室内床面左壁	9.7	1.7	0.4	5.0	
F5			鉄器	鉄鎌	高坂1号墳	玄室内床面左壁	10.1	1.9	0.7	6.1	
F6			鉄器	鉄鎌	高坂1号墳	玄室内床面左壁	10.6	1.9	0.5	6.3	
F7			鉄器	鉄鎌	高坂1号墳	玄室内床面左壁	9.7	1.9	0.5	5.7	
F8			鉄器	鉄鎌	高坂1号墳	玄室内床面左壁	8.8	1.8	0.3	4.4	
F9			鉄器	鉄鎌	高坂1号墳	玄室内床面左壁	8.2	1.9	0.4	5.0	
F10			鉄器	鉄鎌	高坂1号墳	玄室内床面左壁	4.9	1.7	0.2	3.8	
F11			鉄器	鉄鎌	高坂1号墳	玄室内床面左壁	4.5	2.1	0.4	3.7	
F12			鉄器	鉄鎌	高坂1号墳	玄室内床面左壁	3.0	0.6	0.4	1.0	
F13			鉄器	鉄鎌	高坂1号墳	玄室内床面奥壁	13.9	3.5	0.5	14.6	
F14			鉄器	鉄鎌	高坂1号墳	玄室内床面奥壁	13.4	3.1	0.5	14.4	
F15			鉄器	鉄鎌	高坂1号墳	玄室内床面左壁	7.4	1.0	0.4	4.0	
F16			鉄器	鉄鎌	高坂1号墳	玄室内床面左壁	2.2	0.6	0.4	1.0	
F17			鉄器	鉄鎌	高坂1号墳	玄室内床面左壁	2.8	0.7	0.4	1.1	
F18		図版53	鉄器	刀子	高坂1号墳	玄室内床面左壁	5.9	1.6	0.8	9.2	
F19			鉄器	簪	高坂1号墳	玄室内床面奥壁	6.5	6.4	0.8	27.7	
F20	第29図	図版52	鉄器	鉄鎌	高坂1号墳	4区玄室内床面	9.6	2.0	0.5	7.7	
F21			鉄器	鉄鎌の柄	高坂1号墳	玄室内	3.1	1.0	0.5	1.9	
F22			鉄器	鉄鎌の柄	高坂1号墳	玄室内	5.0	1.0	0.7	2.6	
F23			鉄器	鉄鎌	高坂1号墳	1区玄室内	4.5	3.0	0.4	3.8	
F24			鉄器	鉄鎌	高坂1号墳	1区玄室内	4.7	1.7	0.2	3.1	
F25			鉄器	鉄鎌	高坂1号墳	1区玄室内	3.5	2.3	0.3	4.6	
F26		図版53	鉄器	鋸	高坂1号墳	1区玄室内	2.1	1.8	0.1	2.0	
F27			鉄器	刀子	高坂1号墳	4区玄室内床面	6.1	1.4	0.8	7.6	
F28			鉄器	刀子の柄	高坂1号墳	玄室内	2.9	1.1	0.7	4.0	
F29			鉄器	刀子の柄	高坂1号墳	4区玄室内床面	2.2	1.0	0.7	3.0	
F30			青銅器	耳環	高坂1号墳	2区玄室内床面	2.5	2.5	0.4	3.5	
F31			鉄器	鉄斧	高坂1号墳	填丘	18.5	6.5	4.9	985.0	
F32	第38図	図版53	鉄器	鉄鎌	高坂2号墳	東棺棺外	9.1	2.9	1.0	7.5	
F33			鉄器	鉄鎌	高坂2号墳	東棺棺外	8.7	2.8	0.5	7.3	
F34			鉄器	鉄鎌	高坂2号墳	東棺棺内東端	13.9	1.4	0.8	10.0	
F35			鉄器	刀子	高坂2号墳	東棺棺内東端	7.8	2.2	1.6	9.5	
F36			鉄器	刀子	高坂7号墳	南棺	9.8	1.9	1.3	7.4	
F37			鉄器	刀子	高坂9号墳		7.0	1.7	0.8	9.9	

第7表 高坂1号墳出土玉一覧

No.	挿図	図版	種別	器種	材質	出土遺構	場所	全長	直径a	直径b	孔径a	孔径b	重量(g)	色	備考
J1	第30図	図版51	玉	勾玉	石英	高坂1号墳	玄室内3区床面	32.0	13.2	10.6	2.9	1.7	10.20		
J2	第30図	図版51	玉	勾玉	瑪瑙	高坂1号墳	玄室内南北壁	32.5	10.8	8.7	3.0	1.5	7.18		
J3	第30図	図版51	玉	勾玉	瑪瑙	高坂1号墳	玄室内1区床面	25.8	7.2	6.6	2.5	1.2	3.17		
J4	第30図	図版51	玉	切子玉	水晶	高坂1号墳	通道	23.1	17.1	16.1	4.3	2.5	8.25		
J5	第30図	図版51	玉	切子玉	水晶	高坂1号墳	玄室内	19.5	14.3	13.5	3.7	1.5	4.95		
J6	第30図	図版51	玉	切子玉	水晶	高坂1号墳	玄室内4区床面	16.8	13.8	13.6	4.6	2.5	3.99		
J7	第30図	図版51	玉	切子玉	水晶	高坂1号墳	通道	17.2	13.2	13.1	3.6	1.0	3.66		
J8	第30図	図版51	玉	切子玉	水晶	高坂1号墳	玄室内2区床面	16.8	13.4	12.0	3.7	1.2	3.37		
J9	第30図	図版51	玉	管玉	碧玉	高坂1号墳	2区墳丘	26.0	8.7	8.4	2.5	1.1	3.64	やや淡い緑色	
J10	第30図	図版51	玉	管玉	碧玉	高坂1号墳	玄室内2区床面	26.7	9.0	7.8	2.6	1.0	3.08	暗オリーブ灰	
J11	第30図	図版51	玉	管玉	碧玉	高坂1号墳	通道	23.0	6.3	7.8	3.4	1.0	2.60	やや淡い暗緑灰	
J12	第30図	図版51	玉	管玉	碧玉	高坂1号墳	通道	22.4	8.8	8.8	2.6	0.4	3.31	やや淡い暗緑灰	
J13	第30図	図版51	玉	管玉	碧玉	高坂1号墳	2区墳丘	19.6	9.8	9.3	2.2	0.6	3.75	暗緑灰	
J14	第30図	図版51	玉	管玉	碧玉	高坂1号墳	玄室内床面	21.2	8.6	8.5	2.4	1.1	2.77	緑灰	
J15	第30図	図版51	玉	管玉	碧玉	高坂1号墳	玄室内4区床面	19.2	7.2	6.9	2.8	0.9	1.82	暗緑灰	
J16	第30図	図版51	玉	丸玉	土	高坂1号墳	通道	7.6	8.6	8.2	1.8	1.6	0.55	黒	
J17	第30図	図版51	玉	丸玉	土	高坂1号墳	通道	7.8	8.6	8.4	1.3	1.3	0.58	黒	
J18	第30図	図版51	玉	丸玉	土	高坂1号墳	通道	7.5	8.4	8.2	1.2	1.2	0.53	黒	
J19	第30図	図版51	玉	丸玉	土	高坂1号墳	通道	7.6	9.0	8.2	1.8	1.4	0.51	黒	
J20	第30図	図版51	玉	丸玉	土	高坂1号墳	通道	6.7	8.2	8.0	1.4	1.2	0.45	黒	
J21	第30図	図版51	玉	丸玉	土	高坂1号墳	通道	6.5	8.5	8.2	1.5	1.3	0.46	黒	
J22	第30図	図版51	玉	丸玉	土	高坂1号墳	通道	5.7	7.9	7.9	4.0	1.5	0.37	黒	
J23	第30図	図版51	玉	丸玉	土	高坂1号墳	通道	6.7	8.0	8.0	1.5	1.2	0.42	黒	
J24	第30図	図版51	玉	丸玉	土	高坂1号墳	通道	6.3	6.1	7.5	1.2	1.2	0.36	黒	
J25	第30図	図版51	玉	丸玉	土	高坂1号墳	通道	6.3	7.7	7.5	1.2	1.1	0.40	黒	
J26	第30図	図版51	玉	丸玉	土	高坂1号墳	通道	5.8	7.8	7.5	1.1	1.1	0.37	黒	
J27	第30図	図版51	玉	丸玉	土	高坂1号墳	通道	5.0	7.9	6.7	1.2	1.2	0.27	黒	
J28	第30図	図版51	玉	丸玉	土	高坂1号墳	玄室内1区床面	6.1	8.0	7.7	1.5	1.4	0.36	黒	

第8表 高坂西遺跡出土石器一覧

報告No.	挿図	図版	種別	器種	材質	出土遺構	場所	長さ	幅	厚さ	重量(g)	備考
S1	第70図	図版57	石器	石鎚	サヌカイト	高坂1号墳	墳丘	18.5	15.3	3.0	0.93	
S2	第70図	図版57	石器	石鎚	サヌカイト	SH02		12.5	12.8	3.7	0.54	
S3	第70図	図版57	石器	石鎚	サヌカイト	9号棺		29.5	16.2	6.3	2.25	
S4	第70図	図版57	石器	磨石	砂岩	高坂1号墳	通道	79.0	47.3	28.0	147.86	
S5	第70図	図版57	石器	素材	水晶	高坂2号墳	玄室	28.3	36.5	18.5	17.63	

## 報告書抄録

ふりがな	たかさかこふんぐん							
書名	高坂古墳群							
副書名	国道175号竹田バイパス公共特殊改良一種事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
卷次								
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告							
シリーズ番号	第281冊							
編著者名	篠宮 正・西口和彦・三辻利一・矢作健二・石岡智武・降幡順子							
編集機関	兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所							
所在地	〒652-0032 兵庫県神戸市兵庫区荒田町2丁目1番5号 TEL.078-531-7011							
発行年月日	西暦2005年(平成16年)3月18日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
たかさかこふんぐん 高坂古墳群	ひょうごけん 兵庫県 たんばし 丹波市	28223	810002 810138 810143	35度 14分 37秒	135度 7分 28秒	19980819 19981125	1,983m <sup>2</sup>	国道175号 竹田バイパス 公共特殊改良 一種事業
たかさかにしいせき 高坂西遺跡			810144					
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
高坂古墳群	古墳	古墳時代	円墳(横穴式石室) 円墳(木棺直葬) 木棺墓 石棺墓	須恵器 土師器 金属器(鉄鏃・刀子・簪・耳環) 玉類(勾玉・管玉・切子玉・丸玉)				
高坂西遺跡	集落	縄文時代 弥生時代 古墳時代 古代 中世	土坑・陥穴 風倒木痕 竪穴建物	縄文土器・磨石 弥生土器・石鏃 土師器・須恵器 瓦器				

# 図 版



1 高坂古墳群 遠景（東から）



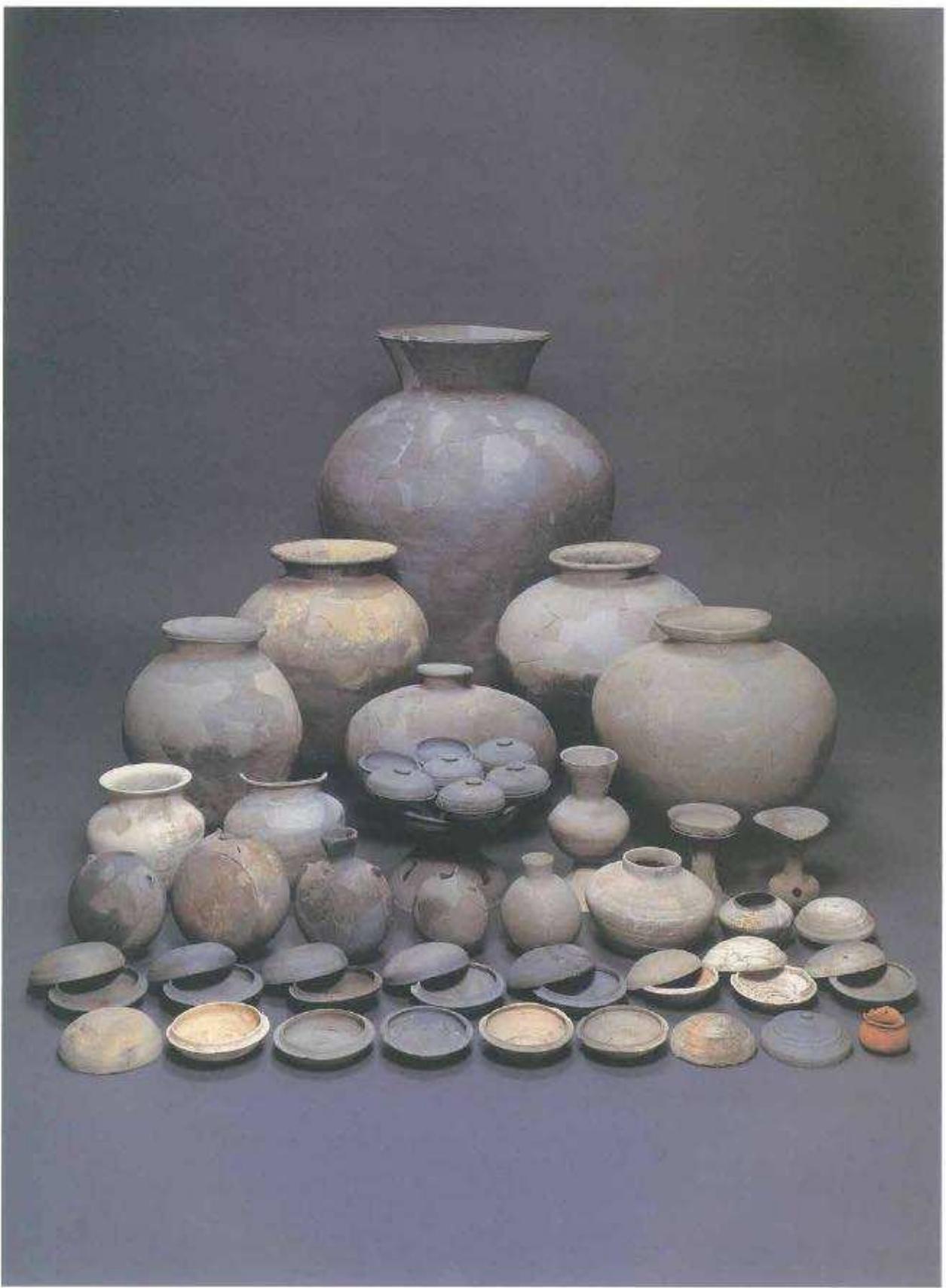
2 高坂古墳群 遠景（北東から）



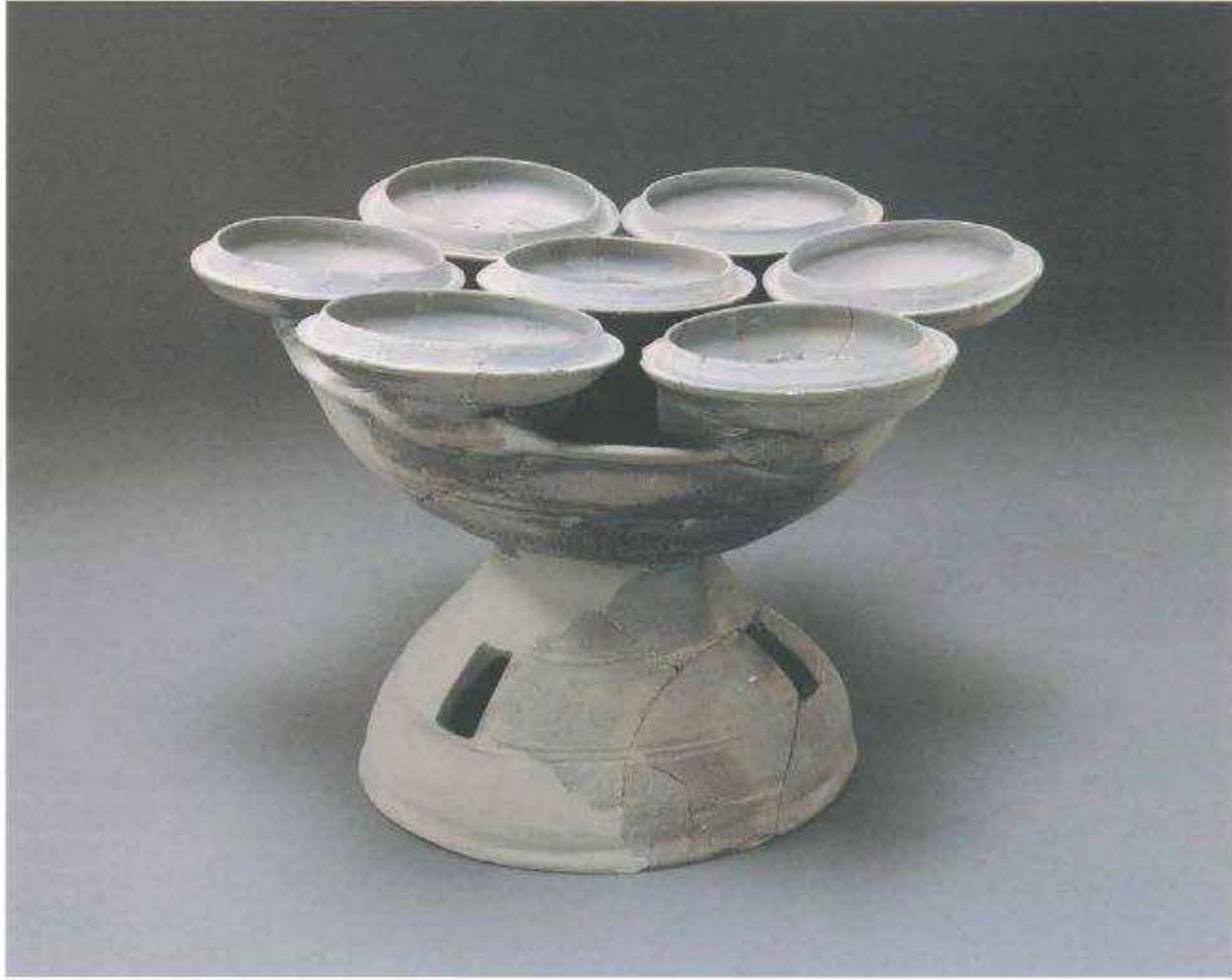
3 高坂1号墳 全景（南東から）



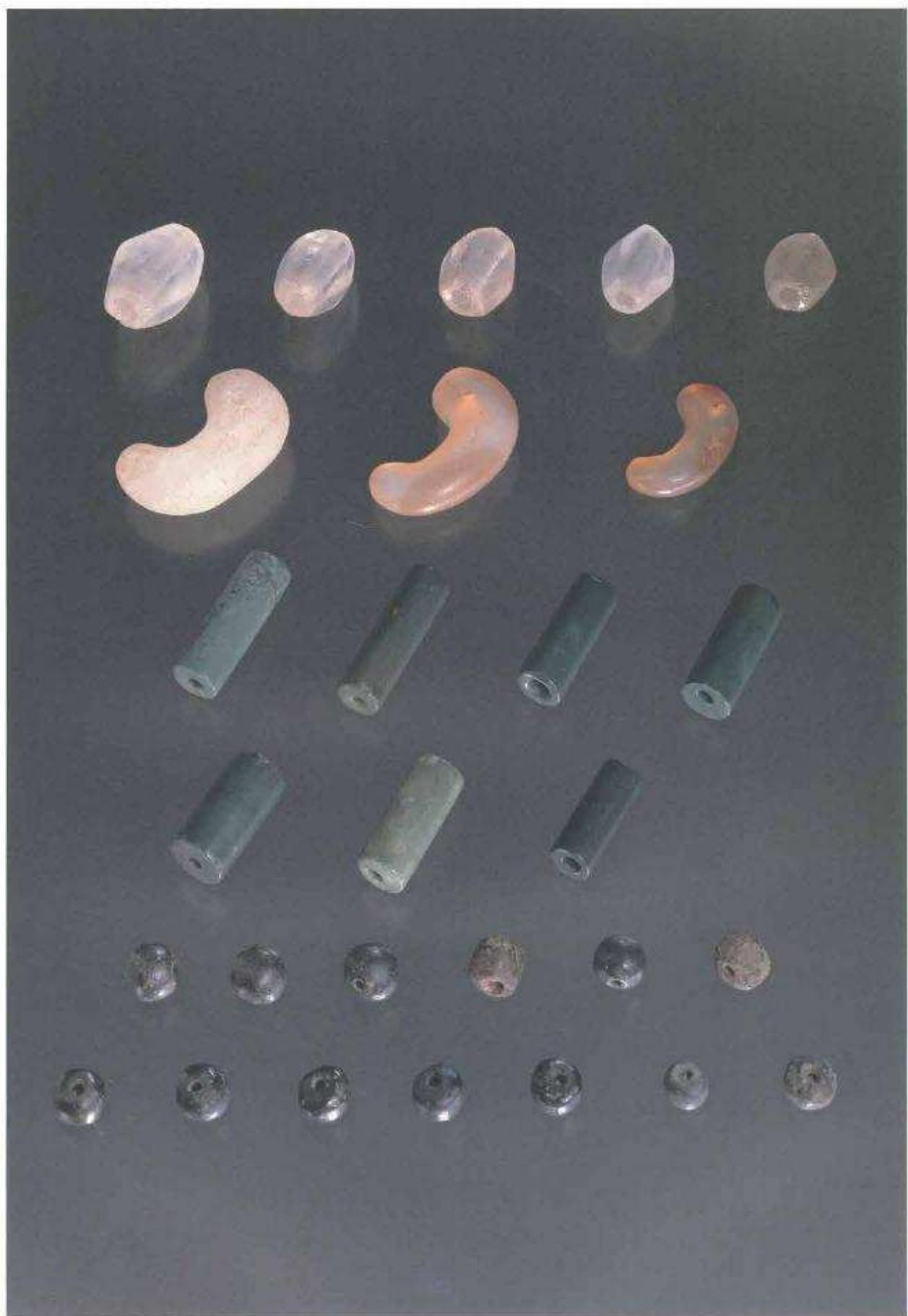
4 高坂1号墳 埋葬施設 全景（北から）



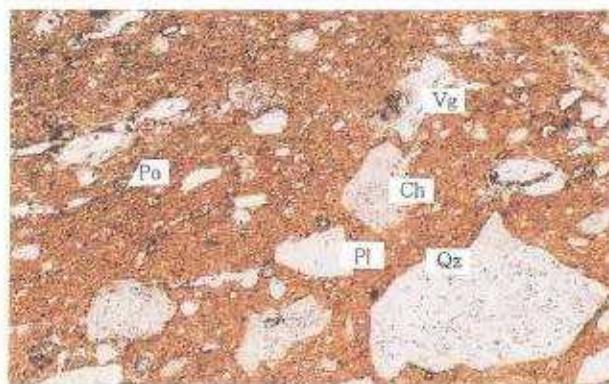
高坂1号墳 出土土器



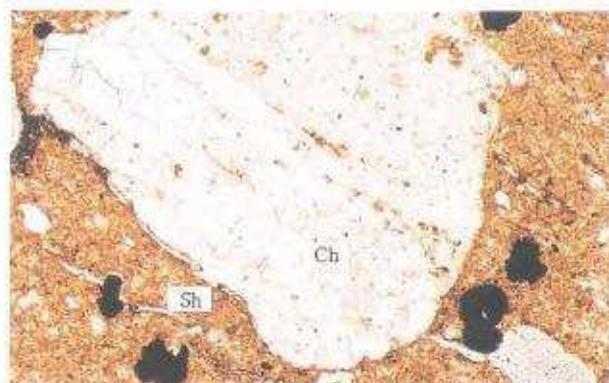
高坂1号墳 出土子持器台



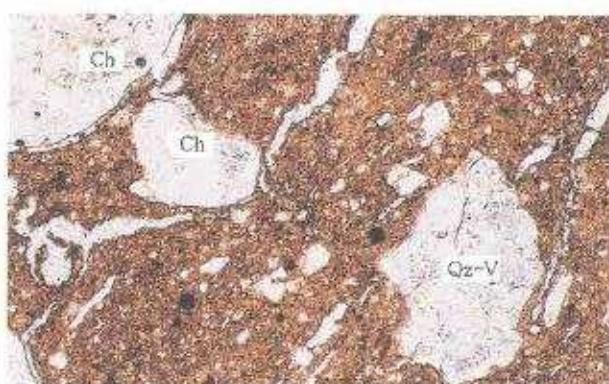
高坂1号墳 出土玉



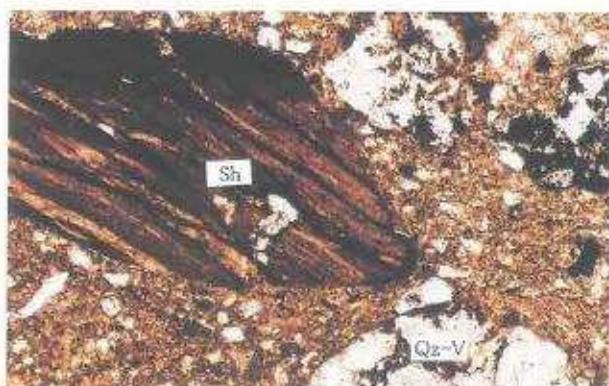
1.142 S H01 弥生



2.118 SK01 縄文晩期(突帯文)



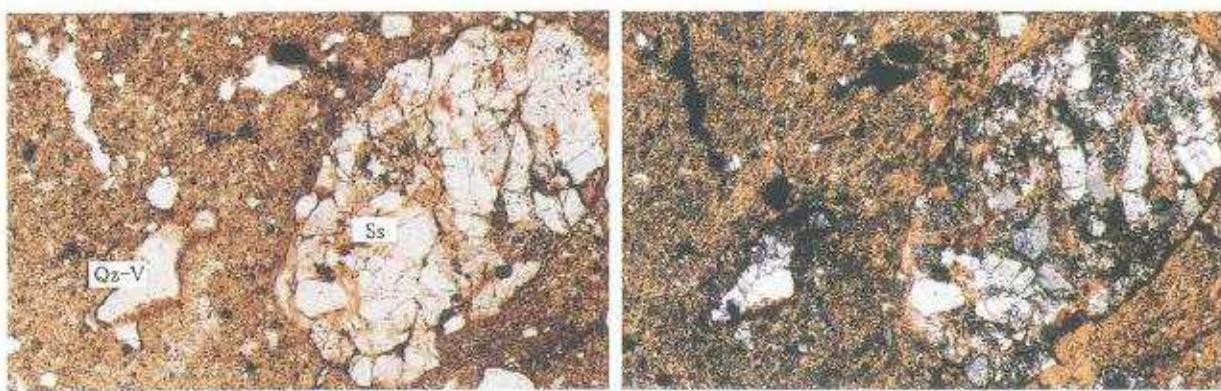
3.114 SK01 縄文晩期(突帯文)



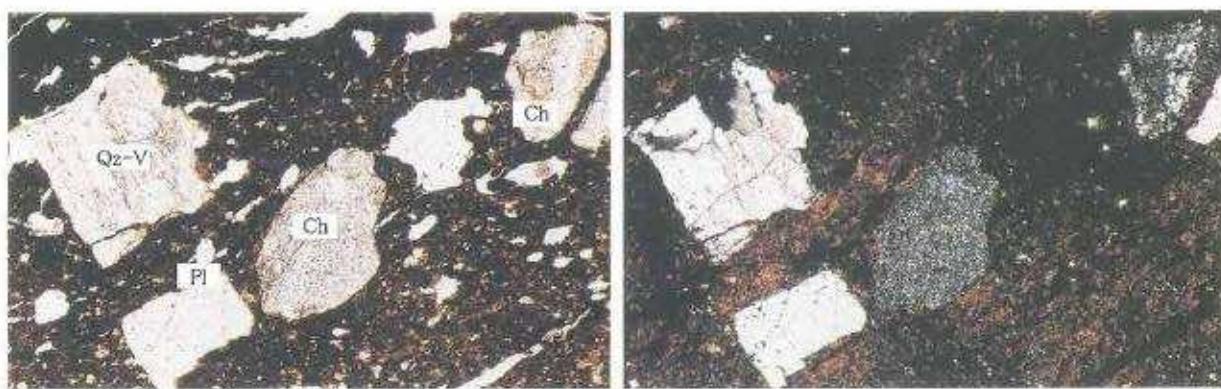
4.116 SK01 縄文晩期(突帯文)

0.5mm

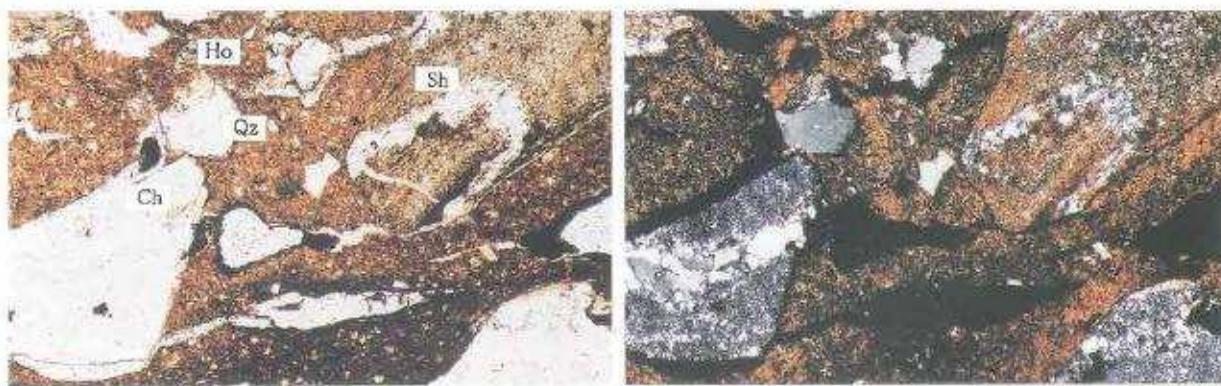
Qz : 石英、Pl : 斜長石、Ch : チャート、Sh : 黒岩、Qz-V : 脱石英、Vg : 火山ガラス、Po : 植物珪酸体  
写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。



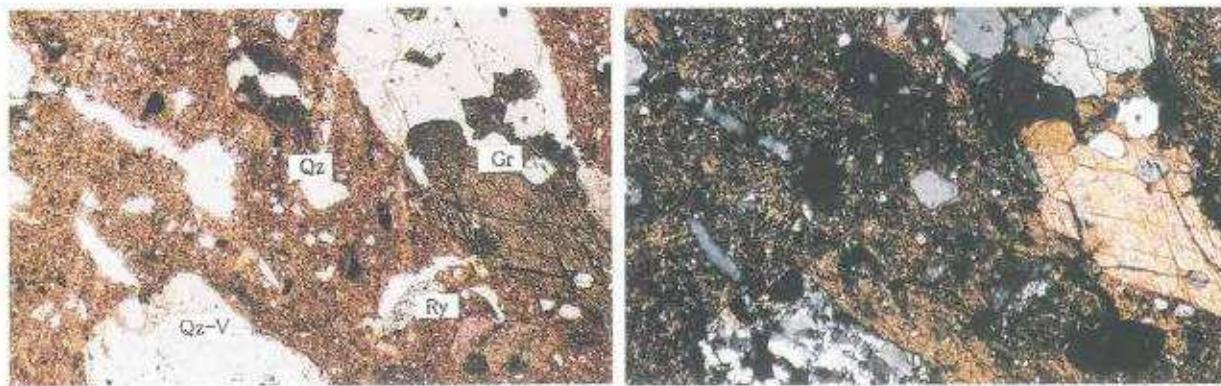
5.126 SK01 繩文晩期(突帯文)



6.123 SK01 繩文晩期(突帯文)



7.119 SK01 繩文晩期(突帯文)

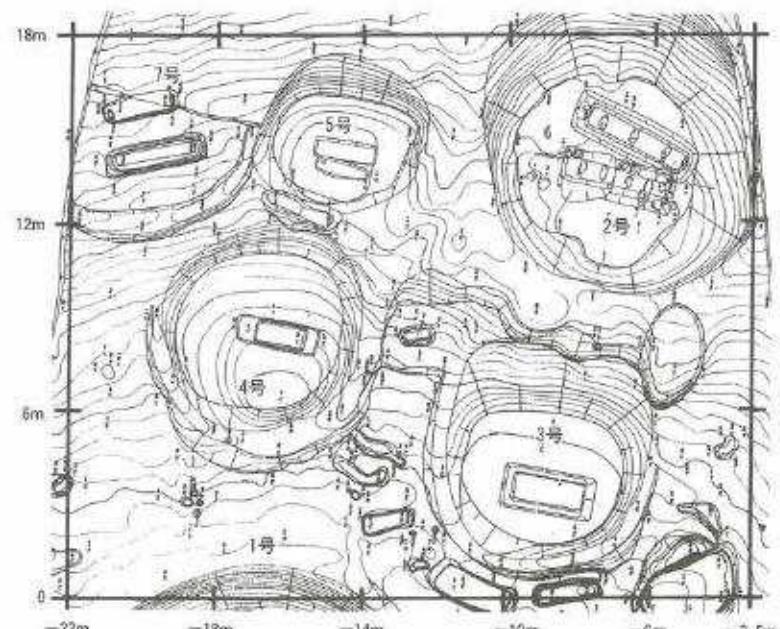
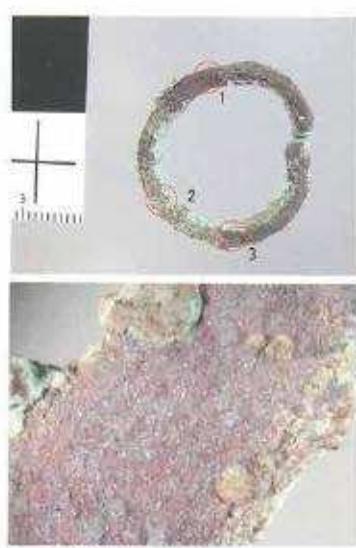
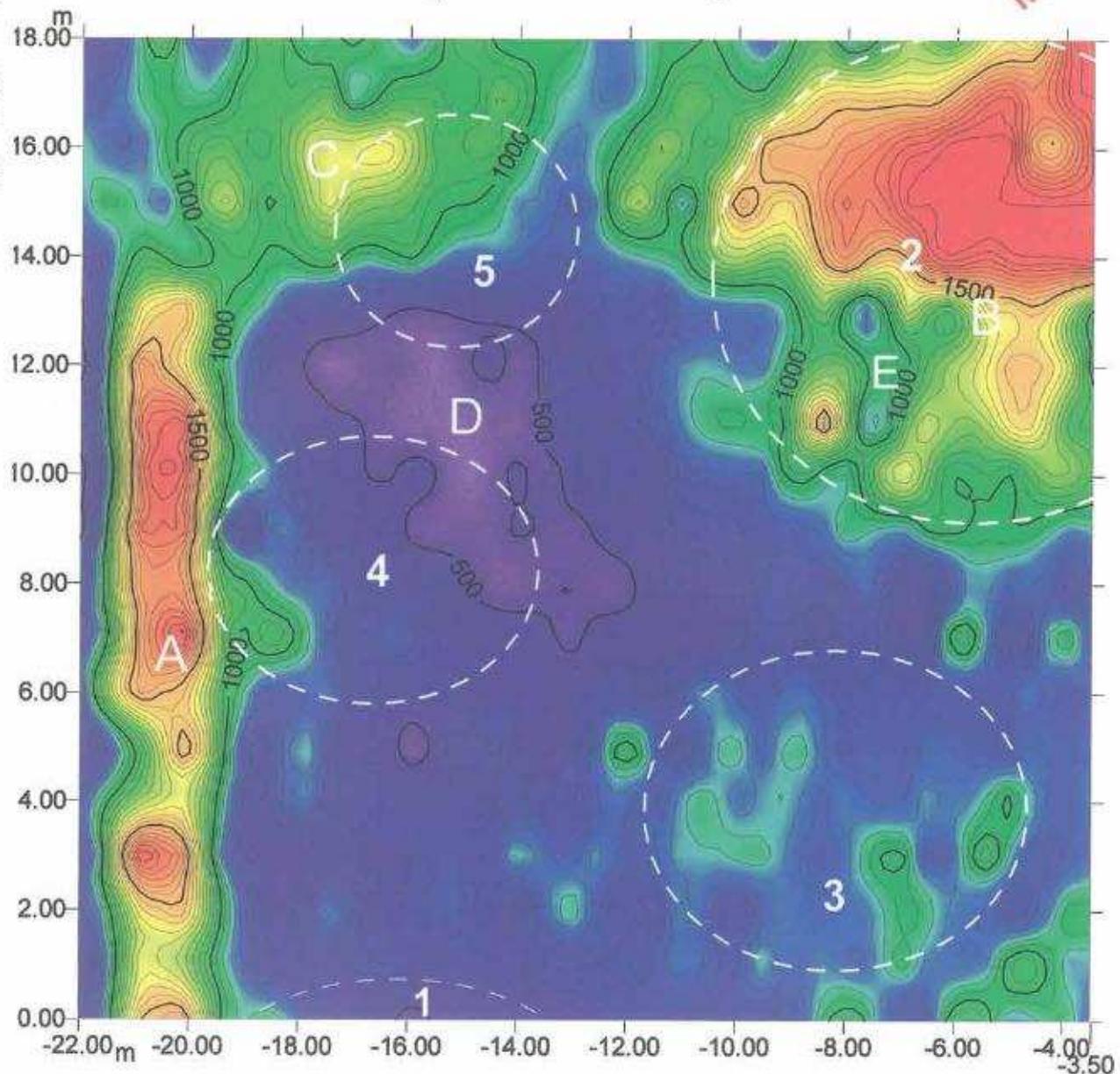


8.121 SK01 繩文晩期(突帯文)

0.5mm

Qz : 石英, Pl : 鈣長石, Ho : 角閃石, Ch : チャート, Sh : 黄岩, Ss : 砂岩, Ry : 流紋岩。  
Qz-V : 漆石英, Gr : 花崗岩。 写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

# TAKASAKA RM(Wenner-1.0m)

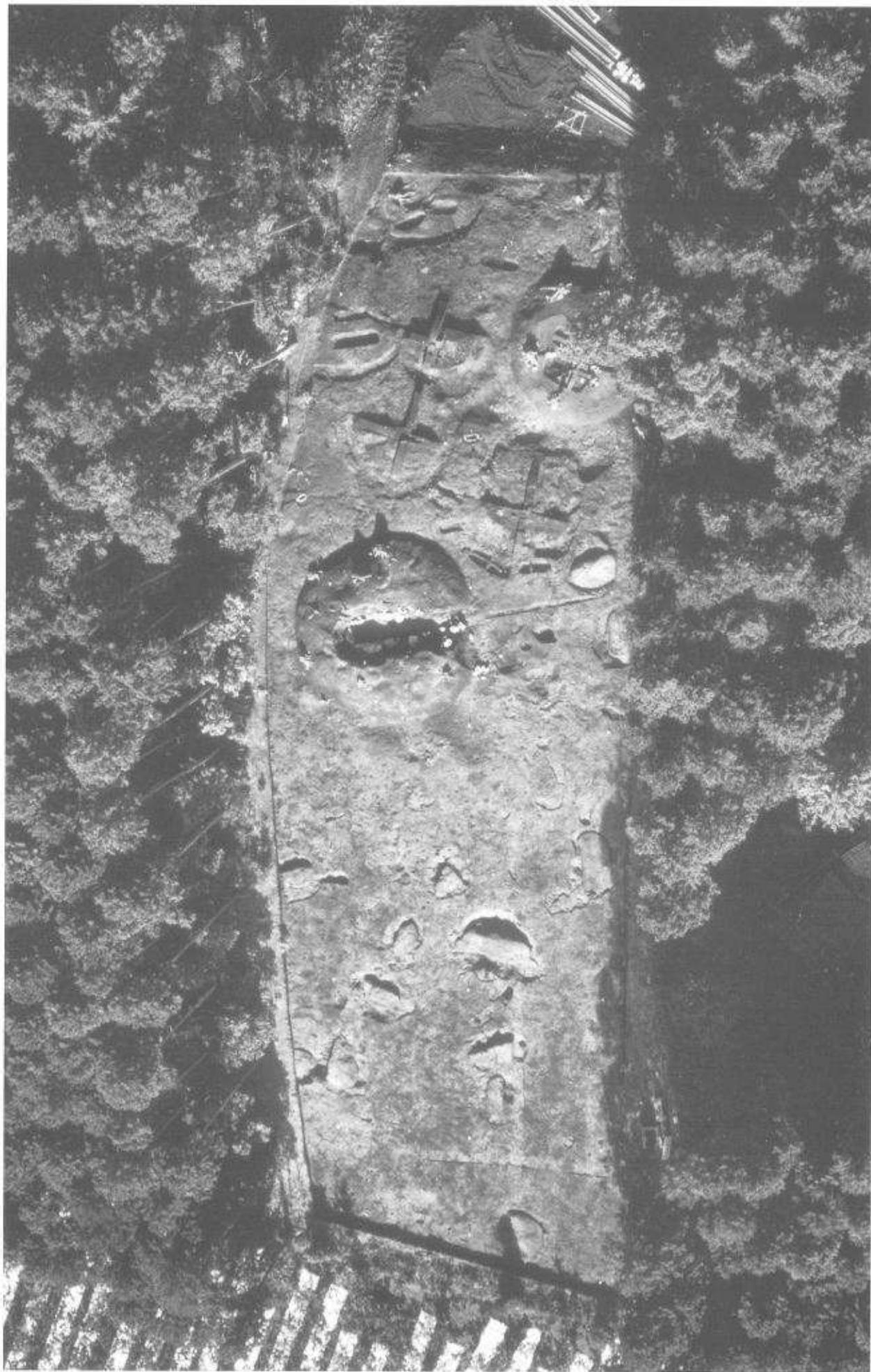




5 高坂古墳群 遠景（南から）



6 高坂古墳群 遠景（東から）



7 高坂古墳群 全景（上が北東）



8 高坂古墳群 全景（北東から）



9 高坂古墳群 全景（南西から）



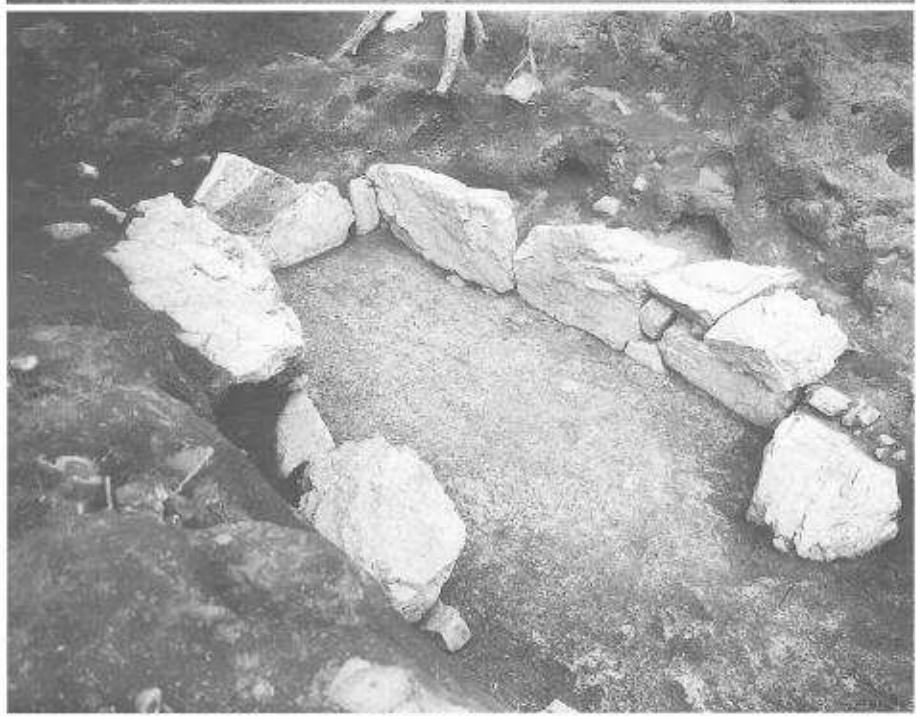
10 高坂1号墳 調査前（南西から）



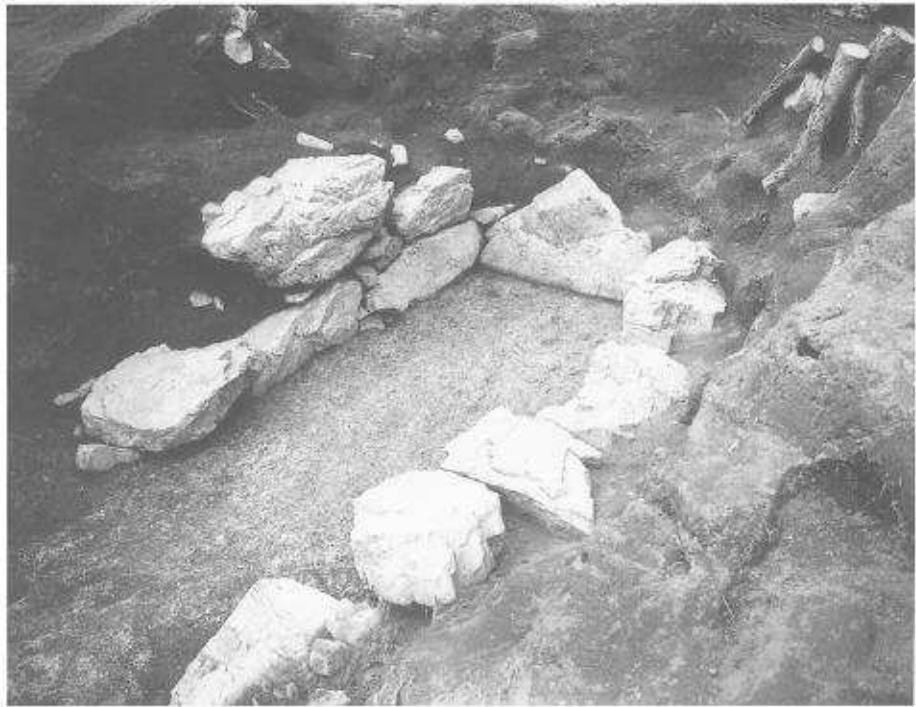
11 高坂1号墳 全景（南西から）



12 高坂1号墳 全景  
(南東から)



13 高坂1号墳 石室  
(南から)



14 高坂1号墳 石室  
(東から)



15 高坂1号墳 石室奥壁  
(南東から)



16 高坂1号墳 石室右側壁  
(北東から)



17 高坂1号墳 石室左側壁  
(南西から)



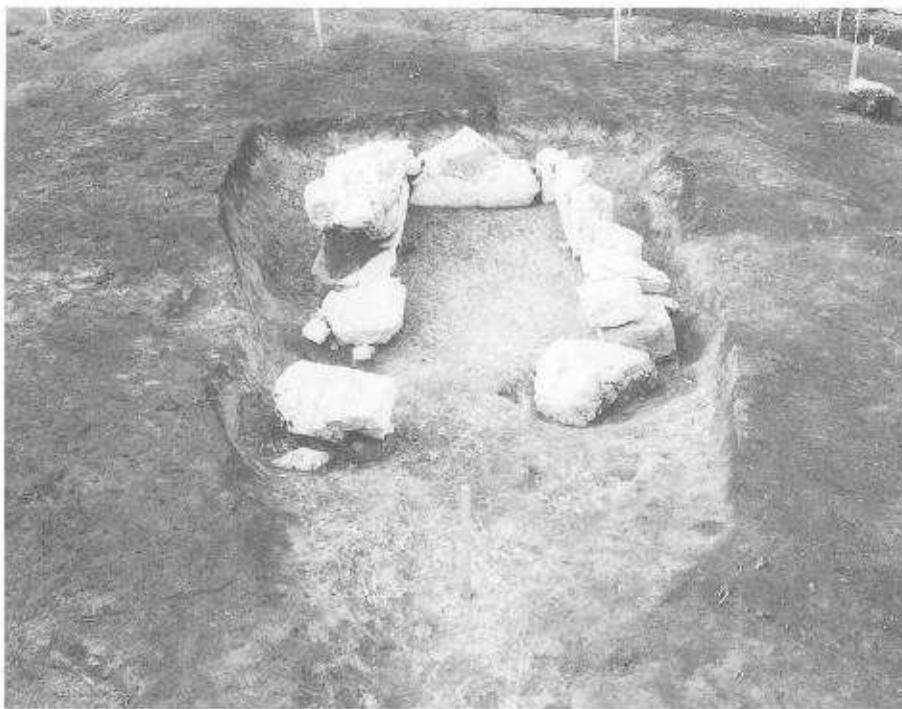
18 高坂 1 号墳 墳丘盛土断面  
(南東から)



19 高坂 1 号墳 南西側墳丘盛土断面  
(南東から)



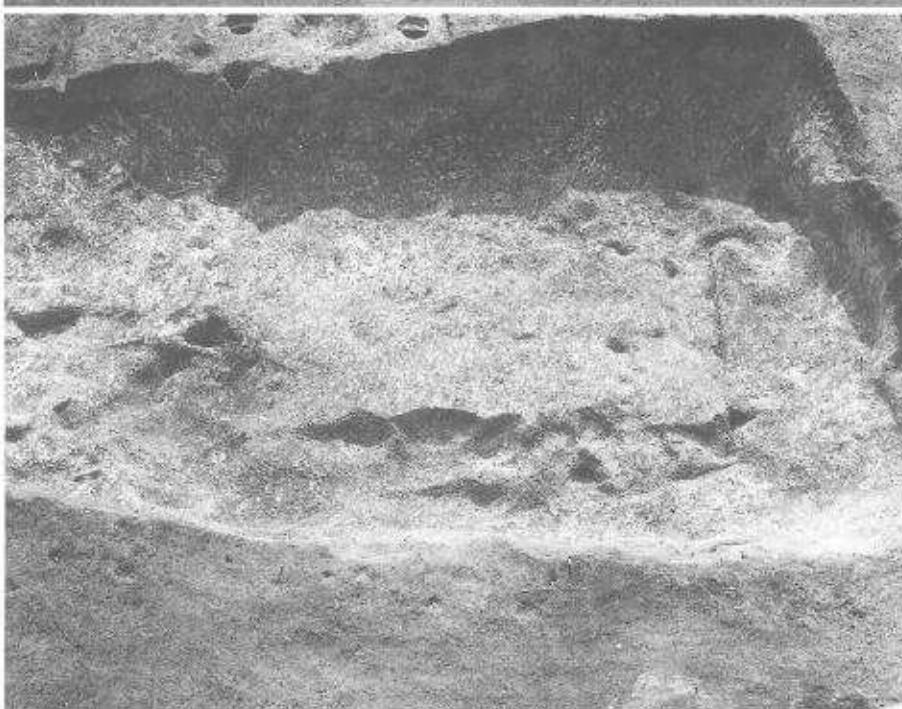
20 高坂 1 号墳 北東側墳丘盛土断面  
(南東から)



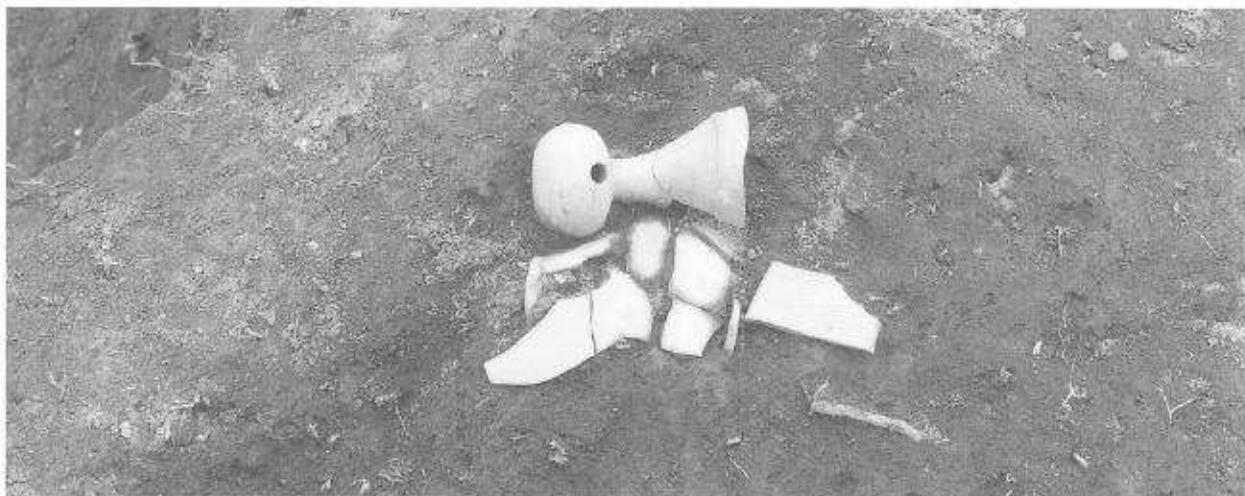
21 高坂1号墳 石室掘形  
(南東から)



22 高坂1号墳 石室掘形  
(北東から)



23 高坂1号墳 石室掘形完掘  
(北東から)



24 高坂1号墳 遺物出土状況（南東から）



25 高坂1号墳 草道（南東から）



26 高坂 2 号墳 調査前 全景  
(北西から)



27 高坂 2 号墳 東埋葬施設墓標  
(北から)



28 高坂 2 号墳 下層周溝  
(北西から)



29 高坂 2号墳 埋葬施設（北から）



30 高坂 2号墳 埋葬施設（西から）



31 高坂 2 号墳 東埋葬施設 鉄鐵出土状況（東から）



32 高坂 2 号墳 東埋葬施設（南から）



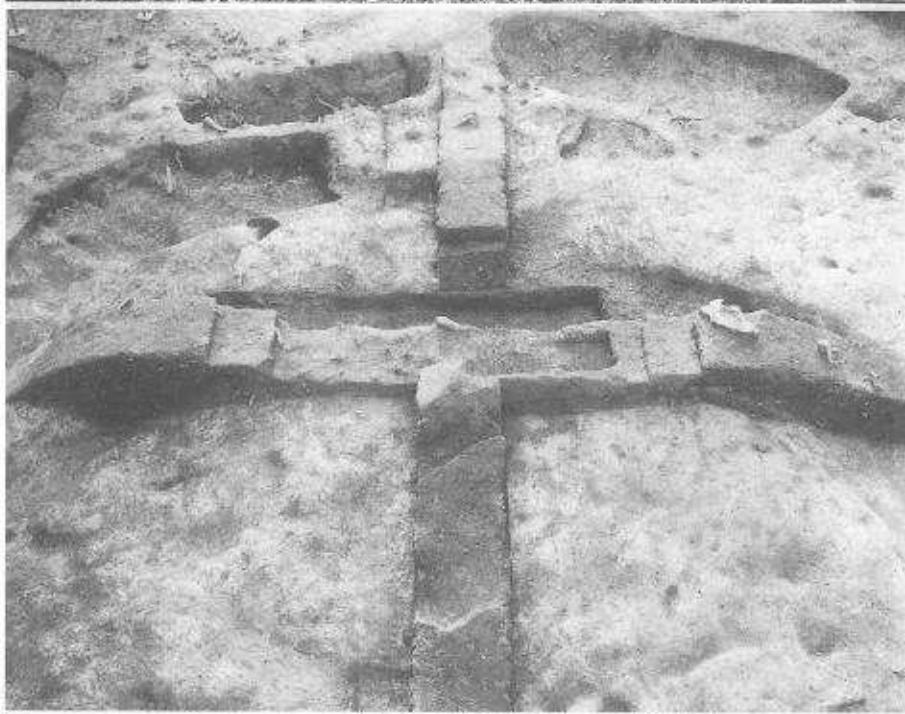
33 高坂 2 号墳 西埋葬施設 南半（北から）



34 高坂 2 号墳 西埋葬施設 南半（東から）



35 高坂 3 号墳 調査前 全景  
(西から)



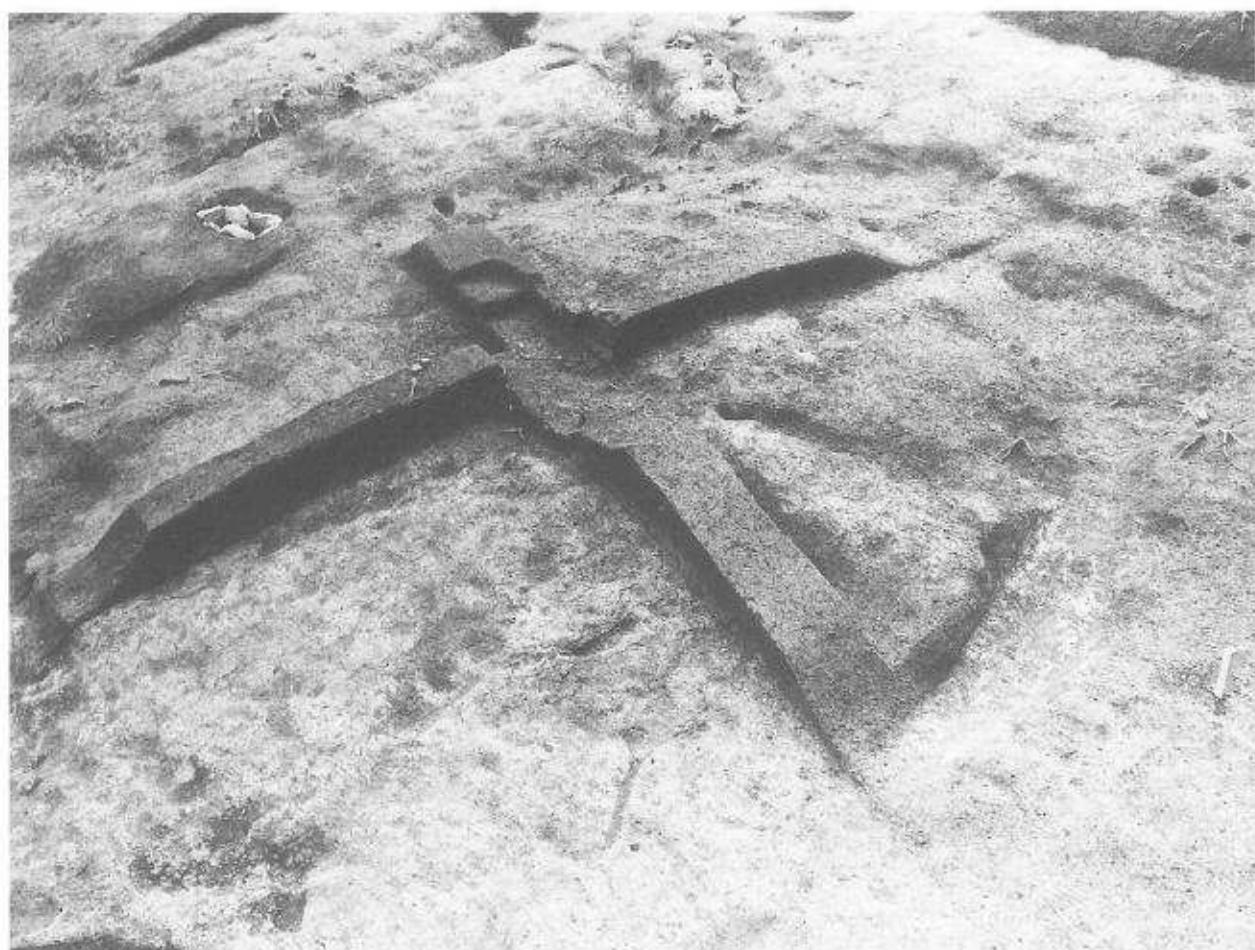
36 高坂 3 号墳  
(北東から)



37 高坂 3 号墳・6 号墳  
(北西から)



38 高坂 4号墳・5号墳 調査前 全景（南西から）



39 高坂 4号墳 全景（北西から）



40 高坂4号墳・5号墳 調査前 全景（南西から）



41 高坂5号墳 埋葬施設（北西から）



42 高坂 7号墳 全景（北東から）



43 高坂 7号墳 埋葬施設（北東から）



44 高坂 7 号墳 全景（南東から）



45 高坂 7 号墳 埋葬施設（北西から）



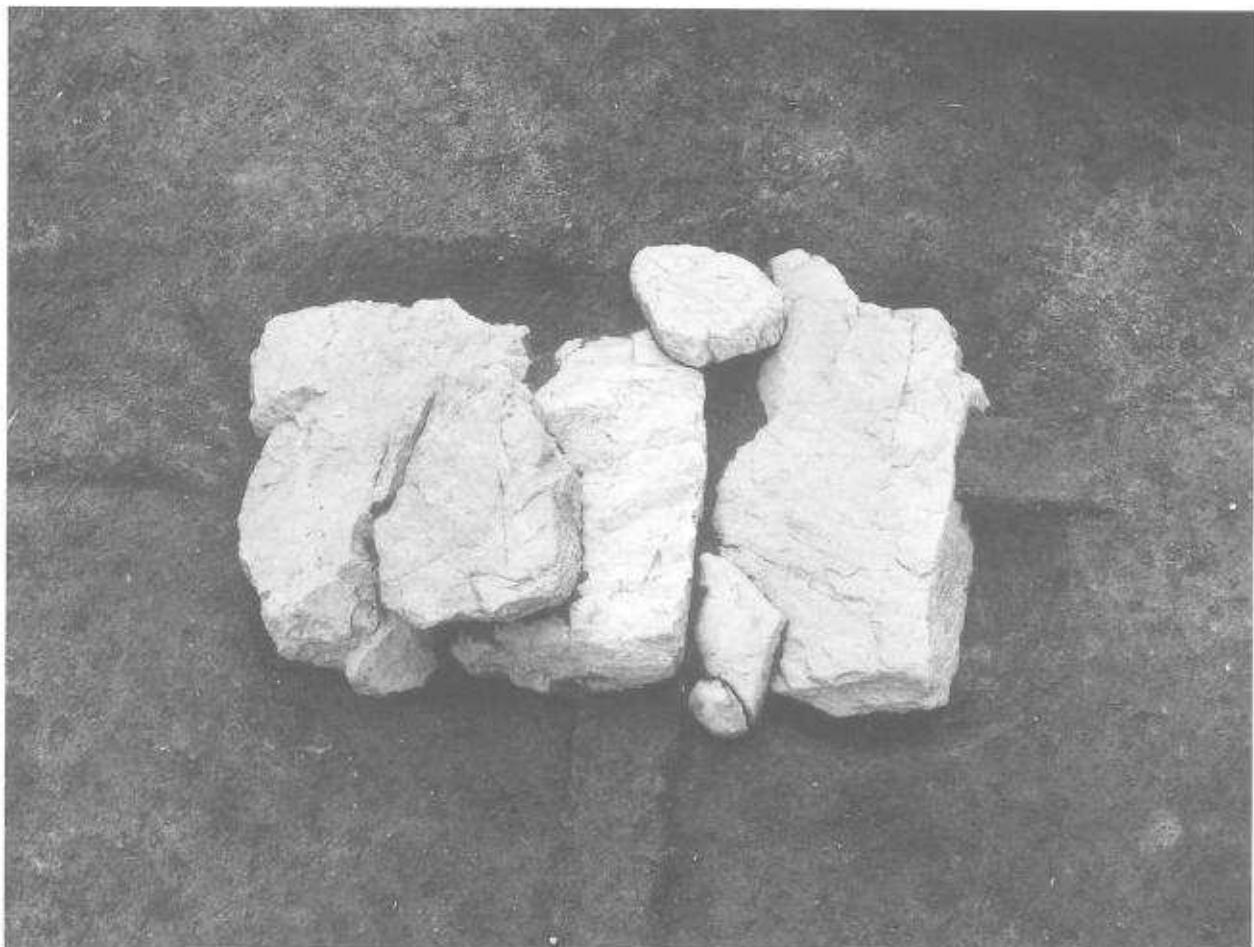
46 8号埋葬施設  
(北東から)



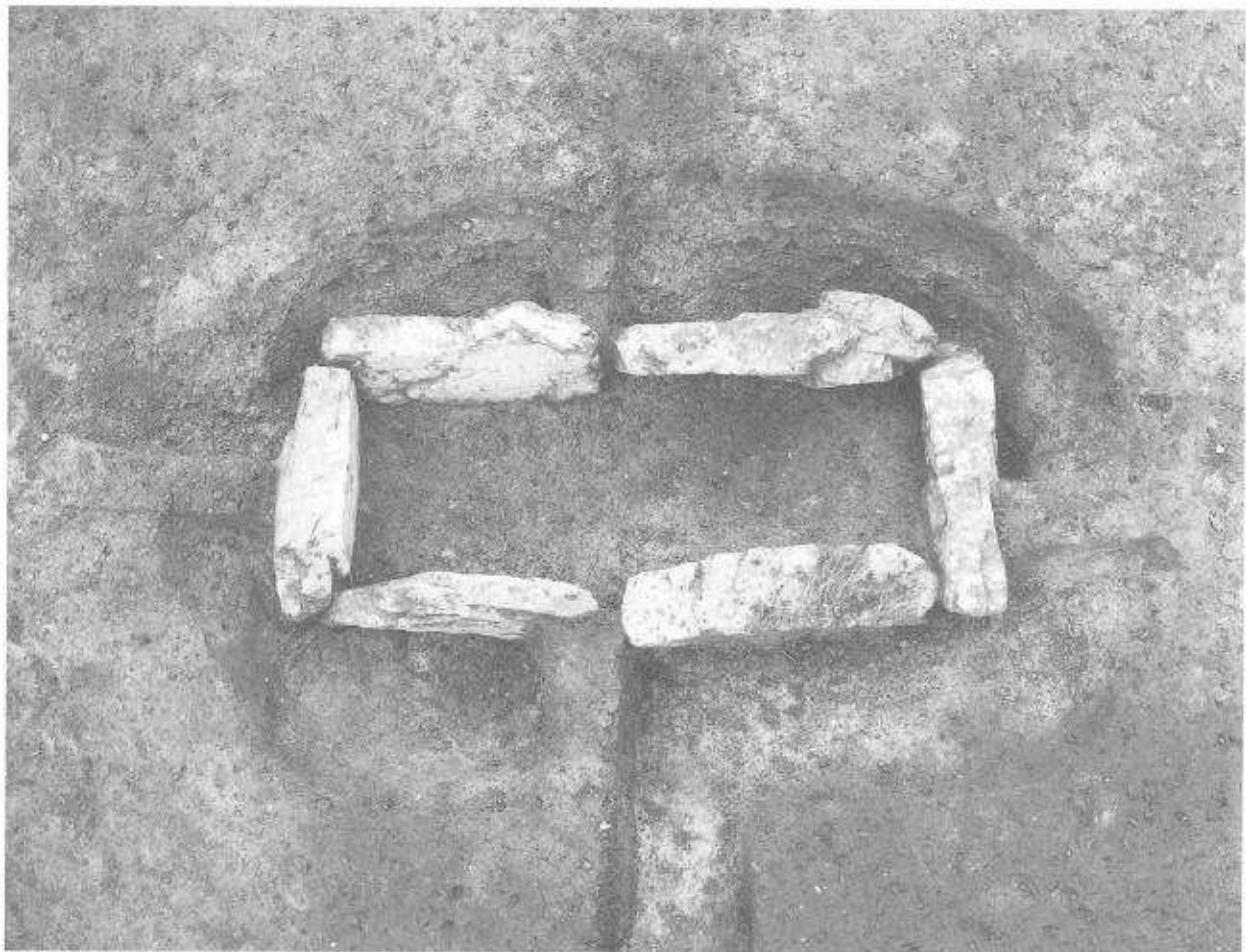
47 9号埋葬施設  
(北東から)



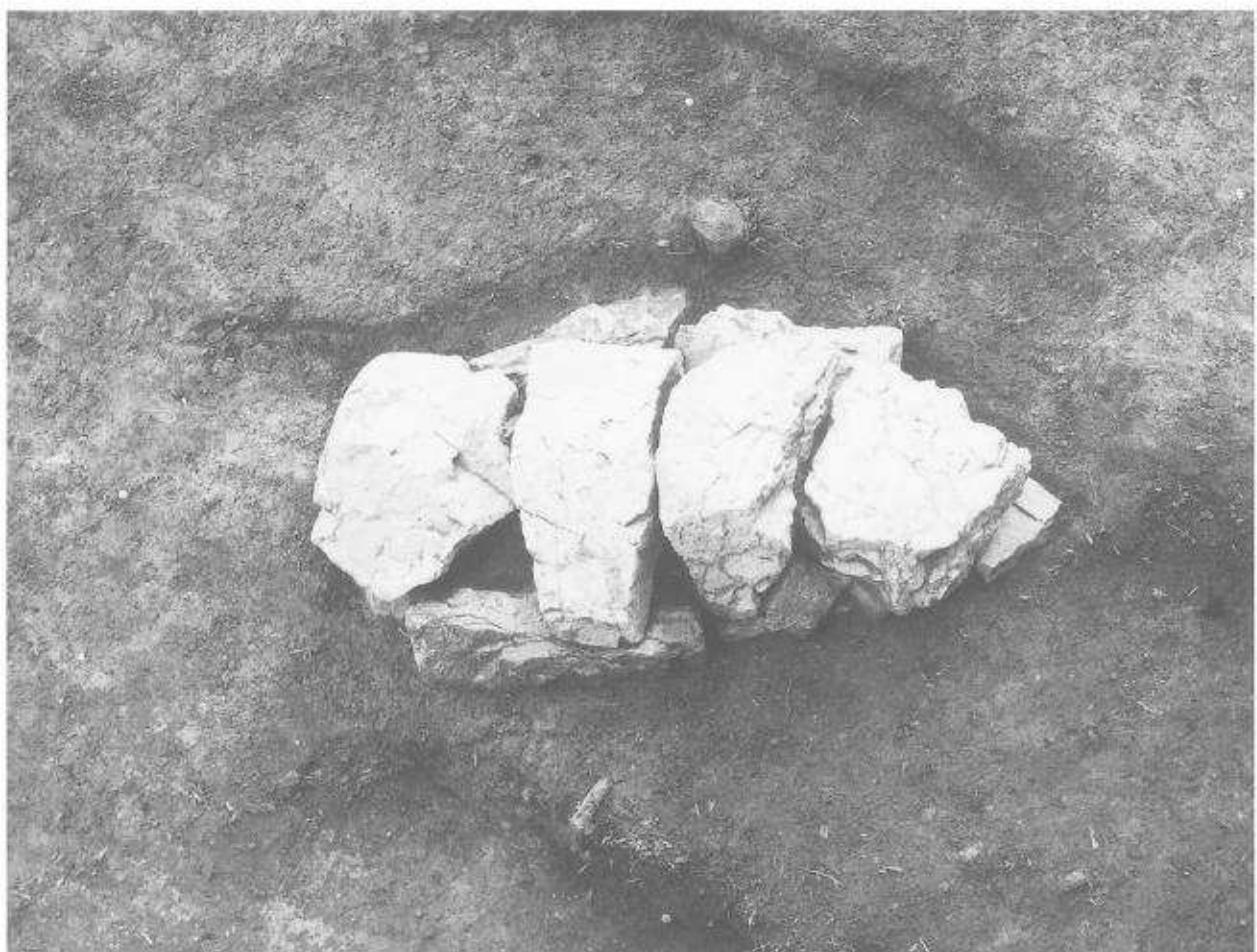
48 8号埋葬施設 土器出土状況  
(北東から)



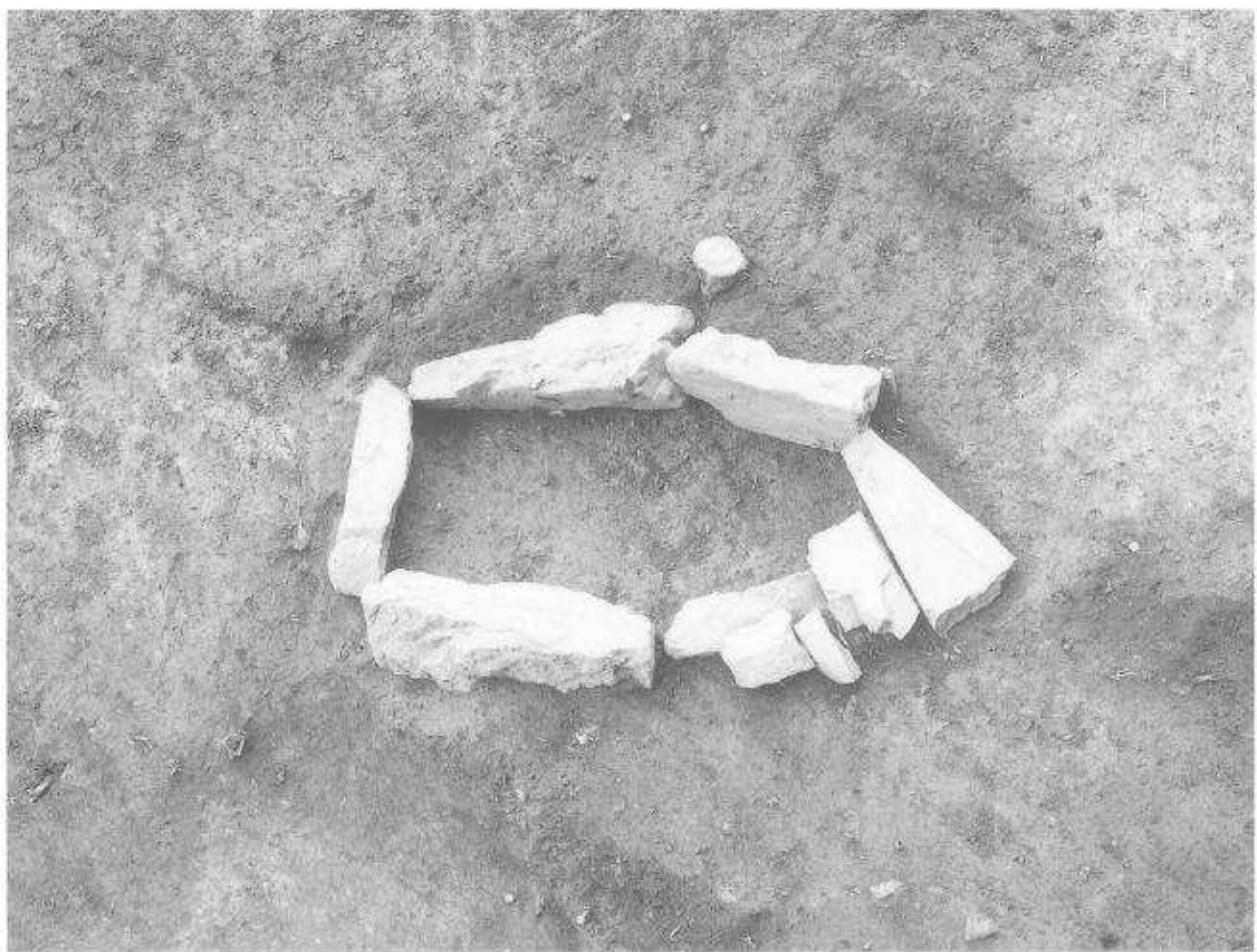
49 12号石棺蓋（北東から）



50 12号石棺（北東から）



51 13号石棺蓋（北から）



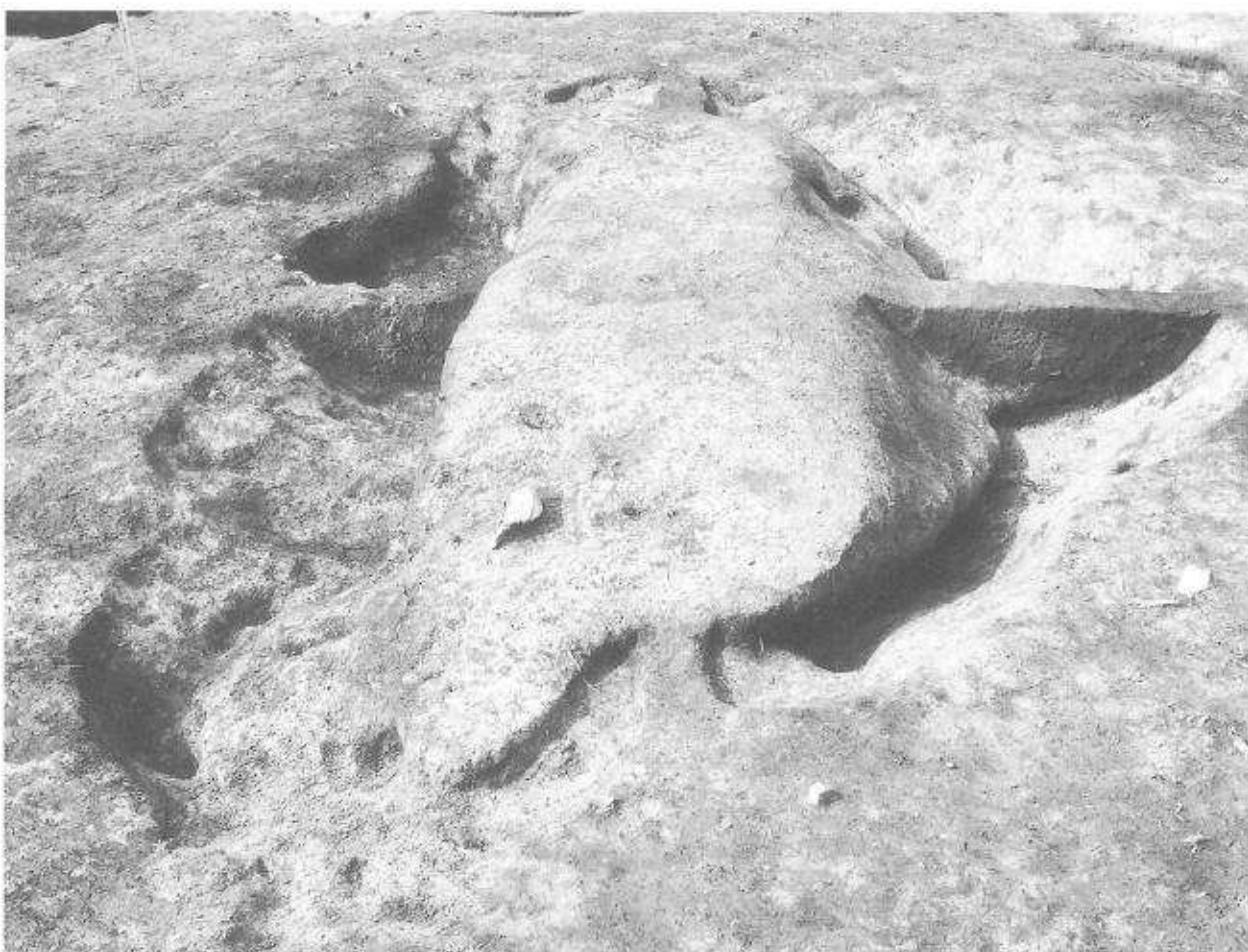
52 13号石棺（北から）



53 風倒木群（南西から）



54 風倒木群（北東から）



55 風倒木SZ06（南東から）



56 土坑SK01（北東から）



57 土坑SK05（南西から）



58 土坑SK06（南西から）



59 陷穴SK18（東から）



60 陷穴SK30（東から）



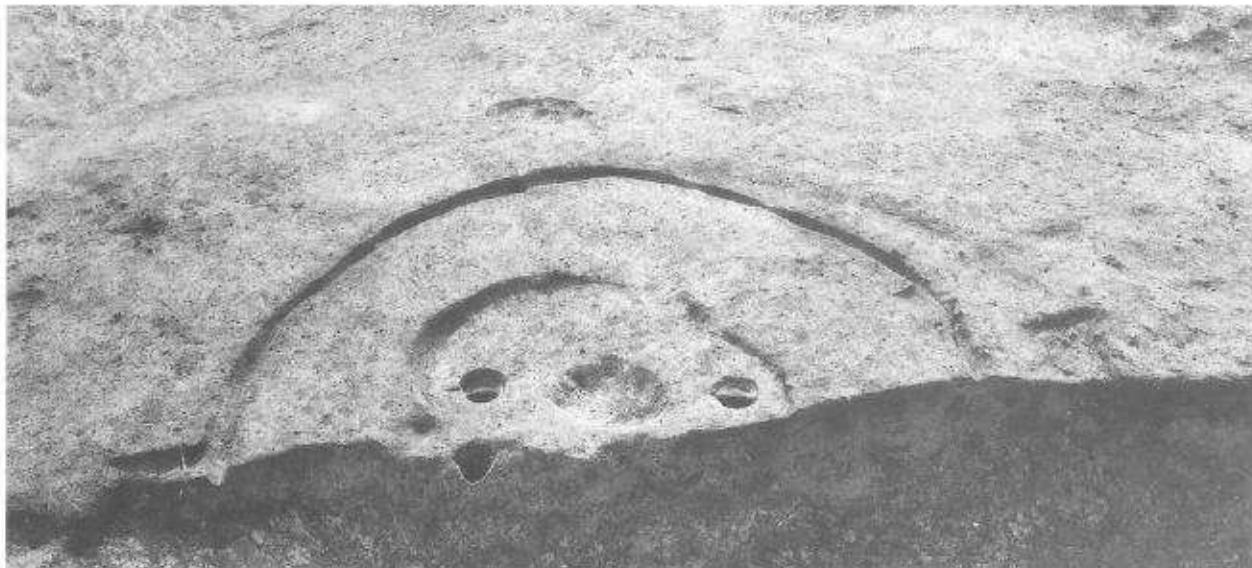
61 縦穴建物SH02 検出状況  
(北東から)



62 縦穴建物SH02 検出状況  
(北東から)



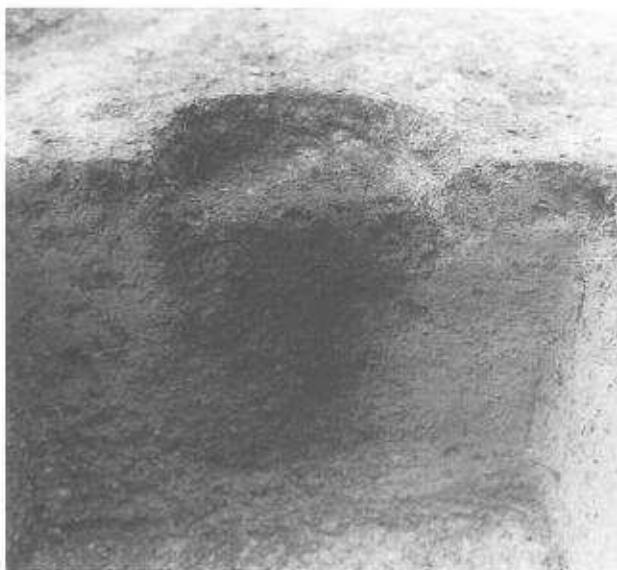
63 縦穴建物SH02  
(北東から)



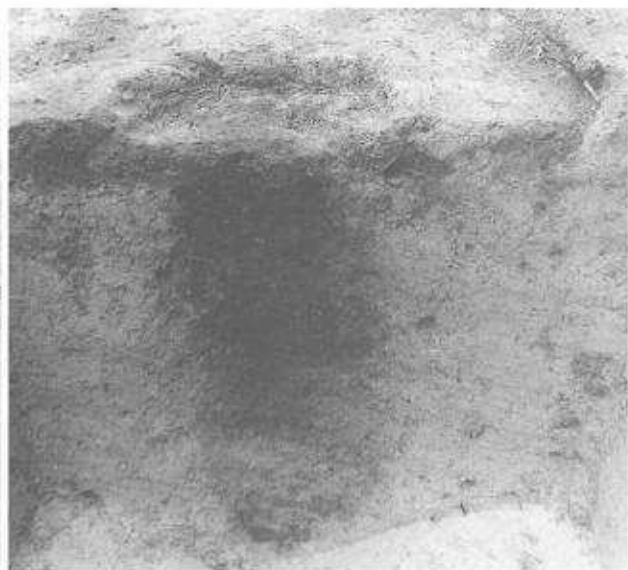
64 竪穴建物SH02 (北東から)



65 竪穴建物SH02 柱穴断面 (北東から)



66 竪穴建物SH02 柱穴 1 断面 (北東から)



67 竪穴建物SH02 柱穴 2 断面 (北東から)



1.



7.



6.



5.



10.



2.



3.



11.



12.

9.

高坂 1 号墳 出土土器(1) 壱蓋



高坂 1 号墳 出土土器(2) 坯身



16



38



32



31



35





高坂 1 号墳 出土土器(5) 子持器台



49



52



50



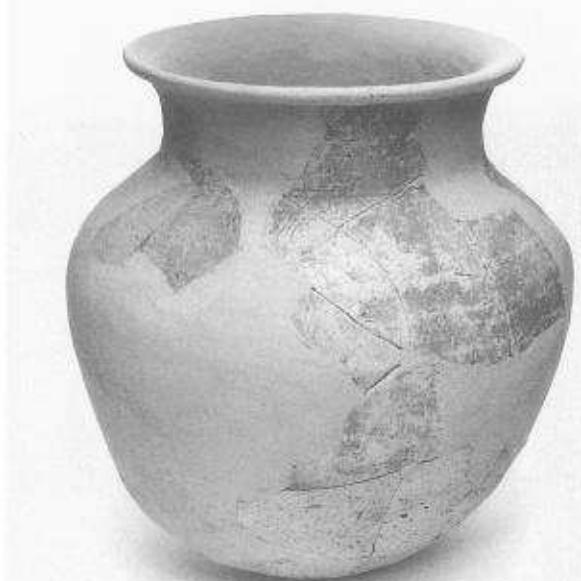
51



54



高坂 1 号墳 出土土器(6) 子持器台細部および蓋



66



67



40



41



44



55



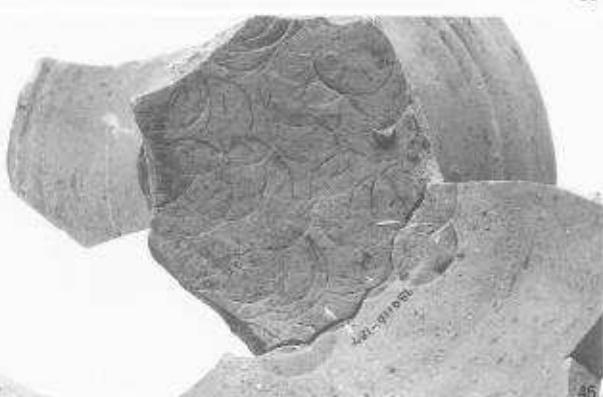


58

60



59



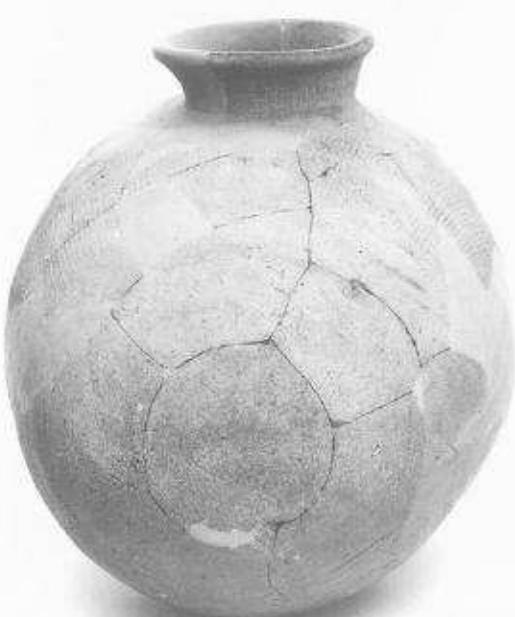
45



48



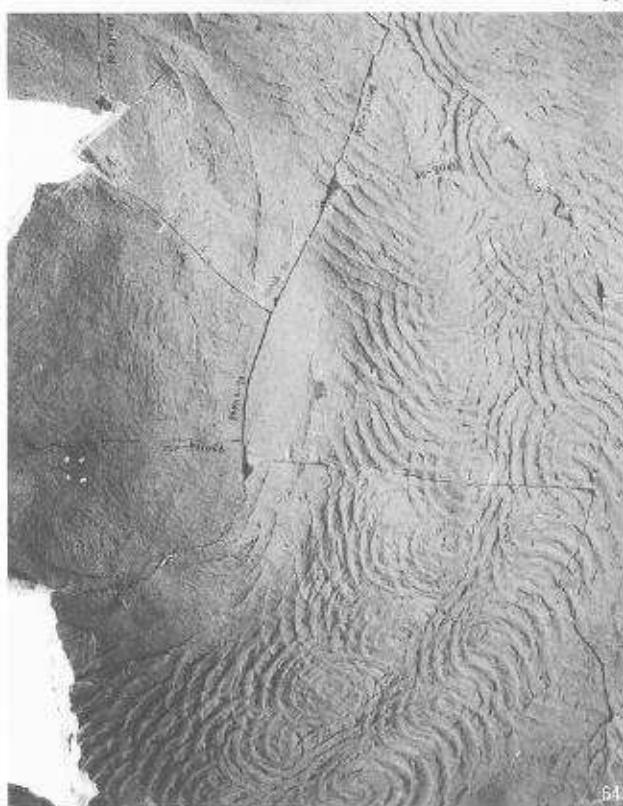
45



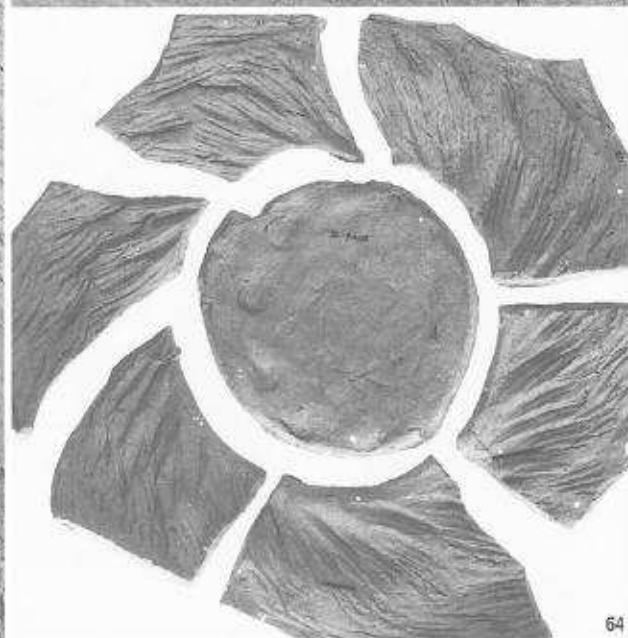
64



65

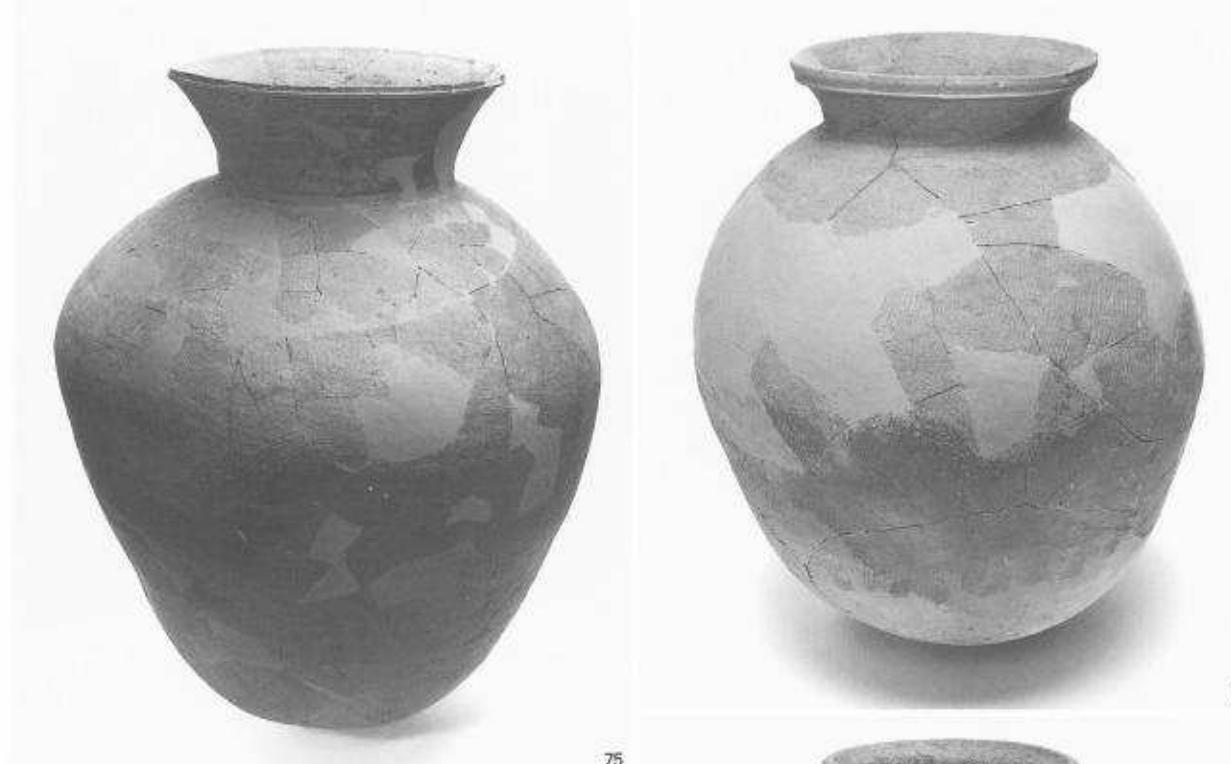


66



67

高坂 1 号墳 出土土器(10) 横瓶・甕



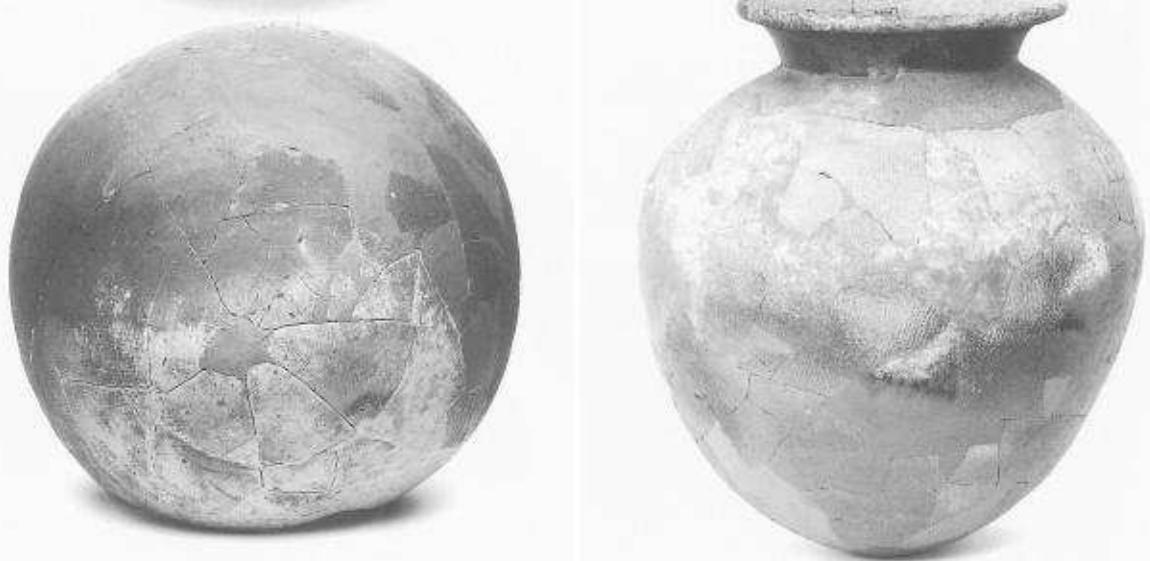
75

73



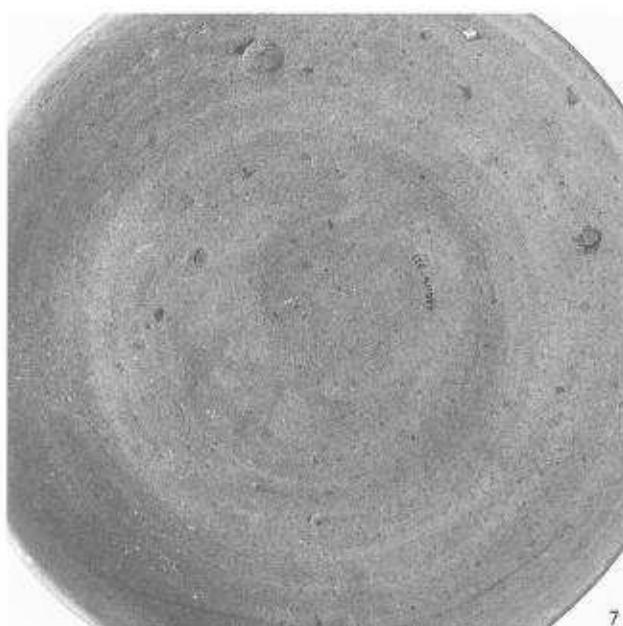
74

76



75

77



7



23



2



37



42



47



109



108

高坂 1 号墳 出土土器(12) 7 号墳 出土土器



76



83



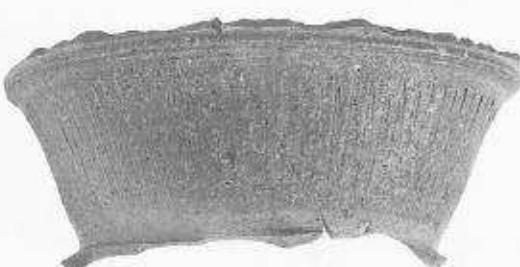
85



88



79



90



89



78



93



96



99



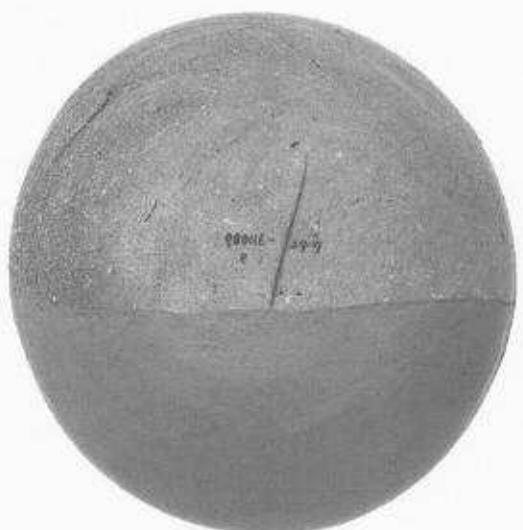
97



100



99  
100



100



100



104



106



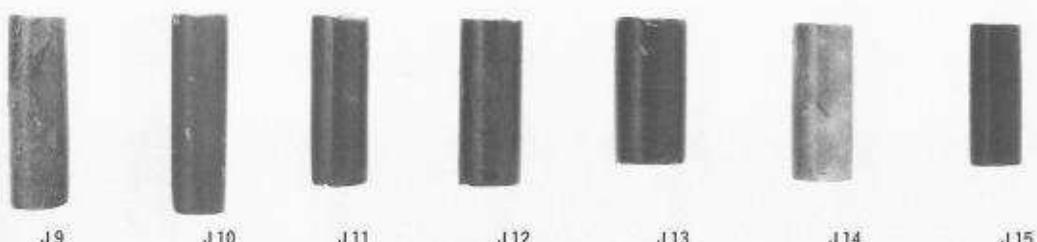
111

110



112

113



60KV、2mA、2min



J1

J2

J3



J4

J5

J6

J7

J8



J16

J17

J18

J19

J20

J21



J22

J23

J24

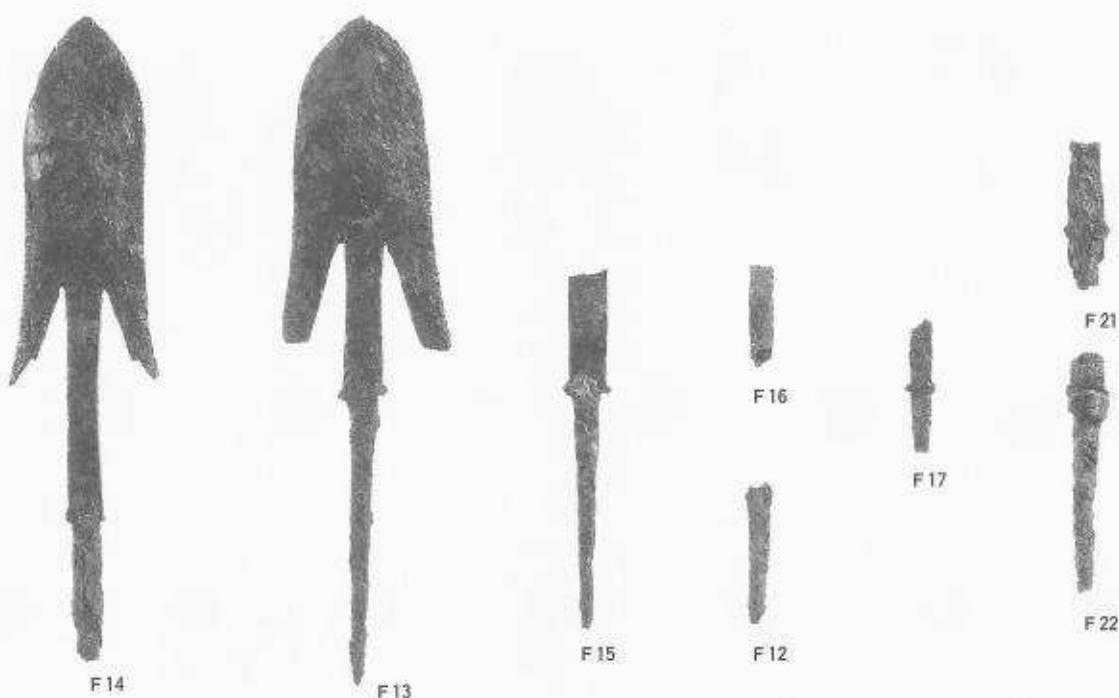
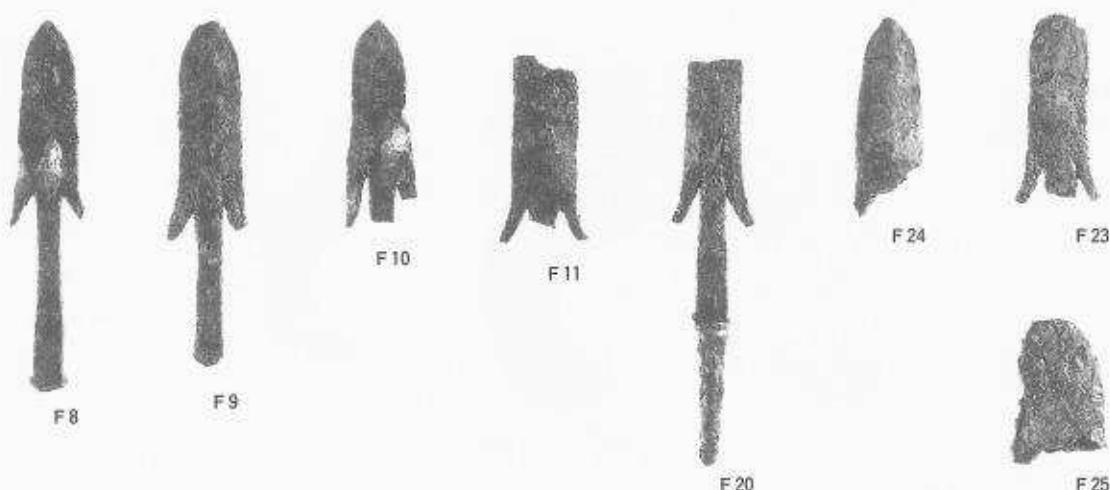
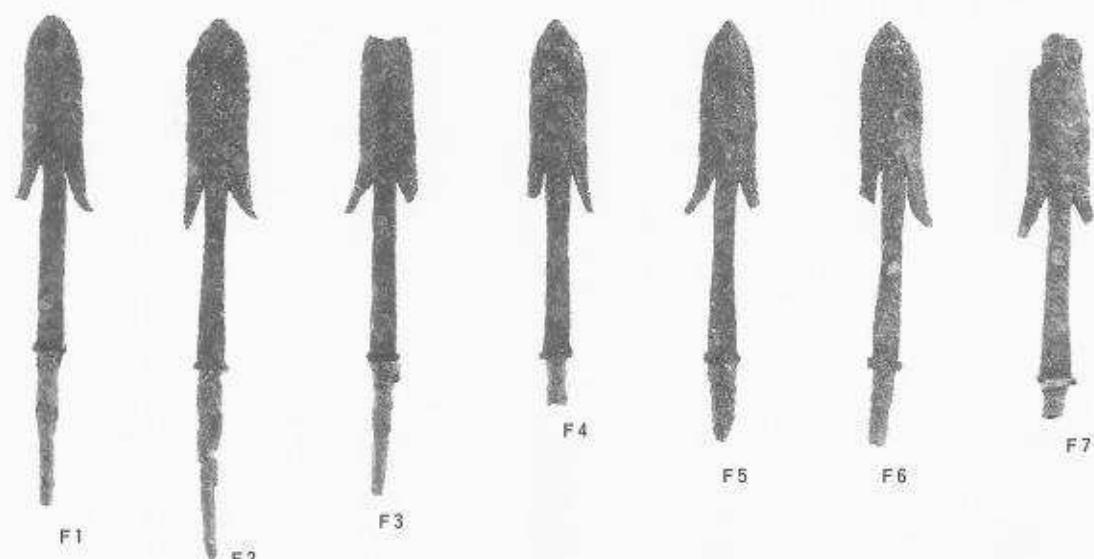
J25

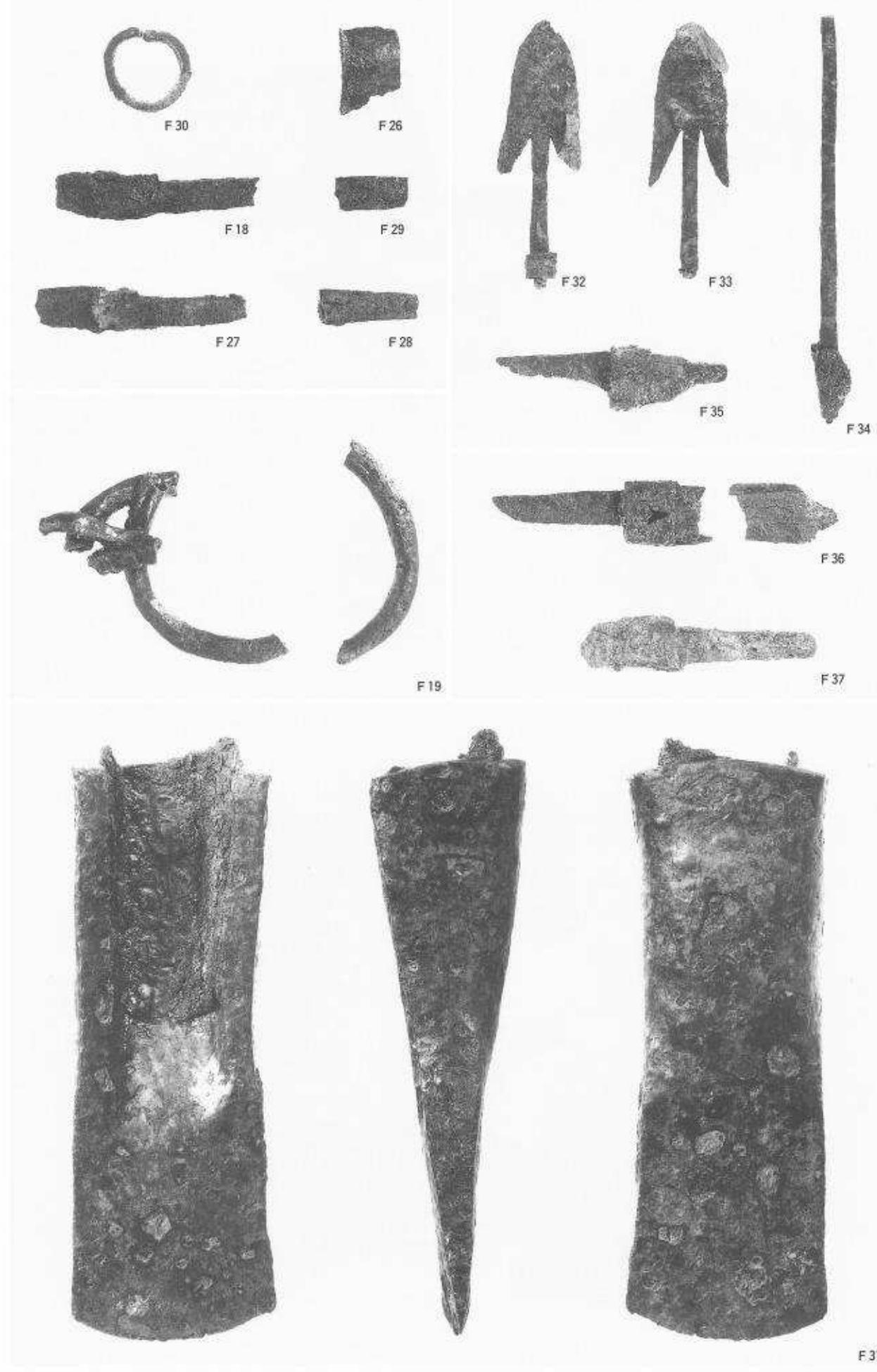
J26

J27

J28

図版 52  
遺物





高坂 1 号墳・2 号墳・7 号墳・9 号埋葬施設 出土金属器



116



118



115



125



122



117



120



123



114



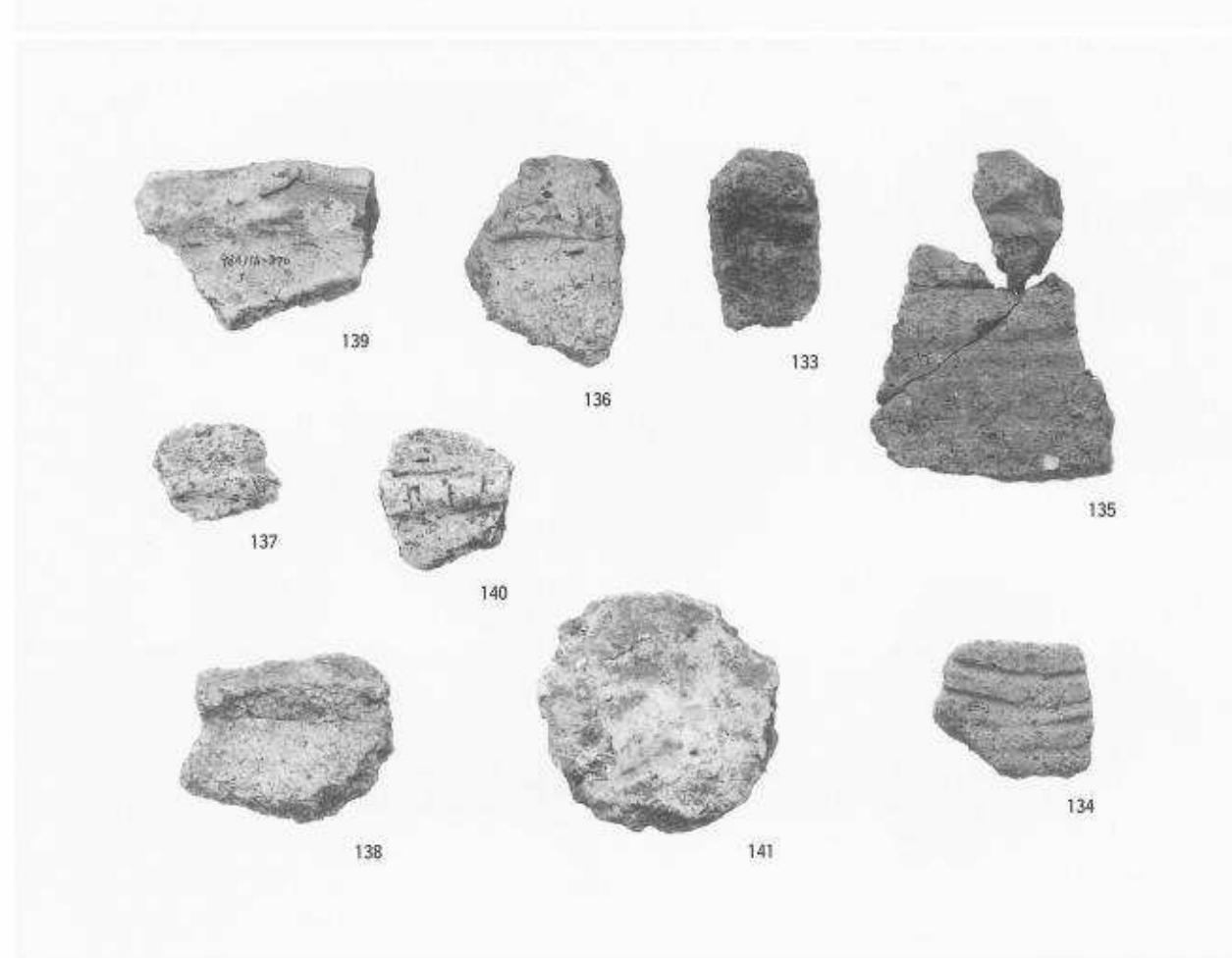
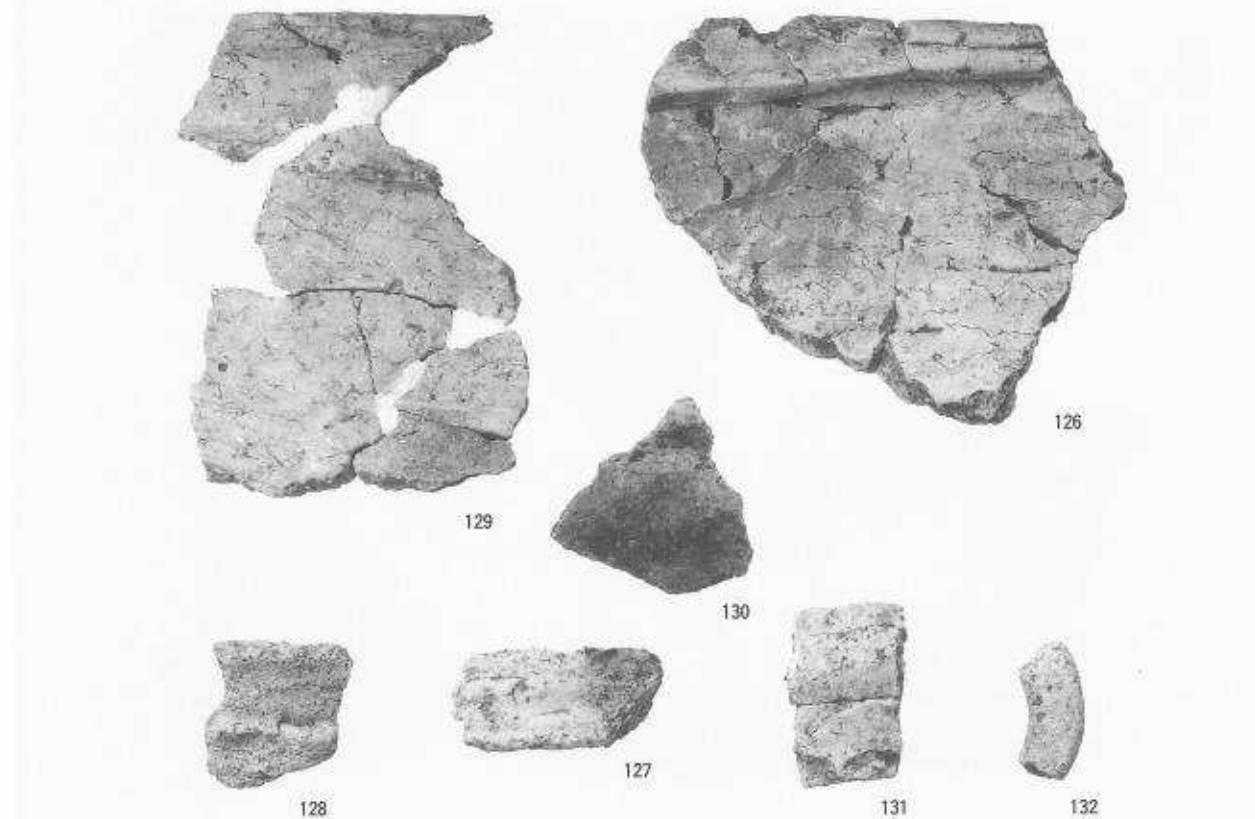
119



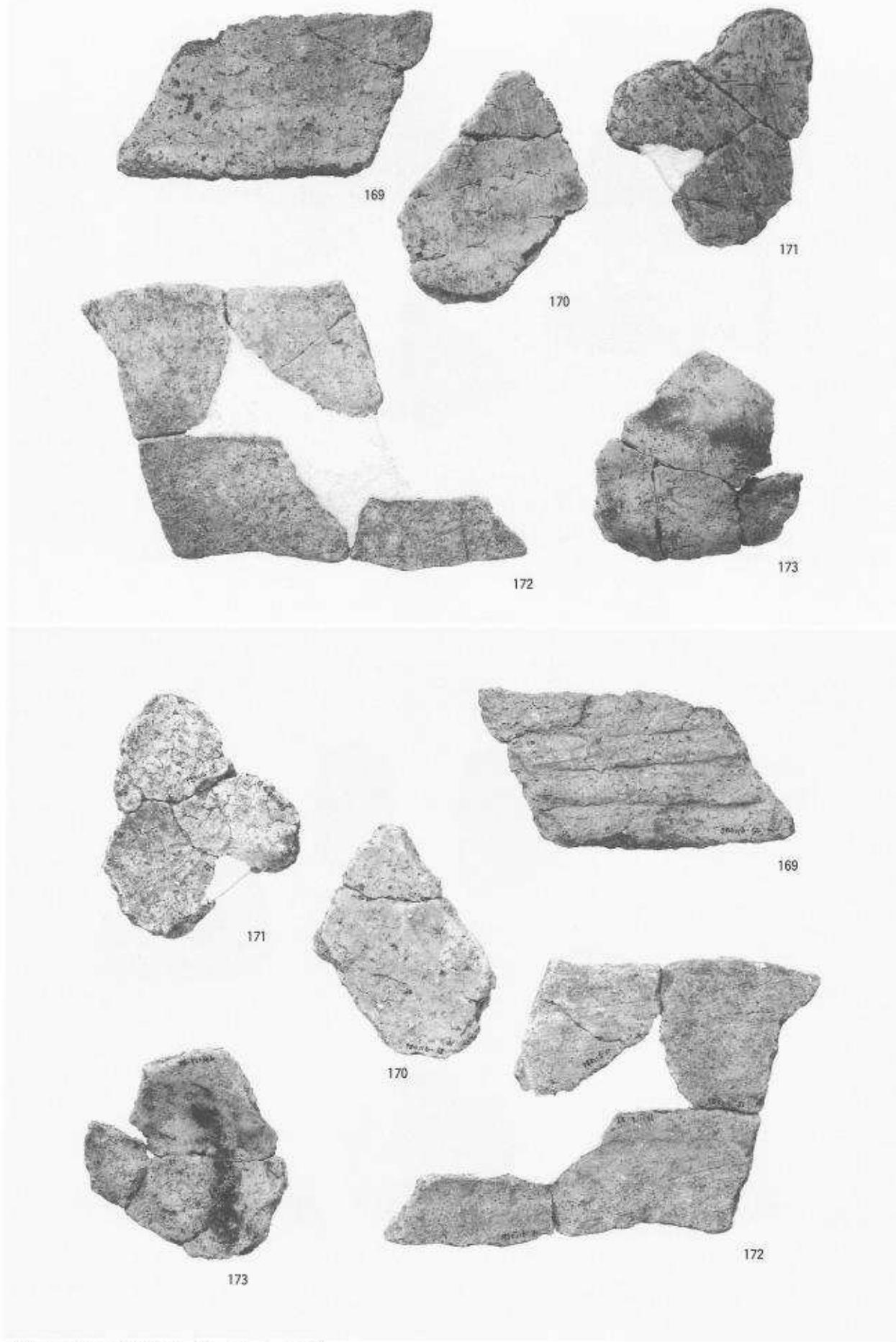
124



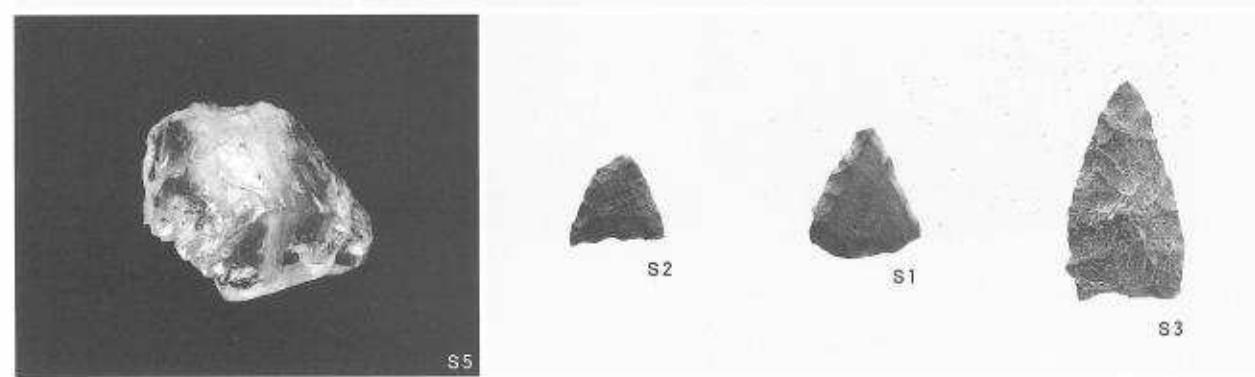
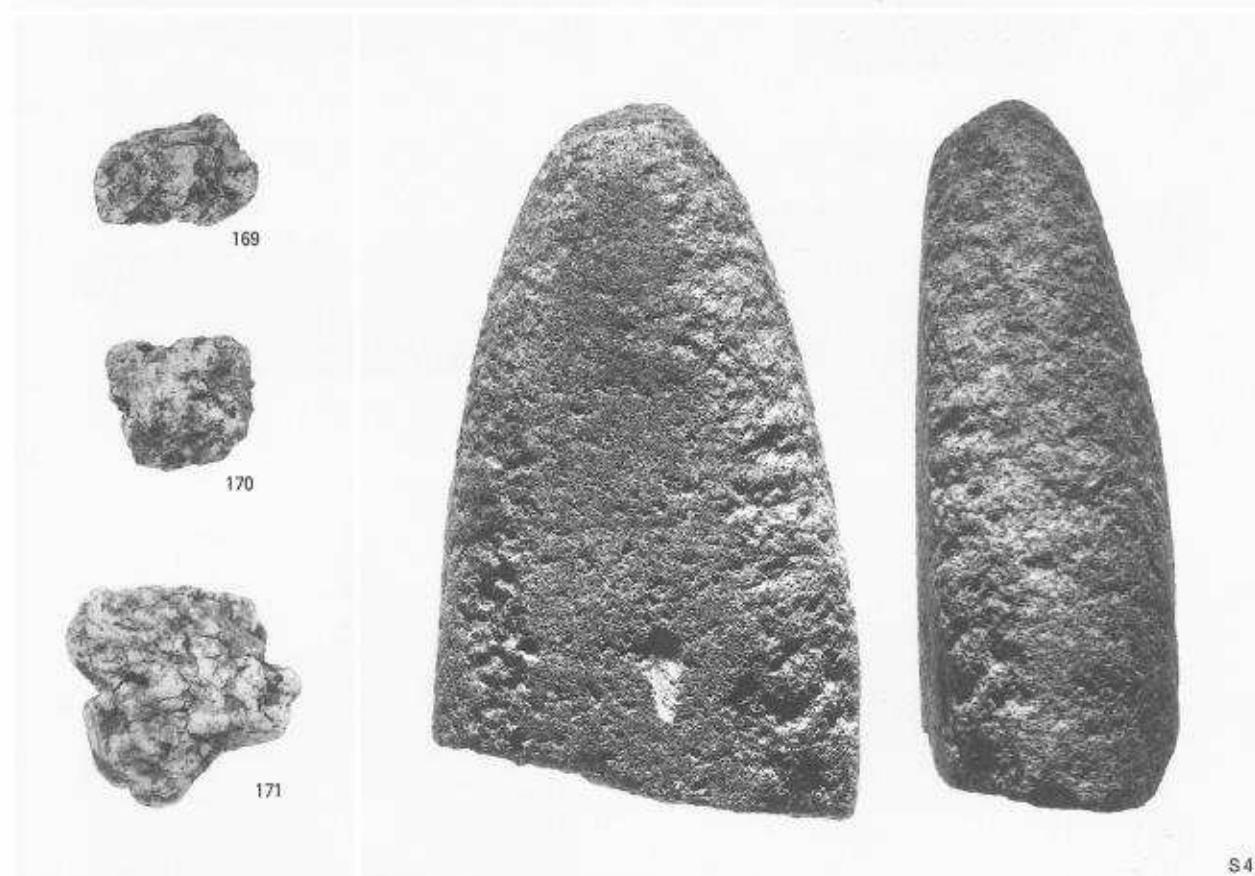
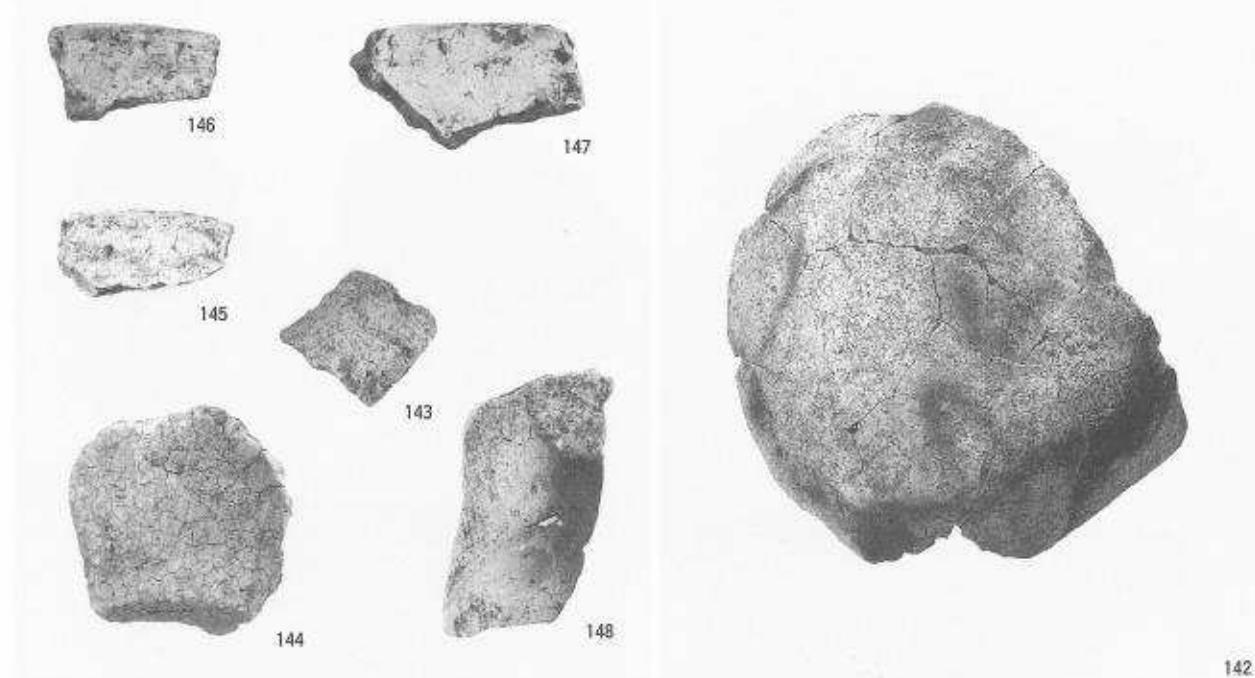
121



上 土坑SK01 出土土器(2) 下 繩文土器



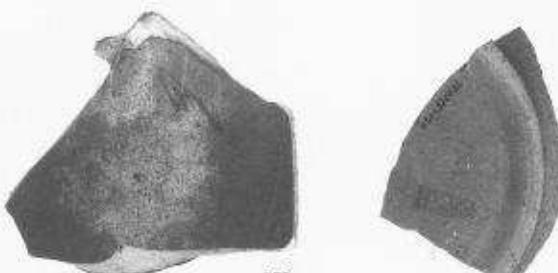
風倒木SZ061 出土土器（上；表、下；裏）



弥生土器・石器類



156



158



167



151



153



152



162



165



166

兵庫県文化財調査報告 第281冊

## 高坂古墳群

国道175号竹田バイパス公共特殊改良一種事業に伴う  
埋蔵文化財調査報告書

平成17年3月18日 発行

編集 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所  
〒652-0032 神戸市兵庫区荒田町2丁目1番5号  
TEL (078) 531-7011

発行 兵 庫 県 教 育 委 員 会  
〒650-8567 神戸市中央区下山手通5丁目10番1号

印 刷 菱三印刷株式会社  
〒652-0803 神戸市兵庫区大開通2丁目2-11